岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第514集

細谷地遺跡第15次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2008

岩手県盛岡市
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

細谷地遺跡第15次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成18年度に発掘調査された盛岡市細谷地遺跡第15次調査の成果をまとめたものです。

細谷地遺跡は、縄文時代晩期の竪穴住居跡も発見されていますが、基本的には平安時代を中心にした古代の集落跡です。

今回の調査区は、北側が第４・５次調査、南側が第８次調査区の続きで、それぞれの東側に当たり、これまでと同様の傾向が窺われ、この古代集落が北側の段丘崖に沿って東西方向に広がっていることがわかりました。また、同様に土師器を焼成した穴も多数発見され、初めて竪穴住居跡からロクロを据えたと考えられる穴も見つかり、“土師器工房”としてさらに注目されます。竪穴住居から琥珀が出土した点も、今回の調査成果の一つです。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　武　田　牧　雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割71－２ほかに所在する細谷地遺跡の第15次発掘調査の結果を収録したものである。

2　今回の調査は、盛岡南新都市土地区画整理事業に伴う事前の発掘調査である。

調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と盛岡市都市整備部盛岡南整備課の協議を経て、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3　岩手県遺跡台帳に登録される遺跡番号は、ＬＥ26－0214である。

4　発掘調査期間、担当者、調査面積、遺跡略号は次の通りである。

平成18年10月16日～12月12日／金子昭彦・荒谷伸郎ほか／1,675㎡／ＯＨＹ－06－15

5　室内整理期間と担当者は、次の通りである。

平成18年12月１日～平成19年３月30日／金子昭彦・荒谷伸郎

6　執筆分担。第Ⅳ章のRA150住居跡の遺構記載および遺物出土状況は、八木勝枝、同様に、RA153住居跡、RD355、RD356土坑のそれは、濱田　宏、それ以外は金子が担当した。

7　細谷地遺跡の本調査は十二回目である（第１～３次調査は、試掘）。詳細は、第Ⅱ章第３図参照。

8　遺構名は、盛岡市教育委員会の命名方法に準拠した。略号は以下の通り、番号は三桁で付け、第14次調査からの続き番号である。

ＲＡ→竪穴住居跡、ＲＢ→掘立柱建物跡、ＲＤ→土坑

9　遺物の分析・鑑定・保存処理は、次の方々に依頼した。

石質鑑定：花崗岩研究会、炭化材樹種同定：木炭協会、鉄製品保存処理：岩手県立博物館

10　報告書作成にあたり、次の方々に御協力・御指導いただいた（敬称略）。

小林　克（秋田県埋蔵文化財センター）

11　調査成果はこれまでに現地公開資料や略報（「平成18年度発掘調査報告書」）に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

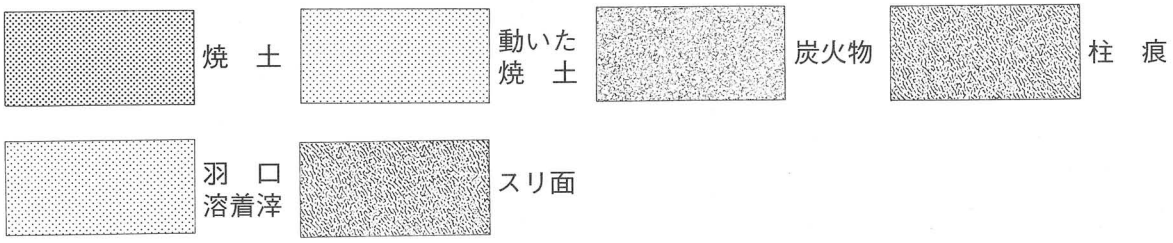
12　調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

13　遺構等の平面位置は、平面直角座標第Ｘ系を利用している（座標値は第６図参照）。座標値は、日本測地系に基づく。基準杭は、当方の希望の場所に委託者に設置していただいた。

14　土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）を参考にした。

15　凡例は、下記に示した。遺構図版内のｐは土器、ｓは石を示す。

16　参考文献は、それぞれの章、節、項の後に記している。



目　　次

報告書抄録

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　立地と環境 …… 1
1　位置・地形・調査範囲 …… 1
2　基本層序・検出状況・出土状況 …… 3
3　これまでの調査と周辺の遺跡 …… 8

Ⅲ　調査・整理の方法 …… 10
1　野外調査の経過 …… 10
2　野外調査の特記事項 …… 11
3　室内整理の経過 …… 15
4　室内整理の特記事項 …… 15
5　報告書の特記事項 …… 16

Ⅳ　遺　　構 …… 17
1　竪穴住居跡 …… 18
2　掘立柱建物跡 …… 28
3　土　　坑 …… 47

Ⅴ　遺　　物 …… 68
1　土師器・須恵器 …… 68
2　石　　器 …… 70
3　土　製　品 …… 70
4　鉄　製　品 …… 70
5　琥　珀、その他自然遺物 …… 70

Ⅵ　考　　察 …… 87
1「盛南開発」地域における細谷地遺跡第15次調査区の特徴 …… 87
2　土師器焼成坑 …… 87

表 目 次

第１表　細谷地遺跡これまでの調査一覧 …… 7
第２表　「盛南開発」地域における土師器焼成遺構の可能性のある焼土坑 ……113

図版目次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　遺跡の立地 …… 3
第３図　これまでの調査区 …… 4
第４図　周辺の調査区と検出遺構 …… 5
第５図　周辺の遺跡 …… 6
第６図　調査範囲と大グリッド …… 12
第７図　遺構配置図 …… 29
第８図　RA047・RA151住居跡 …… 30
第９図　RA150住居跡 …… 31
第10図　RA152住居跡 …… 32
第11図　RA153住居跡（１）…… 33
第12図　RA153住居跡（２）…… 34
第13図　RA153住居跡（３）…… 35
第14図　RA154住居跡 …… 36
第15図　RA155住居跡（１）…… 37
第16図　RA155住居跡（２）…… 38
第17図　RA156住居跡（１）…… 39
第18図　RA156住居跡（２）・RA155とRA156の重複 … 40
第19図　RA157住居跡（１）…… 41
第20図　RA157住居跡（２）…… 43
第21図　RA157住居跡（３）…… 44
第22図　RA157住居跡（４）…… 45
第23図　RB003掘立柱建物跡（補）…… 46
第24図　土　坑（１）RD338～RD343 …… 58
第25図　土　坑（２）RD344～RD350 …… 59
第26図　土　坑（３）RD351～RD354 …… 60
第27図　土　坑（４）RD355～RD358 …… 61
第28図　土　坑（５）RD359～RD362 …… 62
第29図　RA047住居・RA150～153住居出土遺物 … 63
第30図　RA153～155住居出土遺物 …… 64
第31図　RA155～157住居出土遺物 …… 65
第32図　RA157住居、RD340、341、343、344、348、349土坑出土遺物 … 66
第33図　RD350～354、356～362土坑、沢跡出土遺物 … 67
第34図　土師器・須恵器（１）…… 71
第35図　土師器・須恵器（２）…… 72
第36図　土師器・須恵器（３）…… 73
第37図　土師器・須恵器（４）…… 74
第38図　土師器・須恵器（５）…… 75
第39図　土師器・須恵器（６）…… 76
第40図　土師器・須恵器（７）…… 77
第41図　土師器・須恵器（８）…… 78
第42図　土師器・須恵器（９）…… 79
第43図　土師器・須恵器（10）…… 80
第44図　土師器・須恵器（11）…… 81
第45図　土師器・須恵器（12）…… 82
第46図　土師器・須恵器（13）…… 83
第47図　土師器・須恵器（14）、鉄製品、土製品 … 84
第48図　石　器（１）…… 85
第49図　石　器（２）…… 86
第50図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（１）… 88
第51図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（２）… 89
第52図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（３）… 90
第53図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（４）… 91
第54図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（５）… 92
第55図　細谷地遺跡第８次竪穴住居跡集成（１）… 93
第56図　細谷地遺跡第８次竪穴住居跡集成（２）… 94
第57図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（１）… 95
第58図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（２）… 96

第59図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（３）… 97
第60図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（４）… 98
第61図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（５）… 99
第62図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（６）… 100
第63図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（７）… 101
第64図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（８）… 102
第65図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（９）… 103
第66図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（10）… 104
第67図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（11）… 105
第68図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（12）… 106
第69図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（13）… 107
第70図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（１）… 108
第71図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（２）… 109
第72図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（３）… 110
第73図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（４）… 111
第74図　細谷地遺跡第４・５・８・15次調査区における焼土坑の分布　… 114
第75図　細谷地遺跡第９・10次調査区、本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区
における焼土坑の分布 …… 115

写真図版目次

写真図版１　遺跡遠景・調査区全景 …… 123
写真図版２　調査前風景・RA047住居跡 …… 124
写真図版３　RA150住居跡（１）…… 125
写真図版４　RA150住居跡（２）…… 126
写真図版５　RA151住居跡・RA152住居跡（１）… 127
写真図版６　RA152住居跡（２）…… 128
写真図版７　RA152住居跡（３）…… 129
写真図版８　RA153住居跡（１）…… 130
写真図版９　RA153住居跡（２）…… 131
写真図版10　RA153住居跡（３）・RA154住居跡（１）… 132
写真図版11　RA154住居跡（２）…… 133
写真図版12　RA154住居跡（３）・旧沢跡調査風景 … 134
写真図版13　RA155住居跡（１）…… 135
写真図版14　RA155住居跡（２）…… 136
写真図版15　RA155住居跡（３）…… 137
写真図版16　RA156住居跡（１）…… 138
写真図版17　RA156住居跡（２）…… 139
写真図版18　RA157住居跡（１）…… 140
写真図版19　RA157住居跡（２）…… 141
写真図版20　RA157住居跡（３）…… 142
写真図版21　RA157住居跡（４）…… 143
写真図版22　RA157住居跡（５）…… 144
写真図版23　RA157住居跡（６）…… 145
写真図版24　RB003掘立柱建物跡（補）…… 146
写真図版25　RD338～RD341土坑 …… 147
写真図版26　RD342～RD344土坑 …… 148
写真図版27　RD345～RD348土坑 …… 149
写真図版28　RD349～RD351土坑 …… 150
写真図版29　RD352～RD354土坑 …… 151
写真図版30　RD355～RD358土坑 …… 152
写真図版31　RD359～RD362土坑 …… 153
写真図版32　土師器・須恵器（１）…… 154
写真図版33　土師器・須恵器（２）…… 155
写真図版34　土師器・須恵器（３）…… 156
写真図版35　土師器・須恵器（４）…… 157
写真図版36　土師器・須恵器（５）…… 158
写真図版37　土師器・須恵器（６）…… 159
写真図版38　石器（１）…… 160
写真図版39　石器（２）・琥珀・土製品・鉄製品 …… 161

報告書抄録

ふりがな	ほそやちいせきだいじゅうごじはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	細谷地遺跡第15次発掘調査報告書
副 書 名	盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第514集
編著者名	金子昭彦・濱田　宏・八木勝枝
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所 在 地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2008年２月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
細谷地遺跡 第15次調査	岩手県盛岡市 飯岡新田２地 割71-2ほか	03201	LE 26-0214	39度 40分 37秒	141度 08分 13秒	2006.10.16～ 2006.12.12	1,675㎡	盛岡南新都市 土地区画整理 事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
細谷地遺跡 第15次調査	集落跡	平安時代 （９世紀中～ 10世紀初頭）	竪穴住居跡９棟 （１棟は、第８次調査の続き） 掘立柱建物跡１棟 （第４次調査の続き） 土坑25基	土師器・須恵器大コンテナ（32×42×30㎝）９箱 砥石７点 磨石４点 土錘１点 フイゴ羽口１点 鉄鏃２点 琥珀１点	土坑は、埋没沢の黒土の中に掘り込まれているものが多く、壁や底が焼けていたり、そうでなくても、焼土や炭化物が発見される場合がほとんどである。 ＲＡ153住居跡から、ロクロ・ピットが発見されていることなどから、これらの土坑は、土師器焼成坑と推定される。 土師器焼成坑は、ＲＡ153住居跡を取り囲むように群集している。 竪穴住居跡から琥珀が１点出土した。

要　　約	これまでの調査傾向に符合し、北側の段丘崖に沿って、平安時代の集落跡が東西方向に展開することがわかった。 また、同様に、今回の調査区にも土師器焼成坑が多数検出された。ロクロ・ピットも発見され、これまで焼成失敗品である剥片土器しか発見されていなかったが、さらなる確証が得られた。 周辺地域も含めて考察を加えた結果、今のところ、この地域では、細谷地遺跡以外に本宮熊堂Ｂ遺跡でしか明瞭な土師器焼成坑は発見されていないことが分かった。 この地域の平安集落では遺跡差・地点差が明瞭に存在し、その原因が何かつきとめることが期待される。

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市土地区画整理事業は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地のほかに南部地域を新都市として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された事業である。

この事業は、平成２年９月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成３年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成３年度から面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本調査に関しては盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

本遺跡第15次調査については、岩手県教育委員会が独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所長、盛岡市と協議の結果、平成18年度の事業として確定した。これを受け、平成18年４月１日に、財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、第15次調査1,675㎡を発掘調査を実施する運びとなった。野外調査は平成18年10月16日から12月12日まで、室内整理は平成18年12月１日から平成19年３月30日まで行われた。

Ⅱ　立 地 と 環 境

１　位置・地形・調査範囲（第１～６図、写真図版１～２）

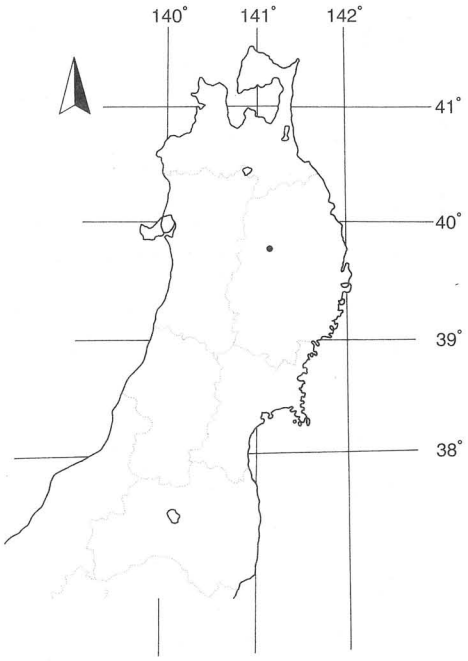
遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線盛岡駅から南約2.5km 、同　仙北町駅から南西約1.3kmに位置し、雫石川によって形成された沖積段丘上に立地する（第１～２図）。地形について概観する。本遺跡は、北西方向に隣接する飯岡才川遺跡（第５図４）と、才川という小さな水路状の沢によって画されている。それは、第３図第５、12次調査区の北端にあり、北西から南東に延びる幹線道路を挟んで、そのまま東側に続く。水路として地上に現れていないようだが、第3図に見える東西に延びる道路の下を通っていると考えて良さそうである。この道路は、やがて南東方向に折れ、そのまま続くが、沢も、これに沿って延びているようである。この道路のほぼ南～西側に段丘崖が認められ、南西方向に平らな段丘が続く。ただし、幹線道路の西側では、沢と段丘崖は一致せず、第３図第15次調査の北側を西側に少し過ぎた当たりから南西方向にずれ、第４次調査区の北限～第６次調査区の南限を通る道路が、段丘の北端に相当したようである。

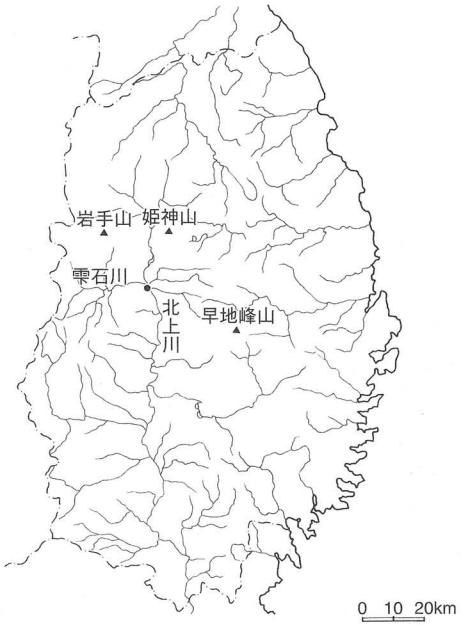
このように、遺跡範囲は、北西側が若干ずれるが、基本的には段丘上にある。本遺跡の主体となる古代集落は、ほぼ段丘上にあると見て良く、北西側は低湿地（旧河道）のため、縄文時代の陥し穴状遺構や近世の遺構など、段丘上とは性格が異なるようである。

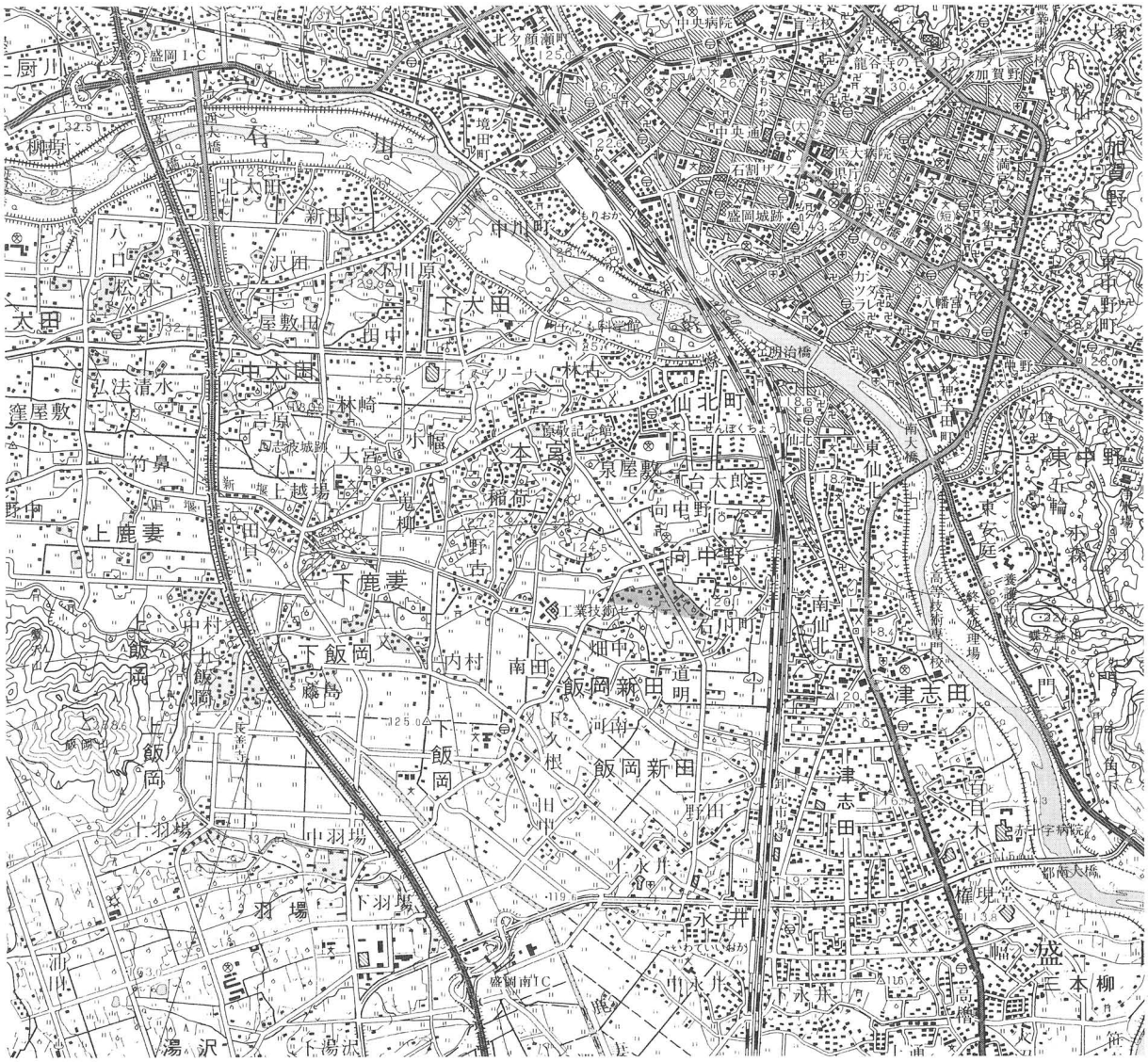
なお、北東方向に隣接する向中野館遺跡（第５図２）とは、境界がはっきりしないが、これは、向中野館遺跡が本遺跡と一部重複しているためである。地形によらず曖昧な区分になっているのは、向中野館遺跡が本来中世の館跡で、北館と南館の二つからなり、その南館が、古代集落である細谷地遺跡が立地する広い沖積段丘の北西端にある可能性が高いためである。

今回の調査箇所は、遺跡北端のほぼ中央に当たり（第３、５図）、北側は段丘崖に隣接する。現況

1　位置・地形・調査範囲







第１図　遺跡の位置（1：50,000　盛岡・日詰）

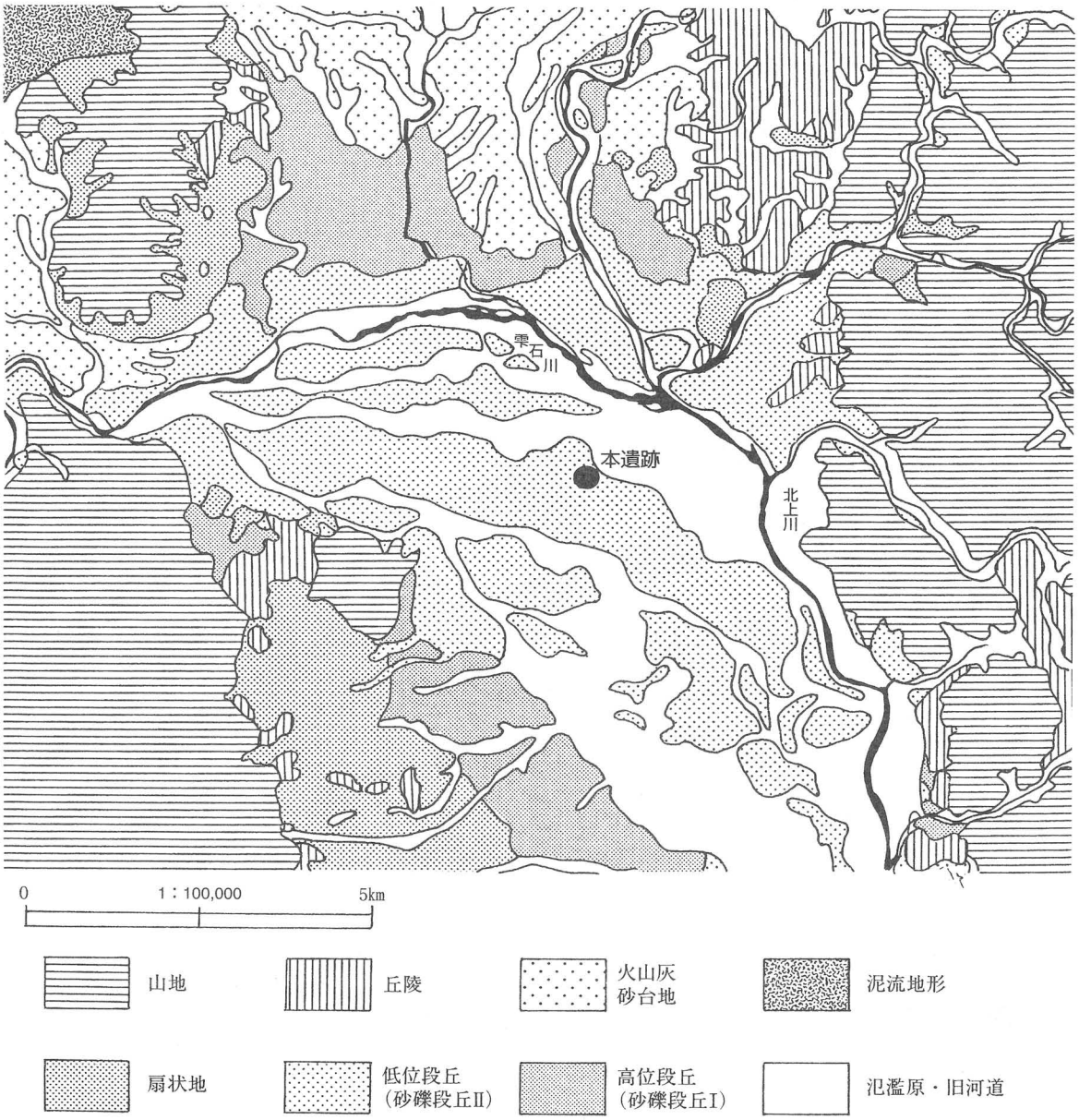
は、大部分が工場跡を更地にしたもので、多くのカクランが認められた。調査区内の地形は、次節参照。

2　基本層序・検出状況・出土状況

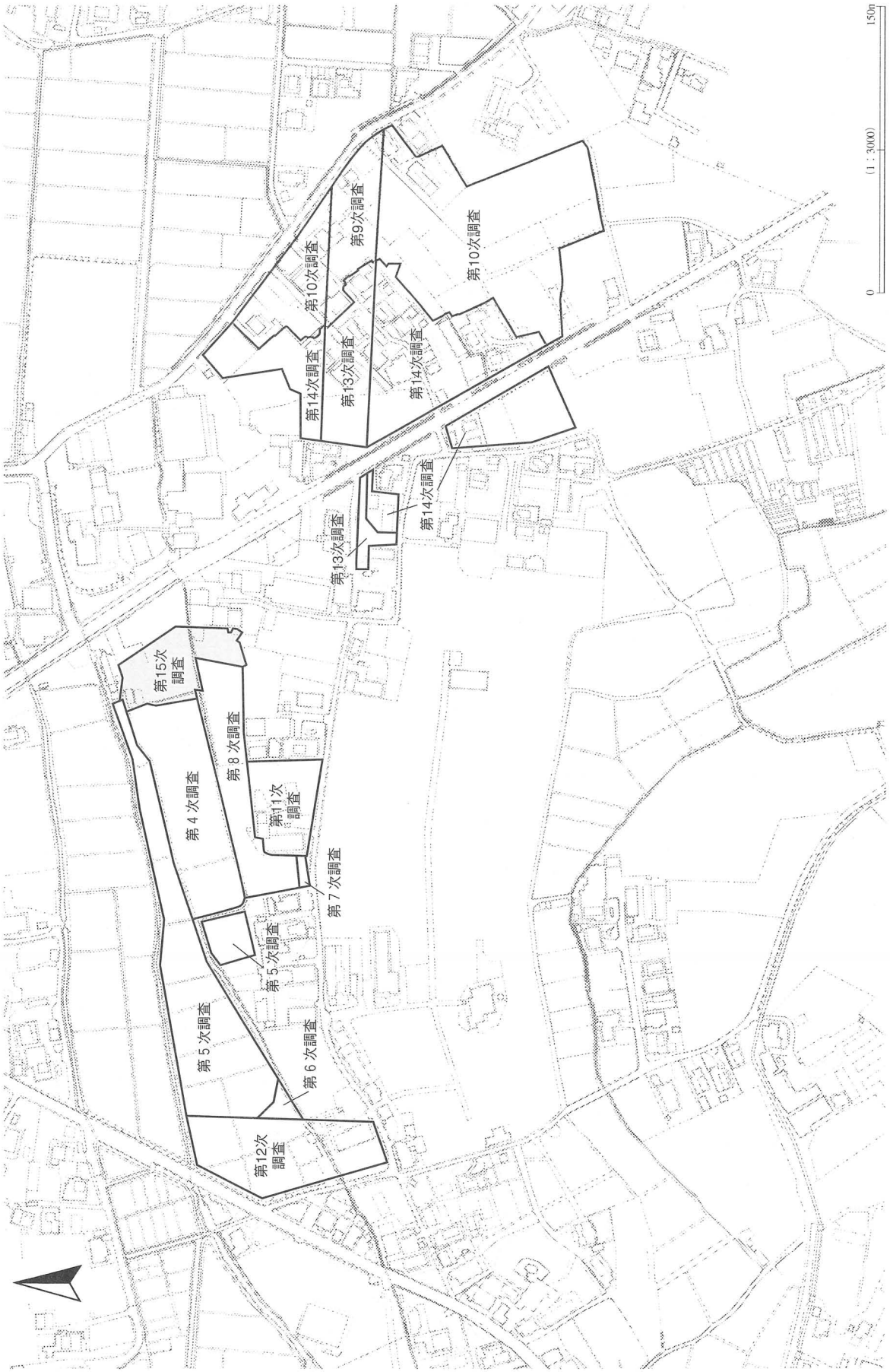
Ⅰ層：表土（整地層）層厚40～60㎝。
Ⅱ層：クロボク土で層厚５～40（沢跡部分）㎝。
Ⅲ層：漸移層で層厚５～10㎝。
Ⅳ層：黄褐色土で層厚20～30㎝。高い部分では砂質、低い部分ではシルト質。
Ⅴ層：黄褐色砂礫層で層厚不明。

調査区南半分は、Ⅳ層がほとんどなく、Ⅲ層の下はⅤ層という状態であった。

Ⅱ層上面が遺構の掘り込み面であるが、ほとんどの遺構はⅢ～Ⅳ層上面で検出された。なお、調査区北側の中央付近で西から東に延びる沢跡が確認されたが、この沢跡は集落形成時には（Ⅱ層で）完



第２図　遺跡の立地（P.5文献30より）



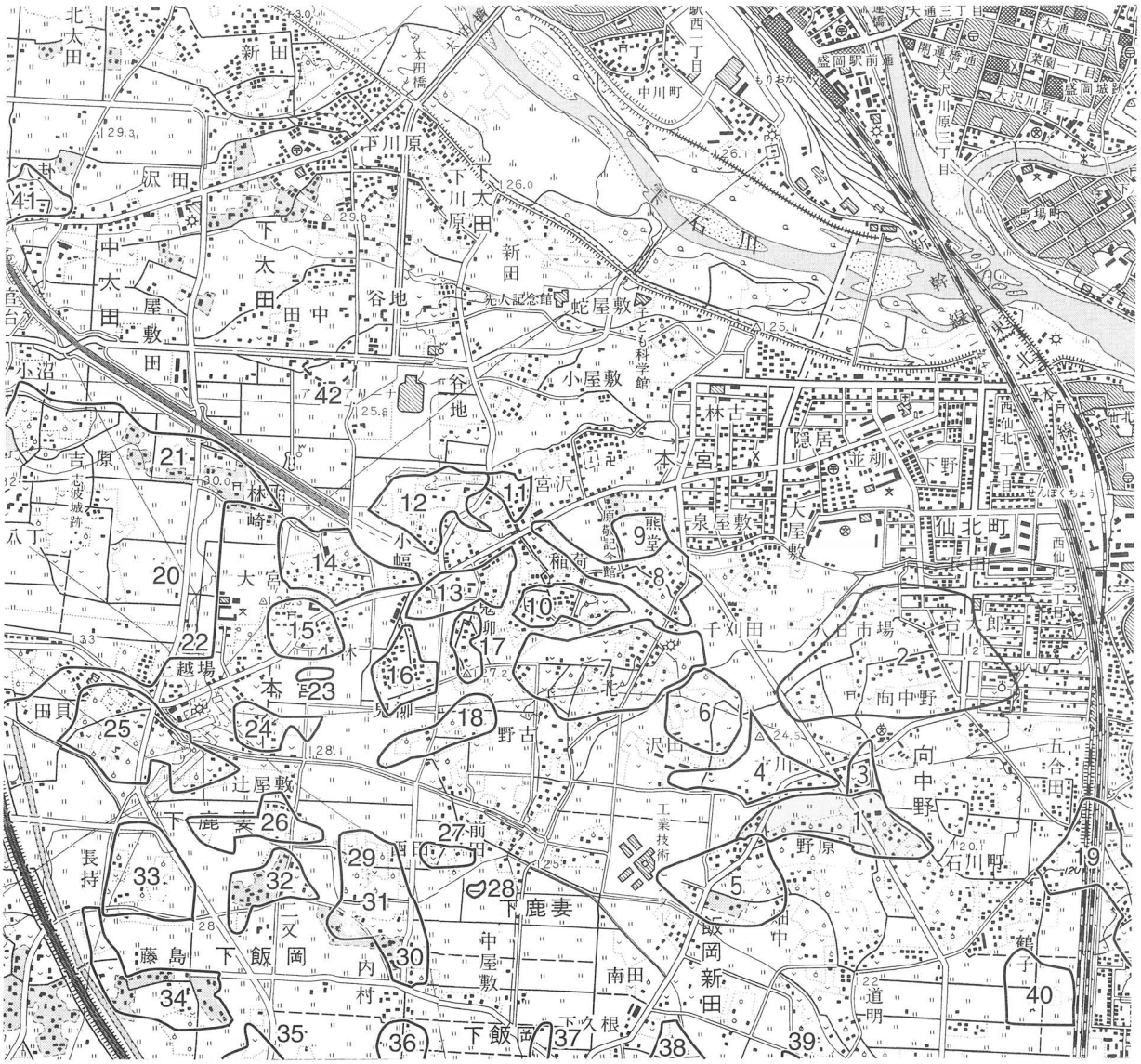
第３図　これまでの調査区（網掛け部分が今回の調査区）

第４図　周辺の調査区と検出遺構

No.	遺跡名	内　容	文献（書名→本文中にある）
2	台太郎	縄文晩期集落／古墳～平安集落→住600以上／中世→五角形の居館、墓地	10、12、14、17、18、22、24～26、31、37、40、41、51、53、57、58、62
3	向中野舘	縄文土坑／平安集落→旧河道、木製品、封緘木簡、鉤／中世城館→堀、木簡、珠洲	14、15、70、71
4	飯岡才川	縄文陥し穴状遺構／古墳～平安集落（9ｃ前含む）集落→、住、掘立柱、円形周溝	13、19、21、37、66
5	矢盛	縄文陥し穴状遺構50基以上／平安住居３	1、32、34、41、42
6	飯岡沢田	縄文陥穴／弥生中期／古墳～平安住居、古代の大規模な墓地／中世方形周溝	27、28、64
7	野古Ａ	古墳～平安集落→住居約80、掘立、溝、縄文土器を模した土師器	9、29、30、37、51～53
8	本宮熊堂Ｂ	縄文土坑、陥穴、土偶、イノシシ形土製品、奈良～平安集落→住居約140、勾玉、鉤	2、10、11、19、20、34、37～39、61、63、65
9	本宮熊堂Ａ	縄文晩期中～後葉集落跡→旧河道、住居、捨て場、土偶、木製品	6、8、35、53、61、69
12	小幅	平安集落→住約40、円形周溝、掘立、溝	3～5、7、14～16、19、53
13	鬼柳Ａ	縄文陥し穴状遺構５／奈良～平安集落	11、19、53
19	南仙北	縄文陥し穴／平安集落→住居、円形周溝／中世溝	43、48、50～53
20	志波城跡	平安初期の城柵・国史跡／以前は、太田方八丁遺跡	44、85～98、55、56、58～60、72ほか、78年から市継続報告
21	林崎	平安集落（住11、掘立、溝跡、土坑）、住居（古墳）１	49、52～54
35	飯岡林崎Ⅱ	平安集落→住居37、掘立、旧河道、焼失住から多量の炭化米、円形硯	33、47、48

No.	遺跡名	内　容	文献
10	稲荷	住（奈）１、溝、墓？	9、32、37、41、53
11	宮沢	溝（平安）	6、52、53、65
14	大宮北	平安集落→住２、住状、坑、溝	8、50、51、53
15	大宮	古代土坑、溝	49、53
18	野古Ｂ	溝、平安土師器、数片	45
22	新堰端	縄文貯蔵穴10、陥穴、後末土器／平安大溝	52、53
28	前田	縄文土坑、溝状、陥し穴、土師器	46
31	内村	平安集落→住１、掘立、溝／常滑大甕	58
32	二又	平安集落→住１、溝	58
33	辻屋敷	住居（平安）２、須恵器、土師器坏	48
34	藤島	住居（古代）１	48
36	深渕Ⅰ	奈良～平安前期集落→住10、円形周溝	47
41	八卦	住（奈３、平１）、溝、土坑	49、52、53
42	太田田中	土師器坏（文献では田中遺跡）	46

No.	遺跡名	内容	文献
1	細谷地	本書第１表	
16	鬼柳Ｂ	古代	
17	鬼柳Ｃ	古代	52（何もなし）
23	小林	古代	
24	水門	古代	
25	上越場Ａ	縄文／古代	
26	上越場Ｂ	縄文／古代	
27	西田Ｂ	古代	
29	西田Ａ	古代	58（何もなし）
30	中屋敷	古代	
37	高屋敷Ⅰ	古代	
38	石持	古代	
39	夕覚	古代／溝？	市試掘
40	向中野幅	古代	



第５図　周辺の遺跡（1：25,000　盛岡・小岩井農場）
（『盛岡遺跡地図（2000年版）』（盛岡市教育委員会2000）より作成

・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発行報告書（年は西暦下二桁）

凡例→『○○遺跡第○次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第○集
『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（平成○年度分）』〃　（＊12年度から「分」とれる）
『平成○年度発掘調査報告書』〃

No.	書名（略）	年	集数
1	矢盛・第１次	94	205
2	本宮熊堂Ｂ・第１次・	95	226
3	小幅・第２次・	96	244
4	略報（平成７年度）	96	246
5	小幅・第４次	96	265
6	略報（平成８年度）	97	266
7	小幅・第５次・第7次・	98	267
8	大宮北・本宮熊堂Ａ・	98	281
9	略報（平成９年度）	98	282
10	熊堂Ｂ５次・台太郎16次	99	293
11	熊堂Ｂ４次・鬼柳Ａ４次	99	308
12	台太郎・第15次・	99	309
13	略報（平成10年度）	99	311
14	向中野４・小幅11・台太郎19	00	321

No.	書名（略）	年	集数
15	向中野館３次・小幅10次	00	338
16	略報（平成11年度）	00	340
17	台太郎・第22次・	01	365
18	台太郎・第18次・	01	369
19	略報（平成12年度）	01	370
20	熊堂Ｂ・第10次・	02	377
21	飯岡才川・第３次・	02	393
22	略報（平成13年度）	02	397
23	細谷地・第４・５次・	02	414
24	台太郎・第23次・	03	415
25	台太郎・第26次・	02	416
26	台太郎・第35次・	03	417
27	飯岡沢田・第３次・	03	418
28	飯岡沢田・第５次・	03	419

No.	書名（略）	年	集数
29	野古Ａ・第12次・	03	420
30	野古Ａ・第15次・	03	421
31	台太郎・第44次・	03	422
32	略報（平成14年度）	03	423
33	飯岡林崎Ⅱ・・	04	427
34	矢盛3次・熊堂Ｂ14次	04	451
35	本宮熊堂Ａ・第17次・	04	453
36	細谷地・第8次・	04	454
37	略報（平成15年度）	04	455
38	本宮熊堂Ｂ・第18次・	05	458
39	本宮熊堂Ｂ13・15・20次	04	467
40	台太郎・第51次・	05	468
41	平成16年度・・	05	469
42	矢盛・第6次・	05	488
61	熊堂Ａ・24・熊堂Ｂ・25・	06	470
62	台太郎・第54次・	06	486
63	本宮熊堂Ｂ・第27次・	06	487
64	飯岡沢田・第９・10次・	06	489
65	平成17年度・・	06	490
66	飯岡才川・第８・９次・	07	494
67	細谷地・第９次・第10次・	07	500
68	野古・第23・24・29次・	07	501
69	本宮熊堂Ａ・第26・29次・	07	502
70	向中野館・第５・６次・	07	503
71	向中野館・第７・８次・	07	504

・岩手県教育委員会発行報告書

43）1979年『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告第35集
44）1982年『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ』岩手県文化財調査報告第68集
45）1990年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告第86集
46）1991年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告第90集
47）1992年『岩手県内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告第91集
48）1993年『岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成4年度）』岩手県文化財調査報告第93集

・盛岡市教育委員会発行報告書

『盛岡市埋蔵文化財調査年報－○年度－』『盛岡市内遺跡群－○○調査概報－』

No.	書名（略）	年
49	－昭和55～58年度－	1985
50	－昭和59年度－	1986
51	－昭和60・61年度－	1987
52	－昭和62年度－	1989
53	平成５・６年度	1998

No.	書名（略）	年
54	－平成10年度発掘調査概報－	1999
55	－平成11年度調査概報－	2000
56	－平成12年度発掘調査概報－	2001
57	－平成13年度発掘調査概報－	2002
58	平成15年度・16年度発掘・・	2005

『紫波城跡－○○年度発掘調査概報－』

No.	書名（略）	年
59	平成８・９・10年度	1999
60	平成11～14年度	2003
72	平成15・16年度	2005

＊54の書名は、『盛岡遺跡群』

第１表　細谷地遺跡のこれまでの調査一覧

調査次数	委託者	種類	調査面積 m²	調査機関	調査期間（西暦）	調査成果・検出遺構	出土遺物	報告書（上記）	備考
1	個人	試掘	112	盛岡市教委	86.7.21	平安時代土坑１		51	
2		試掘		盛岡市教委	平成８年度				
3		不明		盛岡市教委					
4	盛岡市	本調査	3,342	当埋蔵文化財センター	00.06.14～11.08	縄文陥し穴状遺構23／平安（９世紀後半～10世紀前半）集落→住居跡39、掘立柱建物跡４、土坑、焼土１、溝跡、カマド状遺構２基／　近世掘立柱建物跡　井戸跡	縄文土器（後晩期）／あかやき土器、鉄製品（刀子・釘・鉄鏃・手鎌・足金具）、石製品（砥石・磨石・台石・石錘）・土製品（羽口・土錘・紡錘車）／寛永通宝・木製品	23	継続調査
5	〃	〃	5,805	〃	01.04.16～07.31				
6	公団	〃	190	〃	01.05.22～06.05	近世の井戸		22	
7	盛岡市	〃	125	〃	03.10.01～10.31	なし	土師器小片	37	
8	〃	〃	2,638	〃	03.07.01～11.07	平安（９世紀中～10世紀初頭）集落→住居跡16、畠状遺構２、柱列１条、土器焼成土坑４ ＊生産遺構目立つ	剥片土器、耳皿、鉄製品（鉄鎌、刀子、鉸具、鉄鏃）	36	
9	都市機構	〃	1,835	〃	05.04.12～11.18	縄文晩期前葉住居跡（廃屋葬？）、土坑／弥生焼土／奈良～平安集落→住居跡46（奈良11・平安45）、掘立柱建物跡１（平安）、土坑（平安主・奈良２？）、溝跡（奈良～平安）／近世掘立柱建物跡	縄文土器（後晩期）／弥生土器／鉄製品（刀子・鉄鏃・穂摘具・鉄鐸・鈎針・小刀）、石製品（砥石・鉄砧石）、土製品（羽口・土錘・軒平瓦？）／永楽通宝、寛永通宝	67	一体調査
10	盛岡市	〃	10,545	〃	〃				
11	〃	〃	1,569	盛岡市教委	05.04.11～05.20	竪穴住居跡４（平安）、畑畝間	（平安）	未刊	
12	国土交通省	〃	3,240	当埋蔵文化財センター	06.04.10～06.15	縄文時代の陥し穴状遺構11／近世の掘立柱建物跡と墓		今年度	
13	都市機構	〃	2,530	〃	06.07.03～11.27	奈良～平安集落→竪穴住居跡38棟（奈良８、平安30）、鍛冶工房跡、トチノミ、クリ、炭化米などが大量に出土した焼失住居	鍛造剥片、ガラス小玉２	〃	一体調査
14	盛岡市	〃	7,958	〃	06.04.10～11.27				

全に埋まっていたものである。また、その上面の所々に灰白色火山灰のブロックが認められた。

調査区内の地形。今回検出された平安時代（９世紀後半～10世紀前半）の集落跡は、Ⅱ層上面に構築されたと考えられるので、上記沢跡は若干凹んでいたかも知れないが、基本的にほぼ平らであったと推測される。Ⅳ層上面でも、西から東に延びる沢跡は認められたが、それほど大きな起伏ではなく、段丘上であることからもわかるように、なだらかな地形であったと推測される。

検出状況。今回検出された平安時代（９世紀後半～10世紀前半）の集落跡は、Ⅱ層上面に構築されているので、本来的には遺構はⅡ層上面に検出されるはずである。しかし、沢跡上面（Ⅱ層）から比較的多量の遺物が出土したので遺構があるのかどうか見極めようとしたが、全く分からなかった。後にⅣ層上面まで下げたところ土坑が検出されたので、沢跡上面で確認できたはずであるが。

今回は時間がなく、原則としてⅢ層下部～Ⅳ層上面まで一気に下げてしまったので、検出にそれほどの難はなかった。遺構の重複関係を見極めるのは往々にして難しかったが、特徴的な埋土のため検出面ではっきりと分かる場合も比較的多くあった。

出土状況。遺物は、ほとんどが遺構の埋土から出土しているが、上述のように、旧沢跡の上面からも比較的多く出土した。層位差は、時間がなかったこともあって、確認できていない。

3　これまでの調査と周辺の遺跡（第３～５図）

(a) これまでの調査（第３～４図）

細谷地遺跡の本調査は、今回で12回目になる（第４～15次）。各調査の概要は表（p. 7）にまとめたので、ここでは大要のみ記す。なお、表の委託者欄のうち“公団”の正式名称は、「地域振興整備公団岩手県総合開発事務所」、“都市機構”は「独立行政法人　都市再生機構岩手都市開発事務所」である。なお、後者は、前者が組織改変されたものである。

第１節でみたように、細谷地遺跡は基本的には砂礫段丘上に立地するが、北西部に旧河道を含み、段丘上に古代集落跡（縄文晩期の集落跡も？）が立地するのに対し、旧河道では、縄文時代の陥し穴状遺構、近世の集落跡が主として確認されている（第３図第５次調査区の大部分、第12次調査区）。

第３、５図を見て分かるように、本遺跡の調査は、遺跡の北限を東西に分かれて進んできている。本遺跡の主体となる古代集落跡では、平安時代（９世紀後半～10世紀前半）の集落跡は、東西いずれにも認められるが、奈良時代の集落は今のところ東側にのみ確認されている（第９～10次、第12～13次調査区）。間の９世紀前半の集落跡は今のところいずれにも確認されていない。

今後、調査は段丘の中心部に進んでくるので、よりはっきりすると思われるが、平安時代（９世紀後半～10世紀前半）の竪穴住居跡の分布は、明らかに段丘崖に沿って濃く、段丘の内部は希薄なようである。また、第９～10次調査区（文献67）で認められた“環状集落”や、第４～５次（文献23）から第８次（文献36）、そして今回の第15次調査区の中で、竪穴住居跡が幾つかの群に分かれるようなあり方は（第４図）、縄文時代の集落跡に通じるものがあって興味深い。その原因も縄文時代と同様と考えているが、この後は第Ⅵ章で述べたい。なお、奈良時代の竪穴住居跡は、段丘の北東端に沿って弧状に巡る二条の埋没沢の上とその周囲の低い部分に点在するようである。

以下、古代集落跡の特記事項。一辺2.5m以下の極端に小形の竪穴住居跡が、第４次調査区を中心に見られ、第８次、第９～10次、第15次調査区にも散見される。土師器焼成土坑と考えられる土坑が、第４次、第８次、第９～10次、第15次調査区から検出され、第８、９～10次では、土器生産の副産物と考えられる破片がチップ状に剥離した「剥片土器」が出土した。第８次調査では、畠と考えられる

畝間状遺構を検出。まだ未報告であるが、第13～14次調査区から、トチノミ、クリ、炭化米などが大量に出土した焼失住居跡、鍛造剥片が出土した鍛冶工房跡が発見された。第４～５次調査区（文献23）で、内面に花弁状暗文を持つ土師器坏が竪穴住居跡から出土し、第９～10次調査（文献67）では、小形の軒平瓦のような土製品、樹木様の文様を刻書した両面黒色処理の土師器椀が出土した。

古代以外の調査結果について最後にまとめておく。

第９～10次調査区（文献67）で、縄文時代晩期前葉（大洞B2式期）の竪穴住居跡１棟、フラスコ状土坑３基？確認されている。住居跡は、周囲に同様の遺構はなくポツンと点在しており、マウンド状に埋め戻されていて逆位に据えられた完形土器の存在などから、廃屋葬の可能性が窺われる重要な調査例である。この他に、時期は特定されていないが縄文時代と考えられる溝状の陥し穴状遺構が、第５次（文献23）、第12次調査区で確認されている。また、第５次調査区で検出された柱穴状小ピットの中にも、縄文時代と推測されているものがある。

遺物としては、第５次調査区で縄文時代後期前葉、晩期後葉（大洞A1式）の土器片、石器剥片類、第９～10次調査区で縄文時代晩期前葉（大洞B2式）（完形含む）、晩期中葉土器片（大洞C2式）、石鏃や石錐などが出土している。

弥生時代では、第９～10次調査区（文献67）で、弥生時代後期と思われる焼土が埋没沢から検出され、前期末（大洞A′式新段階）と後期の土器片が出土している。

中～近世。第９～10次調査区（文献67）で、永楽通宝が出土している。近世では、第５次（文献23）、第12次調査区を中心として、第６次（文献22）、第９～10次調査区でも、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、火葬墓などが検出され、近世陶磁器、寛永通宝、曲物・杭などの木製品が出土している。

なお、今回の調査区の隣接部分で確認された遺構を第４図に掲げておいた。本来なら遺跡全体の遺構図を示すところだが、東西600ｍにも及ぶ遺跡範囲では、遺構として認識できる大きさで図幅に収めるのには無理がある。ご容赦いただきたい。

（ｂ）周辺の遺跡（第５図）

第５図とその右頁にある文献一覧に略記したので、詳細は文献24、33、70等を参照いただきたい。なお、図および文献一覧は、『向中野館遺跡第７・８次発掘調査報告書』（文献71）のそれを追加変更したもので、一部分かりづらくなっていることをお詫びする（42と61、60と72、42と61以下との関係）。図幅も、中心をもう少し南にずらした方が適切だが、これより南しばらくは調査報告遺跡がないようなので、あまりずらしても意味がないと思われ、さらに盛岡駅からの距離および本遺跡群を考える上で重要な雫石川が入った方が良いと判断して、そのまま変更しないことにした。

また、「略記」には含めていないが、平成18年度にも発掘調査が行われており、当埋蔵文化財センター関連では、台太郎遺跡の第58次調査（3,945㎡）、向中野館遺跡の第９次調査（2,052㎡）、飯岡才川遺跡第12次補足調査、第13次調査（4,000＋2,280㎡）、矢盛遺跡の第９～11次調査（3,055＋147＋3,891㎡）が行われている。概報（(財)岩手県文化振興事業団　2007）によれば、基本的にはこれまでの調査結果と同様のものが発見されているようだが、矢盛遺跡で新しい知見が得られている。一辺70～80ｍのやや歪んだ方形に堀を巡らせた16世紀代の居館跡が確認され、掘立柱建物跡や竪穴建物跡などが検出されている。また、向中野館遺跡では、北館の主郭が発見されたが、遺構・遺物が希薄なことから居所は南館と推測されている。詳細は、今年度発行される報告書を参照いただきたい。

周辺遺跡の調査は、今回と同様ほとんどが「盛南開発」によるもので、周囲には多くの古代集落が広がる。今回報告する細谷地遺跡第15次調査で発見されたもののほとんどは、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）であった。そこで、この時期を中心に周辺の遺跡を簡単に見ていくことにする。遺跡

番号は、第5図の番号である。

古墳末～奈良時代の竪穴住居跡は、細谷地（1）、台太郎（2）、飯岡才川（4）、飯岡沢田（6）、野古A（7）、本宮熊堂B（8）、稲荷（10）、鬼柳A（13）、深渕I（36）遺跡で発見されている。

志波城が造営され存続した9世紀前半の遺跡は、はっきりしない。遺構としては、本宮熊堂B遺跡（8）のRA110住居跡（文献61）くらいしか見あたらない。遺物としては、向中野館遺跡（3）から「厨」と墨書された須恵器が出土している（文献70）。この他にも土器片などは出土しているようだが、はっきりしない。なお、『向中野館遺跡第7・8次発掘調査報告書』（文献71）の中の周辺の遺跡一覧表で、飯岡才川遺跡の項に9世紀前半含む集落跡と書いてしまっている。報告書（文献21）の抄録からそのまま記載したが、当該期とされたRB05掘立柱建物跡出土土器を見ると（報告書：p.92）、とてもそのようには断じ得ない。お詫びして訂正しておく。なお、飯岡才川遺跡の円形周溝から出土した須恵器には、この時期になりそうなものも含まれているそうだが、断定はできないようである。

志波城が廃絶された後の9世紀中頃～10世紀初頭にかけては、爆発的に遺構・遺物が増える。第5図に示した調査歴のある遺跡のほとんどに、この時期の遺構が認められる。この地区で発見された竪穴住居跡は1,000棟を越えるが、その7割以上はこの時期と思われる。まさに、平安時代（1,000年前）の“盛南開発”と言った感じである。こうした動向は、この地区に限ったことではなく、少なくとも岩手県の北上川流域で一般的に認められる傾向である（伊藤　1998ほか）。しかし、9世紀前半における当該地区の壊滅的な少なさに対するこの急激な増加は、尋常なものではなく、何らかの説明が求められる。そもそも時期決定の基となる土器編年が間違っている可能性もなくはない。つまり、9世紀前半に志波城という一般集落ではなく城柵出土の（特別な）土器をあてたことで、他の一般集落ではその（特別な）土器が出土しないという誤謬の可能性もなくはないようだが、報告者は、竪穴住居跡その他の遺構・遺物の特徴およびその分布から、様々な場所から多くの人々が短期間に移住してきた結果なのではないかと考えている。おそらく、その背景には、この地区における本格的な水田稲作の開始ということがあろう。この後は、第Ⅵ章で検討してみたい。

参考文献

伊藤　博幸　1998「後半期の集落」『岩手考古学』第10号　岩手考古学会
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2007『平成18年度発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第505集

Ⅲ　調査・整理の方法

1　野外調査の経過

本来は、別の調査班が10月1日から担当することになっていたが、その班の前の調査遺跡が、面積が増加したこともあって、とても10月一杯には終われないということがわかり、急遽担当替えになったものである（10月6日）。

10月16日（月）から作業開始になったが、取り敢えず先に重機で表土を剥ぐこととし、人力による作業は10月23日（月）からという指示を受けた。というのも、この年盛岡地区で当センターによる発掘調査が多く、元々作業員が不足気味であったことに加え、本遺跡に作業員が移動することになっていた遺跡の調査が終盤延長されたことにもよる。したがって、10月中は15名、11月6日（月）から10名増えて25名体制ということになった。人数もさることながら、上記の理由で足りない部分は新人を

大幅に雇用して補ってきたため、実測・精査のできる作業員が決定的に足りず苦労した。特に本遺跡の調査は、急遽調査班を新規に編成したため予定外であり、作業員の不足は深刻で、既に調査を開始していた現場から配慮はしてもらったが、他の現場も当初の予定の10月31日より大幅に遅れるところばかりで余裕がなく、最も後発の本遺跡が“割を食う”のは当然である。

10月23日（月）午前に器材を搬入して、本格的に調査開始。と言っても、元々作業員数が少ないことに加え、出勤率も悪く、毎日10名程度での作業のため、ほとんどはかどらなかった。この時点では、まだ重機による表土剥ぎを行っていたため、それが終了していた北側から人力による検出作業を始めた。重機による表土剥ぎは、10月16日（月）から26日（木）までかかった。24日（火）を降雨により休んだとは言え、1,675㎡という面積にしては時間がかかりすぎの感がある。その原因は、現況が工場跡地で産業廃棄物が深く残っていて掘削しにくかった部分が大きい。

10月25日（水）に基準杭を打設していただいて、10月30日（月）までに調査区以内のグリッド杭の設置は終了した。

10月29日（月）からは、一部精査も併行して行った。といっても、15名の作業員のうち11名が今年採用の新人であったため、遺構精査のできる人は数名で、精査は主として遺構かどうかあやしいものをはっきりさせる点に主眼を置いた。

11月６日（月）からベテランの作業員（実測できる方も３～4名）が11名増え、また応援の調査員の援助も受けるようになったので、本格的な遺構精査を開始した。

新人を中心に検出作業も続け、最後まで残していた旧沢跡の黒土にもトレンチを入れた。その結果竪穴住居跡など浅い遺構はないことがわかり、ここもⅢ層下部～Ⅳ層上面まで下げ、検出作業はほぼ終了した。11月16日（木）のことである。この後も、重機で掘り足らなかった部分を拡張したり、カクラン範囲として大きく残していた部分を地山深くまで入っている範囲まで縮小するなどの微調整を、新人を中心として、11月24日（金）ころまで続け、最後に、調査区中央を横断する現代の溝の埋土を取り去る作業をしてもらった。このころから退職する作業員が増加したため（特に新人）、結局この作業はほぼ最後までかかった。

この時期“盛南開発”では四現場が同時に調査していたため（全て11月下旬まで）、援助を受けることはできなかったが、他の調査が終了し始めた11月下旬からは若干の援助も受けた。11月24日（金）から先に終了した現場から、実測・精査のできる作業員を４名追加補充したが、同じ頃からやめていく作業員も徐々にでてきたのでトータルではほとんど変わらないかマイナスであった。

12月に入ると精査・実測遺構も減って僅かになってきたので、作業員を約半分を土器水洗にふりわけた（12月６日（水）～）。

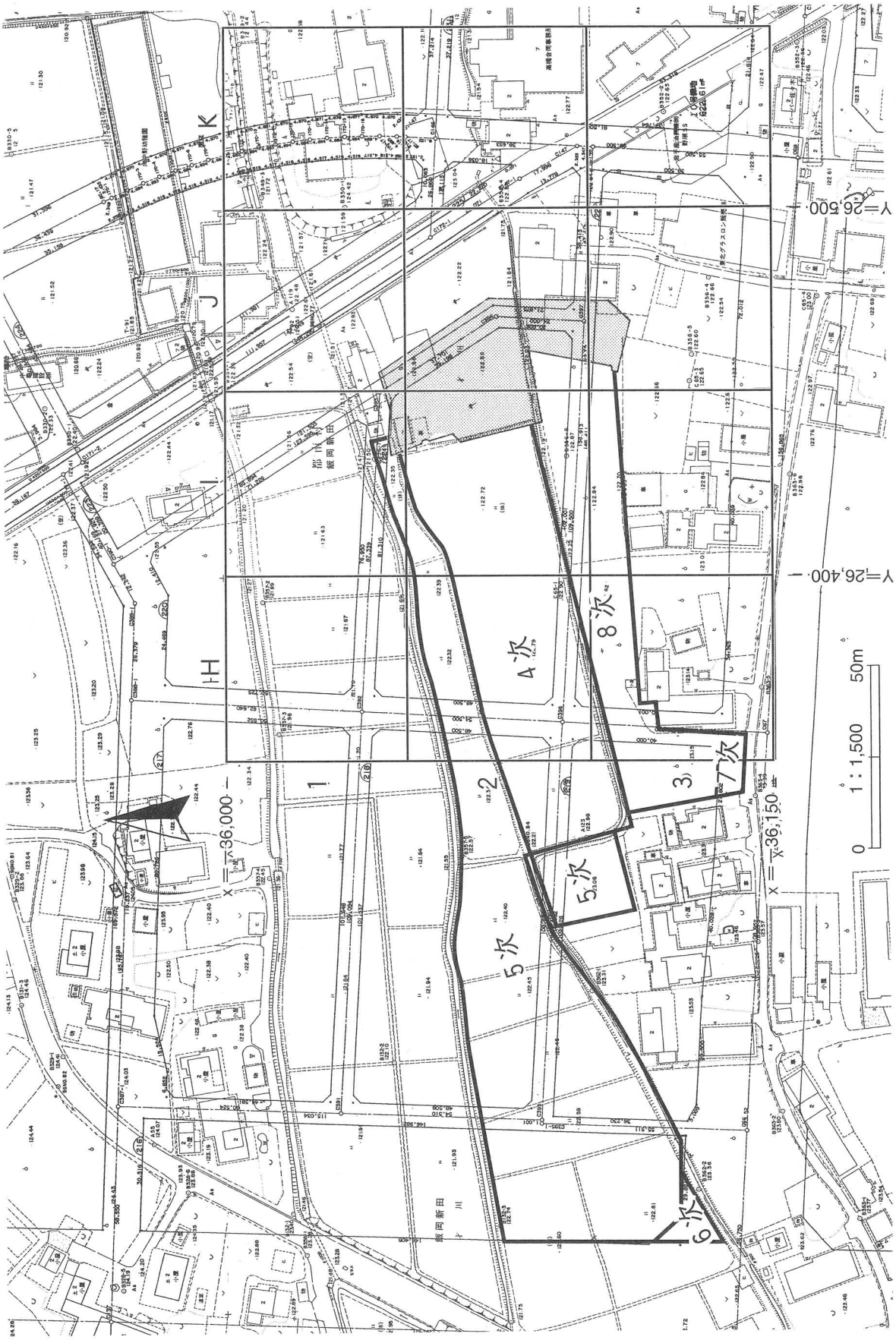
11月は暖冬気味で、むしろ雨に悩まされたが、12月に入ったとたんに冷え、霜や氷に悩まされることになった。12月７日（木）にはついに調査中に積雪を見て作業を中止せざるを得なくなった。天気が悪くてセスナ機による空中写真もなかなか撮れずやきもきしたが、何とか12月４日（月）に終了。

12月11日（月）からは器材の梱包が主となり、12月12日（火）の午後器材を搬出し、同じ頃最後まで残っていたRA157住居跡の柱穴の追加実測を終了し、調査の一切を終了した。

2　野外調査の特記事項

（ａ）グリッドについて

盛岡市教育委員会の指示に従った。平面直角座標（第Ｘ系）に合わせ、大グリッドは50×50ｍのメ



第６図　調査範囲と大グリッド

ッシュで、東西方向に西からＡ、Ｂ、Ｃのアルファベット、南北方向には北から１、２、３のアラビア数字を付し、１Ａ、１Ｂ等と呼称した（第６～７図）。座標値は、第６図に記したが、数値は日本測地系であり、世界測地形に直すと、Ｘ＝－36,050.0000→－35,742.3119、Ｘ＝－36,100.0000→－35792.3126、Ｙ＝26,450.0000→26,150.4088、Ｙ＝26,500.0000→26,200.4069となる。

各大グリッドを25等分し、南北方向に北から１、２、３のアラビア数字、東西方向には西からａ、ｂ、ｃのアルファベットをつけ（第７図参照）、１Ａ１ａ等と呼称した。これが小グリッドである。

（ｂ）遺構の名称について

遺構名も、盛岡市教育委員会に準じている。略号は以下の通りで、番号は三桁で付け、第14次調査からの続き番号である。ＲＡ→竪穴住居跡、ＲＢ→掘立柱建物跡、ＲＤ→土坑。

野外では第○号住居跡、第○号土坑のように作業順に便宜的に名前を付け、報告時に全て付け直した（ただし、RA047住居跡とRB003掘立柱建物跡は既に名前が付いていたため、そのまま使用）。各遺構の種類ごとに原則として南から北に番号を付けたのは、ほぼ精査順に合わせたものである。

・竪穴住居跡

第１号→RA151
第２号→RA152
第３号→RA150
第４号→RA153
第５号→RA154
第６号→RA155
第７号→RA156
第８号→RA157

・土　坑

第１号→RD338
第２号→RD339
第３号→RD340
第４号→RD356
第５号→RD341
第６号→RD361
第７号→RD342
第８号→RD343
第９号→RD344
第10号→RD345
第11号→RD346
第12号→RD347
第13号→RD348
第14号→RD349
第15号→RD350
第16号→RD351
第17号→RD352
第18号→RD353
第19号→RD354
第20号→RD357
第21号→RD358
第22号→RD359
第23号→RD360
第24号→RD355
第25号→RD362

（ｃ）調査方針と方法について

重機で北西隅を一部剥いだ時点で、当初予定の１ヶ月という調査期間で終わるものではないことは明らかであった。調査に入ったのが10月16日であり、調査が延びると整理期間を圧迫することは明瞭で、また季節柄後になればなるほど調査条件は悪く危険も増すことも十分すぎるほどわかっていた。そこで、期間を最優先し、省略できることは全て省略、短縮できることは全て短縮することに決めた。

まず、人力による検出作業を短縮するため、重機で遺構検出面直上（Ⅲ層中部）まで下げた。ダメ押しをする時間はないので、検出面はⅢ層下部～Ⅳ層上面まで下げ一回で判断することにした。その際、Ⅱ層（黒土）中に底を持つものは別に考えるが、取り敢えず底がⅢ層下部～Ⅳ層に達しているものについては全て同様に扱った。竪穴住居跡の平面（完掘）写真は、タワーを設定して撮るのが通常だが、この年にレンタルしたタワーが非常に建てにくく危険なため、全て脚立で撮ることにした。竪穴住居跡の柱穴断面は、浅く単層に近いものは実測しないことにした。

このように臨んだが、産業廃棄物によるカクランが大きな支障となり、前回との調査範囲の境がわかりにくく手間取り、さらにこの時期としては多い雨と霜どけによって調査現場が毎日のようにドロドロになったため、あまり期間を縮められなかった。むしろ、12月中旬以降は雨も減り、1月は記録的な暖冬で雪もほとんどなかったから、無理して早く終わる意味はあまりなかったかも知れない。

（ｄ）調査条件について

調査環境のうち、気象以外の環境条件について。

現況は、大部分が工場跡を更地にしたもので、多くのカクランが認められた。カクランは、産業廃

棄物（鉄、ガラス、コンクリート片、礫）からなるもので除去するのに時間がかかり、またその深さも一様ではないため上から見極めがたく、調査に極めて深刻な影響を与えた（第Ⅳ章冒頭参照）。

排土は、調査区北側の民家部分と西側の「第四次調査区」（第７図）を除いて捨てることができたが、東側が調査区より大分高く、また遺構の集中する調査区北側は、北西側の民家横に出さなければならなかったので、やや影響を与えている。何より、後述する気象条件で毎日土がドロドロになったため、歩きにくく運搬に大変問題があった。遺物、器材水洗用の水。10月中は雨が少なくて苦労したが、11月は雨が比較的多く、カクラン部分に穴を掘って水をためたため、あまり問題はなかった。遺構埋土。基本的にクロボク土で掘りやすかった。検出面を大幅に下げたため、検出にも難はなかった。

（ｅ）特に気象条件について

10月は基本的に秋らしい好天が続いた。しかし、11月は、暖冬で暖かかったが、例年になく雨が多く、基本的に毎週１日雨で作業中止になった。その量も、この季節には珍しく多く、水くみ等の復旧に半日くらいを費やした。特に、11月27日（月）～29日（水）は毎日雨が降り、佳境に入った精査に大きく水を差した。12月４日（月）からは急に気温も下がり、毎日霜が降りるようになった。前の週に雨が多かったせいか、シートをかけても中から凍るためあまり意味がないのである。それでいて、雨が多いのも変わらず、12月５日（火）も午後から雨となり３時で作業を中止せざるを得なかった。12月７日（木）にはついに雪が積もった。この12月４日（月）～８日（金）の週は、作業終了がかかる大事な週だったのだが、天気には全く恵まれなかったのである。

特に困ったのが土である。雨の日は言わずもがな、天気の良い日は霜がおり、それが解けてドロドロに、ということで、11月下旬以降は、毎日ドロドロの中で作業をせざるを得なかった。歩きにくく、また一輪車で土を運ぶのが大変であった。水分の多い時には滑りやすく、乾いてくると靴に土がくっついて歩くのが大変といった状態である。滑ってけがをした人がいなかったのだけが幸いであった。

暖冬で比較的過ごしやすくはあったが雨が降って大変で、カクランと共に作業に支障となった。

（ｆ）調査員、作業員の構成について

調査員は２名の他に援助があり、11月６日（月）以降は常時５名以上いた。作業員は、10月中は15名、11月６日（月）から10名増えて25名であったが、季節柄出勤率が悪く、10月はほぼ10名、11月はほぼ20名程度である。11月24日（金）から４名追加補充したが、一人二人とやめていき、12月は15名以下となった。上記のように、作業員は新人が多かったが、真面目な方が多く、また検出・粗掘が比較的後の段階まで残ったこともあり、作業の支障にはほとんどなっていない。しかし、10月はさすがに人数が足りなくて作業が進まず、やきもきした。

（ｇ）遺構の検出について

（３）調査方針で述べたように、調査期間をできるだけ短縮するため、原則として遺構が明瞭に確認できるⅢ層下部～Ⅳ層上部まで一気に下げている（掘り込み面はⅡ層上面）。

（ｈ）遺物の取り上げについて

遺構土層断面記録後の完掘時には、基本的には層ごとに掘り上げ、遺物も層ごとに取り上げているが、時間がなくて一括した場合があり、また層に変化がなくて識別しにくかった場合には一括せざるを得なかった。残りの良い土器や床・底面出土遺物は、出土状況を図や写真等で記録した。

（ｉ）遺構の実測について

平面図は、基本的には一般的な簡易遣り方で作成したが、ＲＡ153住居跡の一部を光波トランシットによる測距を基に作成している（平板実測の測量の部分を光波トランシットで行ったのに相当）。

3　室内整理の経過

野外調査の開始が遅かったこともあって変則的である。室内整理は、12月から開始し、12月は調査員１名のみの作業であった。１月以降は同じく調査員１名のほかに作業員がついたが、１月は２名、２月は１名、３月は再び０名である。

作業員の数が少ないこともあって、遺構関係の作業は全て調査員が行った。図面整理は基本的に野外で行ったが、トレースに当たっての一部変更調整を12月中に行った。他に、遺構写真のアルバム整理も12月に行っている。土層注記のパーソナル・コンピューター打ち込みも、ほぼ野外で行ってきたので、１月はトレース、２月は図版作成、３月上旬に写真図版の作成を行って、遺構関係は終了した。

遺物整理。遺物水洗のほとんども野外で終われなかったので、１月は通常の作業員に加え、日々雇用の作業員を５名雇い、遺物水洗と接合・復元作業および写真撮影のための石膏部分色塗りを行った。２月は再び通常の整理体制にもどったが、他からの援助も受けて遺物実測、拓本を行い、トレースも含めて終了した。このように早く終了したのは、余裕がないため掲載遺物を大幅に減らしたことが大きい。３月前半は遺物図版の作成を行い、３月13日（火）～15日（木）に遺物写真撮影、その後考察部分の図版作成と遺物写真図版作成を行った。

一部原稿の執筆を残し、３月30日（金）に整理の一切を終了した。

4　室内整理の特記事項

（ａ）遺物の全体量と報告書掲載基準について

調査では、土師器・須恵器（32×42×30㎝のコンテナ）９箱、石器11点、土製品２点、鉄製品２点、琥珀１点が出土した。掲載基準は、整理方針に後述（詳細は第Ⅴ章参照）。

（ｂ）スタッフと整理方針について

調査員１～２名と作業員１～２名で整理作業を行ったが、作業員は若干の支援があった。作業員の数は少ないが、ほとんどがベテランであり作業ははかどった。

スタッフと整理期間（整理は１月から開始、１月は水洗・注記・接合復元を行ったので実質２～３月の二月で全て終了）を考慮して、次のような整理方針を立てた。

第一に、土器以外の遺物は少ないので基本的に全点掲載するが、土器は大幅に掲載を割愛する。研究の現状から、土師器・須恵器とも、器形が復元できないとほとんど意味がない、甕は胴部だけではあまり意味がない、特に土師器は“セット（共伴）”で出土しないと大幅に情報が減るので遺構外や遺構内でも出土状況が不明なものはあまり意味がない、と判断された。そこで、遺構外は全形が残っているもの以外は原則として掲載しない、遺構内でも、器形が推定復元できないものは掲載しない、遺構内でも、土師器甕の胴下半部だけの資料は、全形が残っているもの以外は原則として掲載しないとの方針を立てた。したがって、No.を付けて取り上げてきた遺物でも、接合せず破片のままだったものは全て割愛した。遺構外出土品で形の残っているものはほとんどなかったので、減らすのにそれほど苦労はしなかった。結果として、住居内を中心に掲載土器は大幅に減り、あまりに減らしすぎて報告書の見積もりと大きな齟齬が生じ、逆にこの点で頭を悩ますことになった。

第二に、掲載方法は、ニーズとコストを考えて（金子　1998：pp.11～13）、石器は写真を基本とした。その他の遺物については原則として全て実測したが、琥珀は写真のみとした。土器は、時間のかかる調整痕の実測は表裏とも1/8周にとどめた。現状では、調整の種類・方向以外に意味はないと判

断され、縄文土器の縄文以上の意味はなく、1/4周描くのは美的観点からのみと思われるからである。

（c）遺構図面の点検・修整について

平面図と断面図の照合等の図面点検は、現地で行った。合わない場合は計り直したが、どうしても合わない場合やセクション・ポイントがないなどの不備は、そのままにし本文中にその旨記している。ただし、1/20の縮尺で1㎜（原寸では2㎝、報告書では0.5㎜）の違いについては誤差範囲とし、特にふれていない。報告書に嘘を書くべきでないという方針（金子　1998：p.10、13）に拠る。

（d）遺物の接合・復元・注記について

土器は基本的に報告書に掲載したものだけに注記した。土製品、石器、鉄製品については、1点、1点別の小袋にしまって、その袋に出土位置等を記載し、注記はしていない。

土器の接合は、作業員約1～2名と日々雇用作業員が約2週間行った。原則として同じ袋、同じ遺構、同じグリッドの中でのみ試み、遺構間や異なるグリッドの間での接合は行っていない。また、日々雇用の作業員はほとんどが初心者のため、まだ接合する可能性を残していると思われる。

（e）遺物の実測・拓本・トレースについて

遺物の実測・拓本・トレースは作業員が行い、実測図は調査員が点検した。

5　報告書の特記事項

報告書の体裁は、基本的に既存の報告書に倣ったが、一部違うところがあるので以下に記す。

（a）遺構、遺物図版の凡例について

本書冒頭の例言の下にある。

（b）遺構出土遺物の掲載・記載の位置について

遺構出土の遺物も第Ⅴ章で掲載・記載しているが、遺構図版の後に遺構内遺物集成図として縮尺を落としてまとめてもいる（第29図～第33図）。出土状況は、第Ⅳ章の各遺構の項を参照。

（c）遺物の分類・掲載順序について

遺物は、基本的に種類ごとに、出土位置の順（遺構内→遺構外）に並べている。

（d）遺物の記載の仕方について

遺物の記載は基本的に観察表で行い、表に入りきらない場合や表の項目に当てはまらないことは本文中に記し、その頁を表の「本文記載」という欄に記した。観察表の見方等は、第Ⅴ章冒頭に記した。

（e）註・引用参考文献の掲載位置について

それぞれの節の最後にまとめている（例えば、第1節土師器・須恵器）。

（f）本文、表、図版のレイアウトについて

原則として本文は本文、図版は図版とまとめている。報告書は通して読まれるということはほとんどないと思われるので、“捜し易さ”を優先すべきと考えたためである。

（g）全体の体裁について

元々は細谷地第13、14次の報告書と合本の予定で、“合わせる”ことが求められていたが、2月26日になって急に変更になったため、やや無理が生じている部分がある。

参考文献

金子　昭彦　1998「埋蔵文化財センターの考古学」『紀要』XⅦ　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

Ⅳ 遺　　構

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡９棟（１棟は第８次調査の続き）、掘立柱建物跡１棟（第４次調査の続き）、土坑25基で、いずれも平安時代で９世紀後半～10世紀初頭の可能性が高い。

本章を読む際に注意していただきたい点。凡例は、本書冒頭の例言の下にある。遺構から出土した遺物は、第Ⅳ章の後に遺構ごとの集成図を掲げているが（第29～33図）、遺物自体の詳細については第Ⅴ章を参照いただきたい（番号は共通）。遺構名称は、野外では仮番号を付け（第○号住居、土坑など。○には数字が入り、精査順に番号を付けた）、報告書執筆の時点で、例言に示した盛岡市教育委員会の方法に則って全て付け直した（第Ⅲ章で詳述）。ただし、順番はそれほど大きく変えていない。同じ種類の遺構の中での番号は、基本的に南から北に向かって付けているが、土坑の場合は、ＲＤ342の後、南西に移っている。その他、第Ⅲ章を参照していただきたい。平面図と断面図の照合等の図面点検は、現地で全て行っている。合わない場合は計り直しているが、どうしても合わない場合は、そのままにし本文中＜図・精査状況＞にその旨記している。ただし、1/20の縮尺で１㎜（原寸では２㎝、報告書では0.5㎜）以内の違いについては誤差範囲とし、とくにふれていない。本文記載中の深さは、言うまでもなく検出面からの深さである。

後述のように検出面を大きく下げたので、検出は、旧沢跡と一部の重複以外容易だった。土も大体掘りやすかったが、礫（Ⅴ）層が露出している場所やカクランは掘りにくく時間がかかった。

調査区内の地形については第Ⅱ章に記した。基本的には砂礫段丘上にあるが、西側の第４次調査区からの続きで、西から東に沢跡が入る。第７図ＲＡ155住居跡の南半分から南側にあるＲＤ340土坑くらいまでの幅で、東端は、ＲＡ153住居跡南端から２Ｊ11ｋグリッドの杭あたりまで続く（写真図版12）。ただし、沢はⅣ層上面にあり、今回の調査で発見された集落は本来的にはⅡ層上面に形成されていたものである。したがって、集落形成時には既に沢は埋まりきっており、3,881.3ｇと比較的大量に出土した土器片や土錘は、沢跡の上のⅡ層上面から出土している。集落形成時のⅡ層上面を基準にすれば、今回の調査区は平坦に近い。再び、地山であるⅣ層上面について。調査区中央よりやや南に調査区を横断する溝がある。これ自体は最近の溝だが、これより南はⅣ層の発達が弱いのか、Ⅲ層の下はすぐ砂礫となる。遺構が少ないのは、これが原因なのかも知れない。

調査区の現況についても第Ⅱ章で記したが、工場跡地を更地にしたものだったのでカクランが著しく多い。ただし、南側はそれほどでもなく、リンゴの木を移し替えたような跡が見られたので畑だったのかも知れない。また、北側のカクランも、大部分は深く入っているのだが、深さは一様ではなかった。重機で表土を剥いだ時点で、一応中心を深掘りしてみて深さも確かめてみてはいたのだが、時間がなかったので（カクランは産業廃棄物からなっているため除去するのに著しく時間がかかる）、それほど徹底してはいなかった。それが、ＲＡ154、156住居跡を精査してみて、思ったより深く入っていない地点もあることが分かり、その後、カクランの周囲をクリーニングして深さを確認し、深く入っていないところはカクランを除去して狭める作業も行ったが、カクランの中央付近に浅い部分があった可能性もなくはない。しかし、既に12月に入っており、徹底することはできなかった。

排土置き場は、第7図北西端の「第５次調査区」（北西側に図よりさらに続く）、南西の「第８次調査区」、調査範囲より外側の東～南に設定することができ、調査範囲の東南外側を重機による排土置き場とし、それ以外を人力による排土置き場とした。なお、「第４次調査区」には高い土山が築かれていたため、排土置き場とすることはできなかった。

遺構の検出・精査状況。重機による表土剥ぎは、北から南に向かって行った。余裕がないので検出作業を省力化するため、重機でⅢ層中部まで下げた。人力で検出作業をはじめた時にはまだ重機が動いていたので、安全確保のため、第７図ＲＤ348～351土坑付近から北に向かって開始した。北東隅は、遺構が希薄ですぐ終了したが、その南側は、遺物が多く出土して遺構を確認しようとしたが、沢跡の上で黒土が厚く堆積しているため、見極めるのは容易ではなさそうだった。そこで、重機が終わるのを待って、第７図側溝から南側の遺物・遺構の希薄な範囲から検出・精査を開始することにした。住居、土坑の若い番号がこちらに付いているのはそのためである。側溝より北側は、まず沢跡より南の範囲を検出・精査し（検出作業は11月１日までに終了）、その後は沢跡を挟んで北西部分を検出し（９日までに終了）、最後に残しておいた沢跡にトレンチを入れ（写真図版12）、竪穴住居跡はないことがわかったので全て地山まで下げた（16日に終了）。その他の野外作業については、第Ⅲ章参照。

ダメ押し。最初からダメ押しする余裕がないと判断していたので、検出面を通常より大幅に下げてⅢ層下部～Ⅳ層上面としており（遺構の掘り込み面はⅡ層）、“取りこぼし”をしたおそれはほとんどないものと考え、行っていない。また、上述のように、第７図「カクラン」として広く残した範囲の中に遺構が残存している可能性もあるが、余裕がなくてできなかった。

前回調査との境がはっきりせず困った。調査では「用地ギリギリまでは掘らないでくれ」と指示されることが多いので、どうしても余裕を残して調査しがちだからである。したがって、図面と実際の間に齟齬が生じ、たとえ齟齬がなくても、現地で図だけから位置を特定するのは困難である。終了した暁には捨て杭など何らかの目印を打つ必要を感じる。第７図「第４次調査区」の場合には高い盛土があったので特に広げるのに苦労した。

この調査でもおびただしい数の柱穴様の穴が検出され、調査区北東、ＲＤ357土坑の周辺には特に多かった。原則として全て半裁してみたが、遺構となり得たのは、ＲＢ003掘立柱建物跡とＲＡ155住居跡の周囲から検出されたものだけで（ＲＡ155住居跡の中で報告）、他は全て根穴等の自然現象と判断された。また、調査区内に南北方向に延びる道を何本も確認したが（例えばＲＡ157住居跡の東カマド煙出付近）、重複関係と土性から最近のものと判断したので記録は取らなかった。

1　竪穴住居跡（第８～22図、写真図版２～23・39）

９棟（１棟＝ＲＡ047住居跡は第８次調査の続き）検出され、いずれも平安時代で９世紀後半～10世紀初頭の可能性が高い。

出土位置の欄の住居の後のＱ１～４は、住居を４等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が１、北東が２、南西が３、南東が４になる。精査の順は、概ね、ＲＡ047→150～152→153、154、155→157（11月15日～12月12日）→156（11月30日～12月12日）である。調査区南東隅のカクランは、埋土がⅡ層再堆積土を主としており、北西端を検出した際には竪穴住居跡のように見えた。調査範囲を拡張した時点でプランが不整形でおかしいなと思ったが、念のため下げてみたところ、土師器片とともに最近の陶磁器片が出土し、近現代の穴であることがわかった。

概要。調査区北側の段丘端に近い部分に集中することは明らかである。全体傾向として、カマドの煙道が、住居壁において床面より高いところから始まる特徴を持つ。最大のＲＡ157（カマドが６つ・拡張あり）が一辺約７ｍ、最小のＲＡ151が約2.5ｍだが、大きさの推移は漸移的である。ＲＡ153ではロクロピットが検出されている。出土土器の量は、ＲＡ157が圧倒的に多く28,872.7ｇ、次いでＲＡ153の17,659.3ｇだが、ＲＡ157、153を除けば、一般的な出土量より少ないと思われる。鉄製品

は、ＲＡ153の２点と、極端に少ない。土製品は、同じくＲＡ153のフイゴ羽口１点のみである。

ＲＡ047住居跡（第８・29図、写真図版２）

＜位置・検出状況＞調査区最南端、３Ｊ３ｄ付近に位置する。西に隣接する第８次調査の続きで、事前に想定していた。ただし、住居南側は、今回も調査区から外れているため、未了である。Ⅲ層下部～砂質のⅣ層上面において黒土で明瞭に確認。第８次調査との合成図を第８図右下に掲げた。

＜重複関係＞これまで調査できた範囲では、ない。東壁は、倒木によってカクランされ、全体的に、壁は根による汚れ、カクランを受けている。

＜規模・平面形状＞南側が調査未了のため、正確な規模は不明だが、5.2×4.8ｍ程度の隅丸方形か。

＜埋土＞前回調査と同様、三層に分かれるようで（今回上層は残っていなかった）、中層には灰白色火山灰がブロック状に入る。

＜床面・掘り方・貼り床＞今回の調査範囲では貼床は確認できず、砂礫層（Ｖ層）あるいは一部（南端）その上の砂質Ⅳ層がむき出しの状態で認められた。前回の調査範囲では、貼床がほぼ床面全体に認められたようである。土は、10YR5/6黄褐色砂質シルトと10YR2/3黒褐色シルトの混合土（粗粒砂多く含む）。

＜壁・壁溝＞壁は、砂質Ⅳ層で、前述のようにカクランが多く認められた。壁溝は検出できなかった。

＜柱穴＞検出できなかった。前回調査範囲でも、柱穴らしいものは確認できていないようだが、それらしい位置に土坑が検出されている。

＜カマド＞今回の調査範囲では検出されなかった。前回の調査では、西壁のやや北寄りに検出されている。芯材とした礫は確認されたが、構築土は残っていなかったようである。主軸方向は、Ｎ－68°－Ｗ。燃焼部焼土は、今回の調査でしばしば認められたように、床面より高い位置に、煙出に向かって上がるように検出されている。

＜付属施設＞今回の調査では検出されなかったが、上述のように前回は土坑が２基確認されている。床面からの深さは両方とも30㎝程度である。

＜遺物＞（出土状況）1,052.8ｇの土器が出土。出土遺物は少ないが、琥珀が１点出土。既に取り上げられてしまっていたので詳細は不明。前回調査区では土師器・須恵器が比較的多く出土している。

（掲載遺物）第29図１～４の土師器・須恵器、写真図版39の琥珀が出土。

＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀前半）と思われる。

ＲＡ150住居跡（第９・29図、写真図版３～４・38）

＜位置・検出状況＞調査区南の２Ｊ25ｅ～３Ｊ３ｇグリッド付近に位置する。表土直下Ⅲ～Ⅳ層上面で検出した。

＜重複関係＞重複関係は認められない。

＜規模・平面形状＞3.7×3.8ｍの方形。住居東壁中央は一部撹乱が入る。壁高は24㎝である。

＜埋土＞覆土は三層に分かれ、黒色土層と褐色土ブロックを多量に含む層が自然堆積層の層相を示す。

＜床面・掘り方・貼り床＞貼り床はカマドを除く住居全体に認められる。

＜カマド＞カマドは西壁のほぼ中央で１基検出した。カマドの主軸方向はＮ―51°―Ｗである。袖はシルトで構成される。カマド天井部は一部残存する。支脚は認められない。煙道は長さ1.6ｍ直径32㎝で、深さ38㎝直径34㎝の煙出しに向けて降下する刳り貫き式である。煙出しからは礫がまとまって出土しているが、遺物は認められない。

＜付属施設＞北壁中央および住居南東隅でピットを検出した。Pit１・２は柱穴の可能性がある。
＜遺物＞（出土状況）950.5ｇの土器、後述の石器？が出土。カマド内およびカマド周辺に散在して出土している。
（掲載遺物）第29図５～８の土師器・須恵器、写真図版38の１の砥石？が出土。
＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と判断される。

ＲＡ151住居跡（第８・29図、写真図版５）
＜位置・検出状況＞調査区中央東端、２Ｊ15ｊグリッド付近に位置する。シルト質のⅣ層上面で、重機で剥いだ時点で確認。ただし、土の色がそれらしくなく、また１Ｊ16ａ付近で同様のシミが撹乱であったことから、竪穴住居跡であることを疑っていた。しかし、精査した結果、土層断面がそれらしいことから、竪穴住居跡に認定した。
　また、本住居跡は調査できた範囲でカマドは確認できず、そうした意味では住居状遺構とすべきかも知れない。しかし、南側が大きくカクランを受けておりカマドがあった可能性を残すこと、さらに西側に隣接するＲＡ152竪穴住居跡によく似ているため、竪穴住居跡と認定した。
＜重複関係＞南側が最近まで使われていた側溝に大きく壊されており、特に西端は、より北側まで撹乱されている。その他は、調査できた範囲では、ない。
＜規模・平面形状＞北辺は約2.5ｍ、隅丸方形か。
＜埋土＞単層に近い。炭化物等は見られず、生活痕跡は薄い。
＜床面・掘り方・貼り床＞砂礫（Ⅴ）層をそのまま床としており、貼り床は認められない。
＜壁・壁溝＞砂質のⅣ層を壁としている。
＜柱穴＞砂礫層を床としているためか、検出できなかった。
＜カマド＞調査できた範囲には、ない。
＜付属施設＞確認できなかった。
＜遺物＞（出土状況）出土遺物は非常に少なく、697.5ｇの土器が出土。西端の、より北側までカクランが及ぶ地点から比較的大きな土器片がまとまって出土したが、カクラン内であるため記録は取らなかった。（掲載遺物）第29図９の土器が出土。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＡ152住居跡（第10・29図、写真図版５～７）
＜位置・検出状況＞調査区中央、東寄りの２Ｊ15ｈグリッド付近に位置する。砂質のⅣ層上面で、重機で剥いだ時点で検出。ＲＡ151竪穴住居跡と同様、埋土は、あまりそれらしくなかった。
＜重複関係＞北西隅を大きく撹乱され、また北側の煙出付近も撹乱を受けている。
＜規模・平面形状＞約3.9×3.6ｍのややひしゃげた隅丸方形。
＜埋土＞一部壁の崩れや撹乱が認められるが、基本的には上層（２層）と下層（３層）に分けられる。上層は灰白色火山灰がブロック状に入り、下層はⅣ層ブロックや炭化物を含む。
＜床面・掘り方・貼り床＞砂利（Ⅴ）層上面を床とし、貼り床はない。
＜壁・壁溝＞砂Ⅳ層を壁とする。崩れている部分もある。
＜柱穴＞東壁の中央下付近の床面から柱穴状の穴を検出した。検出時は輪郭がシャープでそれらしく見えたが、深さ10㎝程度で柱穴でない可能性も高い。埋土は、10YR3/1黒褐色シルト、砂Ⅳ層粒子含む。一部撹乱を受けビニールが入る。この穴全体が撹乱である可能性も残す。北東隅壁下にも黒褐色

の落ち込みを確認したが、不整形で浅く、柱穴にはならないと思う（根が入ったものらしい）。
＜カマド＞北壁やや東寄りに確認した。煙道の主軸方向は、Ｎ－15°－Ｗ。煙道はくり抜き式だが（砂Ⅳ層を壁とする）、煙出に向かってあまり下がらない。煙出は撹乱を受けて不明である。袖は、Ⅳ層を貼ってから、それを掘り込んで礫を二列に並べている（写真図版７の左上）。この写真の北東端の礫は火を受けて赤くなっている。おそらくは、この上にさらにⅣ層を盛り上げてドーム状にしていたものと推測される。なお、検出時にも西側（写真では左手）に多量の礫を確認したが（写真図版７の右上）、含まれている土は黒褐色土（住居２層）でカマド袖とは直接関係ない。焚き口手前に横たわる長い礫の下にも袖土が認められ、本来この礫は橋状に渡してあったものと思われる。
＜付属施設＞なし。
＜遺物＞（出土状況）444.9ｇの土器が出土。出土量は少ないが、カマド付近から比較的多くの土器が出土した。No.１～５は、カマド北側から落ち込んだように傾斜している。土器柱の周囲を掘られてしまったのではっきりしないが、２層上面からの出土か。第10図p.６は、底から２㎝上にほぼ水平の状態で出土している（カマド3層上出土）。第10図p.８は、焚き口上で、礫側から落ち込むように傾斜し、礫側は底から４㎝上のカマド１層上？にあり、反対側の西端は口縁で床面にくっついていて立つような角度である。（掲載遺物）第29図９～11の土器が出土。
＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＡ153住居跡（第11～13・29～30図、写真図版８～10）
＜位置・検出状況＞調査区北側、２Ｊ３ｅ～６ｈグリッド付近にかけて位置する。Ⅱ層下部で黒褐色土の方形プランが確認できた。北側は検出面まで下げきらずに精査を開始した。
＜重複関係＞ＲＤ355土坑、ＲＤ356号土坑と重複している。いずれよりも本遺構のほうが新しい。
＜規模・平面形状＞6.6～７m×5.86m。南東壁に幾分広がる部分があるがほぼ方形である。
＜埋土＞黒褐色土が主体だが下位ほど褐色土粒が多く混入しする。その割合から大きく３枚に分層した。全体的に礫や土器片が多く含まれている。焼失時の焼土や炭化物も見られる。
＜床面・掘り方・貼り床＞基盤の砂礫層を床とし、部分的に貼床も施されている。堅く締まる。
＜壁・壁溝＞23～50cm程度残存していた。東寄りの残りがよい。
＜柱穴＞Pit１・２・４・５の4個確認できた。いずれも長方形の柱痕跡が明瞭で、比較的大きめの掘り方（直径45～65cm）を有する。深さはいずれも50cm前後である。掘り方には、砂礫主体の黒褐色粘土質土が充填されていた。
＜カマド＞カマドは北西壁中央からわずかに北隅寄りに設置される。本体は袖部と燃焼部焼土が残る。
（本体部）袖部の幅は1.0～1.2mで、黄褐色のシルト質土で被覆される。袖には左右とも土器片が混ぜ込まれる。燃焼部焼土は32×42cmほどに広がり、厚さは最大で６cm。焼けはあまり良くない。
（煙道・煙出し部）刳り貫き式の煙道で、壁から煙出しまでの総長は約２mである。底面は燃焼部を越えてわずかに立ち上がり、壁際から煙出し部に向けて下がっていく。途中、階段状になる箇所がある。煙出しの深さは62cmあまりで、多くの円礫を含む。煙道方位はＮ－75°－Ｗである。
＜付属施設＞ロクロの回転台を据えたかと思われる土坑（Pit３）と貯蔵穴（Pit６）を検出した。Pit３は直径50cmの円形をなし、深さは約20cmを測る。底面には心棒を差し込んでいたと思われる小孔を持つ。埋土は上位に暗赤褐色の土器片を含む土が堆積しており、その状況から人為的に埋め戻された可能性もある。Pit６は直径50cm、深さは15cmである。
＜遺物＞（出土状況）ＲＡ157住居跡に次いで大量の遺物が出土し、土器は17,659.3ｇ。炭化材のNo.

1（厚さ1㎝角）はクリ、No.2（厚さ2～5㎝）はケヤキ、No.3（厚さ5㎝前後）もケヤキとの同定結果を得ている。

（掲載遺物） 第29図12～32の土師器・須恵器、第30図2・3の石器（砥石と磨石？）、第30図1、2の鉄製品（鏃）、第30図1の土製品（フイゴ羽口）が出土。

＜時期・所見＞出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属する遺構と思われる。

①数カ所に焼けの悪い焼土や炭化物の集積が見られることから、焼失家屋と判断される。

②第12図に示したように、本遺構からは土器片が比較的多く出土しており、またロクロピットが見つかっていることから、土器製作工房として機能した住居と考えられる。

ＲＡ154住居跡（第14・30図、写真図版10～12）

＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北寄りの２Ｉ４ｙグリッド付近に位置する。南側の沢跡に隣接する場所にある。Ⅲ層下部～Ⅳ層上面において黒褐色土ではっきりと検出。検出時には、撹乱がより周囲にも広がっていてカマドは確認できなかったが、精査時にカクランの多くが上部にとどまっていることがわかり、床面まで壊しているところ以外は取り除いた。その結果、全景写真撮影時にクリーニングしたところ、西壁中央付近にカマド煙道が検出された。

＜重複関係＞調査の終盤までないと思っていたが、撹乱を除去した結果、カマドの煙道がＲＡ156住居跡の埋土中に延びていることが分かった（本住居の方が新しい）。南西隅1/4弱を撹乱によって壊されている。また、壁のほとんどが崩れている。

＜図・精査状況＞カマド底が礫層のためセクション・ポイントが動き、平面図と合わない。柱穴1は、完掘時に西側の上場が2㎝掘り広がったため、断面図と平面図合わない。また、南東隅の柱穴4も、西側の下場が5㎝掘り広がったため、合わない。

＜規模・平面形状＞約5×5ｍの隅丸方形だが、壁が崩れているため不整形である。

＜埋土＞床や壁の近くに異なった土が認められるが、基本的には単層に近く、黒褐色土に黄褐色土のブロックが混じるものである。埋め戻しの可能性もあるか。なお、住居中央から拳大の礫が多量に出土したが（3層が主、一部2層）、記録は取っていない。

＜床面・掘り方・貼り床＞一部シルト、大部分は砂質のⅣ層を床としており、柱穴を結んだ範囲の内側四角い範囲は非常に硬く締まる（図示）。ほぼ全面に掘り方を持つが、掘り方を露出させると、内側の四角い範囲は細かい凹凸が見られる砂質のⅣ層、その周囲は基本的に礫が露頭した（Ⅴ層上面）。

＜壁・壁溝＞一部シルト、大部分は砂質のⅣ層を壁としている。崩れているところが多いせいか、壁の下は黒いところが多く不明瞭であったが、壁溝は持たないようである。

＜柱穴＞周囲を中心に黒い場所が多く、検出条件は悪かったが、何とか4つ認めることができた。基本的に4本柱のようで（床面からの深さは30～40㎝）、東壁に認められた間の小穴は浅く、入り口などに関係すると推測される。カマド前の北西の一つには掘り方が明瞭に認められ、礫で固めている（手違いで図示されていない）。

＜カマド＞上面を覆っていた撹乱を除去したところ、西壁のほぼ中央にカマドが検出された。煙道の主軸方向は、Ｎ－80°－Ｗ。袖は、北側のみが残り、南側は撹乱で壊されている。あまり残りは良くないが、Ⅳ層土を貼って礫を芯とし、その上にまたⅣ層土を貼って作ったようである。煙道は、検出時には掘り込み式のように見えたが、半裁した結果、くり抜き式が落盤したものと分かった（断面4～6層が天井部の崩れ）。一般的なものと違って、焚口から住居壁付近でいったん上がって、煙出に向かってじょじょに下がるという構造である。焚口の焼土は、撹乱の下に入っているためか、検出す

ることはできなかった。
＜付属施設＞検出していない。
＜遺物＞（出土状況）5,369.6ｇの土器が出土。カマド付近を中心に土器類が出土した。p.１は、須恵器で内面を上に向けて出土（5層上面）。p.２はバラバラで、p.３は底外面を上に向けて出土（いずれも２層？）。p.４は、住居北西隅に向かって傾斜して出土（３層？）。p.５は、正位で出土（３層）。p.６～10は、ほぼ水平に3層から出土しているようだ。p.11～13は、カマド崩落土から出土。p.14は、南東方向に傾斜して出土（３層）。p.15は、床面から３㎝浮いて水平に重なるようにカマド崩落土から出土している。
（掲載遺物）第30図33～42の土師器・須恵器、第30図４・５の石器（砥石）が出土。
＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＡ155住居跡（第15～16・30～31図、写真図版13～15）
＜位置・検出状況＞調査区中央西端。２Ｉ５ｓ～７ｕグリッド付近。排土の関係で、この付近は南から北に向かって検出作業を進めていたが、住居の南半分が旧沢跡の黒土の中にあったため見極められず、周囲をⅣ層上面まで下げて、やっと住居があることに気づいた。そのため特に南半分は大幅に削平してしまった。
＜重複関係＞検出作業で北東隅に別の住居（ＲＡ156）が重複しているのがわかったが、上面では新旧関係を見極められなかった。重複部分にトレンチを入れてみたが、それでもはっきりしなかった（第18図右端）。結局、既に現れていた礫の集積はカマドであり、これがＲＡ155のプランの壁に接し、さらにそれが重複している別の住居の方に延びているのだから、本住居の方が新しい可能性が高いという見通しを持って、断面を見つめ直した。重複断面の５層（ＲＡ156）が黄色い粒が見られる特徴的な土だったため、これを鍵層として確かに整合性を持たせられる分層ができた。そこで、本住居の方が新しいと判断し、断面実測後、精査を始めた。北西壁は、根による撹乱を多く受けている。
＜図・精査状況＞B-B′断面のB′側の壁は、断面実測後に掘り広がったらしく、平面図と合わない。カマド南北断面図は、実測時に水糸がずれたせいか、礫の位置合わず、焼土は、砂礫の上に形成されていたためか撮影時のクリーニングで消失してしまった。東西断面図は、セクション・ポイントの位置がずれ、焼土、礫の位置も合わない。下が砂礫層のためセクション・ポイントがうまく設置できなかったのが最大の理由であろう。時間の余裕がなく、再度測り直して合わせることはできなかった。
＜規模・平面形状＞５×4.8ｍのやや不整形な隅丸方形。
＜埋土＞大幅に削平したこともあって、壁際以外は単層に近い。
＜床面・掘り方・貼り床＞Ⅴ層（砂礫層）上面を床とし、貼り床は認められない。掘り方も見られないが、西壁の中央付近下に浅い凹みを検出（第15図断面７層）。不整形で、柱穴とは考えにくい。
＜壁・壁溝＞砂質Ⅳ層を壁とするが、根による撹乱や崩落のため、原形をほとんどとどめていない。壁溝は認められなかった。
＜柱穴＞床が礫層のため確認しづらく、半裁した結果かろうじて柱穴とした１、２も、浅く、それらしくない。これらが柱穴としても、二本だけで上屋を支えられるはずがない。そこで、住居外に検出された３、４も含めて考えることにした。今回の調査でもおびただしい数の柱穴状のシミを確認したのだが、半裁した結果遺構とすることができたのは、これ二つのみであった。ＲＡ155を精査する前に既にこれら二つを半裁しており、遺構とは認定したが、二つだけで建物を建てることはできないし、どう扱うべくか考えあぐねていたので、渡りに舟だったのである。しかし、これらは構造上あまりふ

さわしい位置になく、特に西側の上屋を支えるのに不都合である。そこで注目したのが、５である。検出時には壁を壊すような位置にあり、根穴か撹乱であろうと考えていたのだが、半裁してみると単なる疑似現象とも言い難い。そこで、これも加えることにした。５と同様の土が認められた６も含めることになったのだが、これについてはやや無理があるかと考えている。以上のように、本住居の柱穴については、多分に理屈に合わせて作り上げてしまった感が強く、考古学的には弱いと言わざるを得ないが、柱穴覆土の２層と4層はそれらしいのではないかと考えている。

＜カマド＞東壁北寄りに位置する。Ｎ－90°－Ｅ。煙出がはっきりと確認できないが、礫の並ぶ方向は、上面にも礫（赤く焼けている）を並べ、検出時から十分に確認できた。袖は、砂質Ⅳ層？土を貼って礫を埋め込んでいる。上部構造は十分に確認できなかったが、礫を並べていることは確かである。礫は皆火を受けているようだ。煙道～煙出ははっきりと確認できなかったが、断面図の３・４層を煙道覆土と考えた。煙道内から大量に土器が出土したが、火は受けていないようである。

＜付属施設＞ないと思われる。

＜遺物＞（出土状況）8,639.5ｇの土器が出土（ＲＡ153住に次いで第三位）。カマド脇、内から大量に土器が出土した。p.１～３は、その他の土器で、p.１の坏は、底を上にほぼ水平の位置で出土（床から５㎝、１層下部）。すぐ東にも同じような土器が出土したが雨で水につかり動いてしまった（p.０、１層床直）。p.４は、カマド脇から大量の土器片が敷き詰められたような水平の状態で出土（１層下部）。p.５～15は、カマド崩落土上面から主として出土し、p.８は３層から出土？、p.９は、南東側煙出から滑り落ちるような形で出土。p.10は、ほぼ水平に出土（３層？）。p.12の坏底は、北東方向から傾斜して出土（１層）。p.14は３層？、p.15は床面から８㎝浮いた状態で１層から出土。p.16～27はカマド精査後に出土したもので、袖内およびその崩落土、煙道から出土している。p.16～18は、４層より淡い黒土から出土し、18は僅かに南側に傾斜し、17は南側に傾斜している。p.20は、僅かに北東側に傾斜、p.22は僅かに北側に傾斜、p.24はほぼ水平に出土。p.20～27の土器は同一個体か？（４層黒土中）、二次焼成は受けていないようで土と一緒に廃棄されたものか。

（掲載遺物）第30図43～第31図54の土師器が出土。

＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＡ156住居跡（第17～18・31図、写真図版16～17・38）

＜位置・検出状況＞調査区北西。２Ｉ４ｔ～６ｗグリッド。Ⅲ層下部～Ⅳ層上面で確認。重機で剥いだ後ジョレンをかけて、黒褐色土で明瞭に検出。北西部分と東側が大きくカクランされていたが、後に、床面まで達していない場所がけっこうあることがわかった。そのせいもあって、この時点ではカマドの位置を確認できていなかった。

＜重複関係＞南西側、ＲＡ155住居と重複。検出時に既に重複を確認していたが、埋土がよく似ていたため、上面では新旧関係を捉えられなかった。そこで、両住居を通してトレンチを入れてみたが（第18図下）、それでもはっきりしなかった。結局、石を組んだＲＡ155住居のカマドの位置と方向が決めてとなって、ＲＡ155→ＲＡ156の変遷を考え、そうした目で再度トレンチ断面を検討したところ、推定プランの境界に位置する第18図下の３層と５層が明確に異なることが分かって、新旧関係を確定した。東側、ＲＡ154住居と重複。間に大きなカクランが広がっていたこともあって、ＲＡ154住居のカマドを精査するまでは、重複していることに気づかなかった。このカクランが思ったより深く入っていないことが後に分かって取り除いたところ、ＲＡ154のカマド煙道が検出された。この時には、まだＲＡ156の精査を開始していなかったので、ＲＡ156の覆土上面にあったカクランについては取り

除いていなかった。ＲＡ154の煙道を断ち割ったところ、予想以上に西側に煙道が延び、ＲＡ156の覆土中まで潜り込んでいることが明瞭に分かり、ＲＡ154の方が新しいと判断された。この他、上述のように、北西部分と東側が大きくカクランを受けている。検出時には周囲のカクランのように深く入り込んで床面まで壊していると予測し、時間がないので覆土上面の最低限の部分だけ取り除こうと考えていた。ところが、予測していたよりはるかに浅いことが住居精査中に分かって、あわてて住居にかかる部分全面を取り除いた。結局、最初に全面カクランを取り除いた方が早かったことが分かった。

＜図・精査状況＞南北断面のＢ′側の下場が、断面実測後に削り取られたため（霜の影響か）、合わない。同様に、カマド１のａ′側の下場が掘り広がって、合わない。同じく、カマド２の住居壁付近の煙道の始まりが、合わない。また、カマド２の焚口焼土が、半裁後にほとんどなくなってしまい、推定で平面実測したため、合わない。

＜規模・平面形状＞約5.2×5.2ｍのやや不整形な隅丸方形。

＜埋土＞２層が特徴的な土であることもあって、二～三層に分けることができる。２層は、その性質上埋め戻した土である可能性がある。北カマドの西側に焼土が２箇所認められた（第17図）。両方とも２層中に形成されているようだが、北側は床面まで焼土が達しており、現地性の可能性もある。南側は、２層土に焼土が乗る。また、住居南側の床面にも焼土が認められたが（第17図）、炭化物が混じり廃棄土のようにも思われる。

＜床面・掘り方・貼り床＞Ｖ層（礫層）を床としているためか、床の中央付近に一部貼床が認められたが（第17図４層）、ごく一部にとどまる。Ｖ層を床としているため、掘り方は確認できなかった。また、カクランにより、第17図p.３と柱穴６の間、そして東側のカクランと囲った範囲は床面まで壊されている。

＜壁・壁溝＞基本的に砂質のⅣ層を壁とし、一部Ｖ層のところがある。

＜柱穴＞四本柱で、建て替えが認められるようである。ただし、４と７以外は非常に浅く、柱穴の役割を十分に果たしたか疑問である。柱穴の番号は検出順を示し、３までが床面で、４以後は床を剥がした後に検出した。覆土はみな単層である。柱穴１、３が、10YR3/1黒褐色シルトⅣ層の斑が見られる。柱穴２が、10YR3/1黒褐色地に10YR5/1黄褐色の斑シルト粘性あり。柱穴４、５、７が、10YR3/1黒褐色で砂質シルト、砂利再堆積層で埋め戻したものか。柱穴６が、10YR2/1黒色シルトややもろい（カクランか）。

＜カマド＞北壁に一つ、西壁に一つ確認された。いずれも残りは悪く、袖は認められなかった。カクランが覆い被さっていたことと、雨中で検出面を汚すことが多かったため、煙道が検出されたのは、住居内の精査が終わって全体写真を撮るためのクリーニングでである。北カマドは、北壁のほぼ中央に位置し、Ｎ－22°－Ｅ。第17図では、西側に袖のようなものが認められるが、これは焼土混じりの土を残したもので、袖そのものではないと思う。煙道は、やや曲がっているが、煙出に向かって急傾斜で下がる。煙道底は、Ｖ層上面～中層で、壁に掘られた部分は床面と同じ高さである。焚口焼土は、礫層に形成されているためはっきりしない点もあるが、明らかに現地性のものである。西カマドも、ほぼ西壁の中央付近か。Ｎ－66°－Ｗ。煙道の底はＶ層上面だが、北カマドと異なり、壁の位置では、床面より高い位置から始まっている。焚口の焼土は、北カマドと同様である。

＜付属施設＞カマド焚口以外の焼土については、＜埋土＞で記した。

＜遺物＞（出土状況）2,866.1ｇの土器、後述の石器が出土した。出土遺物は少なかったが、床面付近に幾つか認められた（第17図）。ｐ.１の坏は、伏せた状態で、西側の壁から落ちたように傾斜して出土し、西側は床面から１㎝、東側は床面から８㎝の高さにある。３層の出土。p.２は、床から１㎝の

高さで、ほぼ水平に出土した（３層）。p.３は、床直だが、ほとんどがカクランから出土。p.４の須恵器は、東壁に沿うように、北から南へ傾斜して出土し、床面からの高さは北が７㎝、南が５㎝である。２層下部あるいは３層の出土。p.５の西側にも床面から１㎝の高さで土器片が認められたのだが、実測までに動いてしまったようである。s.１は、砥石で、東から西にやや傾斜しており、床面からの高さは、東が７㎝、西が６㎝、２層の出土である。

（掲載遺物） 第31図55～60の土師器・須恵器、写真図版38の６～８（一部を第31図に図示）の石器（砥石と磨石）が出土。

＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＡ157住居跡（第19～22・31～32図、写真図版18～23・38）

＜位置・検出状況＞調査区北端。１Ｉ24ｖ～２Ｉ３ｘグリッド。Ⅳ層上面ではっきりと確認したが、東側は、南北方向に道路跡があったこと、西側はカクランがあったこと、南～東壁は根によるカクランで壊されていたこと、さらに南側を排土のための一輪車道にしていたこともあって、カマド煙道はほとんど確認できていなかった。

＜重複関係＞東側、ＲＤ361土坑に切られる。ＲＤ361の埋土が特徴的なため、検出面で明瞭に分かった。南西側、ＲＤ362土坑と重複。周囲が根で壊されていたこともあり、最初は土坑と考えていなかった。住居検出時に、住居プラン外側に黒褐色土が張り出しているように見えたが、この時点では、ＲＤ361土坑の調査例から、住居と重複する土坑は住居より新しく、ＲＤ361土坑の特徴的なあり方から土坑は墓で、埋土中に掘り込むのはその住居の縁者の墓であるためではないかとの見通しを持っていたため、どう見ても住居プランの内側まで埋土が広がらない“張り出し”は、プランが異様に四角く見えたこともあり、住居に伴う棚状施設なのではないかと考えた。偏った見方によって確認がおろそかになった感は否めないが、もし、その通りなら、ＲＤ362土坑の方が古い可能性がある。

＜図・精査状況＞調査終盤大急ぎで精査し、霜や雨でドロドロになったため、住居覆土断面のセクション・ポイントの全て（Ａ、Ａ′、Ｂ、Ｂ′）が失われている。柱穴は、柱穴３のｊ側の下場、柱穴４のｋ′側の上場、柱穴10の両側の上場、柱穴15のｕ′側の上場、掘り広がったため合わない。カマド１の焚口焼土の範囲が、断面と平面の認識の違いで、平面図の方が小さくなっている。カマド２の焚口焼土の範囲が、断面図の方が東側にずれている。カマド３は、平面図のセクション・ポイントｄの位置が動かされているようで、平面図の位置を４㎝西側に延長するとほぼ合うようだ。カマド４の焚口焼土の範囲が、残りが悪くて形を認識しづらかったこともあって大きくずれている。カマド５の焚口焼土も、認識の違いで合わず、またＡ側の煙出下場が、完掘時に掘り広がっていて合わない。カマド６のセクション・ポイントｇ′の位置が、下が礫層のため動いたようで、平面図の位置を５㎝ほど西にずらすと、ほぼ合うようだ。

＜規模・平面形状＞竪穴は、7.5×6.9ｍの隅丸方形。床の硬化面の規模は、3.8×3.6ｍ。

＜埋土＞上から下までほぼ一様で、はっきりしない。下部は、Ⅳ層粒子や焼土粒が散るのを特色とするが、基本的な色調（明暗）は上下で逆転することがある。カマド焚口以外の焼土が４箇所確認されているが（第19図）、柱穴９の北側の焼土については記録が残っていない。柱穴７の西側の焼土は、ブロック状の投げ込み焼土で、床面から12㎝上にあり、焼土下には黒土が見える。ＲＤ361土坑西側の焼土は、最大厚２㎝（確認時）で、床上１㎝で止まり、下に黒土が見える。柱穴15の上に確認された焼土は、厚さ１㎝（確認時）で、同じく下に黒土あり。

＜床面・掘り方・貼り床＞シルト～砂質のⅣ層を床面とするが、一部Ⅴ層上面を床とする場所がある

（一つは、南西隅の柱穴６、10、13とその周囲で、西壁を底辺にした三角形状に延びる。もう一つは、東側のカマド２の焚口と壁との間あたりで、南北方向に長楕円形に広がる）。中央の第19図示した範囲は、硬く締まる。掘り方は、しばしば見られる細かい凹凸の著しいもので、硬化面の周囲は一段下がる（この範囲の床面には黒土が混じる）。

＜壁・壁溝＞南～東壁を中心に根によるカクランが著しく、はっきりしない部分が多いが、北壁を見ると、ほんの少し外反するようである。床と同じ、シルト～砂質のⅣ層。

＜柱穴＞16個確認されたが、９以降は、床を剥がした後に確認したものである。また、柱穴16は、柱穴４と重複しており（第19図の住居外に重複関係を示した）、４を精査した後埋まったものを再発見した可能性もある。砂利による埋め戻しが顕著で、後に確認された10以降（９は半裁しなかったので不明）と、柱穴１、２、５？、７は、確実に埋め戻されている。柱穴７の近辺をクリーニングする際、Ⅳ層を貼って埋め戻した跡がはっきりと丸く黄褐色土で確認できた。埋め戻しと、同じ場所に幾つも認められることから、四本柱で屋根を支え、それが何回も建て直されているものと解釈される。断面図を作成できなかった柱穴９の埋土は、10YR3/1黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土でシルト、礫混じり。柱穴６には明瞭な掘り方が伴い、ＲＡ153住居と同様、礫で周囲を固めている。

＜カマド＞西壁に４つ、南壁に一つ、東壁に一つ、計六つ確認された。検出状況で述べたとおり、住居検出時に確認できたカマドはない。焚口焼土の位置から、カマド６は拡張前の住居に伴うもので、最も古いと言える。その反対側の東側にも焼土が見えるが、これは＜埋土＞で述べたように焚口ではなく埋土中に形成されたものである。カマド１は、最も残りが良かったので、おそらくこれが一番新しいと思われる。カマド２は、精査中には気づかなかったが、住居を掘り下げているときに焚口焼土のある付近にドーム状の黄褐色土があったことを後で思い出した。丁度カマド袖くらいの規模で、そのときは下に黒土があったので（上にも黒土）、埋土中に投げ込んだ黄褐色土と考えて掘り上げてしまった。カマド３～５には新旧関係を推測する材料はなく、カマド６→カマド３～５→カマド２（→）カマド１の順に推移したと思われる。

検出時には、カマド１、２を除いて掘り込み式に見えたが、煙道の様子（煙出に向かって急角度で下がる）と周囲がカクランを受けていて検出面を大きく下げたことから、全てくり抜き式であった可能性が高い。いずれも、住居壁に掘られた煙道は、床より高い位置にあり、特にカマド４は高い。カマド１は、住居掘り方埋土の上に黄褐色砂層（砂質Ⅳ層）を貼って袖を作っている。焚口近くで土師器三つが倒立しているが、焚口焼土の位置からはずれており、支脚の用をなしているのかどうかは不明である。カマド２は、焚口焼土を検出してから煙道ほかを確認したが、袖らしいものがあった可能性については前述した。住居検出時には道があったため煙出を確認できていなかったが、よく見ると、道の下に円く礫が集中するところがあった。西側のカマド３～６は、上面にカクランがあったため、なかなか確認できなかった。また、調査の終盤３～６全て同時に半裁したため細かい点は分からない。カマド３は、他にもまして急角度で煙出に向かって下がる。

＜付属施設＞埋土内に確認された焼土については、＜埋土＞で述べた。

＜遺物＞（出土状況）今回調査の全出土量の1/3以上、全住居跡出土量の約半分を占める28,872.7ｇという、大量の土器が出土した。第19図p.５は２層、p.１～４、６は３層から出土し、p.３は内面を上にした甕で、床面と同じ高さから出土しているが黒土内にある。p.６は、外面を上にし床から２㎝の高さで出土。p.５は、内面を上にし床から10㎝の高さ、南西から北東に向かって傾斜している。p.９も３層から出土。北西隅のp.11～20は、いずれも３層から出土した。柱穴７の上にも比較的大きな破片があったが、柱穴の検出に差し支えたため取り上げてしまった。p.22、23は焚口焼土内からの出土、

p.24は３層からの出土である。第21図p.25の坏は、外面を上にして伏せたような状態で出土し、南東から北西へ傾斜し、床面からの高さは南東６㎝、北西２㎝である。p.26の坏は、２層からの出土で、内面を上にし、南から北へ傾斜して出土。p.39は５層上面から出土。p.41は、壁上から南東から北西に向かって傾斜して出土。
（掲載遺物）第31図61～第32図100の土師器・須恵器、写真図版38の９の石器（砥石？）が出土。
＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

2　掘立柱建物跡　（第23図、写真図版24）

調査区北西で１棟のみ検出され、第４次調査区で検出されたRB003の続きである。凡例等は本章冒頭参照。なお、規模、柱間距離は、柱穴の中心に近い部分で、きりの良い数字で示した。

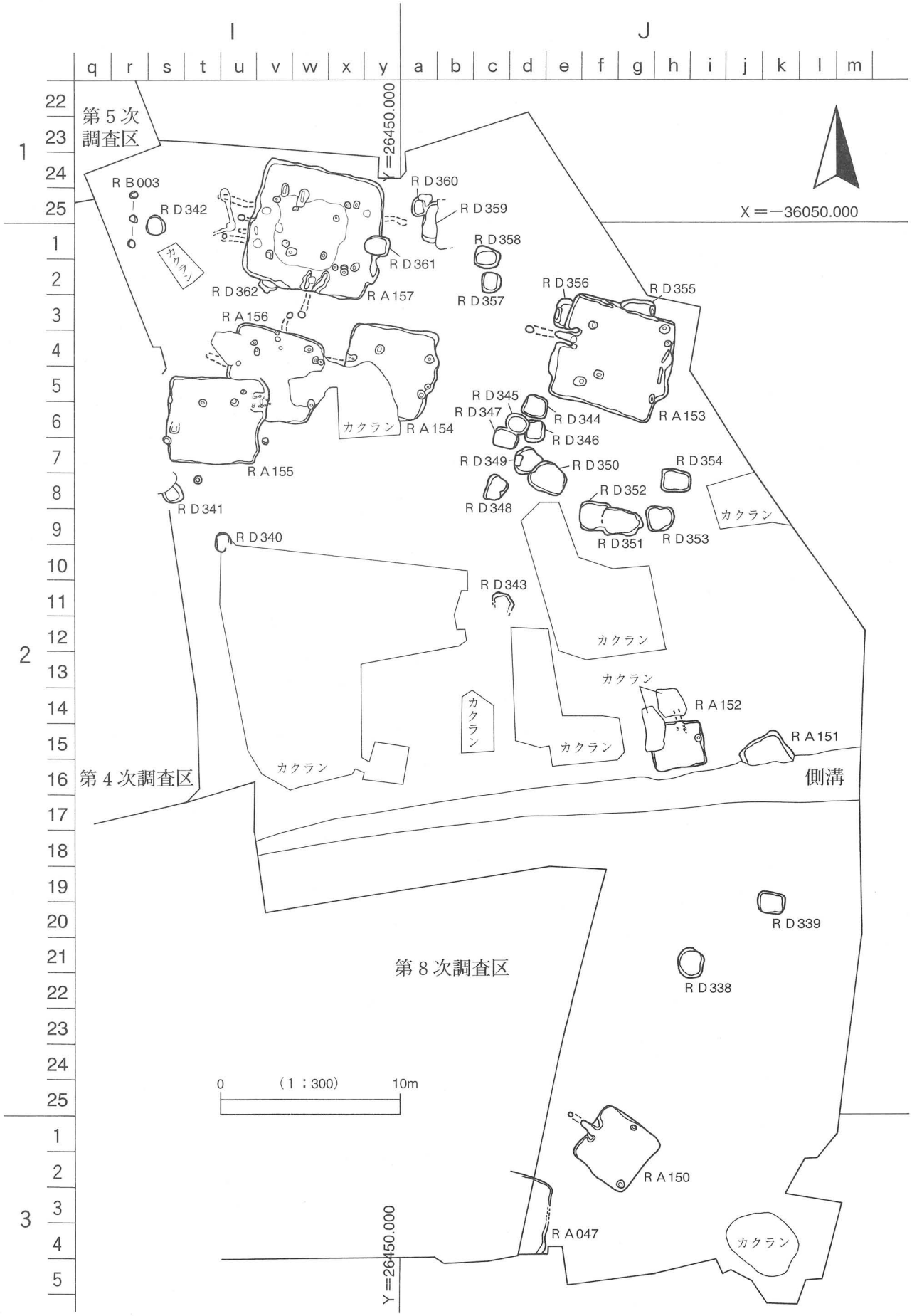
ＲＢ003掘立柱建物跡（第23図、写真図版24）

＜位置・検出状況＞調査区北西端。１Ｉ25ｒ～２Ｉ１ｒグリッド。調査に入る前から、第４次調査で検出されたＲＢ003掘立柱建物跡の東側の続きが検出されると予測していた。そして、Ⅳ層上面で第23図柱穴４、５を検出したが、その埋土が真っ黒で根がいっぱい入っていたことから、今回の調査で北側にしばしば認められた根穴かと思って半裁したところ、壁・底がはっきりしており柱穴に間違いないと判断した。柱穴４には、後にとれて図化できなくなってしまったが、底にグライ化した部分さえあった。ところで、前回の続きならば、柱穴５の南にもう一つ柱穴があるはずだが、検出できない。おかしいと思いながらも、完掘を終え、全体写真を撮るために広くクリーニングしたところ、何と柱穴４の北側に柱穴らしいものが確認された（柱穴６）。掘り方がはっきり残っていて黒土部分が僅かであったことと周囲に根が多かったこと、さらに柱穴列の続きは南側に見つかるはずだと思いこんでいたので、通常の検出作業では確認できなかったのだ。おかしいなと思いながらも半裁したところ、やはり柱穴らしく、底にグライ化した部分もある。

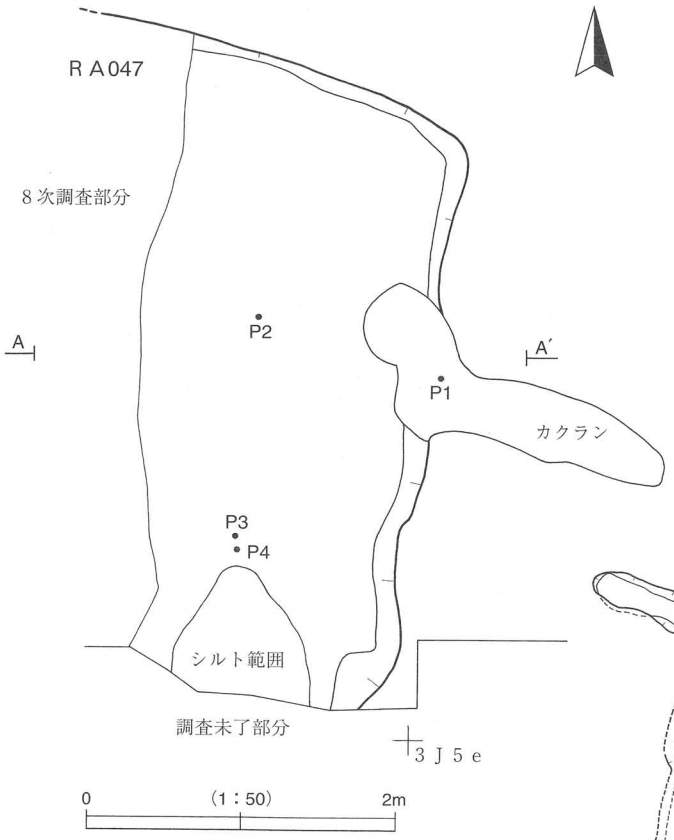
当初は、前回の続きなので、整理時の省力化のため、現地でそのまま前回の柱穴を入れた平面図を作成しようと考えていた（原図を捜すのが面倒だったため、平面図は報告書の図から起こした）。ところが、上述のように南北にずれて、全体構成が平行四辺形になってしまうのである。仕方がないので、通常通り今回調査した部分だけの平面図を作成し（第23図上）、野外作業の終了を待って、前回の平面図の原図を捜してみたところ、杭の位置等が合わない旨の図面整理時の記載があり、報告段階でのズレではないことがわかった。報告書では一応の結論で図を変更して示しているようだが、それも合わないことは上述したとおりである。

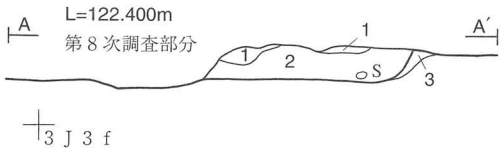
今回の杭の位置がずれている可能性も考えたが、原図が間違っていることを考慮すれば、前回の方がずれている可能性が高い。原図を今回の図と合わせようと頑張ってみたが、（南北東西方向に）ずれるという程度ではなく、根本的に軸が異なっており全く合わせられないことが分かった。

そこで、グリッドは無視して、掘立柱建物跡の柱間の距離と建物方位だけを手がかりに合成してみたのが、第23図下の右の図である。なお左は、グリッド通りの図である。
＜重複関係＞前回調査分も含め、柱穴の重複は認められない。
＜図・精査状況＞検出状況を参照。
＜平面形式・規模＞桁行２間、梁行１間の南北棟建物跡である。桁行きは約300、梁間も300㎝か。
＜建物方位＞Ｎ－４°－Ｅ程度で、前回はＮ－６°－Ｅであったことを考えると、軸方向も若干ずれ


I
J
q r s t u v w x y a b c d e f g h i j k l m
1
2
3
第５次
調査区
第４次調査区
第８次調査区
Y＝26450.000
X＝－36050.000
RB003
RD342
RD360
RD359
RD358
RD361
RD362
RA157
RD357
RD356
RD355
RA156
RA154
RA153
RD345
RD347
RD344
RD346
RA155
RD349
RD350
RD354
RD352
RD348
RD341
RD351
RD353
RD340
RD343
RA152
RA151
側溝
RD339
RD338
RA150
RA047
カクラン
0　（1：300）　10m

第７図　遺構配置図

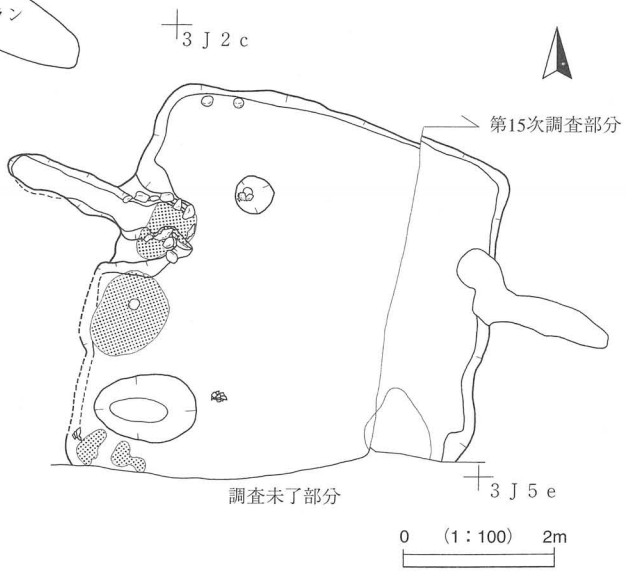


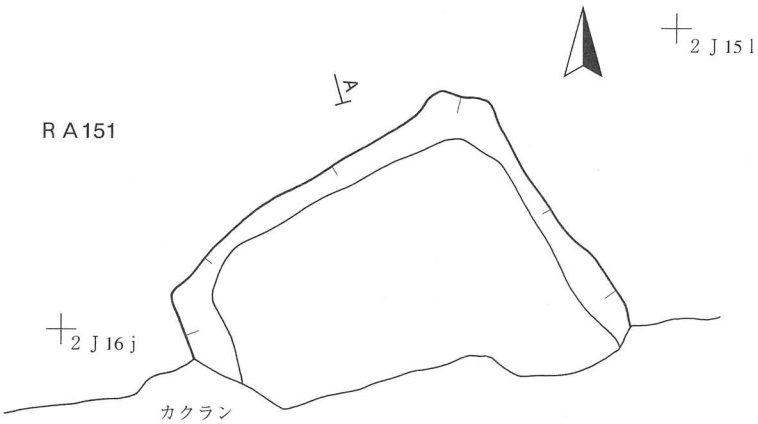


3 J 3 f

1：10YR2/1黒色　砂質シルト。灰白色火山灰が点在する。
　　前回調査の2層と思われる。
2：10YR2/1黒色　シルト　前回調査の3層と思われる。
3：砂質Ⅳ層が根によって汚れたもの。カクラン。

R A047　第8次・第15次調査部分合成図（1：100）

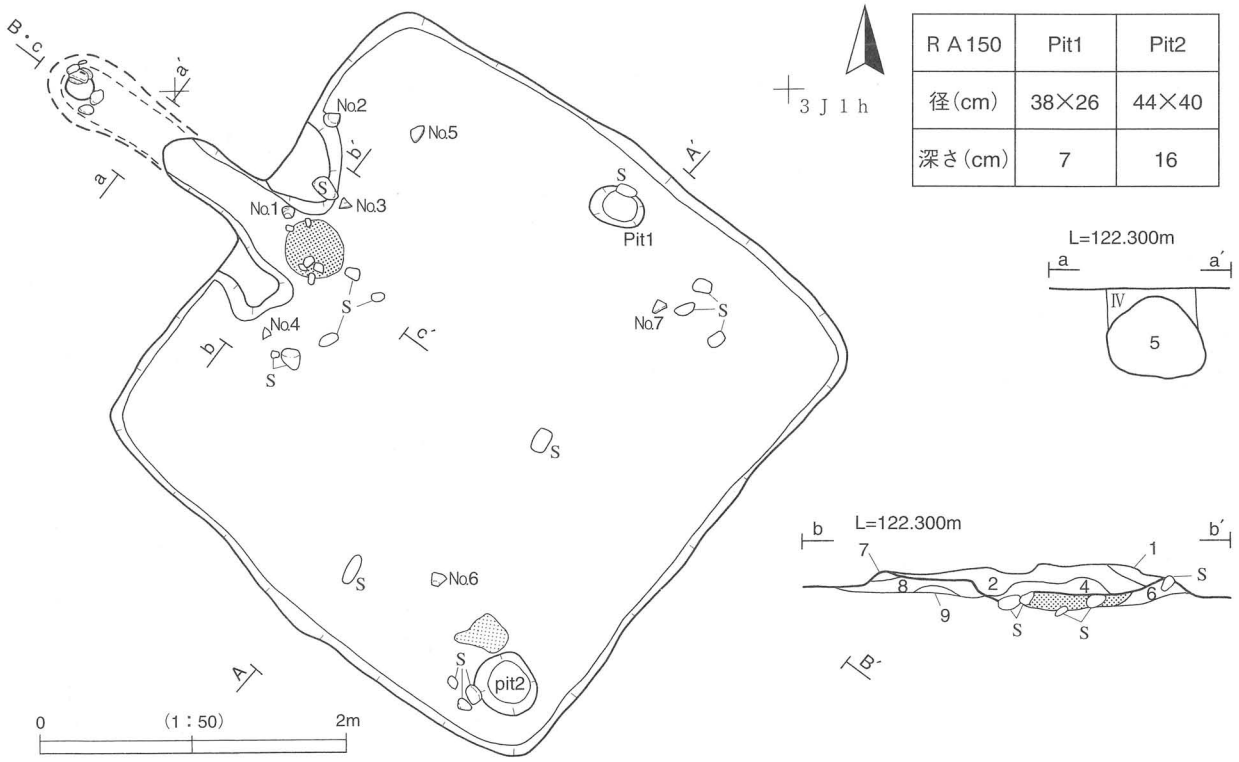




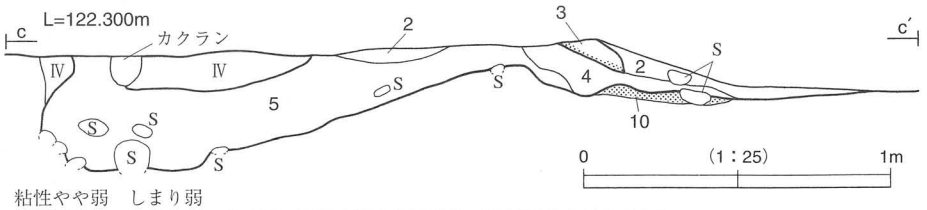
1：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。砂質Ⅳ層の粒子含む。
2：10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性あり。やや硬く締まる。

0　(1：50)　2m

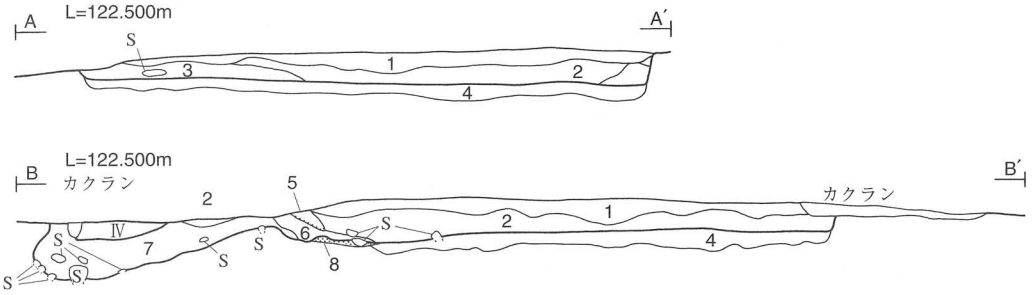
第8図　RA047・RA151住居跡



ＲＡ150	Pit1	Pit2
径(cm)	38×26	44×40
深さ(cm)	7	16

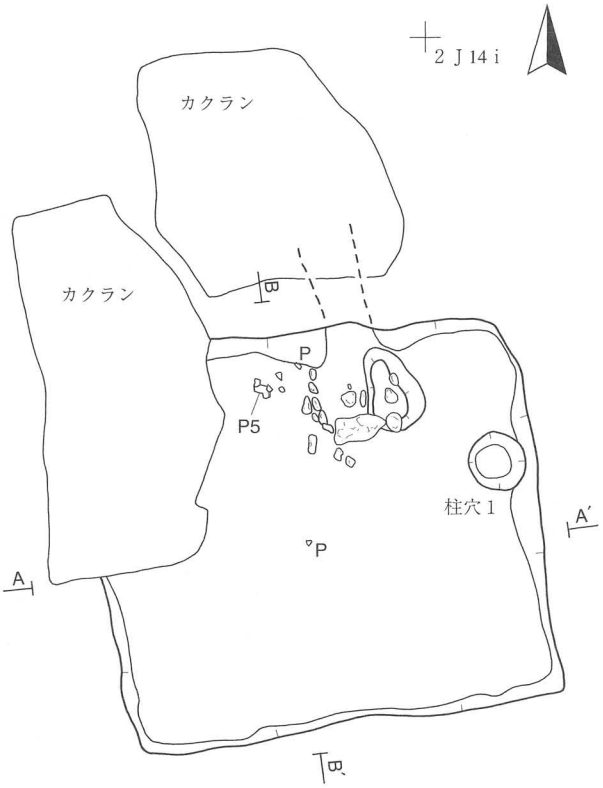


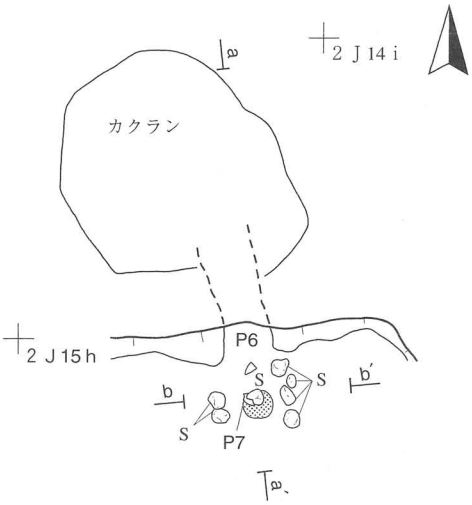
1：10YR2/1　黒色　シルト　粘性やや弱　しまり弱
2：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　焼土粒・褐色土粒を５％含む（住居覆土２層と共通）。
3：10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強（カマド天井）。
4：5YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　焼土粒を70％含む。
5：10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱。
6：10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強　褐色砂質土多く含む。
7：5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性強　しまり弱。
8：10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中　しまり中　褐色土ブロック50％以上含む。
9：10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまり強　暗褐色土含む。
10：5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性強　しまり弱（燃焼面）。

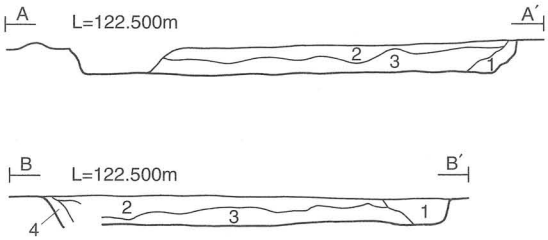


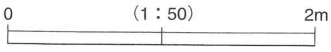
1：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり中　褐色土粒直径５mm程度を３％未満含む。
2：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまりやや疎　褐色土粒直径５mm～５cm程度を20％含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　しまり中　褐色土粒直径１cmを３％含む。
4：10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまり強　直径８cm前後の礫を20％含む。10YR2/2黒褐色シルトを５％含み斑状をなす（貼り床）
5：10YR4/4　褐色　シルト　粘性弱　しまりやや強（カマド天井）
6：5YR2/2　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱　焼土粒を70％含む。
7：10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性弱　しまり弱
8：5YR3/4　赤褐色　シルト　粘性強　しまり弱（燃焼面）。

第９図　RA150住居跡





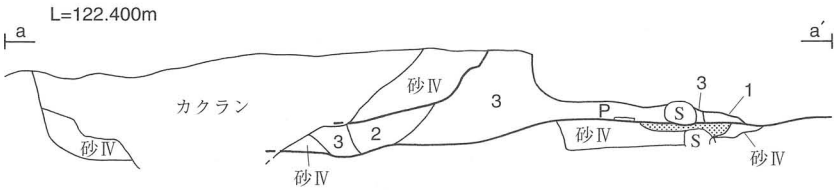


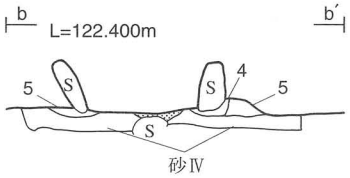


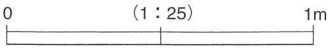
2 J 17 h

R A 152	柱穴 1
径(cm)	38×38
深さ(cm)	15

1：根によるカクラン
2：10YR3/1　黒褐色　シルト　灰白色火山灰が、上、中、下に点在。
3：10YR2/1　黒色　　シルト　径5mm程度の炭化物に僅かに含み、同程度のⅣ層ブロック含む。
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅱ層と砂質Ⅳ層の混土。

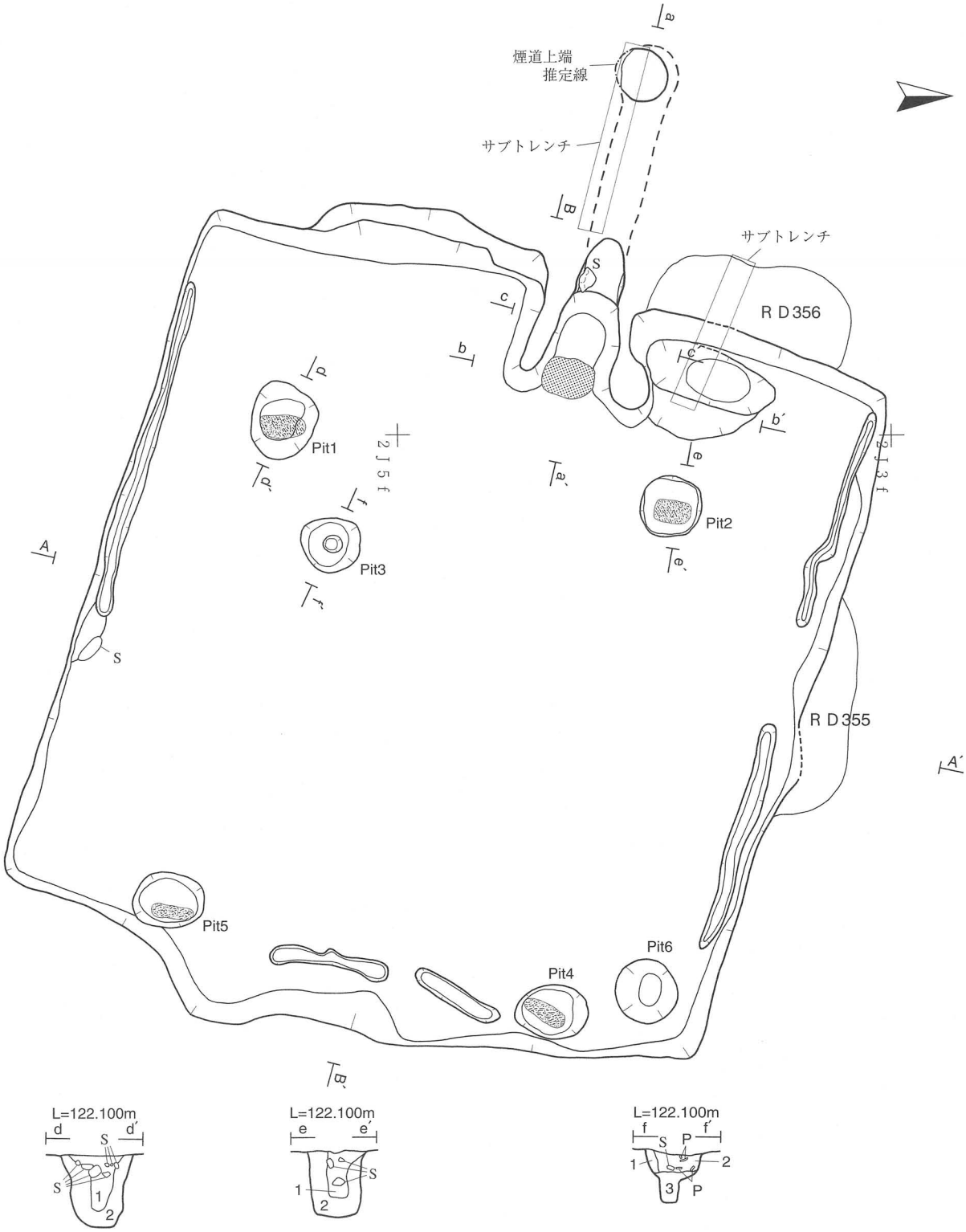






1：7.5YR3/1　黒褐色　砂　炭化物、灰混じる。
2：10YR3/1　黒褐色　砂質シルト　3層が根によって汚れたものか。
3：10YR3/1　黒褐色地に10YR4/4褐色混じる　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
4：10YR3/1　黒褐色　砂　カマド袖の芯となる礫の掘り方埋土。
5：10YR4/4　褐色　　砂　砂Ⅳ層を貼ったもの。カマド袖本体。
6：7.5YR4/4　褐色　　砂　焼土。

第10図　RA152住居跡



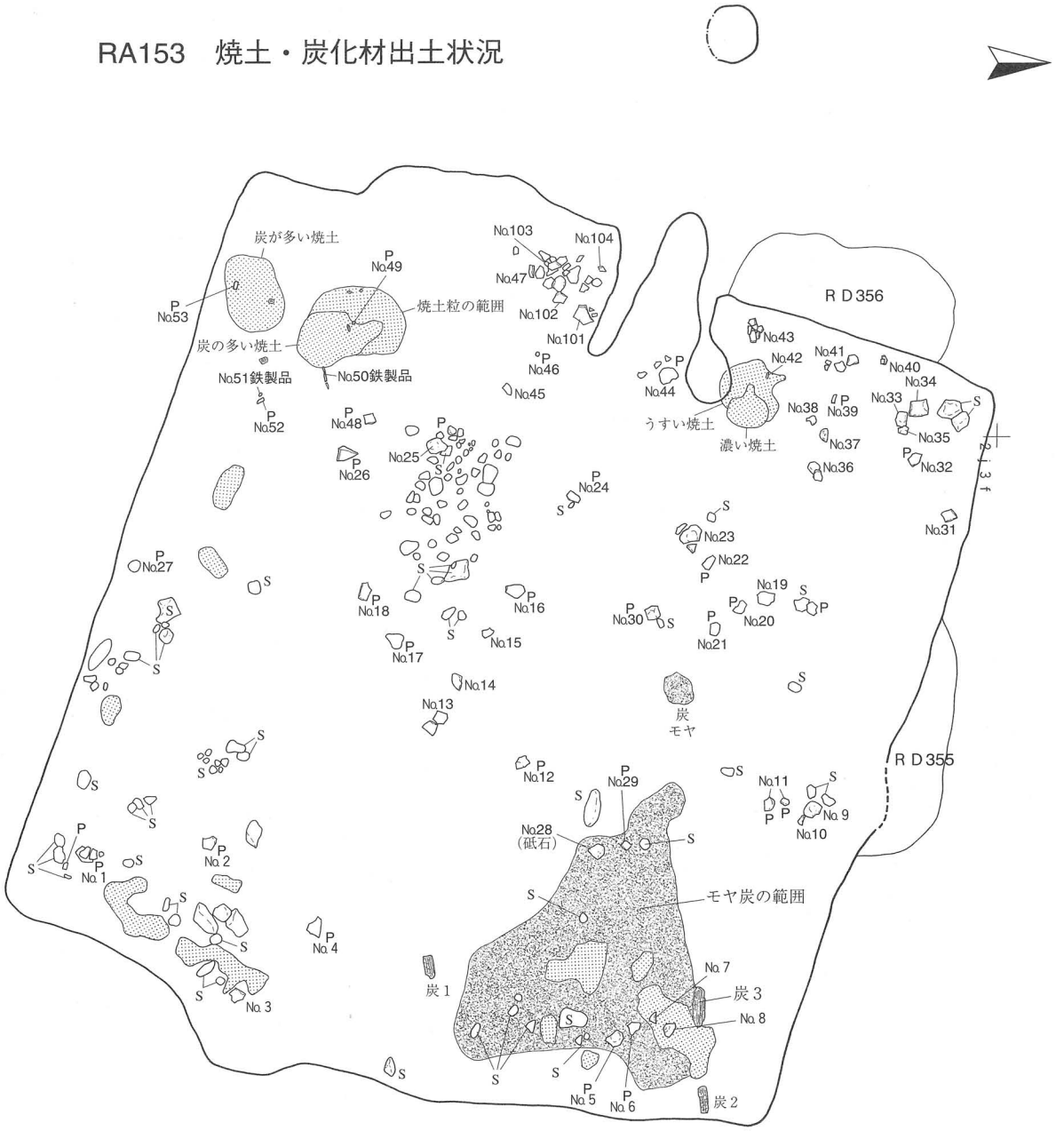
1：10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性強　しまりあり
　　黄褐色土粒（φ５mm）を５％、炭化物粒を１％含む。
2：10YR3/2　黒褐色　砂礫主体　粘性やや強　しまりあり
　　粘性のある黒褐色土と黄褐色土ブロックを含む。

1：10YR3/4　暗褐色　粘土質シルト　粘性やや強
　　しまりややあり　黒褐色土を全体に含む。
2：7.5YR4/3　褐色　粘土質シルト　粘性やや強
　　しまりあり　赤褐色焼土粒・土器片を含む。
3：10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強
　　しまりなし　土器片含むしまりのない土。

0　(1：50)　2m

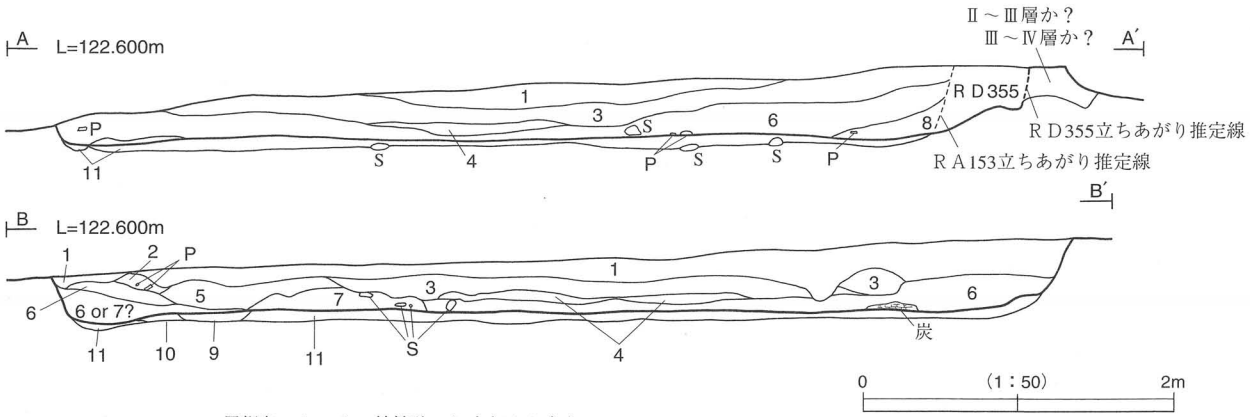
第11図　RA153住居跡（１）

RA153　焼土・炭化材出土状況

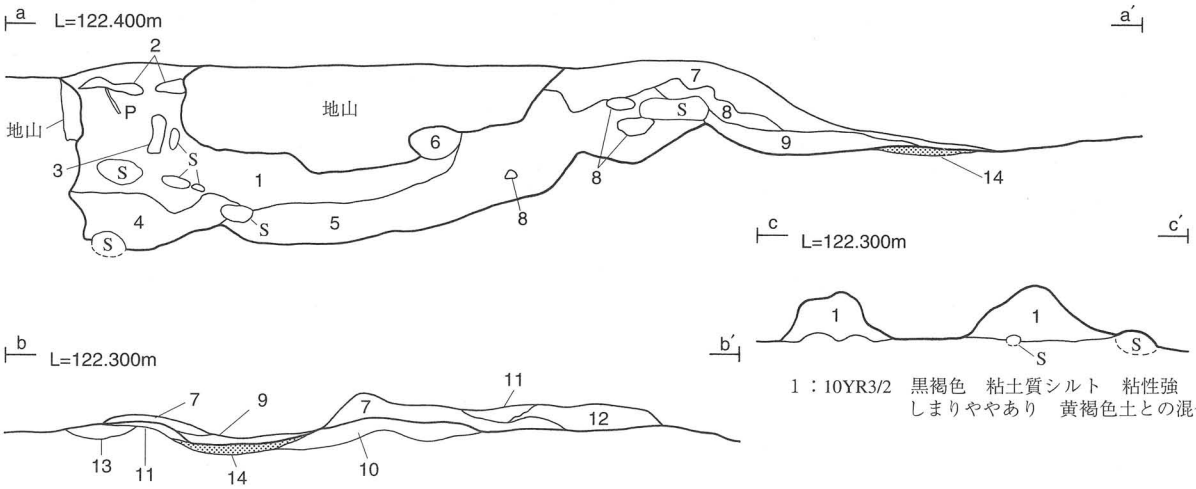


RA153	Pit1	Pit2	Pit3	Pit4	Pit5	Pit6
径(cm)	65×52	50×50	50×46	61×46	60×45	54×50
深さ(cm)	58	55	43	67	52	18

第12図　RA153住居跡（2）



1：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりややあり
2：10YR3/3　黒褐色　シルト　粘性強　しまりあまりなし　焼土を50％以上含む。
3：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　しまりややあり　褐色粘土３％含む。
4：10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまりややあり　炭を多く含む。
5：10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性ややあり　しまりあり　均質
6：10YR5/6　黒褐色　シルト　粘性強　しまりややあり　褐色土粒（φ１mm）を20％含む。
7：10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性あまりなし　しまりあり　φ５mm～10mmの小礫を多く含む。
8：10YR2/1　黒色　シルト　粘性強　しまりあまりなし　均質。
9：10YR5/6　赤褐色　シルト　粘性強　しまりあり　黒色土粒（φ５mm程度）を10％含む。
10：10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性強　しまりあり　褐色土粒（φ５mm）を５％程度含む。
11：10YR4/6　褐色　シルト　粘性強　しまりあり　黒色土ブロック30％、黄褐色土ブロック10％含む。

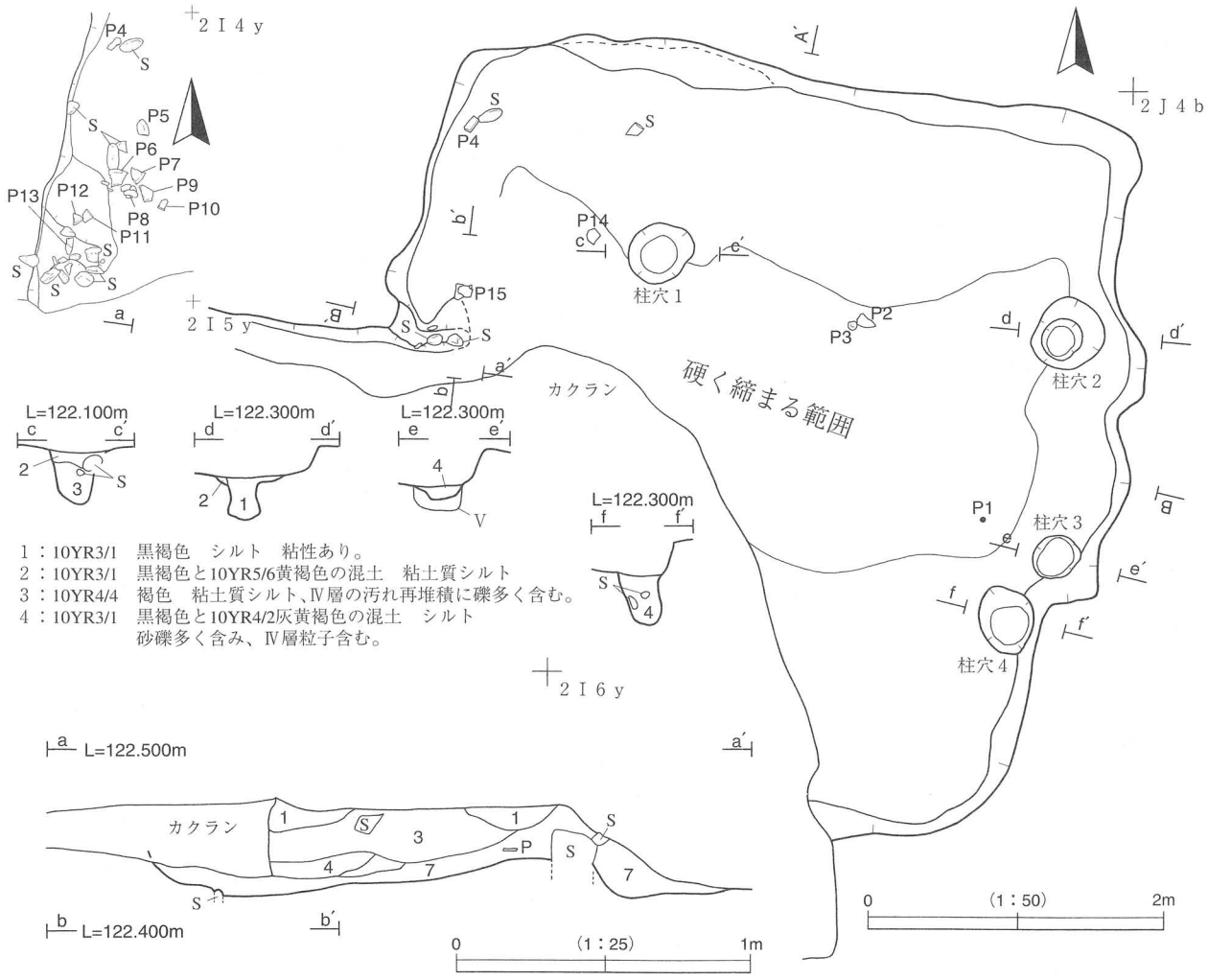


1：10YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　粘性強
しまりややあり　黄褐色土との混合土。

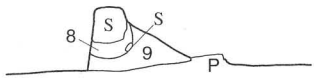
1：10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	粘性やや強	しまりややあり。	
2：10YR4/4	黒褐色	粘土質シルト	粘性強	しまりややあり	黒色土粒を含むブロック。
3：7.5YR3/3	暗褐色	粘土質シルト	粘性強	しまりややあり	わずかに焼土粒を含むブロック。
4：7.5YR3/4	暗褐色	砂質シルト	粘性やや強	しまりややあり	黄褐色土粒を含む。
5：7.5YR2/2	黒褐色	砂質シルト	粘性強	しまりややあり	煤けた色調。
6：10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまりあり	攪乱。
7：10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまりややあり。	
8：10YR4/4	褐色	砂質シルト	粘性あまりなし	しまりややあり	黒色土粒を含むブロック。
9：7.5YR3/2	極暗褐色	砂質シルト	粘性強	しまりややあり	焼土粒・炭化物を含む天井部からの崩落土。
10：7.5YR3/2	極暗褐色	砂質シルト	粘性やや強	しまりややあり	袖部構築土と一部貼床掘り方埋土。
11：5YR4/8	赤褐色	砂質シルト	粘性あまりなし	しまりややあり	焼けの良くない焼失時の焼土。
12：10YR2/1	黒褐色	シルト	粘性やや強	しまりややあり	黒味を帯びる。
13：10YR5/6	黄褐色	粘土質シルト	粘性あり	しまりややあり	袖部構築土
14：5YR4/8	赤褐色	砂質シルト	粘性やや強	しまりややあり	焼けの良くない燃焼部焼土。

0　(1：25)　1m

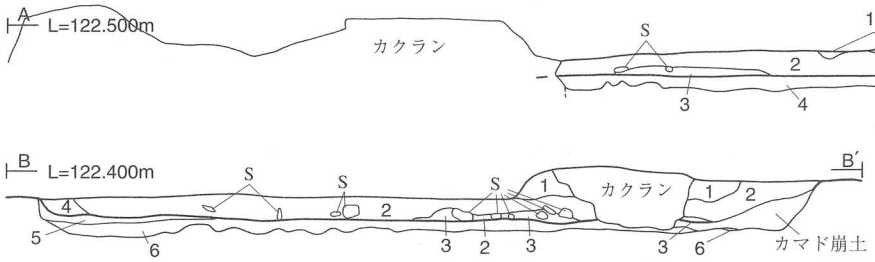
第13図　RA153住居跡（３）



1：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。
2：10YR3/1　黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　粘土質シルト
3：10YR4/4　褐色　粘土質シルト、Ⅳ層の汚れ再堆積に礫多く含む。
4：10YR3/1　黒褐色と10YR4/2灰黄褐色の混土　シルト
砂礫多く含み、Ⅳ層粒子含む。



1：10YR4/4　褐色　シルト　Ⅳ層の汚れ再堆積。
2：10YR3/2　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多い。炭化物含む。
3：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒含む。
4：10YR4/4　褐色　シルト　ややもろい。焼土粒含む。天井の崩れ。
5：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。焼土粒多い。天井の崩れ。
6：5YR4/4　にぶい赤褐色　砂質シルト　硬く締まる。
焼土ブロック。天井の崩れ。
7：10YR3/1　黒褐色　シルト　焼土粒多く、1cm大の焼土ブロック含む。
8：10YR3/1　黒褐色　シルト　カマド袖礫掘り方埋土。
9：10YR3/2　黒褐色　シルト　細かいⅣ層粒子散る。カマド袖。

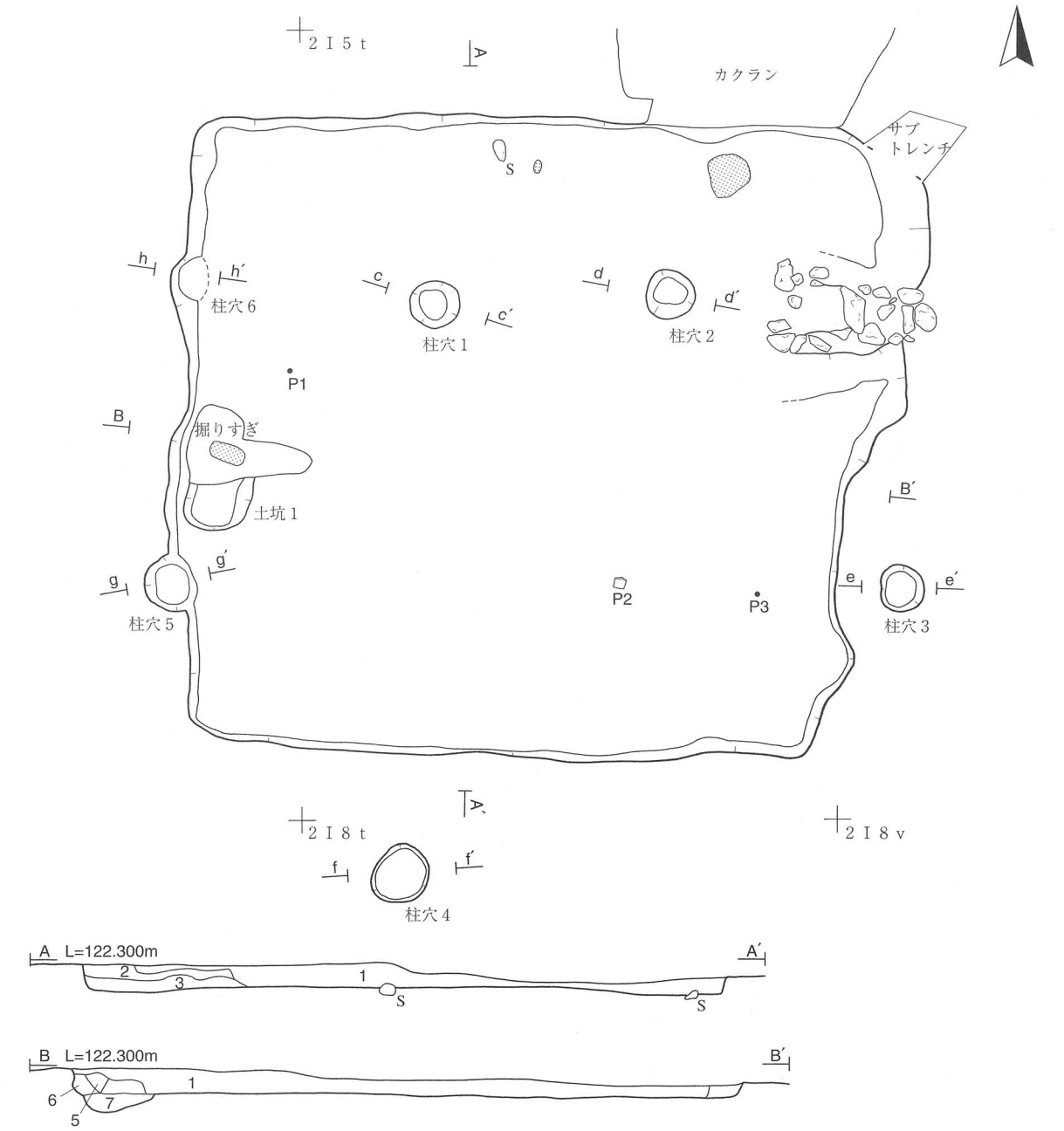


RA154	柱穴1	柱穴2	柱穴3	柱穴4
径(cm)	48×40	50×46	32×30	50×38
深さ(cm)	35	37	20	31

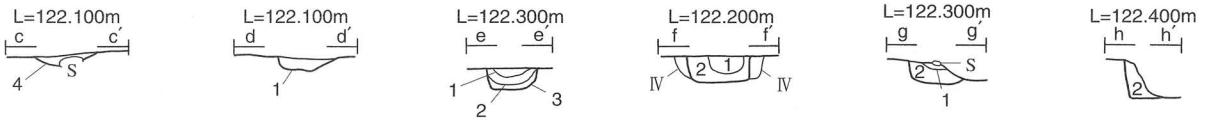
1：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子、土器含む。
2：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の細かいブロック散る　シルト　粘性あり。
Ⅳ層粒子、2cm未満のⅣ層ブロック含む。1層に似るが、ブロック含む点が異なる。
3：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。ややもろい。1層とほとんど同じだが、より暗い。
4：10YR2/1　黒色　シルト　粘性強い。Ⅱ層の再堆積にⅣ層ブロック含む。
5：10YR3/1　黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　粘性強い。埋め戻した土。掘り方埋土であろう。
6：10YR5/6　黄褐色地に霜降り状に10YR3/1黒褐色混じる　粘土質シルト　掘り方埋土。

0　(1：50)　2m

第14図　RA154住居跡



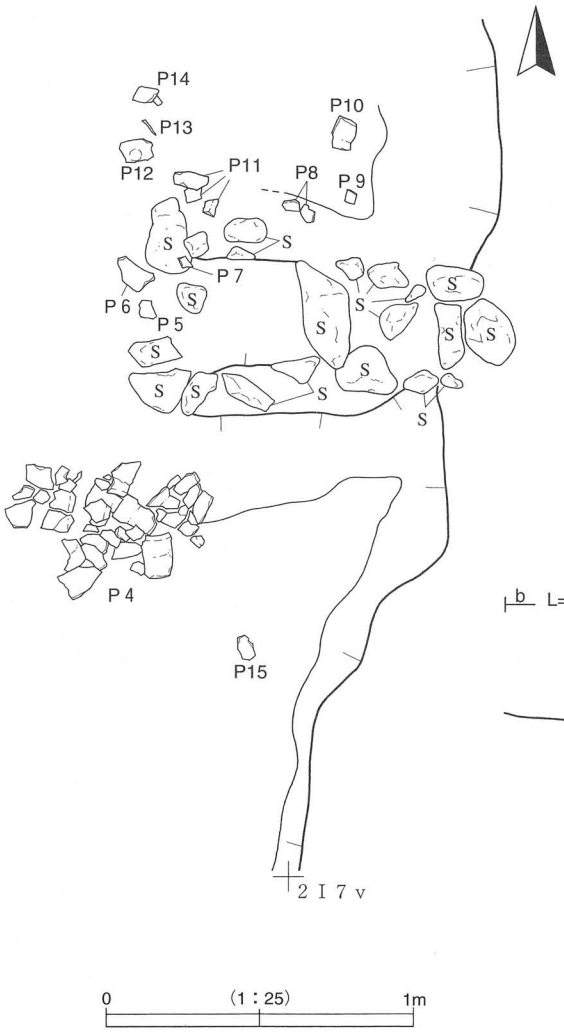
1：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子僅かに含む。
2：10YR3/1　黒褐色地に10YR4/4褐色混じる　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子多く含む。
3：10YR2/1　黒色地に10YR4/4褐色混じる　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
4：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の塊　シルト　粘性あり。Ⅳ層ブロック含む。
5：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　焼土粒、Ⅳ層粒子、ブロック含む。
6：10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性強い。
7：10YR3/2　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多い。

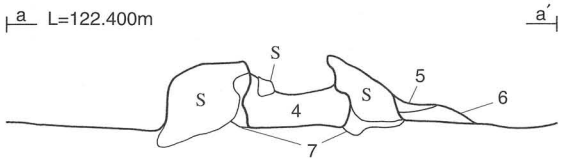


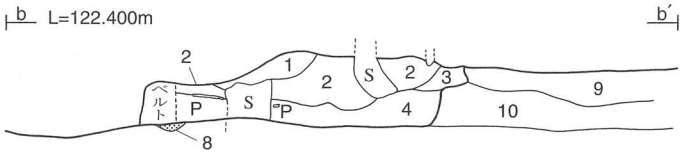
1：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
2：10YR3/1　黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルトⅣ層粒子多い。掘り方埋土か。
3：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
4：10YR3/1　黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　2層よりⅣ層粒子多い。掘り方埋土か。

0　(1：50)　2m

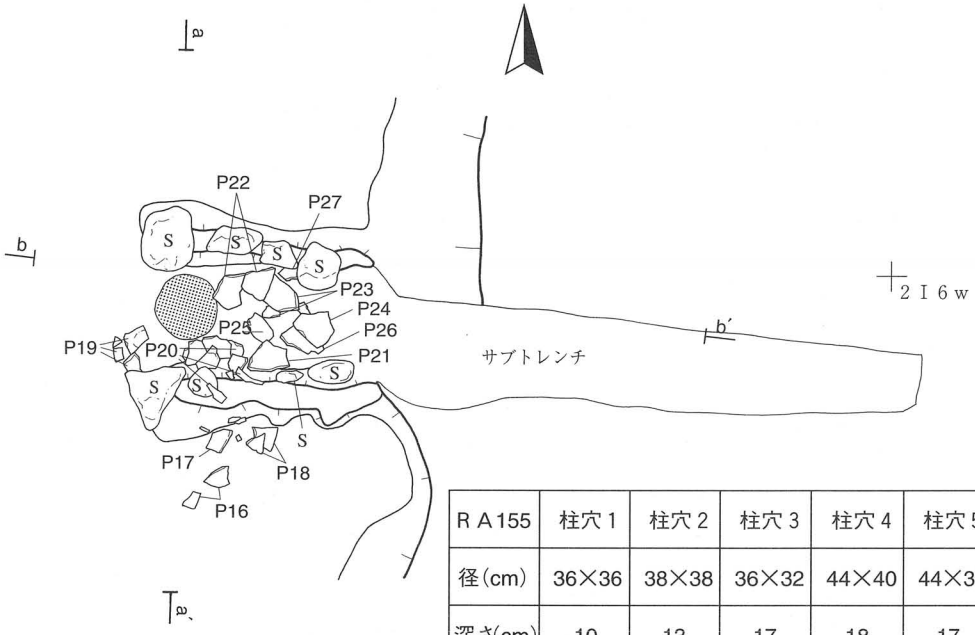
第15図　RA155住居跡（1）





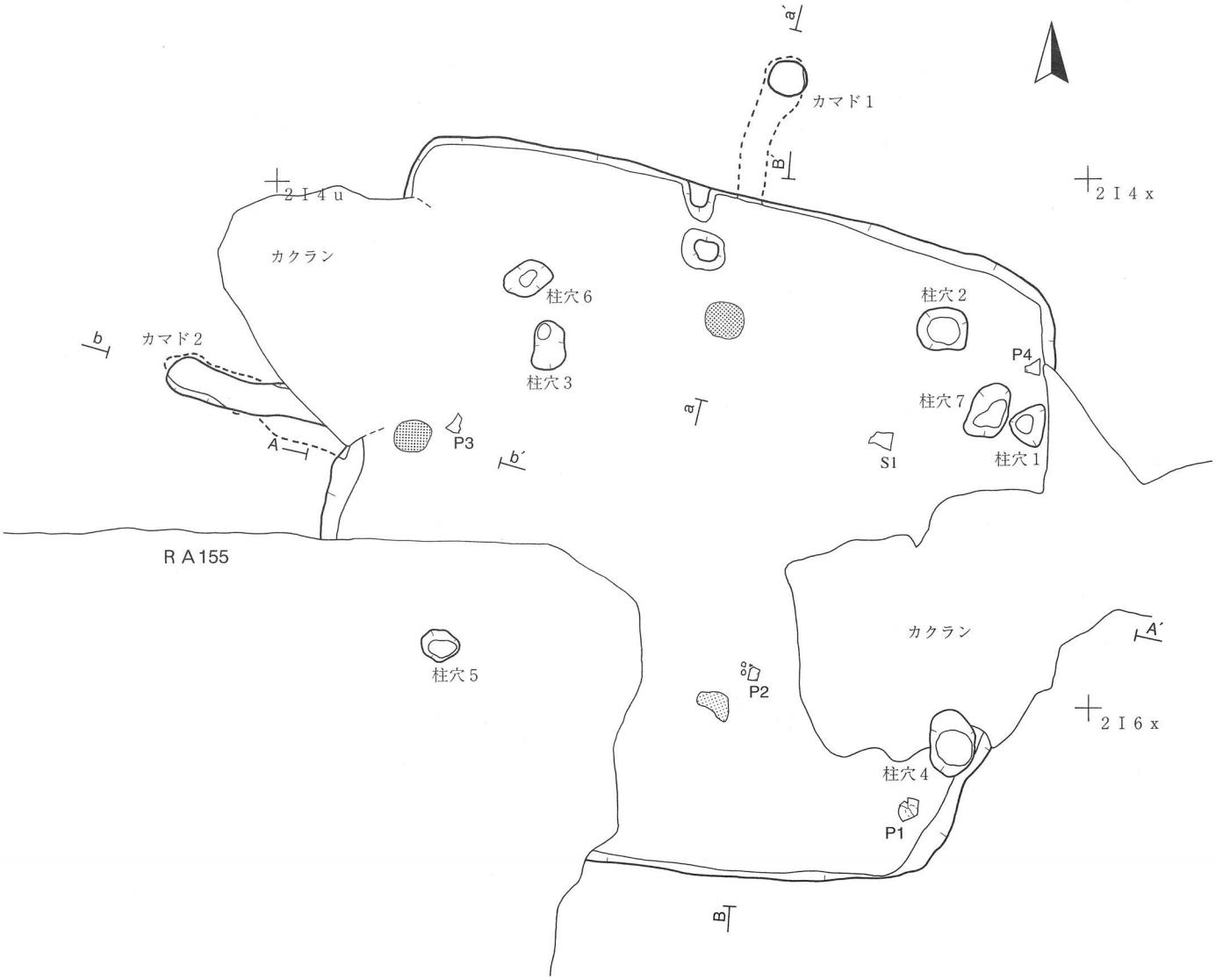


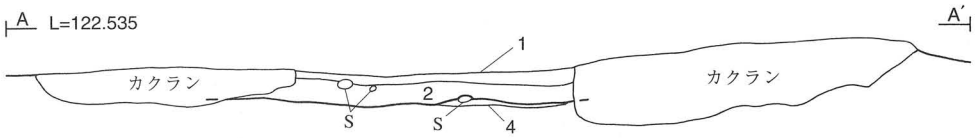
1：10YR2/1　黒色　シルト
2：10YR3/1　黒褐色　シルト　炭化物含む。細かいⅣ層粒子散る。
3：10YR3/1　黒褐色　シルト　もろい。２層と８層の中間的。
4：7.5YR2/1　黒色　シルト
5：10YR1.7/1　黒色　シルト　カマド袖覆土。
6：10G2/1　緑黒色　シルト　粘性あり。灰多量に含む。
7：10YR3/2　黒褐色　シルト　カマド袖礫掘り方埋め土。
8：5YR5/6　明赤褐色　砂　焼土。
9：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の斑　シルト　粘性強い。
Ⅳ層粒子顕著に含む。７号住居覆土。
10：10YR2/1　黒色　シルト　４層とよく似る。ＲＡ156覆土。

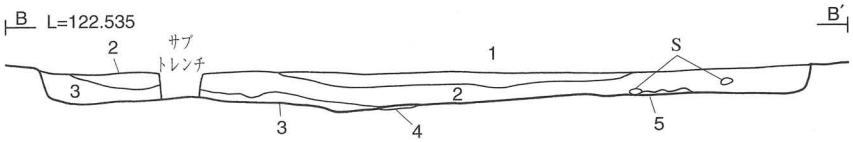


ＲＡ155	柱穴１	柱穴２	柱穴３	柱穴４	柱穴５	柱穴６	土坑１
径(cm)	36×36	38×38	36×32	44×40	44×38	34×28	50×40（残存部）
深さ(cm)	10	13	17	18	17	28	14

第16図　RA155住居跡（２）



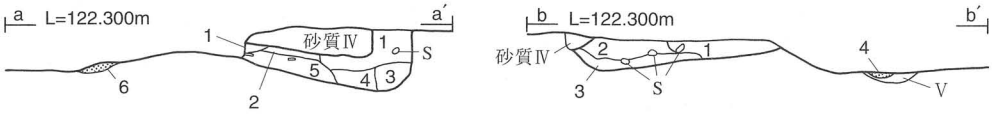




1：10YR3/1　黒褐色　シルト
2：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の斑　シルト　Ⅳ層粒子多い。
3：10YR2/1　黒色　　シルト
4：10YR2/1　黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒　　シルト　硬く締まる。貼床らしい。
5：7.5YR3/2　黒褐色　シルト　ややもろい。焼土粒多い。

0　(1：50)　2m

第17図　RA156住居跡（1）



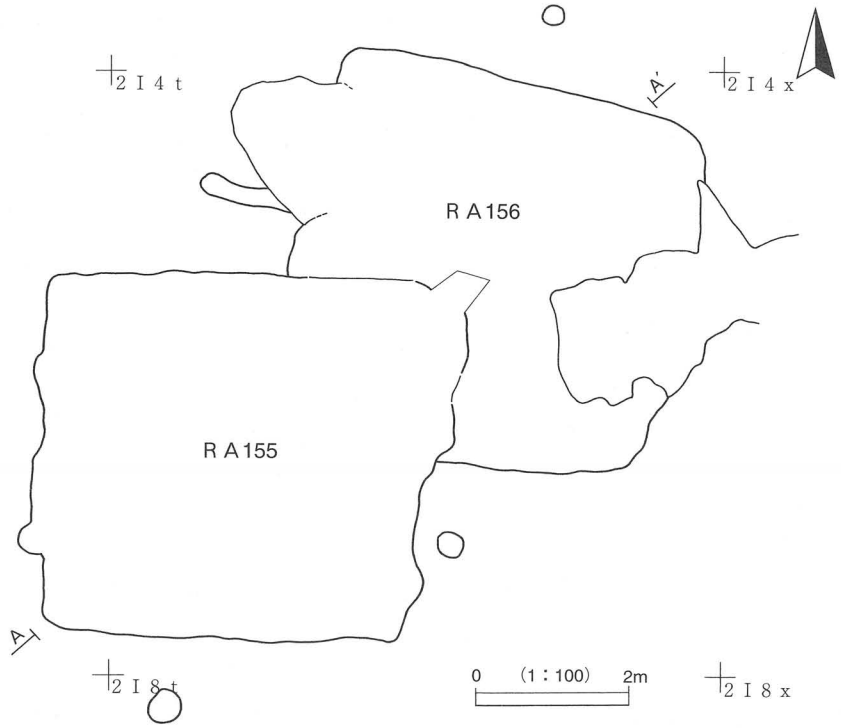
1：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
2：10YR3/3　暗褐色　シルト　１層より多くのⅣ層粒子含む。
3：10YR3/1　黒褐色と10YR4/4褐色の混土
　　シルト　Ⅳ層粒子二番目に多い。
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子最も少ない。
5：10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性あり。
　　Ⅳ層粒子汚れ再堆積。
6：7.5YR4/4　褐色　砂　焼土の残骸。

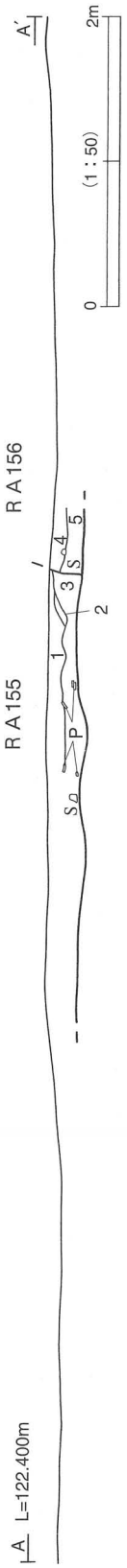
1：10YR3/2　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子散る。
2：10YR3/3　暗褐色　シルト　Ⅳ層粒子含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
4：7.5YR4/4　褐色　砂　焼土の残骸。

0　(1：50)　2m

ＲＡ156	柱穴１	柱穴２	柱穴３	柱穴４	柱穴５	柱穴６	柱穴７
径(cm)	30×26	38×32	38×22	50×34	28×24	36×26	42×30
深さ(cm)	25	12	34	23	11	13	37

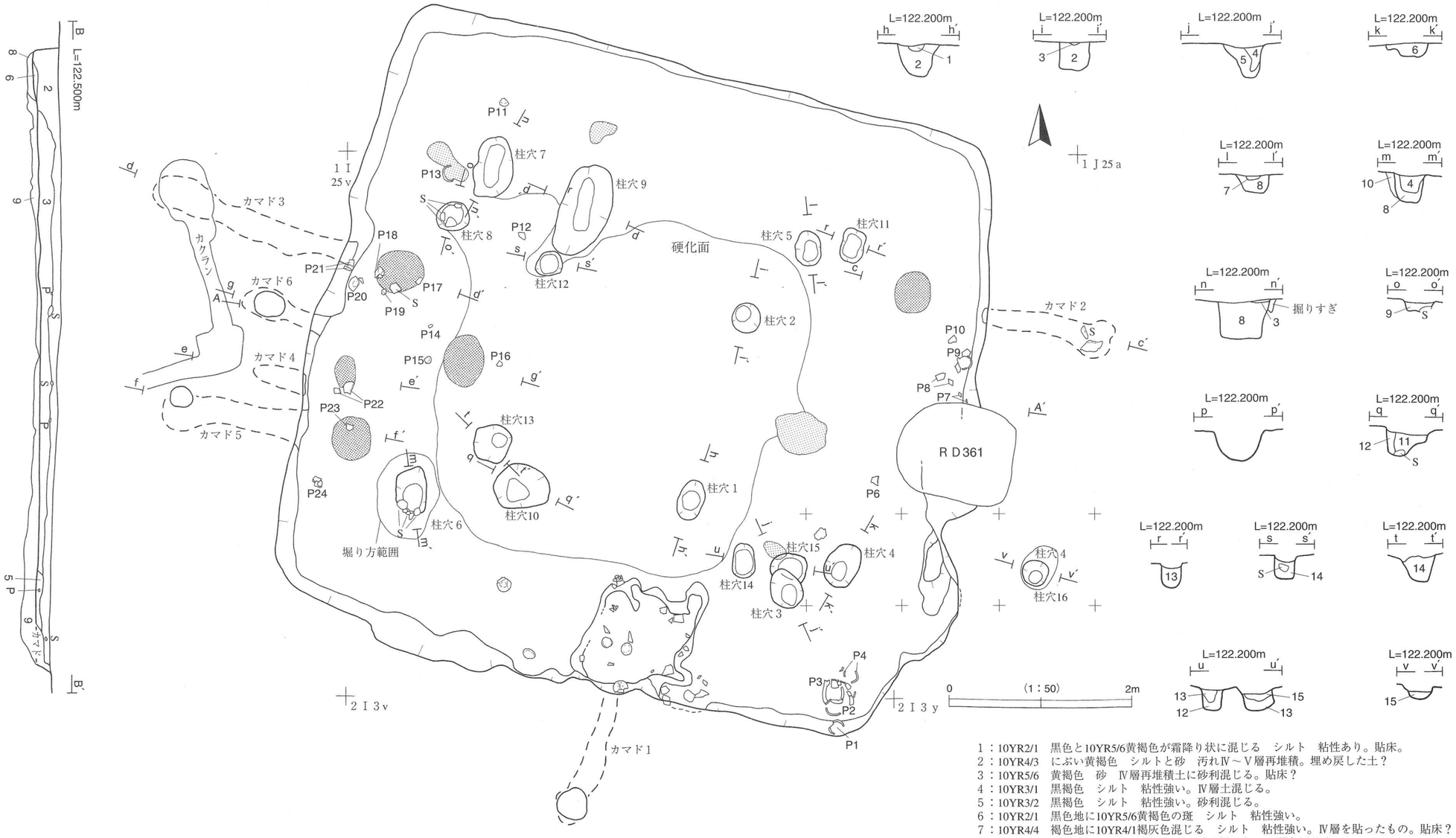
ＲＡ155住居跡とＲＡ156住居跡の重複

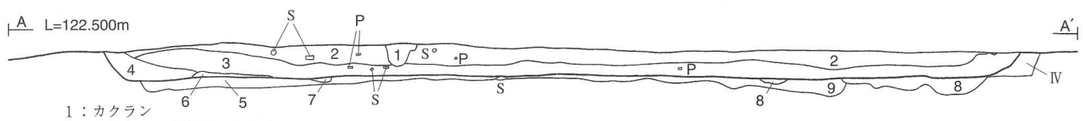




ＲＡ155とＲＡ156の重複
1：10YR3/1　黒褐色　シルト　ＲＡ155・１層に相当するか。
2：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　焼土粒多く含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。１層によく似るが、より暗い。ＲＡ155・３層に相当するか。
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　１層とほとんど同じ。ＲＡ156・１層に相当する。
5：10YR3/1　黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子多く含む。ＲＡ156・２層に相当する。

第18図　RA156住居跡（２）・RA155とRA156の重複

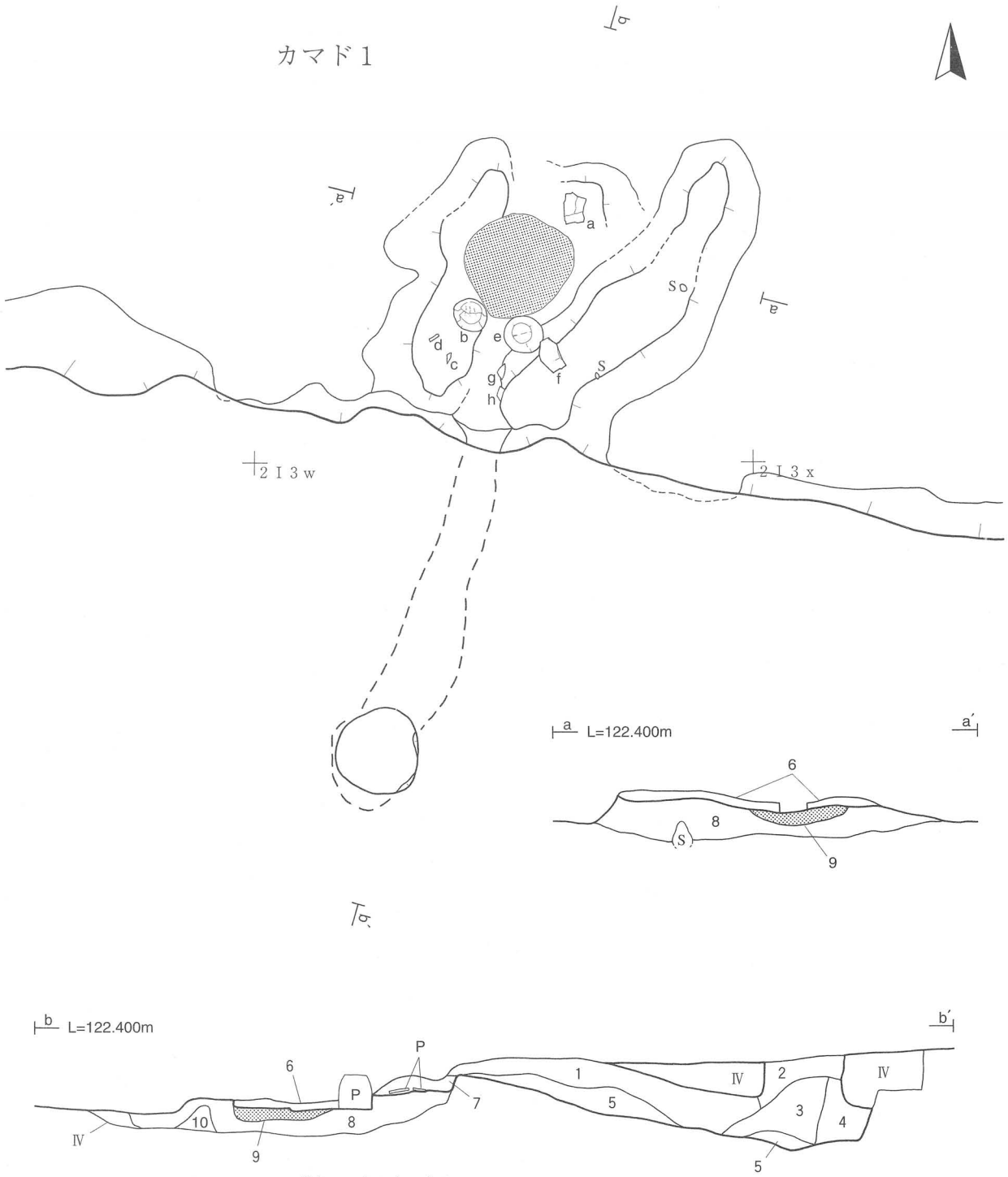




1：カクラン
2：10YR3/1　黒褐色　シルト
3：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　細かいⅣ層粒子、焼土粒が顕著に入る。
4：10YR2/1　黒色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト　ややもろい。焼土粒も含む。壁が崩れたもの。
5：7.5YR4/2灰褐色　シルト　焼土粒多量に含む。
6：縞状（版築状）に10YR2/1黒色と10YR4/4褐色の繰り返し　シルト　粘性あり。貼床。
7：7.5YR4/6　褐色　砂　焼土。
8：10YR5/6　黄褐色と10YR2/1黒色の混土　シルト　粘性あり。掘り方埋土。
9：10YR5/6　黄褐色地に10YR3/1黒褐色の斑　シルト　掘り方埋土。

1：10YR2/1　黒色と10YR5/6黄褐色が霜降り状に混じる　シルト　粘性あり。貼床。
2：10YR4/3　にぶい黄褐色　シルトと砂　汚れⅣ～Ⅴ層再堆積。埋め戻した土？
3：10YR5/6　黄褐色　砂　Ⅳ層再堆積土に砂利混じる。貼床？
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性強い。Ⅳ層土混じる。
5：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性強い。砂利混じる。
6：10YR2/1　黒色地に10YR5/6黄褐色の斑　シルト　粘性強い。
7：10YR4/4　褐色地に10YR4/1褐灰色混じる　シルト　粘性強い。Ⅳ層を貼ったもの。貼床？
8：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性強い。砂利混じり。5層と同じ？
9：10YR4/1　灰褐色と10YR4/4褐色が霜降り状に混じる　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。貼床。
10：10YR3/1　黒褐色　砂　砂利混じり。柱穴掘り方埋土。
11：10YR5/6　黄褐色地に10YR3/1黒褐色～10YR2/1黒色の斑　シルト　砂利混じり。埋め戻した土？
12：10YR3/1　黒褐色　砂　砂利汚れ再堆積。
13：10YR2/1　黒色地に10YR5/6黄褐色の斑　シルト　粘性あり。埋め戻した土？
14：10YR4/3　にぶい黄褐色　砂　砂利混じる層　埋め戻したもの？
15：10YR4/3　にぶい黄褐色地に10YR3/1黒褐色　シルト　埋め戻したものか？

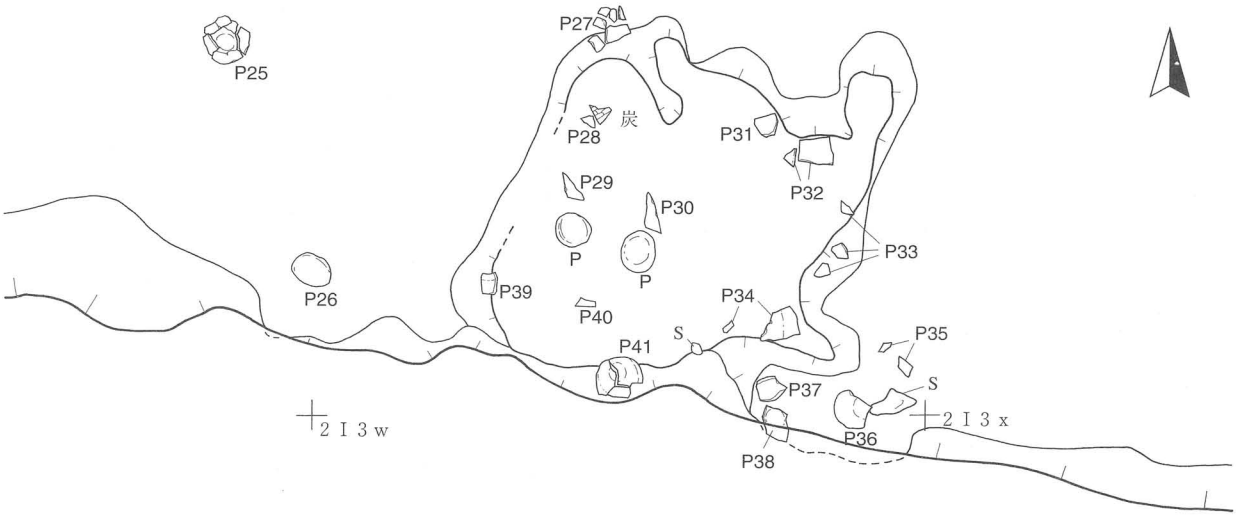
第19図　RA157住居跡（1）



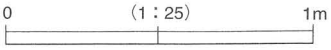
1：10YR2/1　黒色　シルト　もろい。
2：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層の細かい粒子散る。
3：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性あり。2層そっくりだがⅣ層粒子より多い。
4：10YR3/1　黒褐色と10YR4/4褐色の混土　シルト　粘性強い。Ⅳ層粒子多く含む。
5：10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性強い。
6：7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性あり。焼土粒多く、灰含む。カマド覆土。
7：10YR4/4　褐色　シルト　粘性強い。Ⅳ層を貼ったもので、カマド袖本体。
8：10YR5/6　黄褐色と10YR2/1黒色の混土　シルト　粘性あり。掘り方埋土。
9：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性あり。焼土。
10：10YR5/6　黄褐色　粘土？　Ⅳ層を貼ったものらしい（下の層と不整合）。

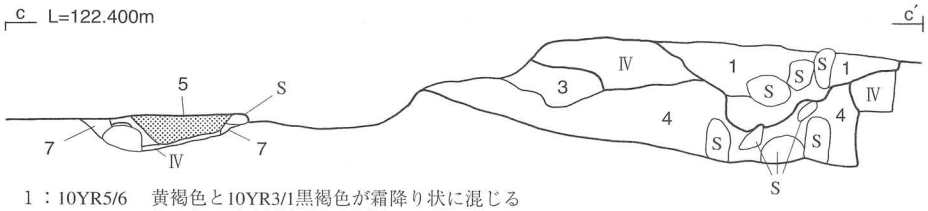
0　(1：25)　1m

第20図　RA157住居跡（2）



カマド１遺物出土状況



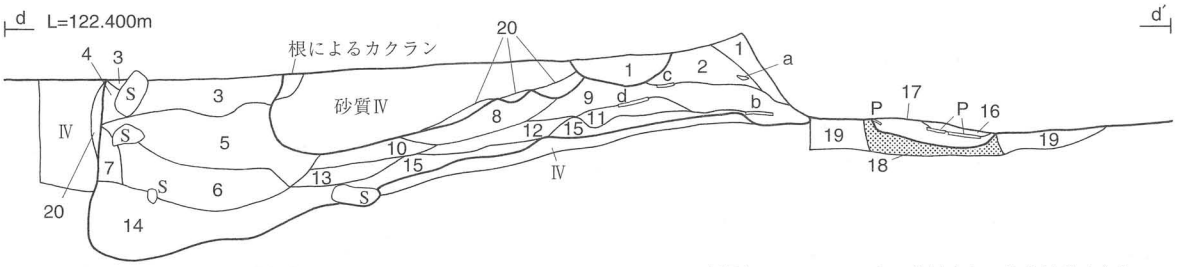


1：10YR5/6　黄褐色と10YR3/1黒褐色が霜降り状に混じる
　　シルト　硬く締まる。最近までの道の跡。
2：10YR3/1　黒褐色　シルト　非常にもろい。カクラン。
3：10YR2/1　黒色　　シルト
4：10YR5/6　黄褐色と10YR3/1黒褐色霜降り状に混じる　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
5：5YR4/8　赤褐色　シルト　焼土。
6：7.5YR4/2　灰褐色　シルト　砂利含む。掘り方埋土。
7：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層ブロック多い。掘り方埋土。

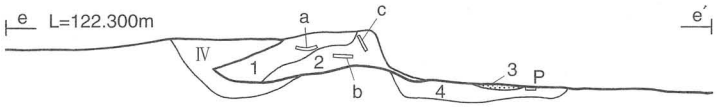
ＲＡ157	柱穴１	柱穴２	柱穴３	柱穴４	柱穴５	柱穴６	柱穴７	柱穴８	柱穴９	柱穴10
径(cm)	44×28	32×32	44×36	50×36	38×28	52×34	66×44	36×32	104×45	60×48
深さ(cm)	39	31	38	16	21	41	45	14	36	35

柱穴11	柱穴12	柱穴13	柱穴14	柱穴15	柱穴16
38×26	30×26	42×40	38×24	40×32	28×28
31	34	36	35	27	17

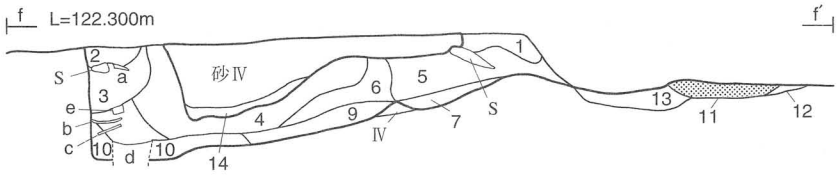
第21図　RA157住居跡（３）



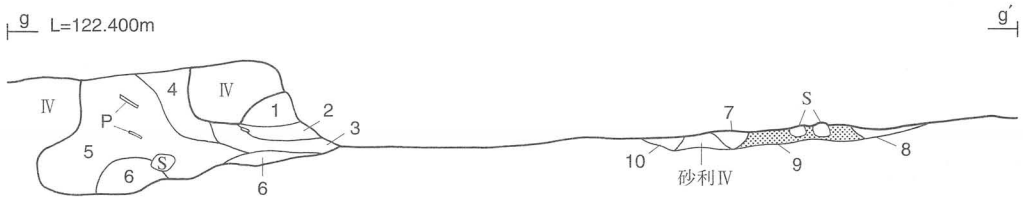
1：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色のブロック　シルト
　Ⅳ層ブロック含む。崩れか根によるカクラン。
2：10YR3/2　黒褐色　砂質シルト
3：10YR3/1　黒褐色地に細かい10YR5/6黄褐色散る　シルト
　粘性あり。細かいⅣ層粒子散る。
4：10YR5/6　黄褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層ブロック。
5：10YR5/6　黄褐色と10YR3/1黒褐色霜降り状に混じる　シルト
　粘性あり。多量のⅣ層粒子含む。
6：10YR5/6　黄褐色地に部分的に10YR3/1黒褐色混じる　シルト
　粘性強い。Ⅳ層再堆積土に焼土粒、黒土混じる。
7：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。もろい。焼土粒含む。
8：7.5YR2/1　黒色　シルト　ややもろい。
9：10YR5/6　黄褐色地に5YR4/4にぶい赤褐色の斑　シルト
　粘性あり。多量のⅣ層粒子、焼土粒含む。
10：5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性あり。焼土粒多く含む。
11：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　焼土の再堆積。
12：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。もろい。焼土粒多く含む。
13：10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層汚れ再堆積。
14：7.5YR1.7/1　黒色　シルト　もろい。
15：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
16：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性あり。焼土（再堆積？）。
17：7.5YR4/2　灰褐色　シルト　粘性強い。焼土粒含む。
18：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性あり。焼土。
19：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。焼土粒多い。
20：5YR3/2　暗赤褐色　砂質シルト　砂質Ⅳ層が火を受けて変化したもの。



1：10YR3/2　黒褐色地に５cm大の10YR5/6黄褐色の塊　シルト　粘性あり。ややもろい。Ⅳ層ブロック含む
2：10YR3/2　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多い。
3：7.5YR4/4　褐色　シルト　焼土の残骸。
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性強い。Ⅳ層ブロック含む。掘り方埋土。



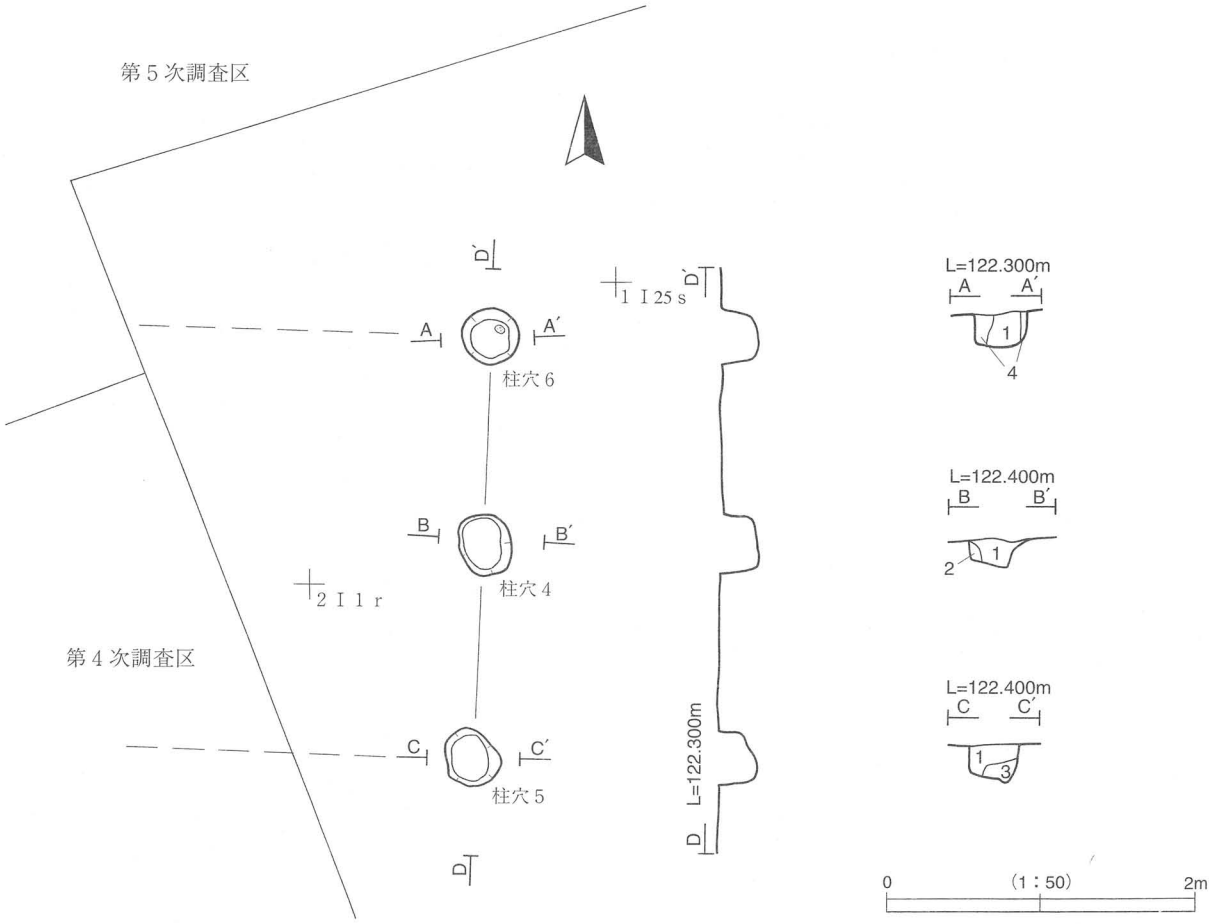
1：7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。周囲赤く焼けている。
2：10YR2/1　黒色　砂質シルト　もろい。
3：10YR4/3　にぶい黄褐色　砂質シルト　もろい。
4：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子含む。
5：10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性あり。
　Ⅳ層汚れ再堆積に焼土粒含む。
6：7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性あり。
　５層とほとんど同じだが、焼土粒より多い。
7：10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　焼土粒、灰含む。５、６層より黒い。
8：10YR4/2　灰黄色　シルト　粘性あり。
　非常にもろい。土器含む。Ⅳ層汚れ再堆積。
9：10YR3/2　黒褐色　砂質シルト
10：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。非常にもろい。
11：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　焼土。
12：7.5YR4/2　灰褐色　シルト　灰。
13：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。掘り方埋土。
14：7.5YR4/3　褐色　砂質シルト　もろい。
　砂Ⅳ層が熱で変化したもの。



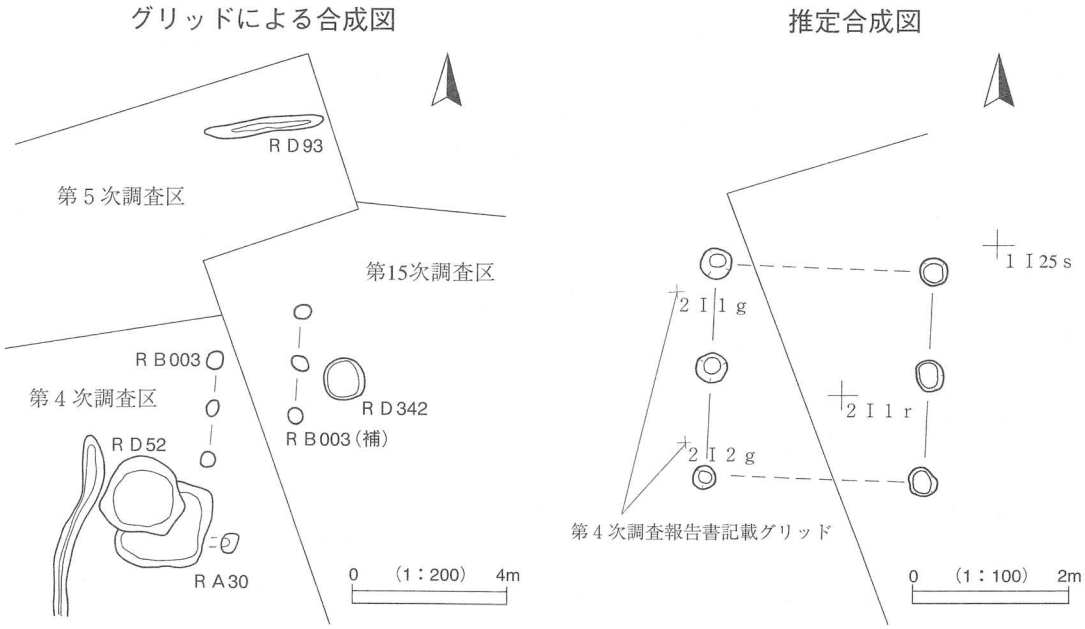
1：10YR4/4　褐色と10YR3/1黒褐色の混土　砂質シルト　ややもろい。
　砂Ⅳ層粒子多く含む。
2：10YR3/1　黒褐色　シルト　もろい。
3：10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性強い。Ⅳ層汚れ再堆積。
4：10YR2/1　黒色　シルト　粘性強い。Ⅳ層粒子含む。
5：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層ブロック含み、Ⅳ層粒子多い。
6：10YR2/1　黒色　シルト　もろい。
7：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。焼土粒含む。
8：7.5YR4/1　褐灰色　シルト　粘性強い。灰多い。
9：5YR4/4　にぶい赤褐色　シルト　粘性あり。焼土。
10：7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性強い。焼土粒、灰含む。

0　(1：25)　1m

第22図　RA157住居跡（４）



・ＲＢ003掘立柱建物跡（補）
1：10YR3/1　黒褐色　シルト　ややもろい。Ⅳ層粒子多く含む。
2：10YR3/1　黒褐色と10YR4/3にぶい黄褐色の混土　粘土質シルト　Ⅳ層ブロック含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。もろい。
4：10YR3/2　黒褐色と10YR4/4褐色が霜降り状に混じる　シルト　粘性あり。掘り方埋土か。



第23図　RB003掘立柱建物跡（補）

ている可能性がある。
＜柱間寸法＞桁方向で135～150㎝、梁方向は不明だが300㎝か。
＜柱穴の規模・平面形・断面形・深さ＞掘り方は、直径30㎝程度の円形～不整円形。深さ20㎝程度。
＜柱痕跡＞断面図に示した１層が柱痕跡と思われる。また、柱穴６には図示したように、柱穴６と４には、底面に柱当たりと思われる直径10㎝程度のグライ化部分が認められた。柱穴４のグライ化部分は、撮影時のクリーニングでとれてしまった。
＜柱穴の埋土＞根穴のような真っ黒い土（１層）とその周囲に掘り方埋土と推測される黄褐色土の混土が認められる。根がたくさん入っているのが特徴的であった。
＜柱穴の壁・底＞シルト質のⅣ層。底は、土坑よりやや硬く締まるような気もする。
＜関連施設＞不明。
＜遺物＞隣接した地点から土器破片は出土しているが（251ｇ）、なし。
＜時期・所見＞前回の調査でも出土遺物はなく、時期は不明とされている。ただし、覆土及びその規格性から、前回調査の類例と同じく平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

３　土　　坑（第24～28図、写真図版25～31）

25基検出され、全て平安時代で９世紀後半～10世紀初頭の可能性がある。凡例等は本章冒頭参照。
精査の順は概ね、ＲＤ338、339（10月31日～11月２日）→340～342、361（11月６日～11月17日）→343～354（11月24日～12月５日）→357～360→355、356（11月28日～12月５日）→362（12月６日～12月11日）である。旧沢跡にあった一群は水につかりやすく苦労した。
概要。その特徴からＲＤ338～342とＲＤ343～362に二分され、後者は覆土に炭化物、灰、焼土を含み、壁や床が焼けているものも多い。後者に含まれるが、ＲＤ344～354は旧沢跡の一箇所に集中し、重複も認められる。その他は、ＲＤ357と358、ＲＤ359と360のように近接もしくは重複するものもあるが、全体的には散在する。全体的に出土遺物は少ないが、ＲＤ344からほぼ完形に復元できる須恵器壺が破片を積み重ねたような状態で出土した。ＲＤ339と340から灰白色火山灰が出土した。

ＲＤ338土坑（第24図、写真図版25）

＜位置・検出状況＞調査区南。２Ｊ21ｈ～22ｉグリッド。砂質Ⅳ層上面ではっきり確認したが、あまり黒いので新しい可能性も考えていた（ただし、プランはあまりシャープではなく新しいという印象はなかった）。半裁したところ、壁、底も、それらしいので土坑と認定した。ちなみに、本土坑の南には、同様の平面形・規模、埋土であったが、輪郭が極めてシャープで新しいと判断された穴があった。その規模から、リンゴの木を移し替えた跡ではないかと推測する。
＜重複＞ないが、柱穴状の疑似現象（根穴？）に所々カクランされている。
＜図・精査状況＞完掘時、断面のⅢ層まで掘り広げてしまったため、Ａ側の立ち上がり、断面図と平面図合わない。
＜埋土＞黒色の単層でフカフカした土。
＜平面形・規模＞160×140㎝程度の小判形。
＜断面形・深さ＞25㎝程度の浅皿形。
＜壁・底＞壁は砂質のⅣ層、底はⅤ層上面（礫露出）。
＜出土遺物＞土師器甕口縁部が出土したはずだが（24.5ｇ？）、掲載基準を満たさなかったらしい。

＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ339土坑（第24図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区南。２Ｊ19ｊ～20ｋグリッド。砂～砂質Ⅳ層上面ではっきりと確認。
＜重複＞ないが、一部根によるカクランを受けている。
＜図・精査状況＞完掘時、Ａ′側の上場が掘り広がったため、断面図と平面図合わない。
＜埋土＞中層に灰白色火山灰が入る。上層は黒土、下層は地山再堆積土。
＜平面形・規模＞145×120㎝程度の方形。
＜断面形・深さ＞約20㎝。
＜壁・底＞壁は、砂～砂質Ⅳ層。底は、西半分砂利層（Ｖ層の一部か）、東半分砂～砂質Ⅳ層。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞灰白色火山灰と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ340土坑（第24・32図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区中央西寄り。２Ｉ９ｔ～10ｕグリッド。旧沢跡の南端に位置するか。Ⅳ層上面黒土ではっきりと確認。
＜重複＞ないと思われるが、南西隅カクランで壊されている。
＜図・精査状況＞合っているが、カクラン部分は掘り広がっている。
＜埋土＞上、下黒土で、中層はⅣ層ブロックを特徴的に含み、灰白色火山灰の細かいブロックも含む。
＜平面形・規模＞105×75㎝程度の小判形。
＜断面形・深さ＞30㎝程度。
＜壁・底＞シルト～砂質Ⅳ層が基本だが、底の南側は礫露出。底は凹凸がある。南西壁は崩れた。
＜出土遺物＞完掘時作業員の手が足りず、執筆者が１～２層を掘ったが、遺物のほとんどは２層から出土しているようであった。155.5ｇの土器が出土し、第32図101の土師器を掲載した。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ341土坑（第24・32図、写真図版25）
＜位置・検出状況＞調査区中央西寄り。２Ｉ８ｓグリッド。旧沢跡。重機で剥いだ時点では、今回の調査範囲からは外れると考えていたが、ＲＡ155住居の南西隅が前回の調査範囲に続いていることがわかり、それに伴って周囲も含めて拡張した。すると、住居の南にあったカクランに切られるようにクロボクの土坑状のシミが認められた。あまり黒いので根穴等の可能性も考えていたが、プランはそれらしく、半裁してみた結果、壁と底がはっきり認められたので、土坑と認定した。
＜重複＞ないと思うが、北西側カクランに壊されている。
＜図・精査状況＞合っている。
＜埋土＞１層はカクランで、三層に分かれる。２層は、Ⅳ層の汚れ再堆積で単なる地山の汚れと区別できないが（壁との境は根によるカクランで、よくわからない）、はっきり土坑のプランに沿っているので埋土に間違いないと思う。埋め戻し土か。３層はクロボク、４層もⅣ層汚れ再堆積。
＜平面形・規模＞長さは、カクランにより不明。幅は104㎝。小判型か。
＜断面形・深さ＞20㎝。

<壁・底>シルト質のⅣ層。上述のように、２層と壁との境がはっきりしない。
<出土遺物>３層から比較的多くの土器、礫（自然）が出土している。第32図102の土師器を掲載した。土器出土総量74.4ｇ。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ342土坑（第24図、写真図版26）
<位置・検出状況>調査区北西隅。ＲＢ003掘立柱建物跡の東隣。１Ｉ25ｓ～２Ｉ１ｓグリッド。Ⅳ層上面、真っ黒いクロボク土ではっきりと確認。あまりに明瞭で、逆に疑いたくなるほどであったが、半裁した結果、壁と埋土との境が明確で、人為的に掘り込んでいることは確かである。
<重複>なし。
<図・精査状況>あっている。
<埋土>根によるカクランではっきりしない。単層のようにも見えるが、上部（１層）が墨の断面のようにのっぺりして見えるのに対し、下部（２層）はボソボソで、Ⅳ層混じりの土。
<平面形・規模>105×102㎝程度のズングリした楕円形。
<断面形・深さ>約32㎝。
<壁・底>シルト質Ⅳ層だが、部分的に砂。底は凸凹している。
<出土遺物>なし。
<時期>覆土と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性もある。

ＲＤ343土坑（第24・32図、写真図版26）
<位置・検出状況>調査区中央。２Ｊ11ｃ～ｄグリッド。Ⅳ層上面で、カクランに切られる黒いシミを見つけたが、不整形であったので遺構かどうか疑っていた。半裁した結果、底面に焼土が認められたので、土坑と認定。
<重複>ないと思うが、南側をカクランで大分壊されている。
<図・精査状況>図面は合っている。黒いシミを検出した際不整形だったため、周囲に認められた根穴等の疑似現象の一つと考え、下げればなくなるかと強くジョレンがけを行ったため、大分削平してしまった。
<埋土>１層はカクランのため、二層。黒土（３層）の上に埋め戻したような黄褐色土混じりの土が入る（２層）。
<平面形・規模>長さ135㎝、幅はカクランのため不明。
<断面形・深さ>約15㎝。
<壁・底>壁はシルト質のⅣ層、底もそうだが、一部Ⅴ層。大きく削平してしまったため、壁ははっきりしない。
<特記事項>西端の<u>底が火を受けて</u>焼けている。
<出土遺物>第32図103の土師器が出土。土器出土総量21ｇ。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ344土坑（第25・32図、写真図版26）
<位置・検出状況>調査区中央よりやや北。２Ｊ５～６ｄグリッド。旧沢跡の北端に当たり、Ⅱ層が薄かったため、比較的早い段階で存在は確認していたが、土坑としてはっきり認識できたのは、沢跡

の黒土を全て除去してからである。Ⅳ層上面、黒土ではっきりと確認。やや不整形で、根穴等の疑似現象の可能性も考えたが、半裁した結果底が平らではっきり確認できたので、土坑と認定した。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。

＜重複＞ないと思うが、ＲＤ345、346土坑と近接する。

＜図・精査状況＞完掘時掘り広がったため、合わない。

＜埋土＞単層で、黒褐色土。

＜平面形・規模＞135×125㎝程度の台形に近い。

＜断面形・深さ＞約10㎝。

＜壁・底＞壁は砂質のⅣ層、底はシルト質のⅣ層で礫が露出している。大幅に削平したためか、壁ははっきりしない。

＜特記事項＞検出面から須恵器の大きな破片がほぼ水平に重なり合うように出土し（写真図版26）、室内で接合したところ完形に近くなった。

＜出土遺物＞出土状況は上述。第32図104・105の土師器・須恵器が出土。土器出土総量2,359.8ｇ。

＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＤ345土坑（第25図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北。２Ｊ６ｃ～ｄグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。

＜重複＞南西側ＲＤ347土坑、東側ＲＤ346土坑と重複。ＲＤ346土坑とは土の違いが大きかったので、検出面ではっきりＲＤ346が古く本土坑が新しいのが見て取れた。ＲＤ347土坑との関係は検出面では分からず、仕方がないので通して半裁することにした。それでもはっきりしなかったが、断面の土層の違いと、重複していない部分のプランの繋がりから、一応本土坑の方が新しいと判断した。

＜図・精査状況＞図面は合っている。

＜埋土＞単層に近いが、西側壁際に、より黒い土が見られた。１層中に焼土が認められたが（厚さ１㎝）、現地性かどうか分からない。

＜平面形・規模＞140×110㎝程度の楕円形。

＜断面形・深さ＞約12㎝。

＜壁・底＞シルト～砂質のⅣ層。壁は、削平されているためか、はっきりしない。

＜出土遺物＞なし。

＜時期＞埋土と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性もある。

ＲＤ346土坑（第25図、写真図版27）

＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北。２Ｊ６～７ｄグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。

＜重複＞西側ＲＤ345土坑と重複し、検出面ではっきりＲＤ345の楕円形のプランが確認でき、ＲＤ346土坑の方が古い。

＜図・精査状況＞北側の上場、完掘時掘り広がって合わない。

＜埋土＞削平されているためか、単層。
＜平面形・規模＞128×105㎝程度の隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約14㎝。
＜壁・底＞壁は砂Ⅳ層で、削平されているためか、はっきりしない。底はシルト質Ⅳ層で一部礫露出し、凹凸がある。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞埋土と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性もある。

ＲＤ347土坑（第25図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北。２Ｊ６ｃ～７ｄグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
＜重複＞北東側ＲＤ345土坑と重複。検出面では新旧関係分からず、仕方がないので通して半裁することにした。それでもはっきりしなかったが、断面の土層の違いと、重複していない部分のプランの繋がりから、一応本土坑の方が古いと判断した。
＜図・精査状況＞合っている。
＜埋土＞削平されているためか、単層。底上３㎝に淡い焼土らしきものを検出したが、規模が小さくはっきりしなかったため、図には表現されていない。
＜平面形・規模＞136×100㎝程度の隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約８㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層で、削平されているためか、はっきりしない。底はシルト質のⅣ層だが一部礫露出。
＜出土遺物＞なし。
＜時期＞埋土と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性もある。

ＲＤ348土坑（第25・32図、写真図版27）
＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北。２Ｊ６ｃ～７ｄグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
＜重複＞ないが、根によるカクランひどく、底は凸凹している。
＜図・精査状況＞Ｃ′側の下場、完掘時掘り広がったため、合わない。
＜埋土＞１層はかくらんのため、二層。壁際に暗褐色土、中央に黒土。
＜平面形・規模＞153×110㎝程度の不整隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約12㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底はシルト質のⅣ層で、一部淡く焼けているように見えたが、撮影のためのクリーニング後なくなってしまった。
＜出土遺物＞第32図106の土師器が出土。土器出土総量17.2ｇ。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ349土坑（第25・32図、写真図版28）

<位置・検出状況>調査区中央よりやや北。２Ｊ７ｄグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
<重複>南東側ＲＤ350土坑と重複。検出面では新旧関係を確認できなかったので、通して半裁した。埋土にもほとんど違いはなかったが、境界付近の土が、ＲＤ349土坑には黄色い粒が認められるのに対しＲＤ350土坑にはなく、ＲＤ350土坑の方がスムーズに壁が立ち上がることから、ＲＤ349土坑の方が古いと判断した。
<図・精査状況>ＲＤ350土坑との重複付近が、完掘時掘り広がったため、合わない。
<埋土>下部（北西側壁際）に焼土ブロック、灰、炭化物含み、上部は黒褐色土。
<平面形・規模>165㎝程度の不整形。
<断面形・深さ>約18㎝。
<壁・底>壁は砂質Ⅳ層。底も砂質のⅣ層だが、一部礫露出。
<特記事項>埋土下部であるが、北西壁際に焼土あり。
<出土遺物>第32図107・108の土師器が出土。土器出土総量381.2ｇ。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ350土坑（第25・33図、写真図版28）
<位置・検出状況>調査区中央よりやや北。２Ｊ７ｄ～８ｅグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
<重複>北西側ＲＤ349土坑と重複。検出面では新旧関係を確認できなかったので、通して半裁した。埋土にもほとんど違いはなかったが、境界付近の土が、ＲＤ349土坑には黄色い粒が認められるのに対しＲＤ350土坑にはなく、ＲＤ350土坑の方がスムーズに壁が立ち上がることから、ＲＤ350の方が新しいと判断した。
<図・精査状況>完掘時掘り広がったため、合わない。実測の精度の問題か、焼土の位置も合わない。第25図南西側の突出部は、カクランがあったため掘り広がったものである。
<埋土>最下部（北西側）に焼土ブロック、灰含み、上部は黒褐色土。
<平面形・規模>210×175㎝程度のやや不整な隅丸長方形。
<断面形・深さ>約18㎝。
<壁・底>壁は砂質Ⅳ層。底も砂質のⅣ層だが、一部礫露出。
<特記事項>埋土下部であるが、北西側に焼土あり。
<出土遺物>（出土状況）土器小片が数点出土している（第25図）。p.１は、底上10㎝、２層上面から出土。p.２～５は、壁際からの出土で、p.２は東方向から、p.３～５は北東方向から滑り落ちたような状態で出土し、いずれも底直上からで、１～２層の出土か。土器出土総量1,208.7ｇ。
（掲載遺物）第33図109～112の土師器が出土。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ351土坑（第26・33図、写真図版28）
<位置・検出状況>調査区中央よりやや北東。２Ｊ９ｆ～ｇグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでい

たものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
＜重複＞北西側ＲＤ352土坑と重複。境界付近の埋土が顕著に異なるため、検出面ではっきりＲＤ351土坑の方が新しいとわかった。根によるカクラン多く、特に南東壁、北壁の一部は壊されている。北壁の近く、重機の爪痕残る（写真図版28）。
＜図・精査状況＞合っている。
＜埋土＞下部に焼土、灰、炭化物含む（一部埋め戻したような再堆積土）。上部は黄褐色土の混じる黒土で埋め戻した土か。９層は、調査時にＲＤ352土坑に帰属する可能性も考えたが、土性の類似性から、これもＲＤ351土坑に帰属するものと思われる。
＜平面形・規模＞236×145㎝程度のやや不整な隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約35㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層で、一部ＲＤ352土坑埋土。底は、シルト質のⅣ層だが、一部礫露出で、若干の凹凸がある。
＜特記事項＞西側の埋土下部に、焼土、灰、炭化物含む。これらは現地性かどうかはっきりしない部分もあるが、これとは別に、ほぼ同じ場所の底面もはっきり火を受けて焼けている（焼土の厚さ２㎝）。
＜出土遺物＞（出土状況）埋土下部の焼土類の周囲から土器小片が多く出土している（第26図）。土器出土総量1,157.1ｇ。図の炭は、ヤマウルシとの同定結果を得ている。
（掲載遺物）第33図113・114の土師器・須恵器が出土。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ352土坑（第26・33図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北東。２Ｊ８ｅ～９ｆグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
＜重複＞南東側ＲＤ351土坑と重複。境界付近の埋土が顕著に異なるため、検出面ではっきりＲＤ351土坑の方が新しいとわかった。根によるカクラン多く、特に北壁の一部は壊されている。
＜図・精査状況＞合っている。
＜埋土＞単層のようである。９層は、調査時に本土坑に帰属する可能性も考えたが、土性の類似性から、これもＲＤ351土坑に帰属するものと思われる。
＜平面形・規模＞180×160㎝程度の隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約20㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底は、シルト質のⅣ層だが、一部礫露出で、若干の凹凸がある。
＜出土遺物＞第33図115・116の土師器・須恵器が出土。土器出土総量147.3ｇ。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ353土坑（第26・33図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北東。２Ｊ９ｇ～ｈグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。
＜重複＞ない。
＜図・精査状況＞合っている。

＜埋土＞最下部、埋め戻したような再堆積土。下部、炭化物や灰など薄い互層で入り、上半部は、黄褐色土の混じる埋め戻した土。
＜平面形・規模＞148×138㎝程度の不整隅丸方形。
＜断面形・深さ＞約30㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底はシルト質のⅣ層だが、一部礫露出で、凹凸があり、深めの部分もある。
＜特記事項＞西壁の中央付近がはっきりと火を受けて焼けている。
＜出土遺物＞第33図117～121の土師器・須恵器が出土。土器出土総量534.4ｇ。
＜時期＞出土遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

ＲＤ354土坑（第26・33図、写真図版29）
＜位置・検出状況＞調査区中央よりやや北東。２Ｊ７ｈ～８ｉグリッド。旧沢跡の黒土を全て除去した後に、Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。基本土層との関係から、おそらくⅡ層の上から掘り込んでいたものと思われるので、大幅に削平している可能性が高い。調査区内で最も低い場所に検出された。
＜重複＞ない。
＜図・精査状況＞合っている。調査区内で最も低いため、しばしば雨水につかって大変だった（シートをかけても、その下に水が入り込んでしまった）。
＜埋土＞最下部、埋め戻したような再堆積土。下部（４層）焼土、中部（３層）黒土、上部は、黄褐色土の混じる埋め戻した土。
＜平面形・規模＞160×130㎝程度の隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約25㎝。
＜壁・底＞壁は砂質Ⅳ層。底は、シルト質のⅣ層だが、一部礫露出で、凹凸がある。
＜特記事項＞図では漏らしたが、西壁の中央付近がはっきりと火を受けて焼けていた。
＜出土遺物＞第33図122の須恵器が出土。土器出土総量513.1ｇ。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ355土坑（第27図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞２Ｊ３ｆ～ｇグリッドに位置する。本来はⅢ層（漸移層）で確認できると思われる遺構であるが、重複するＲＡ153住居跡の壁を精査している際に検出した。
＜重複＞ＲＡ153住居跡の北東壁中央で重複する。底面に焼土を伴っていたため、当初はＲＡ153住居跡に付属するカマドの燃焼部として精査したものである。本遺構のほうが旧い。
＜埋土＞上位は黒色土、中位以下は黒褐色土からなる自然堆積層である。
＜平面形・規模＞本遺構のほうが旧く全体が不明だが、方形基調と思われる。上端204×(82)㎝。
＜断面形・深さ＞皿状。26cm
＜壁・底＞壁は緩く立ち上がり、底面はほぼ平担である。底面に形成された焼土は、大きさが37×47cmの略円形で厚さは２～３cmである。
＜出土遺物＞ないようである。
＜時期・所見＞重複関係と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属すると思われる。ＲＡ153住居跡よりは旧い遺構である。底面に焼土が確認できることや形状から土器焼成遺構の可能性があるが、詳細は不明である。

ＲＤ356土坑（第27・33図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞２Ｊ３ｅグリッド。黒褐色土の広がりで、ＲＡ153住居跡とともに検出した。
＜重複＞ＲＡ153住居跡の北西壁、カマドと北隅の間で重複する。本遺構のほうが旧い。
＜埋土＞自然堆積と思われる。
＜平面形・規模＞本遺構のほうが旧いため全体形は不明だが、方形基調と思われる。162×(65)㎝。
＜断面形・深さ＞皿状。23～32cm
＜壁・底＞西壁のみオーバーハングしている。底面は小さな凹凸があり平坦でない。
＜遺物＞土師器片数点。第33図123～125の土師器・須恵器を掲載した。土器出土総量1,251.1ｇ。
＜時期・所見＞出土した遺物から、平安時代（９世紀後半～10世紀初）に属すると思われる。ＲＡ153住居跡より旧い遺構である。性格は、不明である。

ＲＤ357土坑（第27・33図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区北東。２Ｊ２ｃグリッド。Ⅲ層下部、黒土ではっきり検出。周囲に根穴等の疑似現象多かったが、明らかに異なり、輪郭は明瞭だった。
＜重複＞ない。底に根穴がある。
＜図・精査状況＞Ａ′側の上場、完掘時掘り広がったため合わない。
＜埋土＞１層はカクランのため、二層。両方とも黒土。下部に（底から２㎝）、炭化物あり。
＜平面形・規模＞120×110㎝程度の不整隅丸長方形。東側が膨らんでいるのはカクランのせいか。
＜断面形・深さ＞約30㎝。
＜壁・底＞両方とも砂質Ⅳ層。底は、凹凸がある。
＜出土遺物＞第33図126の土師器、第33図10の石器（磨石）が出土。土器出土総量368.8ｇ。図の炭は、クリとの同定結果を得ている。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

ＲＤ358土坑（第27・33図、写真図版30）
＜位置・検出状況＞調査区北東。２Ｊ１～２ｃグリッド。Ⅲ層下部、黒土ではっきり検出。周囲に根穴等の疑似現象多かったが、明らかに異なり、輪郭は明瞭だった。
＜重複＞ない。底に根穴がある。
＜図・精査状況＞合っている。
＜埋土＞二層で、ＲＤ357に似る。
＜平面形・規模＞140×120㎝程度の不整隅丸長方形。
＜断面形・深さ＞約30㎝。断面形は他と異なり、「レ」状。
＜壁・底＞両方とも砂質Ⅳ層。底は、凹凸がある。
＜出土遺物＞西壁際２層中から土器出土（第27図No.1）。第33図127・128の須恵器・土師器を掲載した。土器出土総量261.5ｇ。
＜時期＞出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ359土坑（第28・33図、写真図版31）
＜位置・検出状況＞調査区中央北端。１Ｊ25ａ～２Ｊ１ａグリッド。Ⅲ層下部～Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。周囲に根穴等の疑似現象多かったが、明らかに異なり、輪郭は明瞭だった。

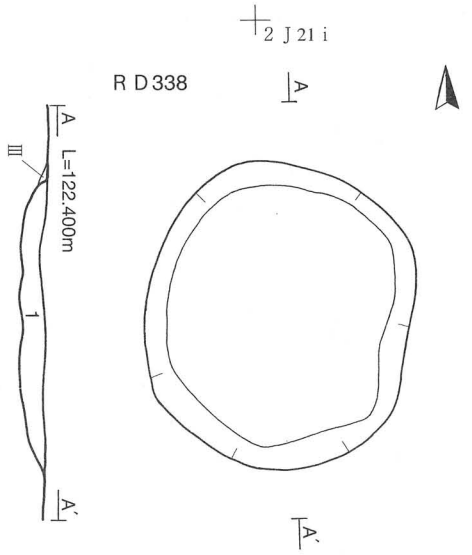
<重複>北西側ＲＤ360土坑と重複。検出面では新旧関係が掴めなかったが、通して半裁した結果、境界付近の土が比較的わかりやすかったので、ＲＤ359土坑の方が新しいとわかった。東半分がカクランによって大きく壊されている。ただし、検出時に予想していたのより深く入っているところは少なく、若干東側に土坑の範囲が広がった。
<図・精査状況>合っている。
<埋土>上部、下部黒土、中央部焼土。
<平面形・規模>長さ240㎝程度の隅丸長方形か（幅は不明）。今回検出された土坑の中では最大級（二番目はＲＤ351土坑）。
<断面形・深さ>約25㎝。断面形は不明だが、確認できた範囲は不整形。
<壁・底>両方とも砂～シルト質Ⅳ層だが、一部黒土中に底があるか。両方とも火を受けてはっきり焼けている（黒土のところも）。底は、凹凸がある。
<特記事項>上述のように、壁～底が焼けている。
<出土遺物>（出土状況）底中央の直上から土器出土（第28図No.１）。南西から北東に向かって傾斜しており、底からの高さは南西側17、北東側７㎝。２層中部の出土か。本土坑土器出土総量890.3ｇに、ＲＤ360土坑とどちらに帰属するかわからない土器出土総量107.2ｇが加わるか。同定可能な炭化材は、アオダモと同定された。（掲載遺物）上記No.遺物は掲載基準を満たさなかったらしく、ＲＤ360土坑とどちらに帰属するのか不明な第33図129、130の土師器しか掲載されていない。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

ＲＤ360土坑（第28図、写真図版31）
<位置・検出状況>調査区中央北端。１Ｊ25ａグリッド。Ⅲ層下部～Ⅳ層上面、黒土ではっきり検出。周囲に根穴等の疑似現象多かったが、明らかに異なり、輪郭は明瞭だった。
<重複>南東側ＲＤ359土坑と重複。検出面では新旧関係が掴めなかったが、通して半裁した結果、境界付近の土が比較的わかりやすかったので、ＲＤ359土坑の方が新しいとわかった。北東側カクラン（根）によって大きく壊されている。
<図・精査状況>合っている。
<埋土>６層はカクランなので、単層か。
<平面形・規模>長さ110㎝程度の隅丸長方形か（幅は不明）。
<断面形・深さ>約30㎝。
<壁・底>両方とも砂～シルト質Ⅳ層。底は、凹凸がある。
<出土遺物>ＲＤ359土坑とどちらに帰属するのか不明な第33図129、130の土師器だけである。土器出土総量107.2ｇか。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。

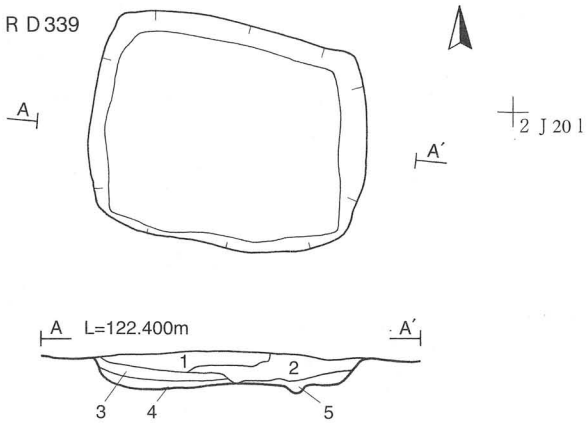
ＲＤ361土坑（第28図・第33図、写真図版31）
<位置・検出状況>調査区中央北端。２Ｉ１ｙグリッド。Ⅳ層上面で、ＲＡ157住居跡検出時に確認。検出面の埋土が黄色い粒々の入る特徴的なものだったため、明瞭に検出。
<重複>西側ＲＡ157住居跡と重複。上述の特徴的な埋土で、ＲＡ157住居埋土中に明瞭にプランを検出（本土坑の方が新しい）。
<図・精査状況>合っている。平面図の白抜きの不整円は、焼土か炭化物だが、注記がなくて不明。

<埋土>複雑である。最下部（５層）褐色土の混じる埋め戻した土？、下部（４層）黒褐色土、中部(3層）炭化物を含む特徴的な土、上部（２層）褐色土の混じる埋め戻した土？　１層はカクラン。
<平面形・規模>128×108㎝程度の小判型から隅丸長方形。
<断面形・深さ>約26㎝。断面形は不整形。
<壁・底>西半分はＲＡ157住居埋土、東半分はシルト質のⅣ層。焼土が４層上面に形成されていることを考えると、４層上面が使用面で、その下は掘り方埋土ということになるか。
<特記事項>上述のように、西側４層上面～東側底面が火を受け、東側は所々焼土を形成している。焼土の厚さは、東側の一部で最大厚２㎝くらいである。焼土が面的に形成されていないのは、西半分が黒土であるためと考えられる。焼土の周辺から、炭化物や土器片が出土している。ただし、３層中の炭は、後の混入か。
<出土遺物>（出土状況）焼土の周囲から、土器片が出土。No.１は、土師器小甕で、内面上に横倒しの状態で出土。No.２は、礫石器で、底４層中？から出土。No.３は、３層か４層の出土。土器出土総量610ｇ。同定可能な炭化材は、サワグルミと同定された。（掲載遺物）第33図131の土師器、第33図11の石器（磨石）を掲載。No.３は、掲載基準を満たさなかったようである
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性が高い。

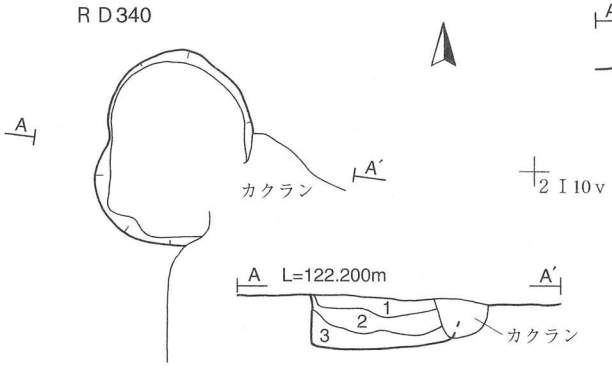
ＲＤ362土坑（第28・33図、写真図版31）
<位置・検出状況>調査区中央北西。２Ｉ２ｖグリッド。Ⅳ層上面で、ＲＡ157住居跡検出時に確認したが、後述のように、この時点では土坑と認識していなかった。ＲＡ157住居精査後に、この“張り出し部”の底面に焼土が見え、今回の調査の他土坑の調査例との類似することから、この“張り出し部”もやはり土坑なのではないかと思うに至った。深さから考えて、大きく削平されていると思われる。
<重複>北側、ＲＡ157住居跡と重複。周囲が根で壊されていたこともあって、最初は土坑と考えてなかった。住居検出時に、住居プラン外側に黒褐色土が張り出しているように見えたが、この時点では、ＲＤ361土坑の調査例から、住居と重複する土坑は住居より新しく、ＲＤ361土坑の特徴的なあり方から土坑は墓で、埋土中に掘り込むのはおそらくその住居の縁者の墓のためではないかとの見通しを持っていたため、どう見ても住居プランの内側まで埋土が広がらない“張り出し”は、プランが異様に四角く見えたこともあり、住居に伴う棚状施設なのではないかと考えた。偏った見方によって確認がおろそかになった感は否めないが、もし、その通りなら、ＲＤ362土坑の方が古い可能性がある。東側、住居壁の崩れにより、土坑も一部壊されている。南側、根によるカクランにより壊されている。
<図・精査状況>合っている。
<埋土>大きく二つに大別され、下部はⅣ層の汚れ再堆積、上部は黒褐色土。焼土が検出されたが、ブロック状で、下に黒土と炭化物が認められたことから、現地性かどうかは疑問である。
<平面形・規模>長さ100㎝程度の小判型か（幅は不明）。
<断面形・深さ>約10㎝。
<壁・底>北半分はＲＡ157住居に壊されている。南半分は、砂質Ⅳ層。
<特記事項>上述のように、床直上に焼土が認められたが、現地性かどうかわからない。
<出土遺物>第33図132の土師器小片が出土した。土器出土総量4.4ｇ。
<時期>出土遺物と今回の調査結果全体から、平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）の可能性がある。



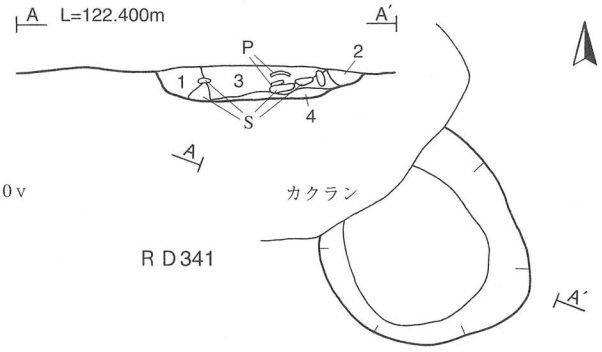
1：10YR2/1　黒色　シルト　砂質Ⅳ層の粒子、ブロック含む。



1：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の斑　シルト
　　砂質Ⅳ層の粒子、ブロック含む。
2：10YR2/1　黒色　シルト
3：10YR7/1　灰白色　砂　火山灰。
4：10YR3/2　黒褐色　砂？　もろい。砂Ⅳ層の汚れ再堆積。
5：10YR4/3　にぶい褐色　シルト　砂質Ⅳ層の汚れ再堆積。

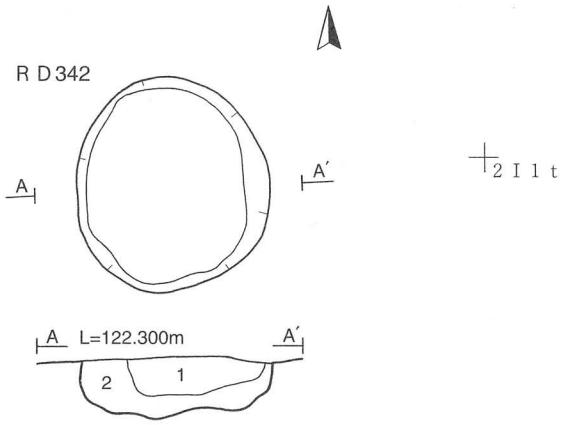


1：10YR2/1　黒色　シルト
2：10YR2/1　黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒　シルト
　　Ⅳ層粒子多く含む。
3：10YR1.7/1　黒色　シルト　下部を中心にⅣ層ブロック含む。

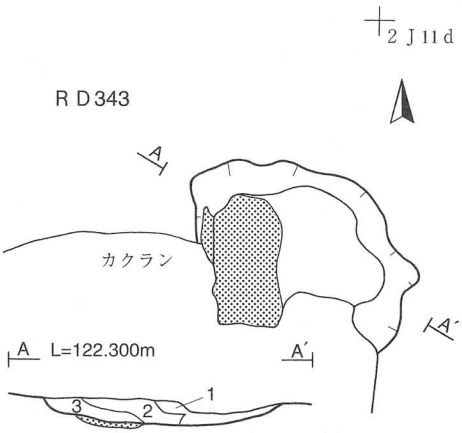


1：カクラン
2：10YR4/2　灰黄褐色　シルト　汚れⅣ層再堆積。
3：10YR2/1　黒色　シルト　土器、礫含む。
4：10YR3/2　黒褐色　粘土質シルト　もろい。Ⅳ層再堆積土含む。

2 I 9 t



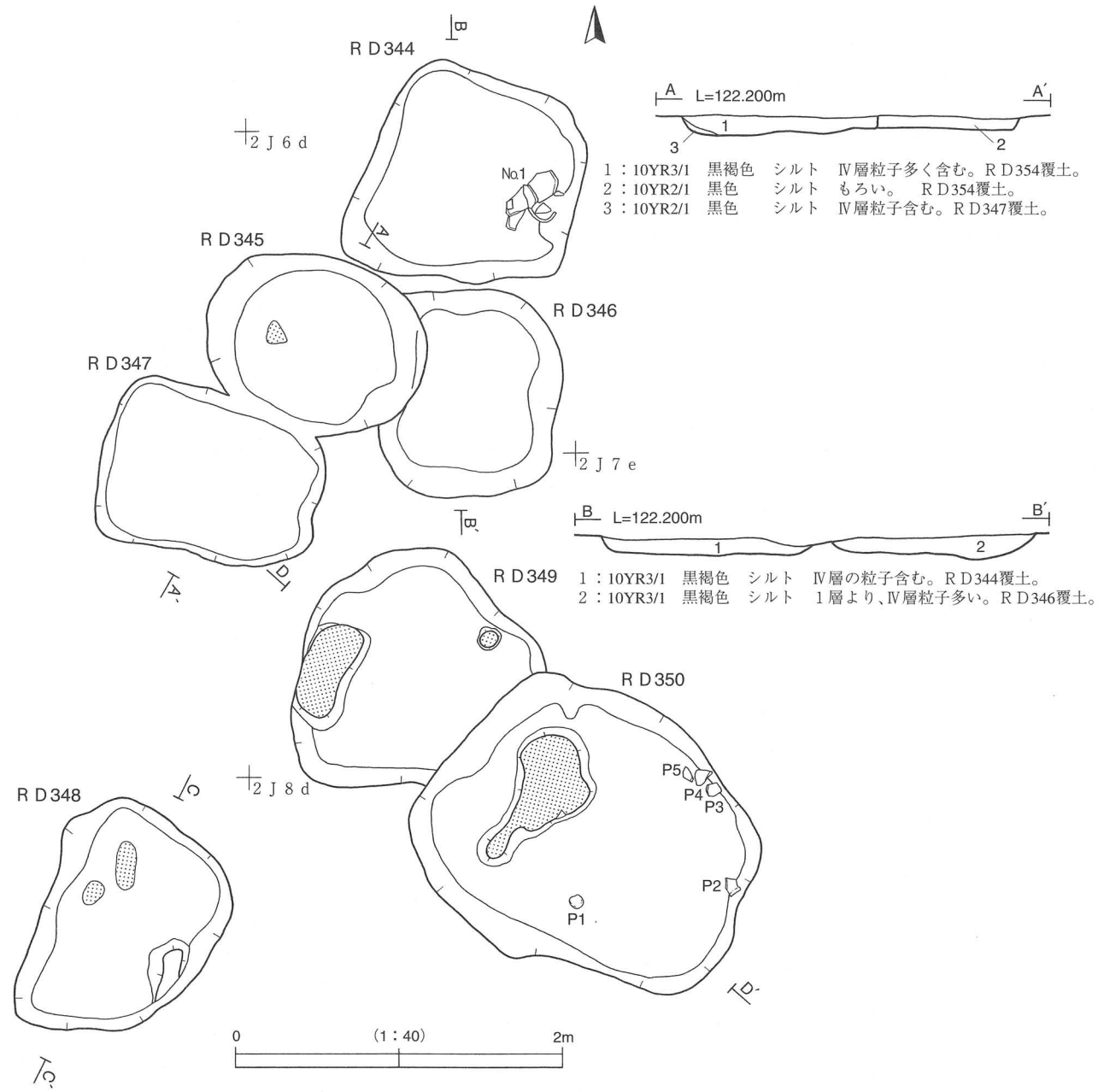
1：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。Ⅳ層粒子、ブロック僅かに含む。
　　夾雑物が少ないのか墨のような一様な印象。
2：10YR2/1　黒色地に細かい10YR5/6黄褐色の粒　シルト　粘性強い。
　　Ⅳ層粒子、ブロック多く含む。根多くボソボソした土

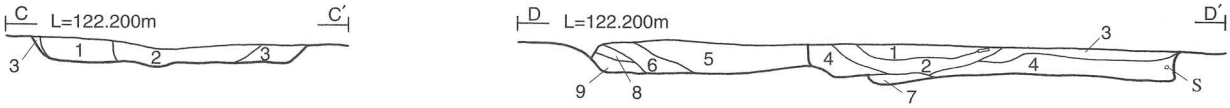


1：カクラン（耕作時）
2：10YR3/1　黒褐色地に霜降り状に10YR5/6黄褐色混じる
　　シルト　Ⅳ層粒子多く、炭化物含む。埋め戻した土か。
3：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子、焼土粒含む。

0　(1：40)　2m

第24図　土坑（1）　RD338～RD343

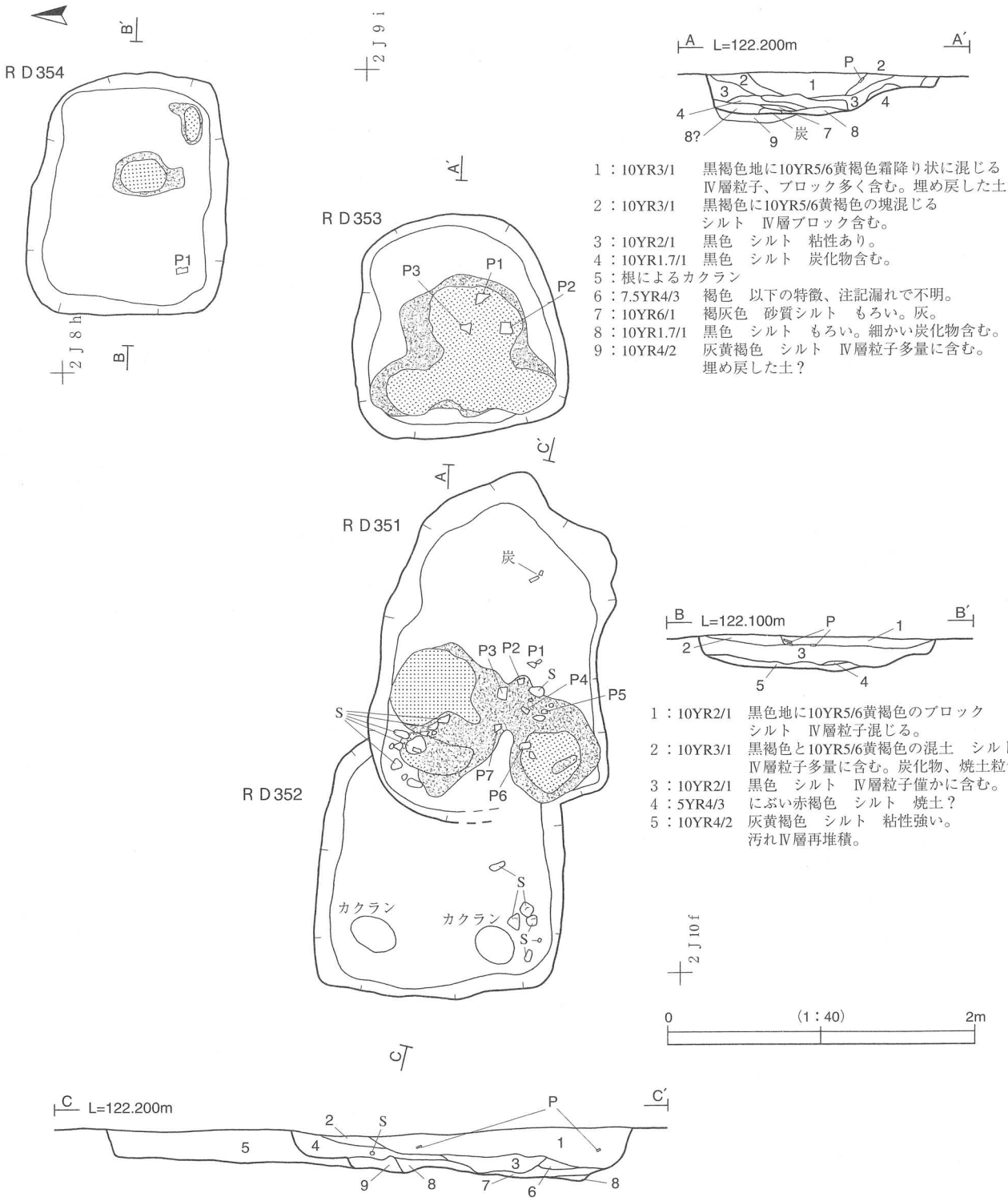




1：木根によるカクラン
2：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。
3：10YR3/3　暗褐色　シルト　Ⅳ層汚れ再堆積。

1：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子含む。R D350覆土。
2：10YR3/2　黒褐色　シルト　灰、焼土粒多量に含む。R D350覆土。
3：10YR3/1　黒褐色　シルト　1層よりⅣ層粒子やや多く含む。R D350覆土。
4：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。根によるカクランあり。R D350覆土。
5：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。4層よりⅣ層粒子多い。R D349覆土。
6：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性強い。焼土粒含む。R D349覆土。
7：5YR4/3　にぶい赤褐色　シルト　焼土粒だが、周囲に灰含む。
8：7.5YR4/1　褐灰色　シルト　焼土粒多く、焼土ブロック含む。投げ込み焼土らしい。
9：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。灰、炭化物含む。

第25図 土坑（2）　RD344～RD350

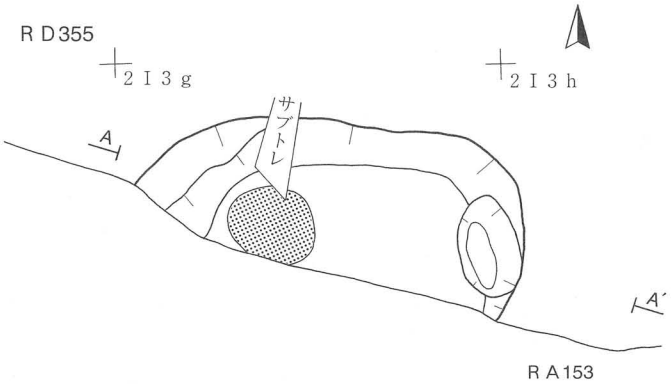


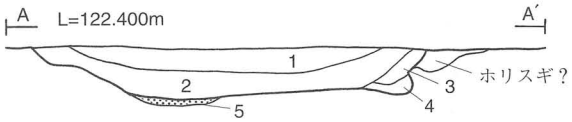
1：10YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色霜降り状に混じる　シルト
Ⅳ層粒子、ブロック多く含む。埋め戻した土であろう。
2：10YR3/1　黒褐色に10YR5/6黄褐色の塊混じる
シルト　Ⅳ層ブロック含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　粘性あり。
4：10YR1.7/1　黒色　シルト　炭化物含む。
5：根によるカクラン
6：7.5YR4/3　褐色　以下の特徴、注記漏れで不明。
7：10YR6/1　褐灰色　砂質シルト　もろい。灰。
8：10YR1.7/1　黒色　シルト　もろい。細かい炭化物含む。
9：10YR4/2　灰黄褐色　シルト　Ⅳ層粒子多量に含む。
埋め戻した土？

1：10YR2/1　黒色地に10YR5/6黄褐色のブロック
シルト　Ⅳ層粒子混じる。
2：10YR3/1　黒褐色と10YR5/6黄褐色の混土　シルト
Ⅳ層粒子多量に含む。炭化物、焼土粒含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子僅かに含む。
4：5YR4/3　にぶい赤褐色　シルト　焼土？
5：10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性強い。
汚れⅣ層再堆積。

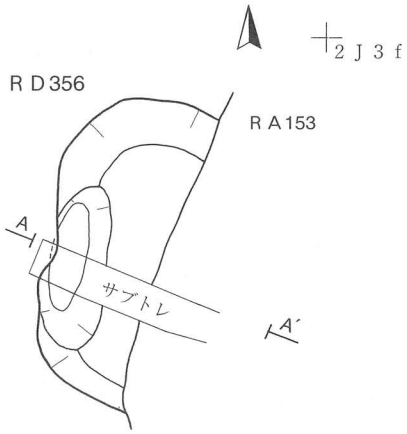
1：10YR2/1　黒色地に10YR5/6黄褐色の塊　シルト
拳大のⅣ層ブロック含む。埋め戻した土か。
2：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性あり。焼土粒、灰含む。
3：7.5YR3/1　黒褐色地に10YR5/6黄褐色の塊　シルト　粘性あり。
上面に炭化物含む。Ⅳ層粒子多い。
4：7.5YR2/1　黒色　シルト　もろい。上面を中心に灰？面的に広がる。
Ⅳ層粒子、炭化物含む。
5：10YR3/1　黒褐色に10YR5/6黄褐色霜降り状に混じる。
シルト　多量のⅣ層粒子含む。炭化物含む。
埋め戻した土であろう。ＲＤ352覆土。
6：10YR5/6　黄褐色　粘土質シルト　硬く締まる。Ⅳ層ブロック。
7：10YR3/1　黒褐色　シルト　下部に焼土粒、炭化物含む。
8：10YR5/6　黄褐色と10YR3/1黒褐色の混土
粘土質シルト　埋め戻した土？
9：10YR4/1　褐灰色　シルト　ややもろい。灰、炭化物含む。

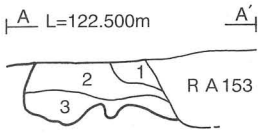
第26図 土坑（３）　RD351～RD354



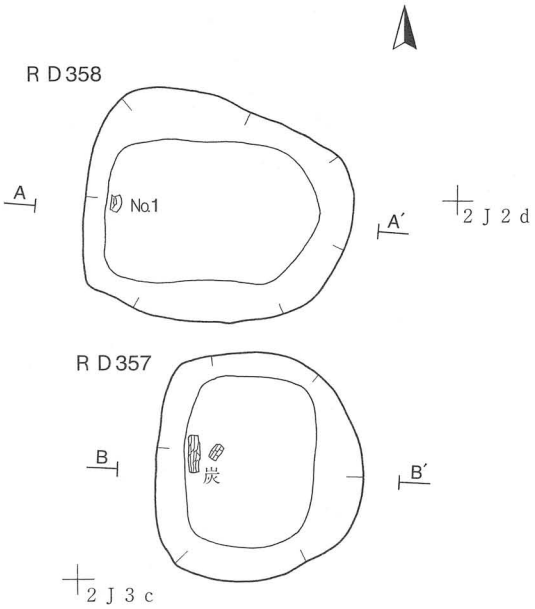


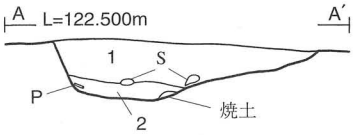
1：10YR2/1　黒色　　シルト　粘性やや強　しまりややあり。
2：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや強　しまりややあり
　　地山の小ブロックをわずかに含む。
3：10YR2/1　黒色　　シルト　粘性やや強　しまりややあり　1層に似る。
4：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性強　　しまりややあり　2層に似る。
5：5YR4/6　赤褐色　シルト　燃焼部焼土。



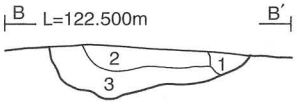


1：10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまりややあり
　　褐色土粒（φ1mm）を5％含む。
2：10YR2/1　黒色　　シルト　粘性中　しまりややあり
　　褐色土ブロックを斑状に5％含む。
3：10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中　しまりややあり
　　褐色土を10％含む。

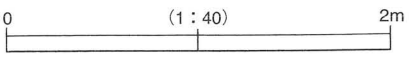




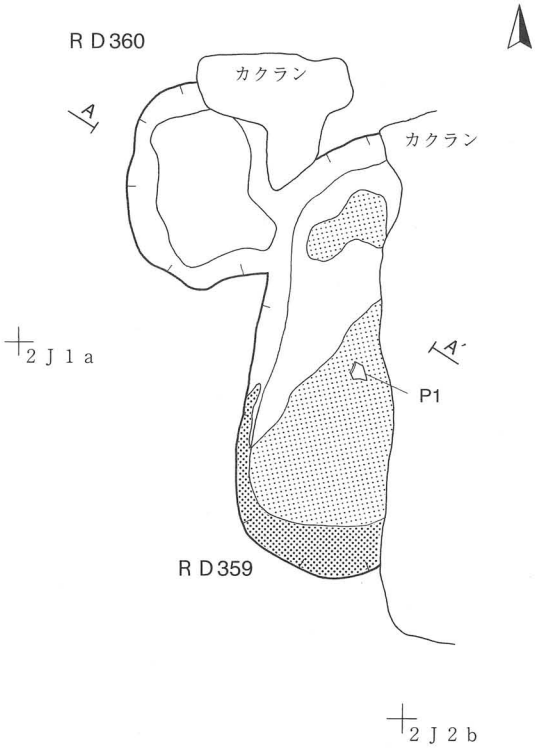
1：10YR3/1　黒褐色　シルト
　　Ⅳ層ブロック僅かに含み、Ⅳ層粒子含む。
2：10YR2/1　黒色　　シルト　炭化物、焼土粒含む。

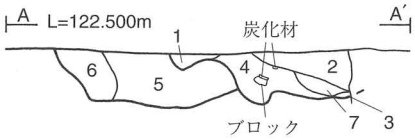


1：カクラン
2：10YR2/1　黒色　　シルト
3：10YR3/1　黒褐色　シルト　硬く締まる。
　　Ⅳ層粒子多く、炭化物含む。

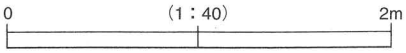


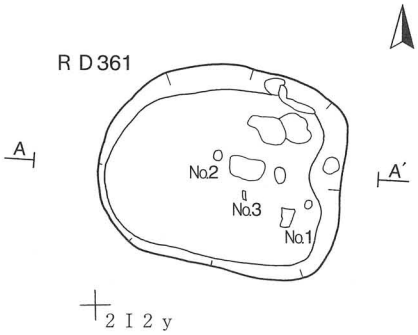
第27図　土坑（4）　RD355～RD358

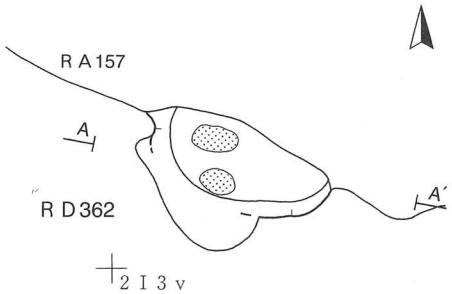


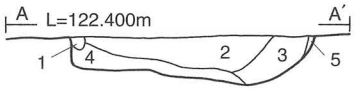


1：10YR2/1　黒色　シルト　細かいⅣ層粒子散る。ＲＤ359覆土。
2：7.5YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子含む。ＲＤ359覆土。
3：7.5YR3/2　黒褐色　シルト　焼土？
4：10YR2/1　黒色　シルト　ＲＤ359覆土。
5：10YR1.7/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子含む。ＲＤ360覆土。
6：カクラン
7：焼土

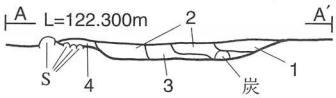






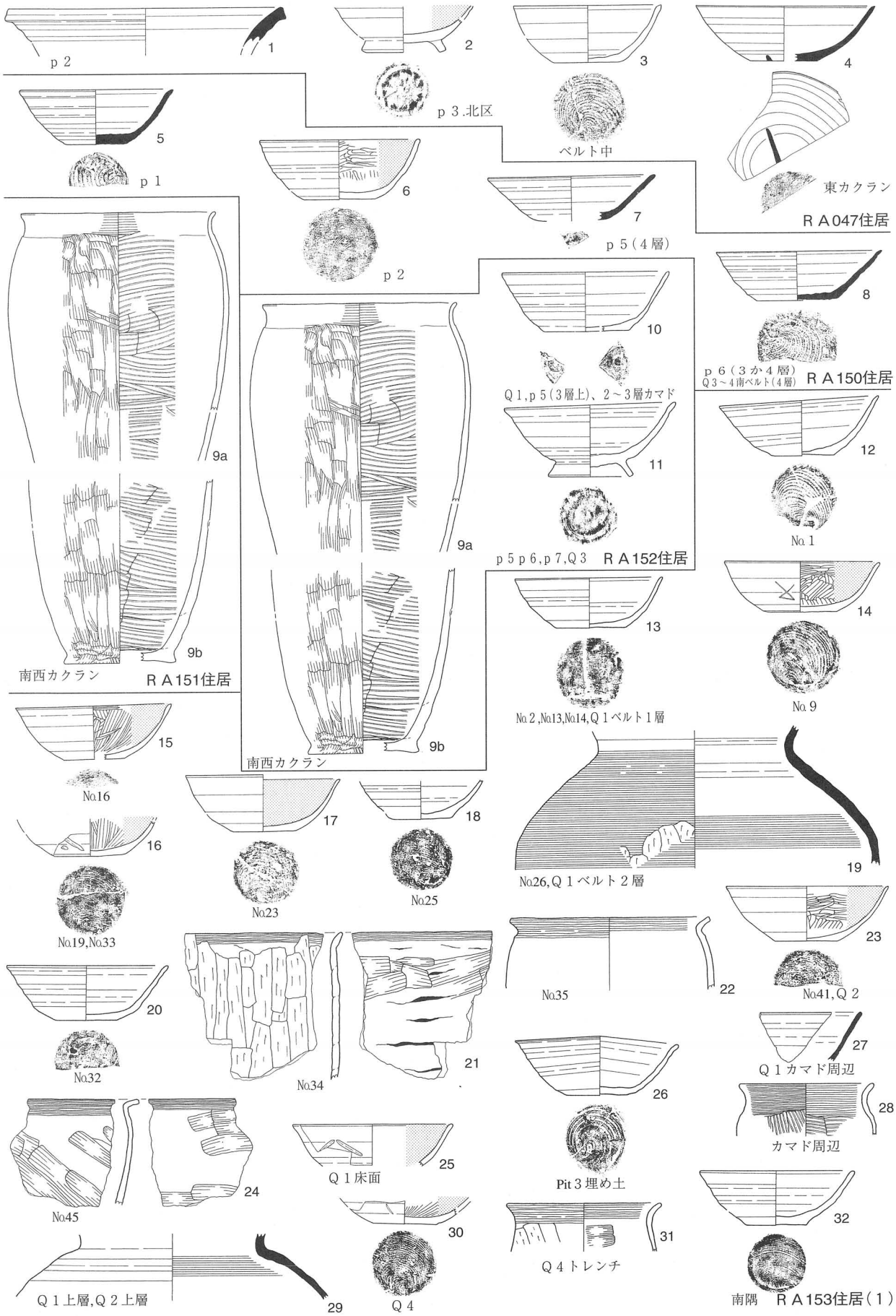


1：カクラン
2：10YR3/1　黒褐色地に10YR4/4褐色の斑が散る。シルト
　　1mm～2cm大のⅣ層ブロック多く、同じくらいの
　　大きさの炭化物含む。
3：10YR2/1　黒色　シルト　1cm大の炭化物比較的多く含む。
4：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性強い。
5：10YR3/1　黒褐色と10YR4/4褐色が霜降り状に混じり合う。
　　粘土質シルト　粘性あり。埋め戻し土か。

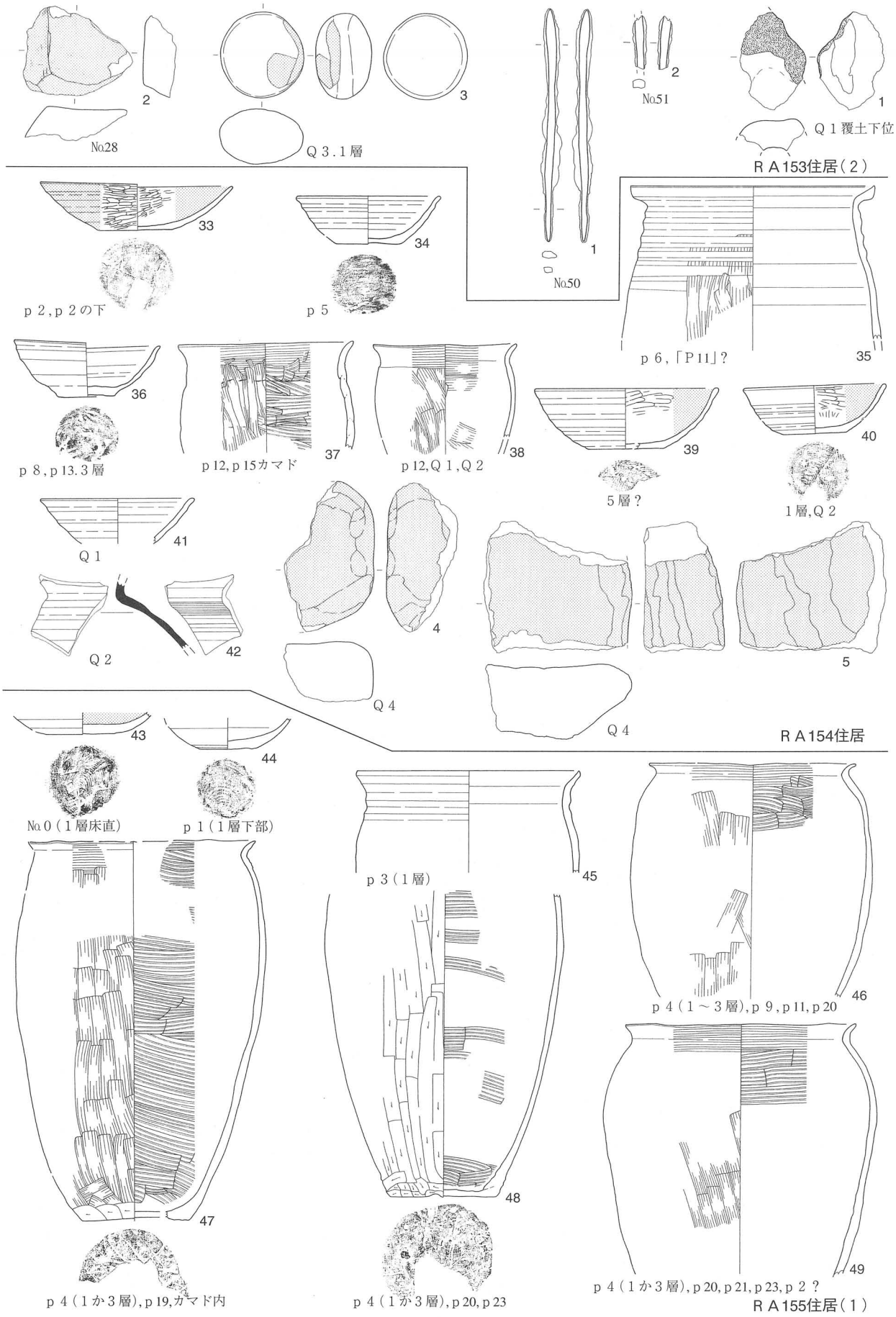


1：10YR3/1　黒褐色　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
2：10YR2/1　黒色　シルト　Ⅳ層粒子多く含む。
　　1層が根によって黒くなったものと思われる。
3：10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性あり。Ⅳ層汚れ再堆積。
4：10YR2/1　黒色　シルト　粘性強い。住居の崩れ。

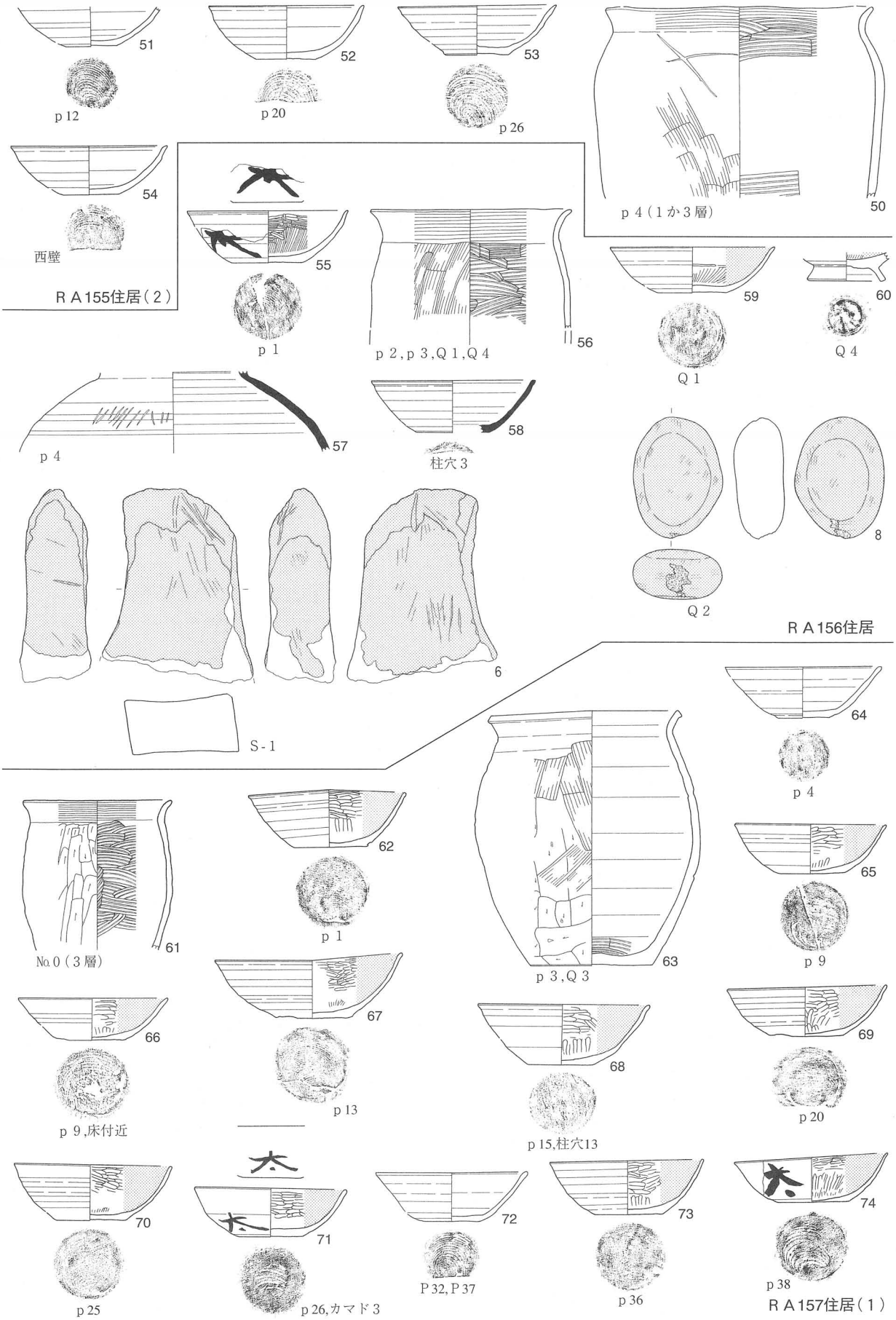
第28図　土坑（5）　RD359～RD362



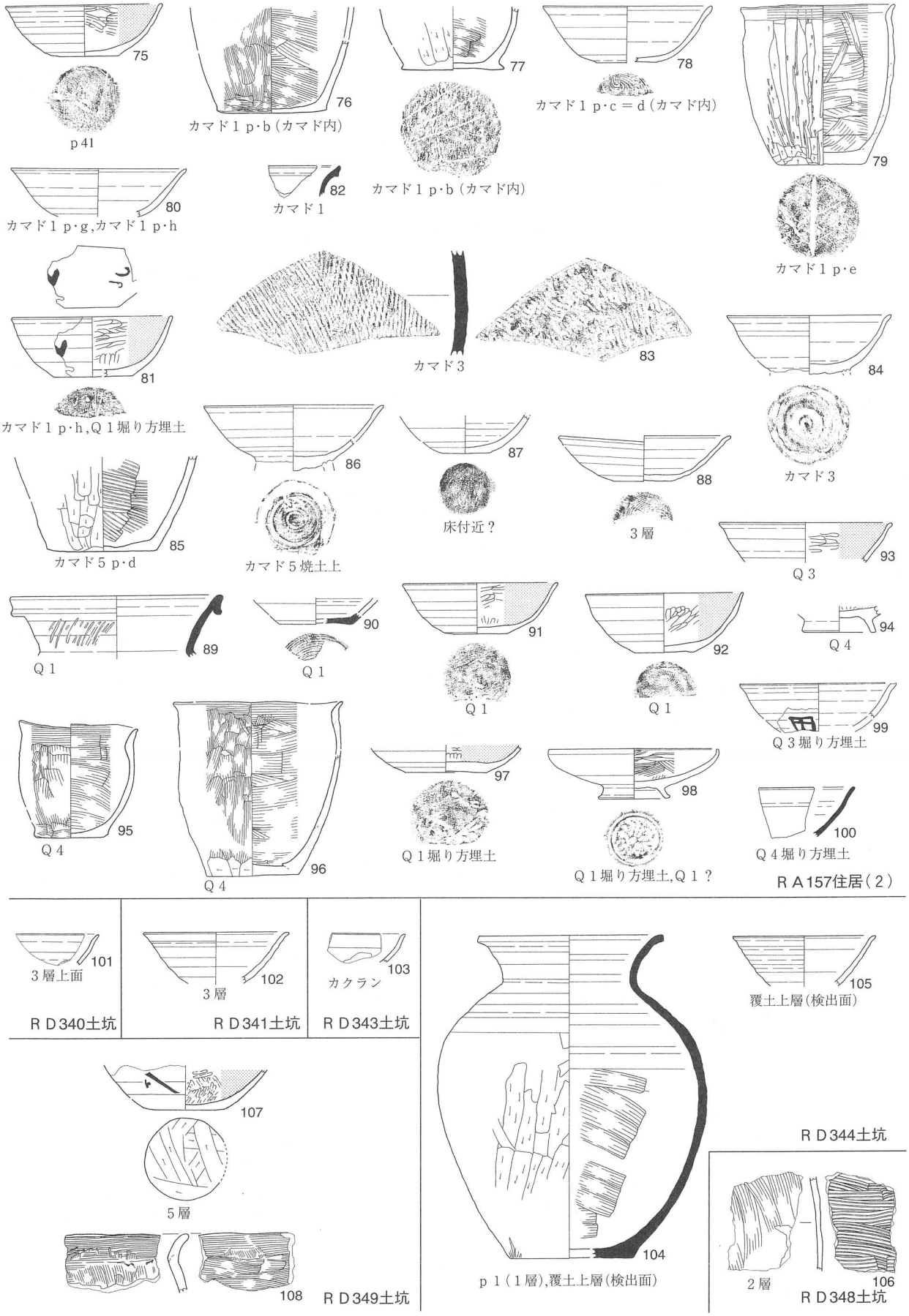
第29図　RA047住居・RA150～153住居出土遺物（1/5）



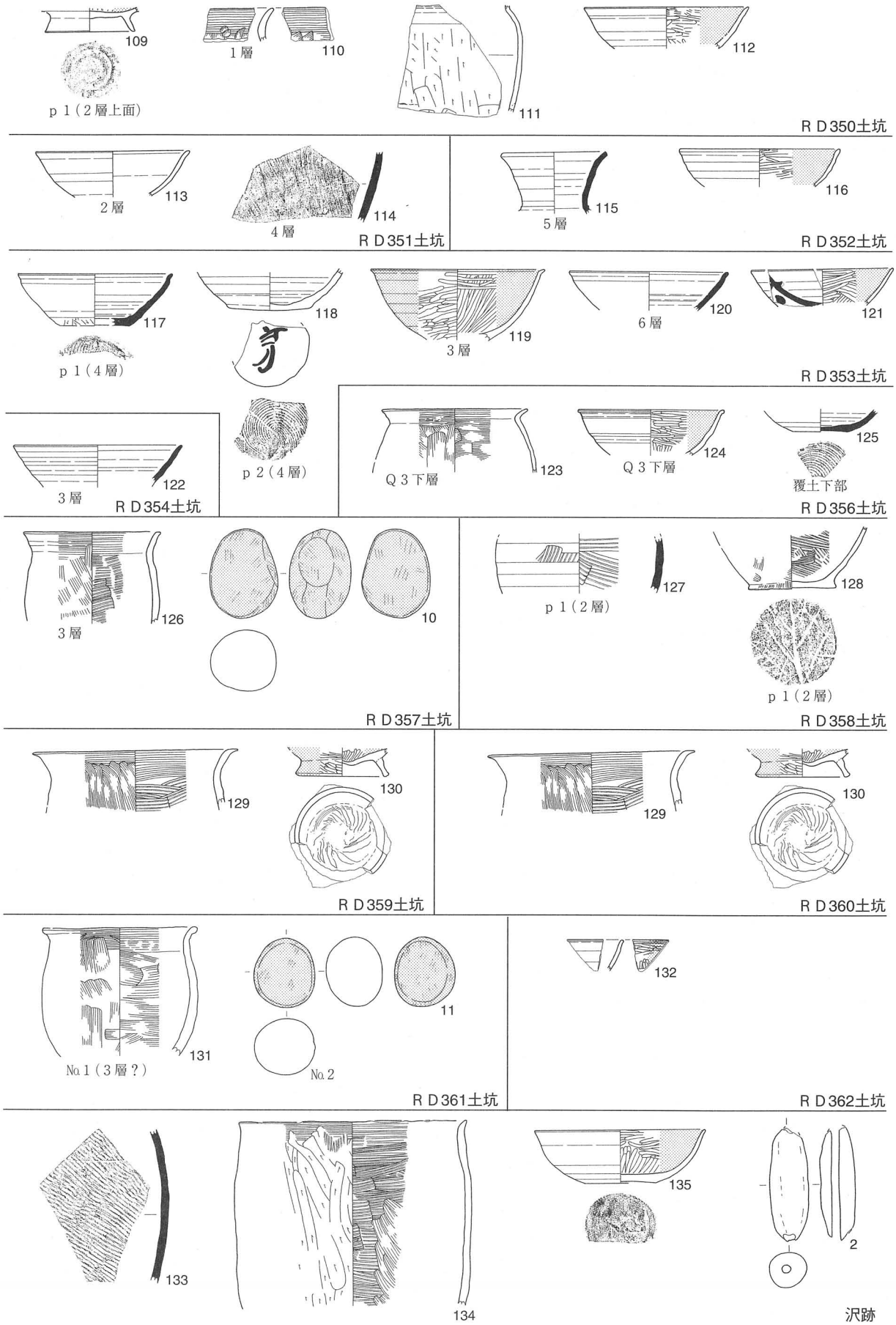
第30図　RA153～155住居出土遺物（土器、石器1/5、鉄製品1/3）



第31図　RA155～157住居出土遺物（1/5）



第32図　RA157住居、RD340、341、343、344、348、349土坑出土遺物（1/5）



第33図　RD350～354、356～362　　土坑、沢跡出土遺物（土器、石器1/5、土製品1/3）

Ⅴ 遺　　物

今回の調査で、土師器・須恵器大コンテナ（32×42×30㎝）約９箱、石器11点（砥石７、磨石４）、土製品２点（羽口、土錘）、鉄製品２点（鏃）、琥珀１点が出土した。

本章では、遺構出土の遺物も含めているが、それぞれ、その種類の遺物の中で冒頭に掲げている。遺構出土品は、第Ⅳ章の後に遺構ごとの集成図を掲げているので参照していただきたい（第29～33図）。遺物は基本的に表で記載しているが、出土位置の欄の住居の後のＱ１～４は、住居を４等分した区画を意味し、土層ベルトを基準に、北西区画が１、北東が２、南西が３、南東が４になる。

なお、自然遺物については、第５節参照。

１　土師器・須恵器（第34～35図、写真図版32～37）

大コンテナ（32×42×30㎝）約９箱出土し、81,366.3㎏出土した。その内訳は、竪穴住居跡から66,301.9ｇ、土坑10,087.5ｇ、遺構外は沢跡3,881.3ｇを含めて4,976.9ｇとなる。

竪穴住居跡は、ＲＡ157住居跡が圧倒的に多く、28,872.7ｇ、次いでＲＡ153住居跡の17,659.3ｇ、その後がＲＡ155住居跡の8,639.5ｇ、ＲＡ154住居跡の5,369.6ｇ、ＲＡ156住居跡の2,866.1ｇ、ＲＡ047住居跡の1,052.8ｇと続き、残りの住居跡は1,000ｇに満たない。ＲＡ157、153住居跡を除けば、一般的な出土量より少ないと思われる。

土坑出土土器は、ＲＤ344土坑が最も多く2,359.8ｇ、次いでＲＤ356土坑1,251.1ｇ、ＲＤ350土坑1,208.7ｇ、ＲＤ351土坑1,157.1ｇで、他は1,000ｇに満たない。

掲載基準。土師器は、原則として器形が復元できるもの（1/4周以上）としたが、出土遺物が少ない遺構や地点では、復元できない口縁部破片なども掲載した。須恵器は、拓本が使えるので破片でも掲載したが、胴部破片で、その遺構内に他に同様の掲載破片がある場合と遺構外の場合は、原則として不掲載とした。このような基準なので、現地でNo.遺物として取り上げているものにも、不掲載品がある。また、今回は整理期間が短かったこともあり、採用基準は厳しく、甕は下半部だけのものはほぼ一周していなければ採用しなかった。竪穴住居跡出土土器は、出土量の割に掲載量がかなり少ないことをお詫びする（沢跡からも比較的多く出土したが、細片が多く、元々掲載基準に合わないものが多かった）。調整痕の書き込みも、同様の理由で1/8周ずつに限った。接合作業も、同様に大幅に短縮した。作業員約１～２名と日々雇用作業員が約２週間行った。原則として同じ袋、同じ遺構、同じグリッドの中でのみ試み、遺構間や異なるグリッドの間での接合は行っていない。また、日々雇用の作業員はほとんどが初心者のため、まだ接合する可能性を残していると思われる。

時期。ほとんどが９世紀中～10世紀初頭前後に位置づけられ、明らかにこの時期を逸脱するものは認められないようである。

今回の出土品の型式学的特徴。ヘラケズリ然としたものは少なく、調整“効果”としてはナデ的である（中に線状痕あり、単位の境界が面をなさない）。甕の外面調整は、口縁部がヨコナデ、胴部は、屈曲部より下はヘラケズリ（あるいは調整効果はナデ）、上は指なで状のものが多い。内面黒色処理の調整痕跡の多くは、全体としては細いが中に線状痕が認められ、ミガキかナデか不明瞭である。“焼けはじけ”状に器表面に細かな穴が多数見られる場合があるが、これはネズミがかじった跡か。変わった器形として、43（底が作り出されていない、皿状）、98（外面もミガキ）、131（厚い）、119（内外両側ミガキ）。墨書土器は多く（右以外に４、81、99、107、118）、中でも「大」は複数認めら

れた（71、74。55、121も？）。第45図118は、回転糸切痕の上に墨書している。刻書土器も認められた（14）。

表の見方。残存状況の欄の略号。内外面の調整の欄。“→”は、調整の順序を示す。調整は、工具よりも“効果”に重きを置いて表現していることをお断りしておく。

以下、表の補足。6の外面、回転糸切で切り離して後、底部底から1㎝ほどの高さも含めて回転ヘラケズリ調整。

9aとbは、同一個体で、9aの出土割合、RA151住：RA152住＝34：1で、9bも合わせると42：1となる。内面下部黒いのはコゲか。

10は、注記ミスで出土割合がはっきりしないが、ほぼ同じ程度で、p.5で取り上げたものが多め。

11の出土割合、p.5が10、p.6が6、p.7が5、Q3が4。

12の出土割合、p.2が3、p.13が6、p.14が4、Q1ベルト1層が1。外面底、回転糸切の後調整しているように見える。

18の底厚い。

23は、Q2で取り上げた破片の方が顕著に残りが悪く、内面の焼けはじけひどい（ネズミがかじった跡か）。外面も黒色処理しているか。外側底、ヘラケズリで調整しているようだ。

28の口縁内面最上部1㎝程度の幅、黒い。32、やや摩耗。

46の出土割合は、p.4が11、p.9が2、p.11が5、p.20が9。外面調整、ヘラナデ状のところもあるが、大体指なで風。内面、ハケメはっきりしないところが目立つが、ナデているためか。破片によって色調異なり、割れてから二次焼成受けているためか。

47の出土割合、p.4が22、p.19が2、カマド内が1。外面上部、二次焼成？で赤い。

48の出土割合、p.4が2、p.20が1、p.23が1で、p.4とそれ以外は、内面の色調異なる。

49の出土割合、p.4が13、p.20が5、p.21が6、p.23が2、p.2？が1、Q2が1。外面調整、下部はケズリっぽいところあるが全体としてはナデの印象で、特に肩より上は指なでっぽい。内面ハケメが見えないところはナデているためか。

50の内面、ハケメが見えないところはナデているためか。52の内面、黒色処理？

56の出土割合、p.2が9、p.3が11、Q1が2、Q4が3。形歪んでおり、上から見ると口は楕円形を呈す。

63、二次焼成のためか、調整飛んでしまってわからない。全体オレンジ色。

64の外面、表面の凹みを粘土足して埋めているのが分かる（雑）。オレンジ色。

65は、タール状付着物が外面口縁にも見られる。外面底、回転糸切の後、回転ヘラケズリ調整か。

66は、底が薄すぎて穴が開いてしまっている。

71の外面底、一部糸切状の痕跡が認められるが、全体としては滑らかで一部光沢が見られる。しかし、比較的大きな石？が抜け落ちた後が表面に認められる。胎土に金雲母目立つ気がする。

74は、欠損部以外割れていない。底薄い。外面底、回転糸切→回転ヘラケズリ。

79は、口縁から底に欠けて稲光状にひび割れているが、完形である。内面、胴部は表面薄く剥落しているため調整不明（口縁、底は除く）。輪積痕少ししか見えない。内面口縁直下に黒い付着物。

96の外面下半、二次焼成で赤～白い。外面底、調整すごく平滑。内面調整、ハケメはっきりしないところはナデているためか（滑らか）。屈曲部などにはハケメはっきり見える。同じ工具による当たり方の違いか。

104は、注記二つに分かれているが、同じ場所から出土したものであろう。

128の外面、底部付近は縦方向のヘラケズリ痕跡が認められる。その上は剥落して見えないが、滑らかである。

135は、内外酸化鉄？付着。64と同様、表面の凹みを粘土足して埋めている。

参考文献

八木　光則　1993「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」『第18回古代城柵官衙検討会　特集シンポジウム北日本における律令期の土器様相』同青森大会事務局（青森県埋文センター）（1992年開催のシンポジウム結果をまとめたもの）

2　石　　器（第48～49図、写真図版38～39、観察表は写真図版の方にある）

11点出土し、全点掲載した。その出土位置から、ほとんどが平安時代に帰属するものと思われる。器種は、砥石と磨石しかない。

砥石は７点出土し、２が白色凝灰岩で、他は溶岩である。古代以降の砥石としてしばしば使われる白色凝灰岩は入手しがたいために（一遺跡で３点以上出土することは少ない）、溶岩で代用したものと思われる。

磨石は４点出土し、中には先端に凹みを持つものもあり（第49図８）、縄文時代の磨敲器類と全く変わらない。これらを必要とする生業が、この時代まで持続していた可能性が高い。

3　土　製　品（第47図、写真図版39）

フイゴ羽口１点、土錘１点出土し、全点掲載した。フイゴ羽口が出土したＲＡ153住居跡は、その他にも、今回唯一出土した白色凝灰岩の砥石、今回唯一出土した鉄製品（鏃）２点と、鉄関係の遺物が目立つ。

4　鉄　製　品（第47図、写真図版39）

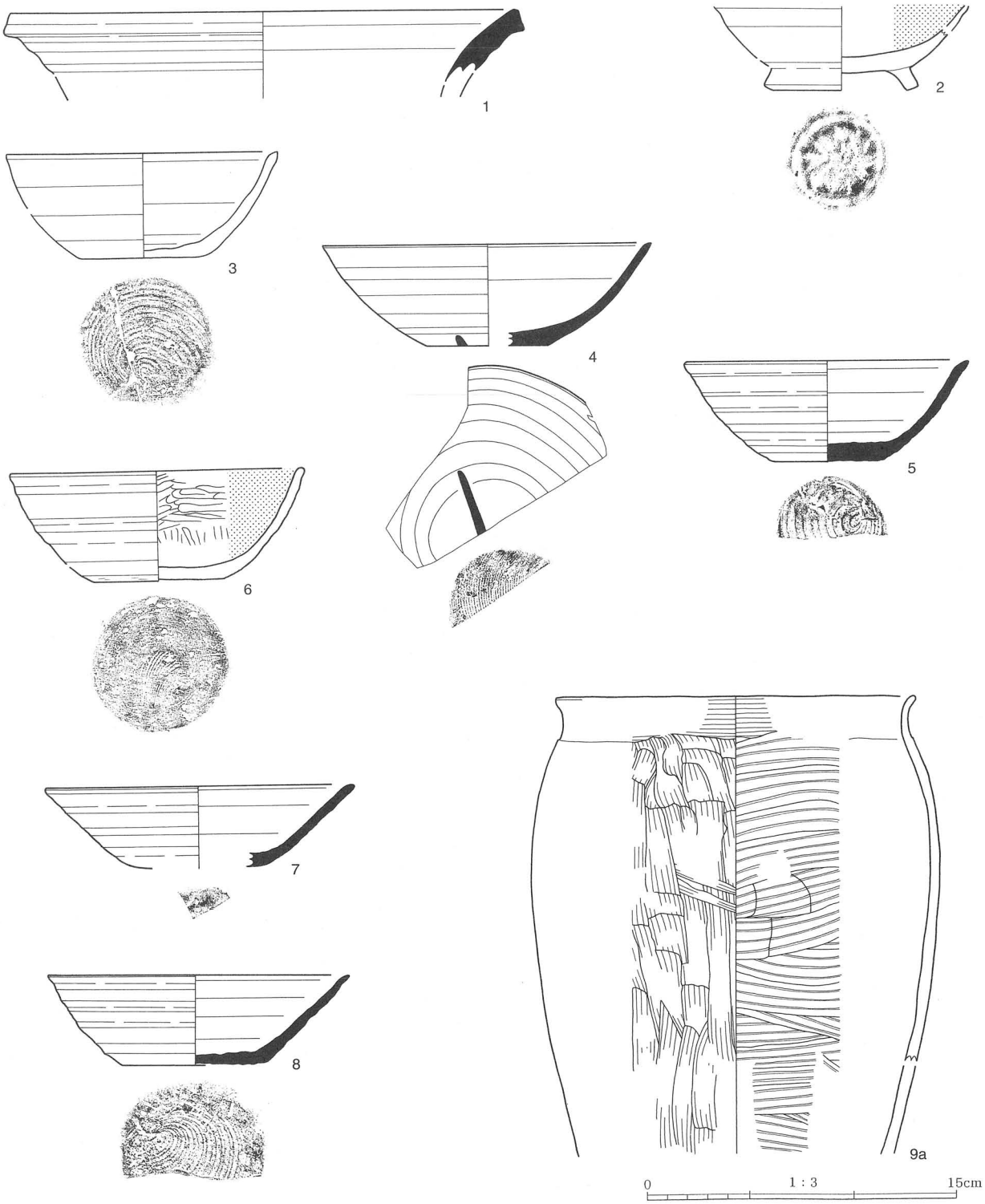
該期の集落跡にしては非常に少なく、２点のみの出土である。どちらも鏃で、どちらもＲＡ153住居跡の出土である。全て掲載した。ＲＡ153住居跡は、その他にも、今回唯一出土した白色凝灰岩の砥石、今回唯一出土したフイゴ羽口と、鉄関係の遺物が目立つ。

5　琥珀、その他自然遺物（写真図版39）

琥珀が１点、ＲＡ047住居跡から出土している。取り上げ後欠損してしまったが、加工痕はなかったと記憶する。精査作業中に取り上げられてしまったので、残念ながら詳しい出土位置は不明である。

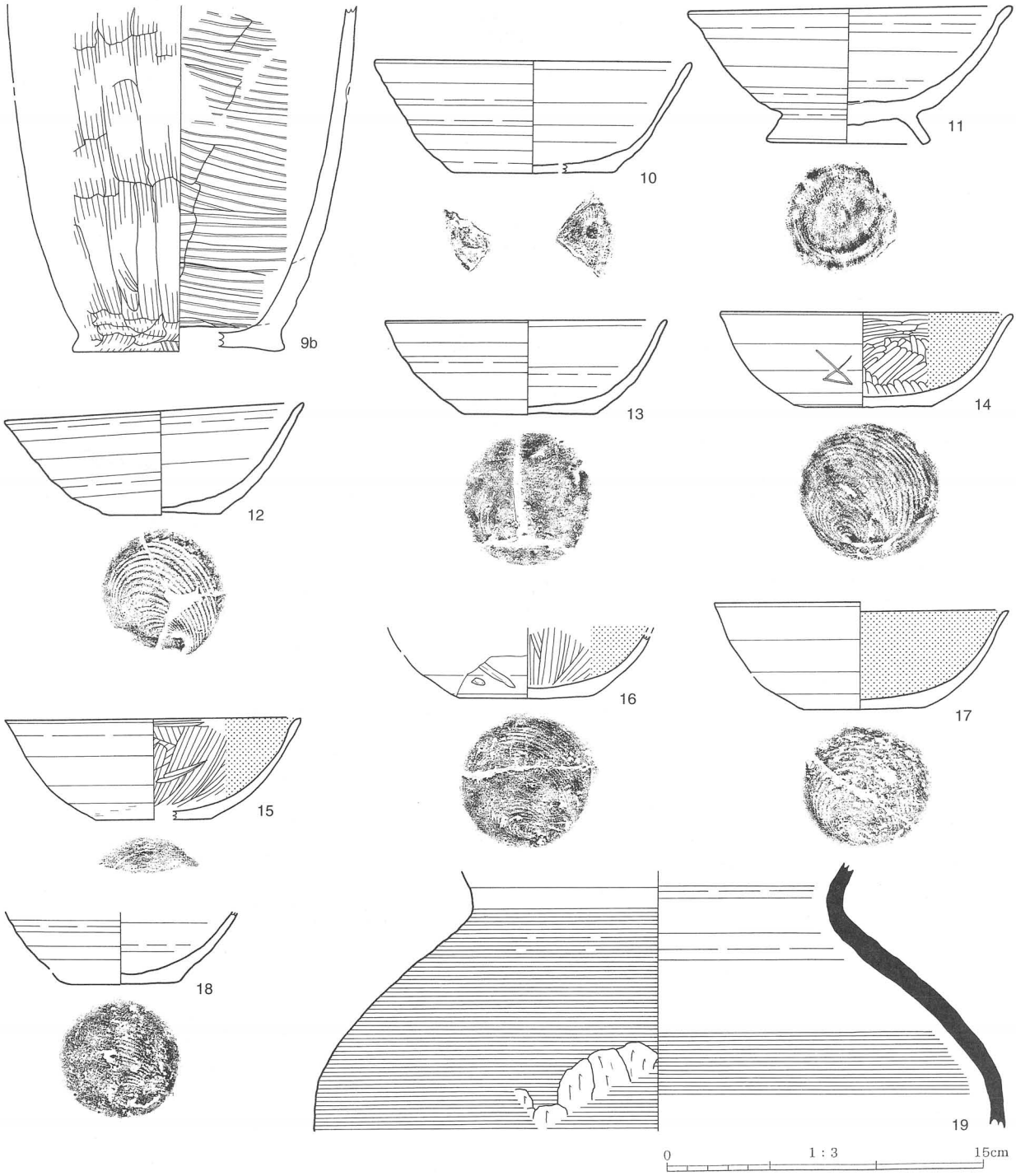
ＲＤ350土坑の灰と思われる土を洗ってみた結果、茅らしい小片が出土した。その他、ＲＡ157住居跡のカマド内土やＲＤ353土坑・４層以下の土、沢跡のⅡ層も洗ってみたが、特にそれらしいものは見られなかった。

遺構から出土した炭化材の樹種は、各遺構で記しているが、ＲＡ153住居跡のNo.１はクリ、No.2はケヤキ、No.３もケヤキ、ＲＤ351土坑からはヤマウルシ、ＲＤ357土坑からクリ、ＲＤ359土坑からアオダモ、ＲＤ361土坑からサワクルミが出土している。



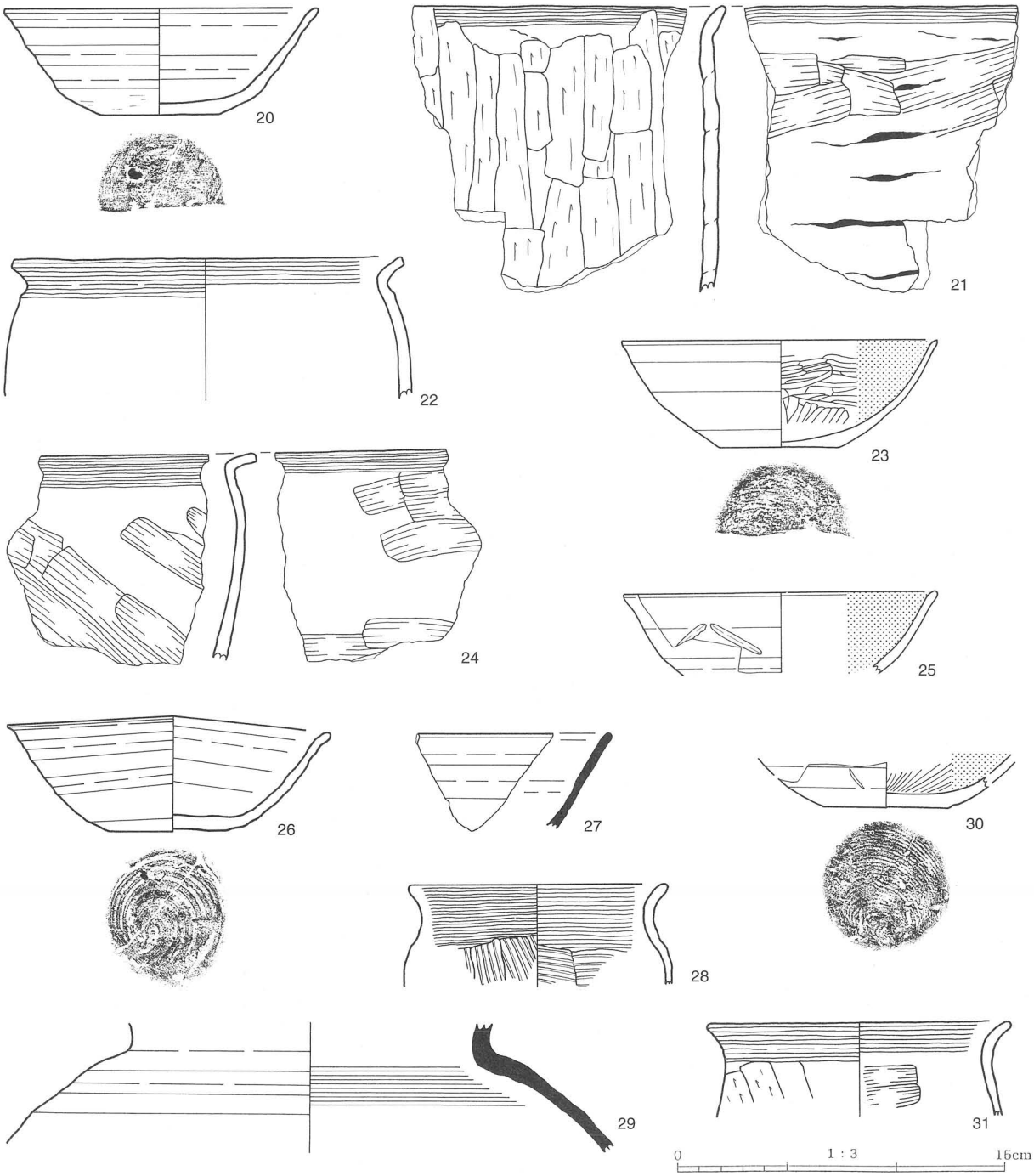
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
1	RA047住居　p.2	須恵甕・口縁	1/5周	ロクロナデ	ロクロナデ		
2	RA047住p.３、RA047住北区（約1/18、台部のみ）	台付坏・底部	底のみ一周	ロクロナデ	摩耗	外面底手づくね・内面黒色処理？、摩耗ひどい	
3	RA047住ベルト中、RA047住	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外黒斑？・内外やや摩耗	
4	RA047住居東カクラン	須恵坏	1/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外底墨書・外、一部ナデ状痕跡	
5	RA150住居　p.1	須恵坏	1/2周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	胎土白砂混入	
6	RA150住居　p.2	坏	底のみ一周	ロクロナデ→ロクロケズリ	ヘラナデ（→ヘラミガキ？）	内面黒色処理・外口、底黒斑・内面やや摩耗	p.69
7	RA150住居　p..5（４層）	須恵坏	1/4周以下	ロクロナデ→底付近ナデ	ロクロナデ	胎土白砂混入	
8	RA150住p.6（3か4層）、RA150住Q3～4南ベルト（4層）	須恵坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	胎土白砂混入・出土割合注記なくて不明	
9	RA151住南西カクラン、RA152住	甕	1/3周以下	ヘラナデ→口、ヨコナデ	ハケメ→口、ヨコナデ、底ナデ	胎土砂多・外、光沢、スス	p.69

第34図　土師器・須恵器（１）



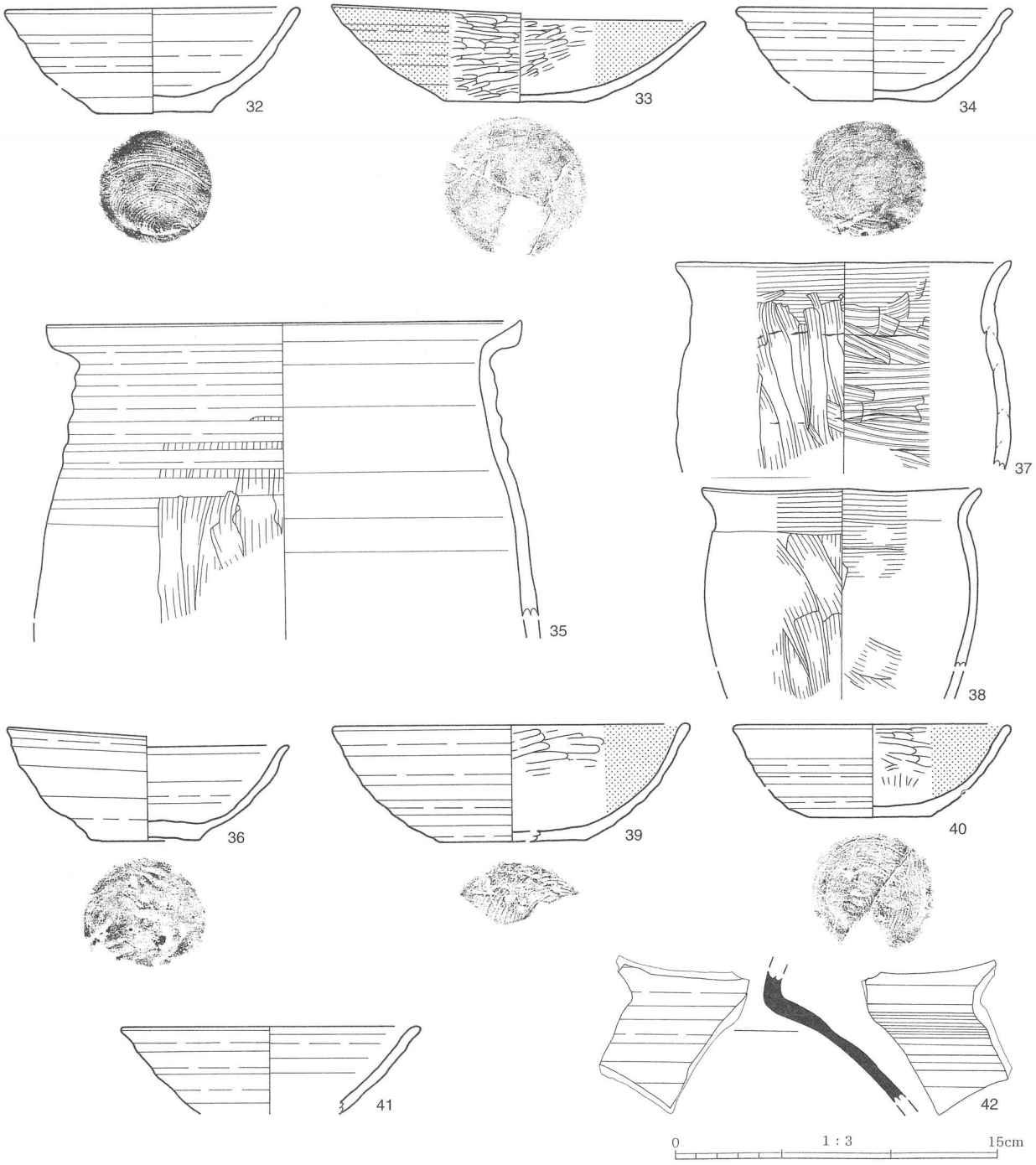
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
9	RA151住南西カクラン、RA152住	甕	1/3周以下	ヘラナデ→口、ヨコナデ	ハケメ→口、ヨコナデ、底ナデ	胎土砂多・外、光沢、スス	p.69
10	RA152住居　Q１、p.5（3層上）、２～3層カマド	坏	2/3周以下	摩耗（ヘラナデ？）	摩耗（ヘラナデ？）	内外面黒色処理→二次焼成でとんだ？	p.69
11	RA152住居　p.5、p.6、p.7、Q３	台付坏	一部欠損	摩耗（ロクロナデ？）	ロクロナデ	二次焼成で摩耗、内面底剥落	p.69
12	RA153住居　No.１	坏	一部欠損	摩耗／底：回転糸切	摩耗	胎土石・外底以外、二次焼成で摩耗	
13	RA153住居　No.２、No.13、No.14、Q１ベルト１層	坏	一部欠損	摩耗	摩耗	内外摩耗ひどい	p.69
14	RA153住居　No.9	坏	一部欠損	摩耗（ロクロナデ?）／底：回転糸切	摩耗（ヘラミガキ？）	内面黒色処理・内外摩耗・割れてない	
15	RA153住居　No.16	坏	1/5周	ロクロナデ?／底：ロクロケズリ	ヘラナデ（→ヘラミガキ？）	内面黒色処理・外摩耗	
16	RA153住居　No.19、No.33　（ほぼ１：１）	坏	底のみ一周	回転糸切→ヘラナデ？	ヘラナデ（→ヘラミガキ？）	内面黒色処理・外黒斑、摩耗	
17	RA153住居　No.23	坏	底のみ一周	摩耗ひどい（ロクロナデ？）	摩耗ひどい	内面黒色処理？・回転糸切？	
18	RA153住居　No.25	坏・底部	一周	ロクロナデ／底：回転糸切？	ロクロナデ	内外摩耗（外底ひどい）・内焼けはじけ	p.69
19	RA153住居　No.26、Q１ベルト２層（ほぼ１：１）	須恵壺？	1/5周	肩カキメ、他ロクロナデ→ヘラケズリ	肩カキメ、他ロクロナデ	外摩耗	

第35図　土師器・須恵器（２）



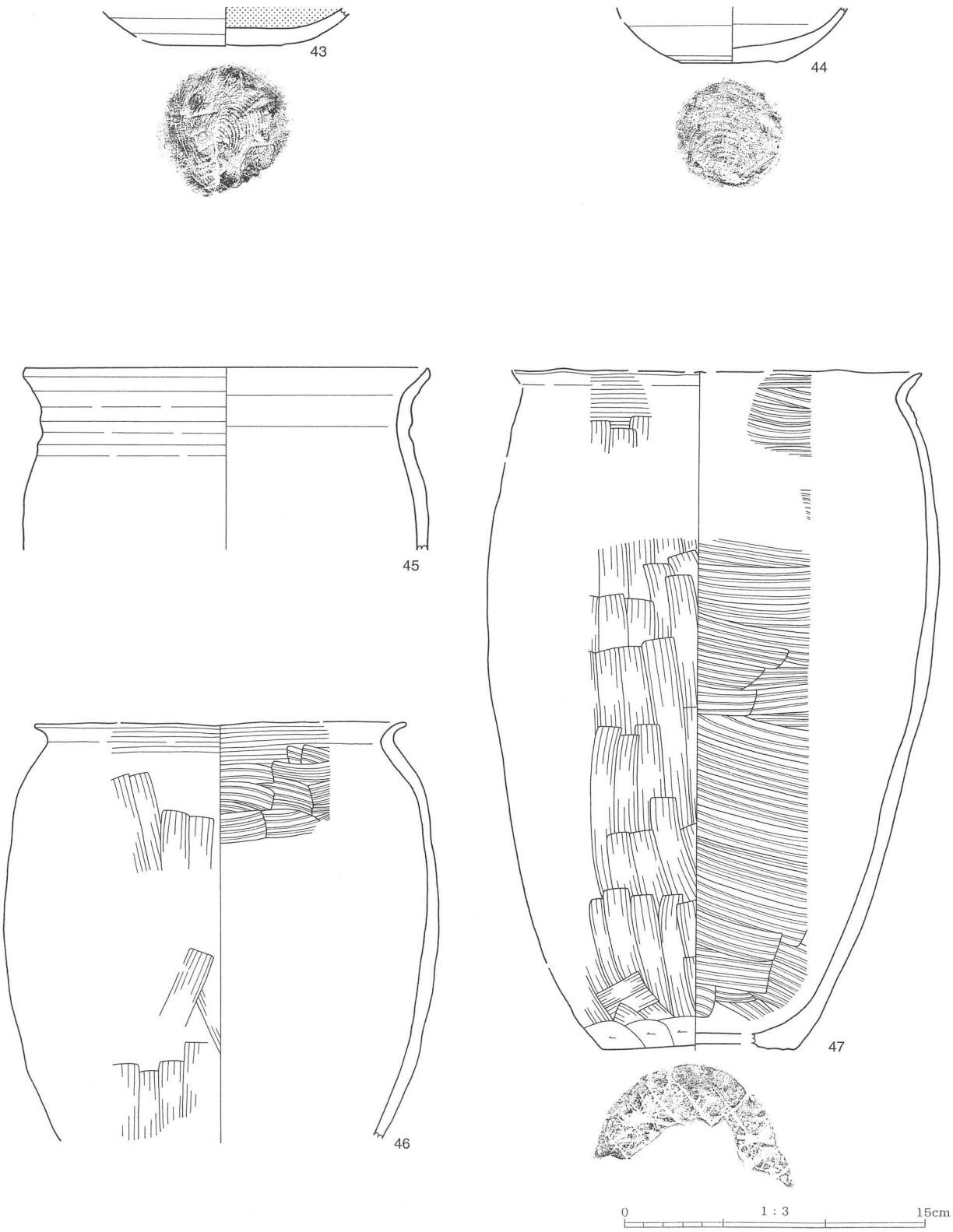
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
20	RA153住No.32、RA153住　（ほぼ３：２）	坏	2/3周以下	ロクロナデ→底回転ヘラケズリ	ロクロナデ？	内外やや摩耗・外黒斑？	
21	RA153住居　No.34	甕・口～胴部	1/5周	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ（輪積痕多数）	内面コゲ	
22	RA153住No.35、RA153住　（ほぼ３：２）	甕・口縁部	1/4周	胴部調整（摩耗）→口縁ロクロナデ	摩耗（口縁ヨコナデ？）	外二次焼成で赤く摩耗	
23	RA153住居　No.41、Ｑ２　（ほぼ３：１）	坏	1/2周以下	ロクロナデ／底摩耗	ヘラミガキ	内面黒色処理	p.69
24	RA153住居　No.45	甕・口～胴部	1/5周	ロクロナデ→ヘラナデ	ヘラナデ？	内外やや摩耗	
25	RA153住居　Ｑ１床面	坏・口縁部	1/3周以下	ロクロナデ？	ヘラミガキ？	内面黒色処理・外キズ状圧痕	
26	RA153住居　pit3埋め土	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	二次焼成？で赤く、形歪んで楕円形	
27	RA153住居　Ｑ１カマド周辺	須恵坏・口縁	1/5周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		
28	RA153住居　カマド周辺	甕・口～胴部	1/3周	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	外全面スス？、焼けはじけ？	p.69
29	RA153住　Ｑ１上層、Ｑ２上層　（ほぼ１：２）	須恵壺・肩	1/5周	ロクロナデ	肩カキメ、他ロクロナデ		
30	RA153住居　Ｑ４	坏・底部	一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラナデ？	内面黒色処理	
31	RA153住居　Ｑ４トレンチ	甕・口縁部	1/4周以下	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	摩耗	内外摩耗ひどい	

第36図　土師器・須恵器（３）



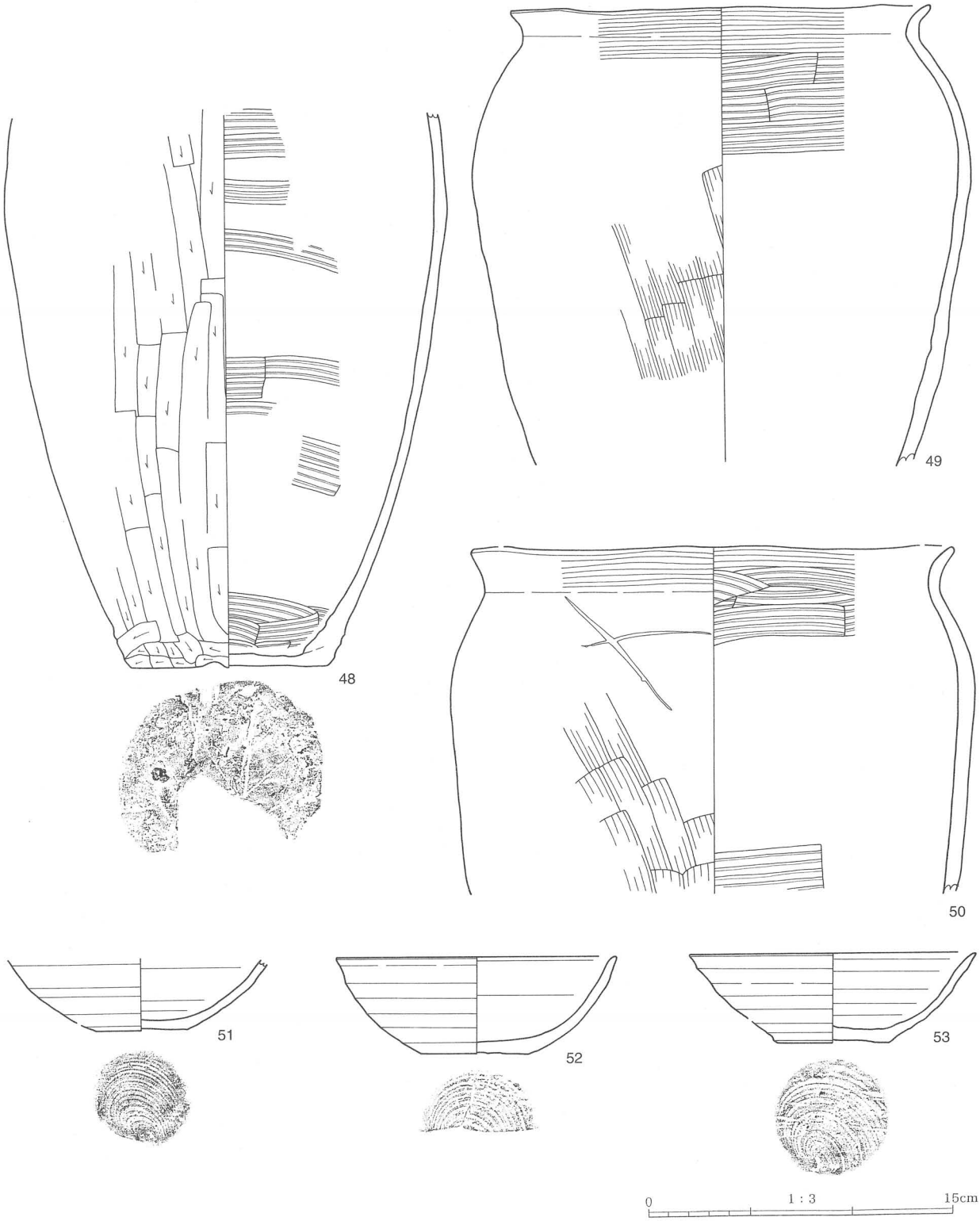
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
32	RA153　南隅覆土	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外刻書というよりキズ？（調査時ではない）	p.69
33	RA154住　p.2、p.2の下　（ほぼ1：1）	坏	7/8周以下	ロクロナデ→ヘラミガキ（底も？）	ヘラミガキ？	内外面黒色処理・内外やや摩耗	
34	RA154住居　p.5	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	内外赤く摩耗ひどい	
35	RA154住　p.6、「p.11」？　（3：2）	甕・口～胴部	1/5周	ロクロナデ→ヘラナデ（光沢）	ヘラナデ→口縁ロクロナデ	「p.11」→注記不明瞭	
36	RA154住　p.8、p.13、3層　（4：3：7）	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：摩耗	ロクロナデ	胎土石・底突出・外摩耗、底歪み	
37	RA154住　p.12、p.15カマド　（2：7）	甕・口～胴部	1/4周弱	口縁ヨコナデ→ヘラミガキ？	ハケメ→口縁ヨコナデ	内面輪積痕多・外面光沢あり	
38	RA154住　p.12、Q 1、Q 2　（4：3：2）	甕・口～胴部	1/3周以下	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	摩耗ひどい	内外摩耗	
39	RA154住居・5層？	坏	1/4周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	摩耗	内面黒色処理・外摩耗ひどい、焼けはじけ？	
40	RA154住　1層、Q 2　（4：3）	坏	7/8周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ？	内面黒色処理・外底黒斑、やや摩耗	
41	RA154住居　Q 1	坏	1/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	胎土石・外面摩耗	
42	RA154住居　Q 2	須恵壺	1/5周以下	ロクロナデ	肩カキメ、他ロクロナデ	外面摩耗	

第37図　土師器・須恵器（4）



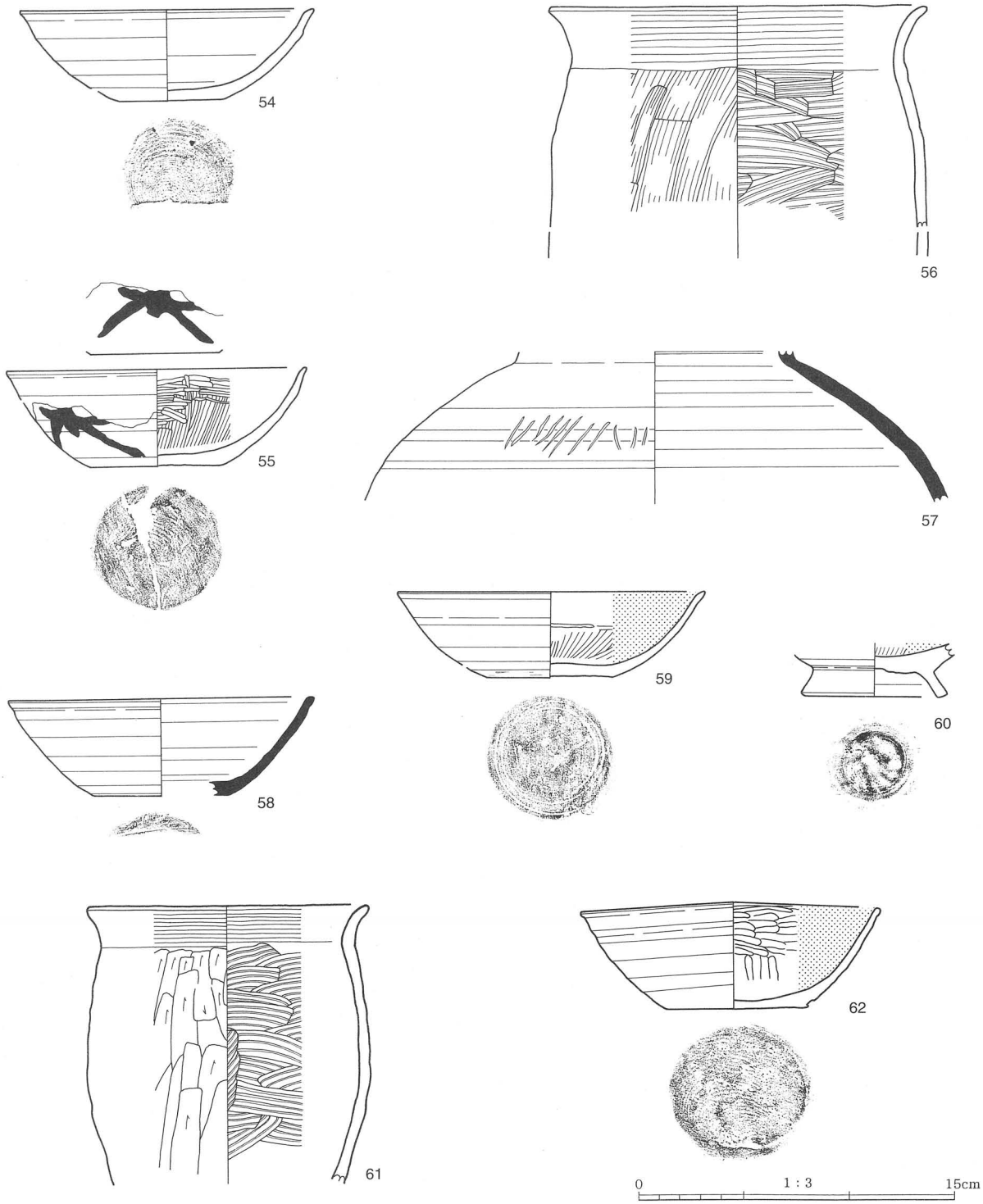
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
43	RA155住居　No.0（1層床直）	坏？・底部	底のみ一周	ロクロナデ、回転糸切→ヘラナデ	摩耗	内面黒色処理・内外酸化鉄付着	
44	RA155住居　p.1（1層下部）	坏・底部	一周	ロクロナデ／底：回転糸切	摩耗	内外摩耗ひどい	
45	RA155住居　p.3（1層）	甕・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ？	外スス付着？・内面摩耗	
46	RA155住　p.4（1～3層）、p.9、p.11、p.20	甕・口～胴部	1/3周以下	ナデ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ、ナデ？	胎土石・外スス、二次焼成・内コゲ	p.69
47	RA155住　p.4（1か3層）、p.19、カマド内	甕	2/3周以下	ヘラケズリ？、ナデ？→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	外底木葉痕・内底指なで	p.69

第38図　土師器・須恵器（5）



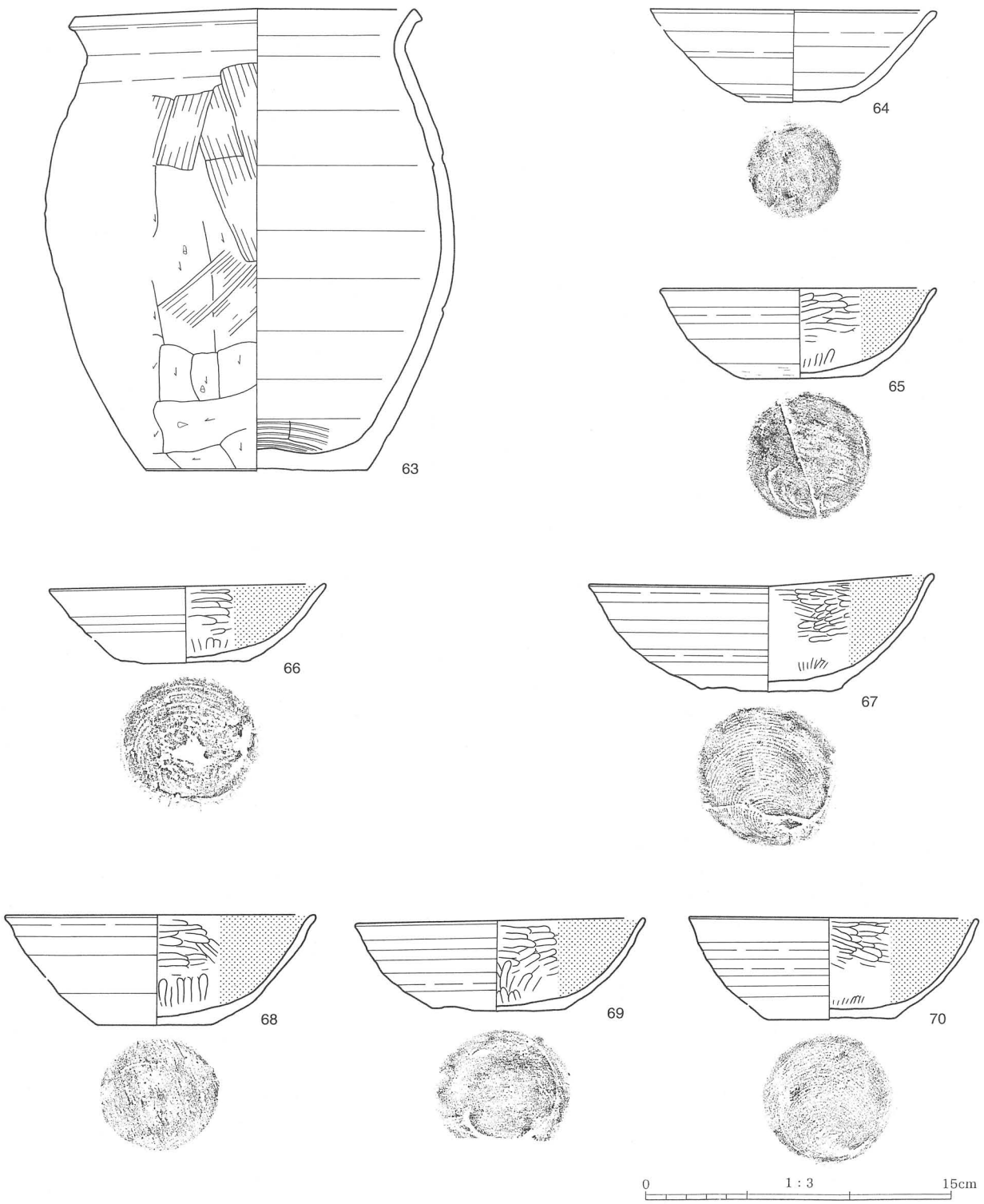
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
48	RA155住　p.4（1か3層）、p.20、p.23	甕・下半	2/3周以下	ヘラケズリ／底：木葉痕	ハケメ→ナデ	胎土石・外スス、二次焼成で赤い	p.69
49	RA155住　p.4（1か3層）、p.20、p.21、p.23、p.2●	甕・上半	1/2周以下	ナデ？→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	胎土石・外二次焼成で赤い	p.69
50	RA155住居・p.4（1か3層）	甕・上半	1/4周以下	指なで？→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	胎土石・外二次焼成で赤い	p.69
51	RA155住居　p.12	坏・底部	底のみ一周	ヘラナデ？／底：回転糸切	ロクロナデ	内面底コゲ？・外摩耗	
52	RA155住居　p.20	坏	1/3周	ロクロナデ→一部ナデ？	ヘラミガキ	外底回転糸切・外スス付着	p.69
53	RA155住居　p.26	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	内底スス？	

第39図　土師器・須恵器（6）



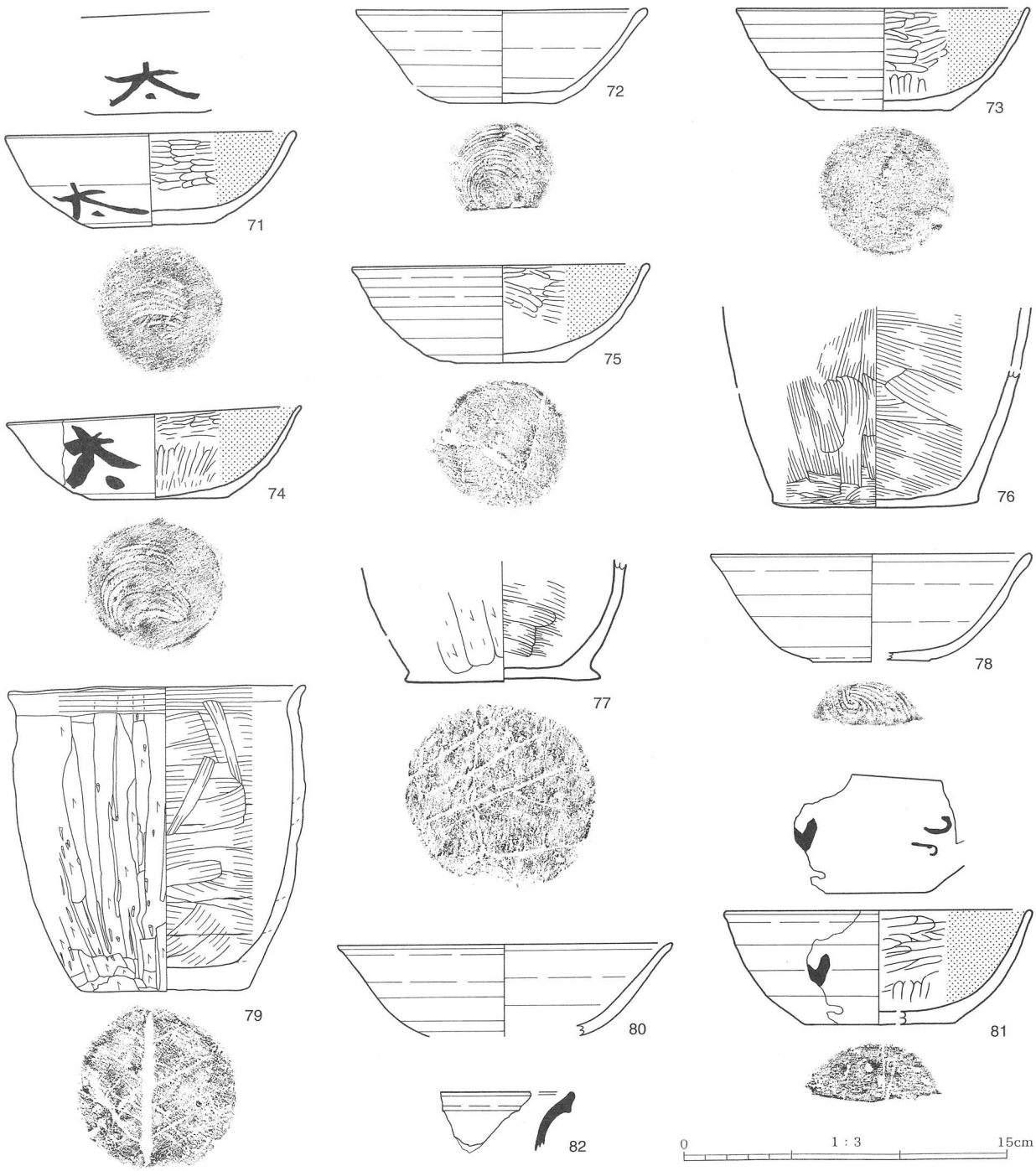
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
54	RA155住居　西壁	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	内スス？・内外やや摩耗	
55	RA156住居　p.1	坏	口欠損多	ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	ヘラナデ？ミガキ？	内面黒色処理・墨書・回転糸切→ケズリ	
56	RA156住　p.2、p.3、Q１、Q４	甕・上半	1/2周	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	胎土石・外摩耗	p.69
57	RA156住居　p.4	須恵壺・肩	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	外自然釉	
58	RA156住居　柱穴３	須恵坏	1/3周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		
59	RA156住居　Q１	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・外光沢（ミガキ？？）	
60	RA156住居　Q４	台付坏・底部	一周	ロクロナデ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・内面やや摩耗	
61	RA157住居　No.0（3層）	甕・上半	1/4周以下	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ	胎土石・外表面滑らか・内コゲ？	
62	RA157住居　p.1	坏	口縁一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラミガキ？	内面黒色処理・内外摩耗	

第40図　土師器・須恵器（７）



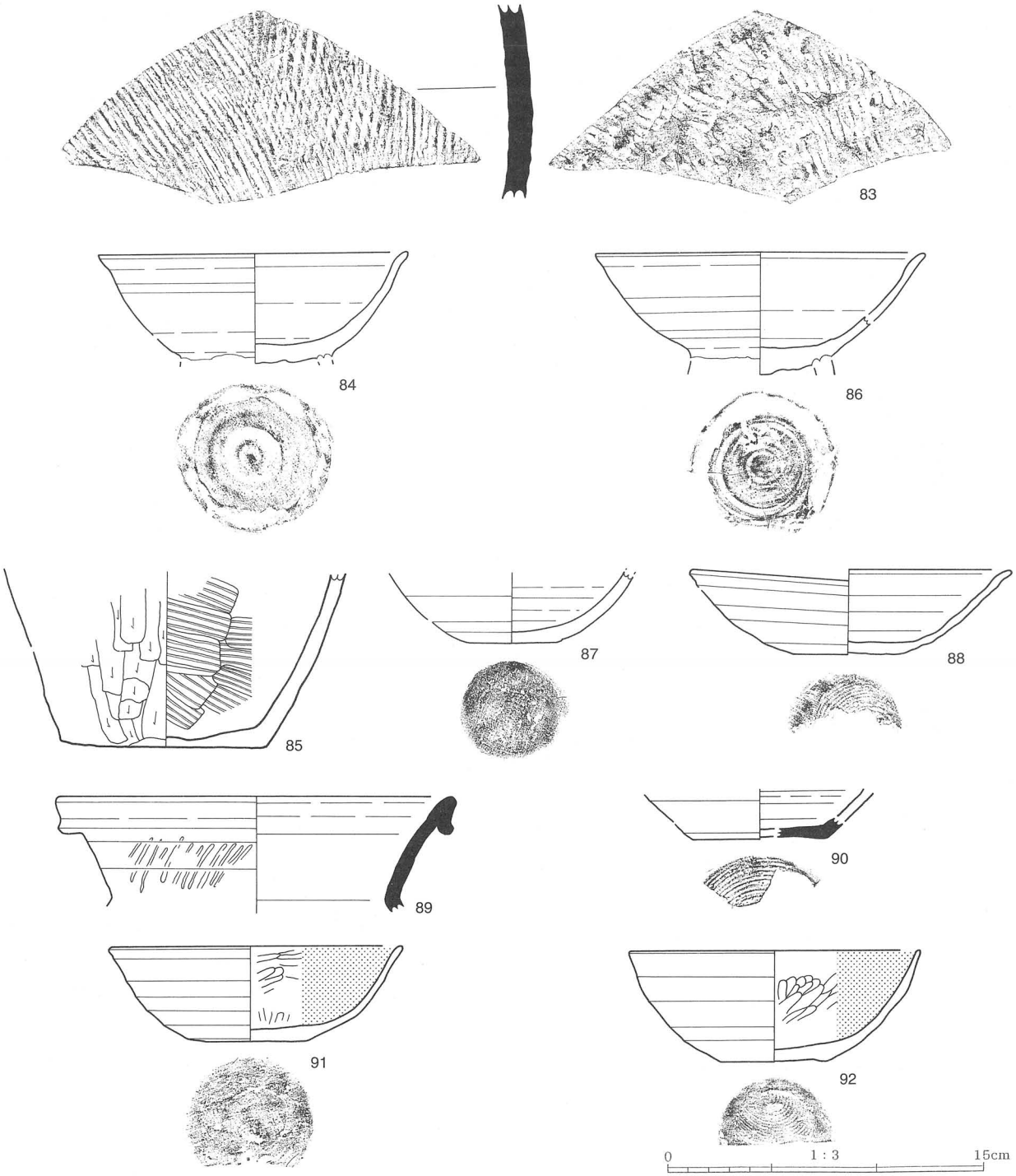
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
63	RA157住　p.3、Q３　（注記ミスで割合不明）	甕	一部欠損	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ？	ロクロナデ	砂底・胎土石・二次焼成で摩耗？	p.69
64	RA157住居　p.4	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転ヘラキリ？	ロクロナデ？	内外摩耗で調整不明瞭	p.69
65	RA157住居　p.9	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転ヘラケズリ	不明	内面黒色処理、タール状付着物	p.69
66	RA157住　p.9、床付近　（注記ミスで割合不明）	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・外黒斑	p.69
67	RA157住居　p.13	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・外底、口黒斑	
68	RA157住　p.15、柱穴13	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転ヘラケズリ	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・外黒斑、表面滑らか	
69	RA157住居　p.20	坏	2/3周	ロクロナデ／底：回転ヘラケズリ	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・内外摩耗・底薄い	
70	RA157住居　p.25	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理	

第41図　土師器・須恵器（８）



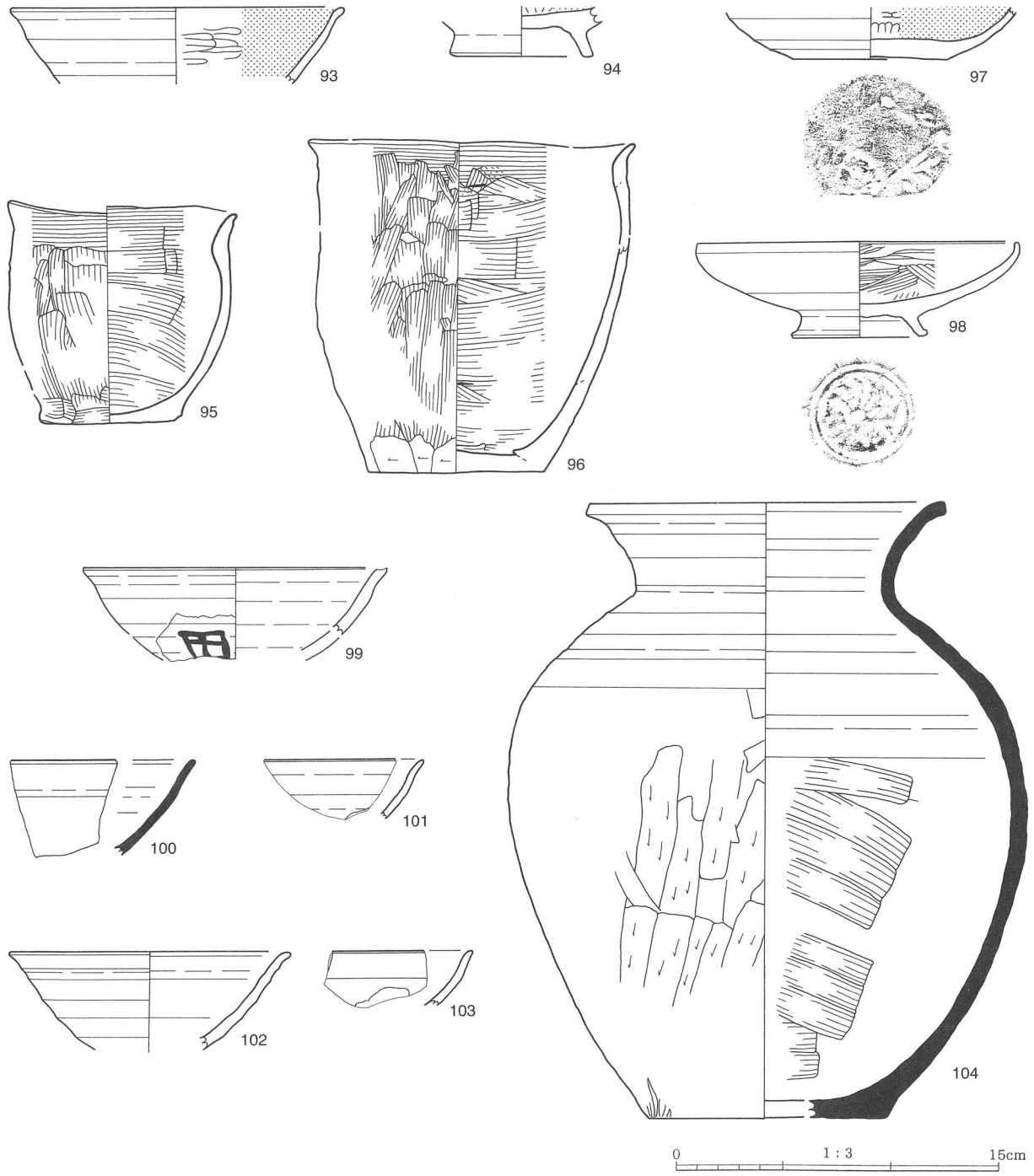
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
71	RA157住　p.26、カマド3	坏	一部欠損	ロクロナデ→底ヘラケズリ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・墨書→「太」	p.69
72	RA157住　p.32、p.37　（1：26）	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ？	胎土へんなもの含む・内面摩耗ひどい	
73	RA157住居　p.36	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：ヘラケズリ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・外やや摩耗	
74	RA157住居　p.38	坏	底のみ一周	ロクロナデ／底：回転ヘラケズリ	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・墨書→「太」	p.69
75	RA157住居　p.41	坏	一部欠損	ロクロナデ／底：ヘラケズリ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・内外摩耗	
76	RA157住居　カマド1 p.b（カマド内）	甕・底部	一周	底面までヘラケズリ	ヘラナデ	胎土石・内底黒い・外スス？	
77	RA157住居　カマド1 p.b（カマド内）	甕・底部	底のみ一周	ヘラケズリ／底：木葉痕	ヘラナデ	胎土石・赤い	
78	RA157住居　カマド1 p.c＝d（カマド内）	坏	1/3周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ？	二次焼成？で赤い・内面摩耗ひどい	
79	RA157住居　カマド1 p.e	甕	完形ひび割れ	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	ヘラナデ？→口縁ヨコナデ	底：木葉痕・胎土砂	p.69
80	RA157住　カマド1 p.g、カマド1 p.h（ほぼ2：1）	坏・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ？	内面やや摩耗	
81	RA157住　カマド1 p.h、Q1掘り方埋土	坏	1/3周	ロクロナデ／底：ヘラケズリ	ヘラナデ？	内面黒色処理・墨書・外摩耗・内付着物？	
82	RA157住居　カマド1	須恵壺？・口縁	破片	ロクロナデ	ロクロナデ	外自然釉	

第42図　土師器・須恵器（9）



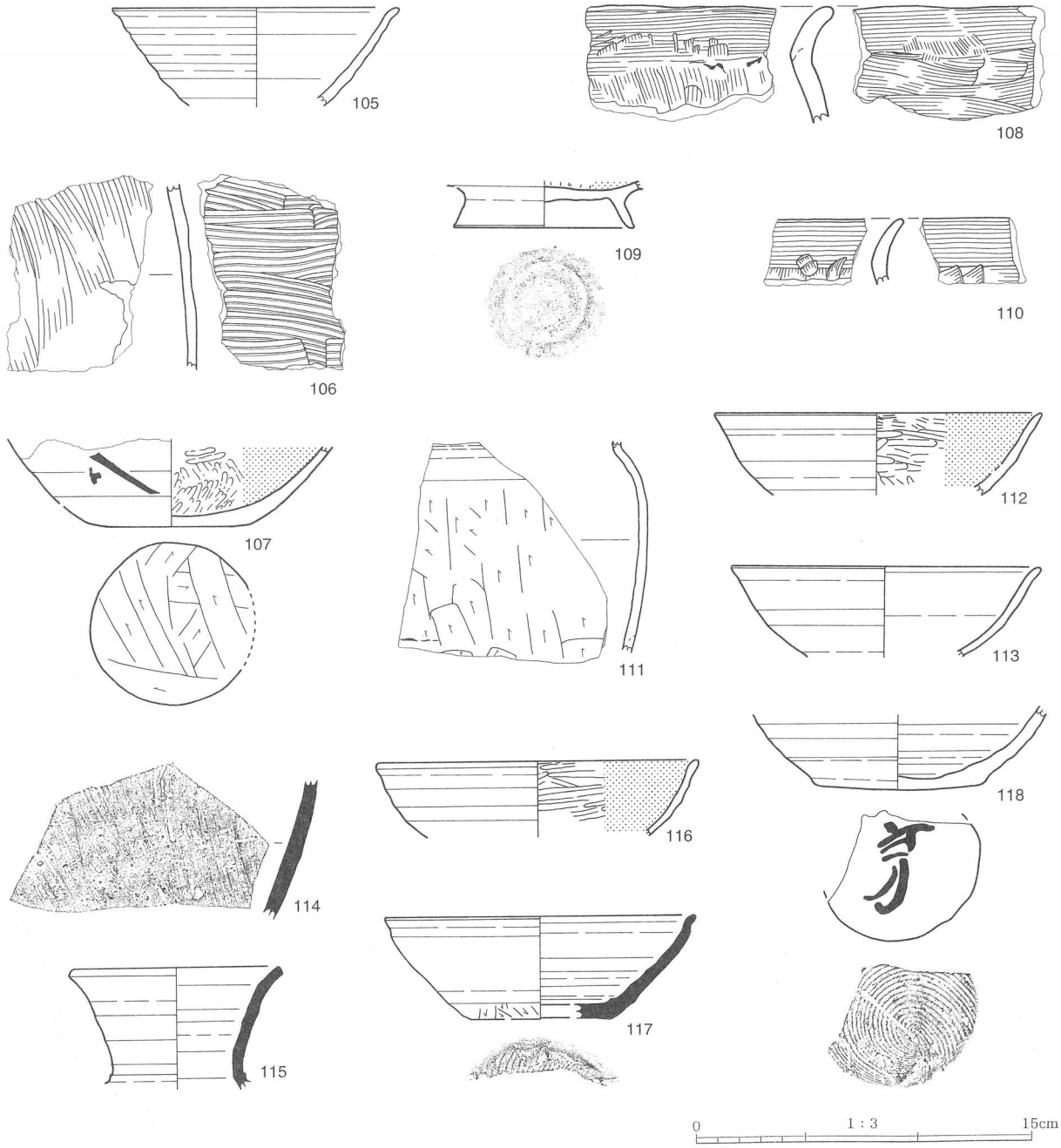
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
83	RA157住居　カマド3	須恵甕・胴	破片	平行タタキ目	平行タタキ目状当て具痕		
84	RA157住居　カマド3	台付坏	底のみ一周	ロクロナデ（台剥落）	ロクロナデ	外面摩耗・厚い印象	
85	RA157住居　カマド５p.d	甕・底部	2/3周以下	底面までヘラナデ?、ケズリ（光沢）	ヘラナデ	胎土砂混入	
86	RA157住居　カマド5焼土上	台付坏	底のみ一周	ロクロナデ（台剥落）	ロクロナデ	内面摩耗ひどい、焼けはじけ？	
87	RA157住居　床付近？	坏・底部	底のみ一周	ロクロナデ／底：ヘラケズリ	ロクロナデ	外底：回転糸切→ヘラケズリ・外摩耗	
88	RA157住居・3層	坏	底のみ一周	ロクロナデ（滑）／底：回転糸切	ロクロナデ（滑らか）	二次焼成？で赤く、剥落、外摩耗	
89	RA157住居　Q１	須恵・口縁部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	甕？・内外自然釉付着	
90	RA157住居　Q1	須恵・底部	1/4周以下	ロクロナデ→ナデ?/底：回転糸切	ロクロナデ（沈刻深く明瞭）	調整から判断すると壺?、傾き・厚さからは坏	
91	RA157住居 Q１	坏	2/3周以下	ロクロナデ→底回転ヘラケズリ	ヘラナデ？	内面黒色処理・内外やや摩耗	
92	RA157住居　Q1	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ヘラナデ?、ミガキ？	内面黒色処理・墨書・外摩耗	

第43図　土師器・須恵器（10）



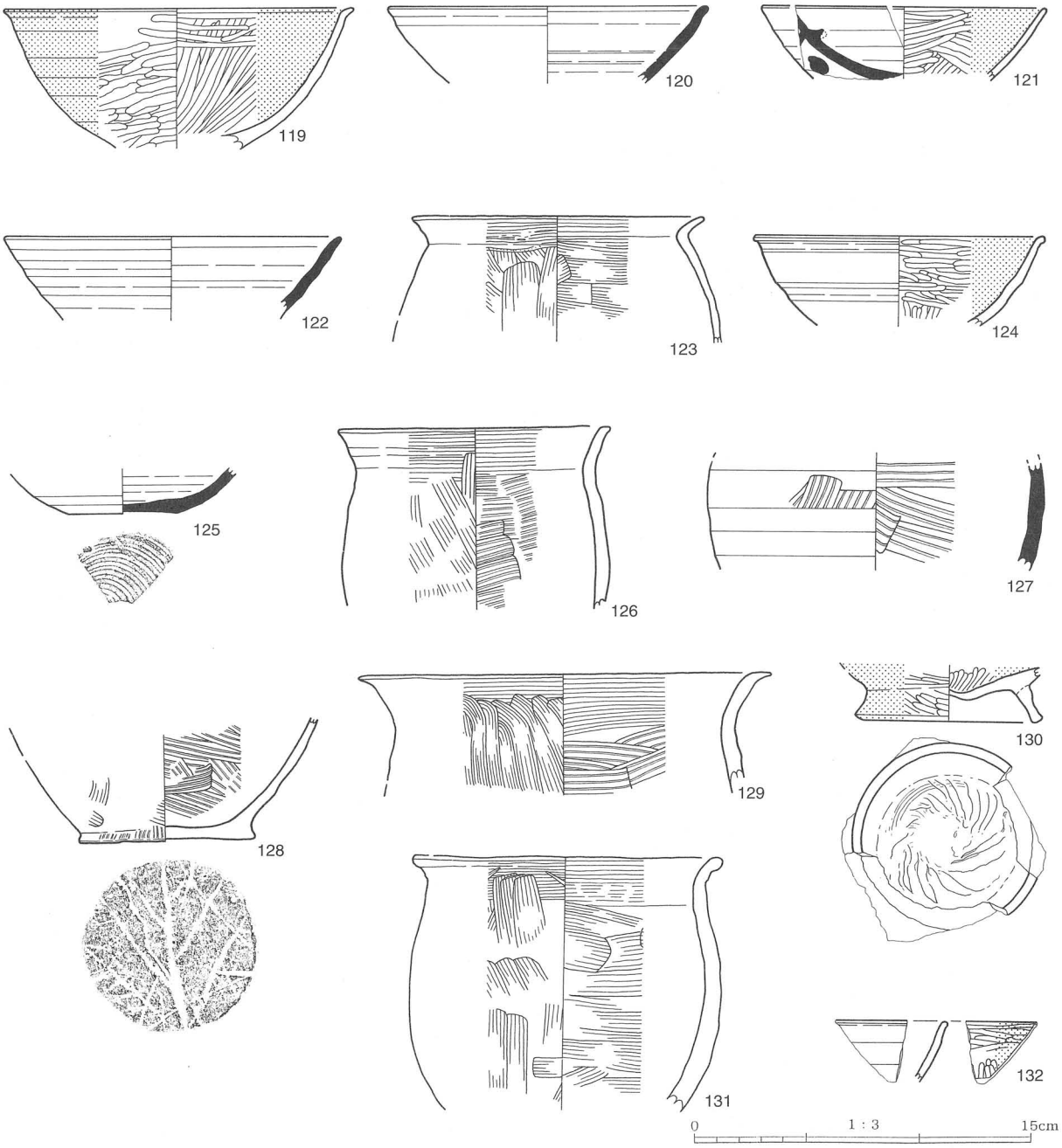
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
93	RA157住居　Q３	坏・口縁部	1/5周	ヘラミガキ？	ヘラミガキ？	内外面黒色処理・内外やや摩耗	
94	RA157住居　Q４	台付坏・底部	一周	ロクロナデ	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・胎土金雲母目立つ	
95	RA157住居　Q４	甕	底のみ一周	口縁～底までヘラケズリ	口：ヨコナデ？／ヘラナデ？	胎土砂・内口縁一周コゲ？・内ハケメ？	
96	RA157住居　Q４	甕	2/3周以下	口縁ヨコナデ→ヘラケズリ（滑）	ハケメ（→ナデ？）→口縁ヨコナデ	胎土砂・外底回転ヘラケズリ	p.69
97	RA157住居　Q1掘り方埋土	坏・底部	2/3周以下	摩耗	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・外摩耗	
98	RA157住　Q１掘り方埋土、Q１、？（注記不明）	台付坏	一部欠損	ヘラミガキ？	ヘラミガキ	内外やや摩耗	
99	RA157住居　Q３掘り方埋土	坏・胴部	1/4周	ロクロナデ（摩耗）	ロクロナデ	墨書→「田」？・外面摩耗	
100	RA157住居　Q４掘り方埋土	須恵坏・口	1/5周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		
101	RD340土坑・3層上面	坏・口縁部	破片	ロクロナデ	ロクロナデ		
102	RD341土坑・3層	坏・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ	外面摩耗	
103	RD343土坑・カクラン	坏・口縁部	破片	ロクロナデ？	摩耗	内外摩耗ひどい	
104	RD344土坑　p.１（１層）、覆土上層（検出面）	須恵壺	所々欠損	ロクロナデ→下半ヘラケズリ	ロクロナデ→下半ヘラナデ	底部直上タタキ目状圧痕・外摩耗	p.69

第44図　土師器・須恵器（11）



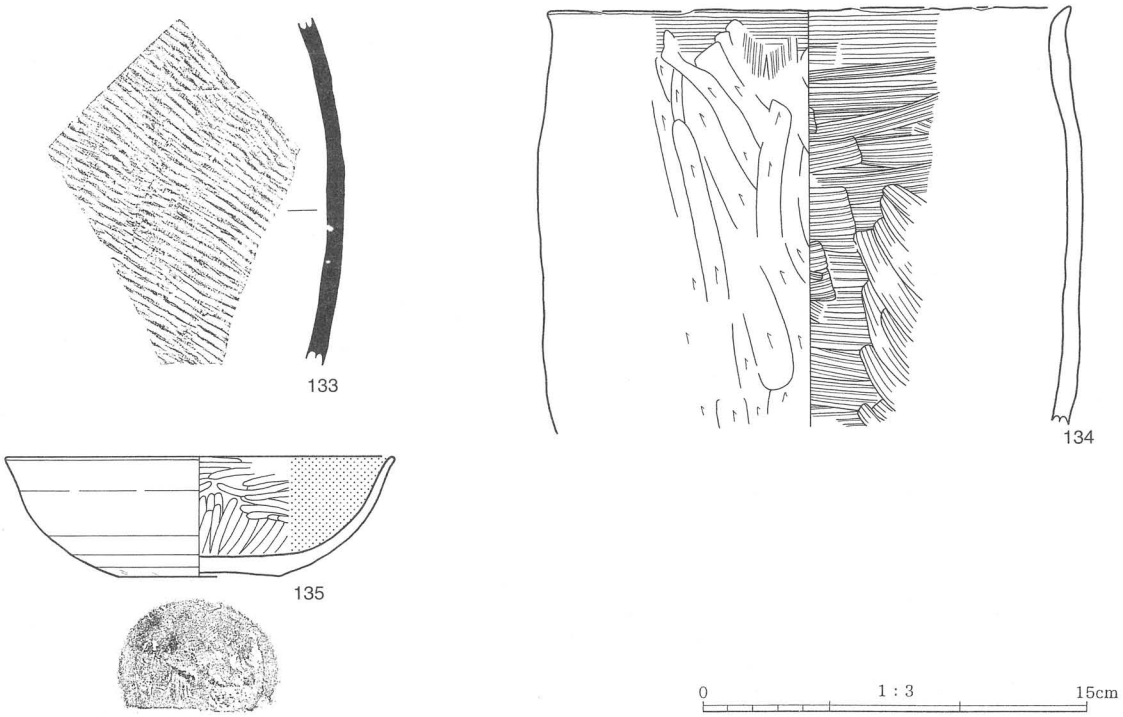
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
105	RD344土坑　覆土上位（検出面）	坏・口縁部	1/4周以下	ロクロナデ（摩耗）	摩耗	内外摩耗	
106	RD348土坑・2層	甕・胴部	破片	ヘラナデ	ハケメ	胎土石混入	
107	RD349土坑・5層	坏・下半部	3/4周	摩耗／底：ヘラケズリ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・墨書・外面摩耗	
108	RD349土坑	甕・口縁部	1/5周	口縁ヨコナデ→ヘラナデ	ヘラナデ→口縁ヨコナデ		
109	RD350土坑　p.1（2層上面）	台付坏・底部	一周	ロクロナデ（やや摩耗）	ヘラナデ？、ミガキ？	内面黒色処理・外面やや摩耗	
110	RD350土坑・1層	甕・口縁部	破片	口縁ヨコナデ→何か当たった痕跡	口縁ヨコナデ		
111	RD350土坑	甕・胴部	1/5周	ロクロナデ→ヘラケズリ	摩耗	内面摩耗ひどい	
112	RD350土坑	坏・口縁部	1/8周	ロクロナデ（やや摩耗）	ヘラミガキ	内面黒色処理	
113	RD351土坑・2層	坏・口縁部	1/5周	ロクロナデ（やや摩耗）	摩耗	内外摩耗・外スス？付着	
114	RD351土坑・4層	須恵壺・胴	破片	ヘラケズリ	ロクロナデ	外面自然釉？	
115	RD352土坑・5層	須恵壺・頸	1/4周以下	ロクロナデ	ロクロナデ		
116	RD352土坑	坏・口縁部	1/5周	ロクロナデ→下部ヘラケズリ？	ヘラミガキ？	内面黒色処理	
117	RD353土坑p.1（4層）、RD353土坑　（割合２：１）	須恵坏	1/4周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ		
118	RD353土坑　p.2（４層）	坏・底部	1/3周以下	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	外底面に墨書・内外やや摩耗	

第45図　土師器・須恵器（12）

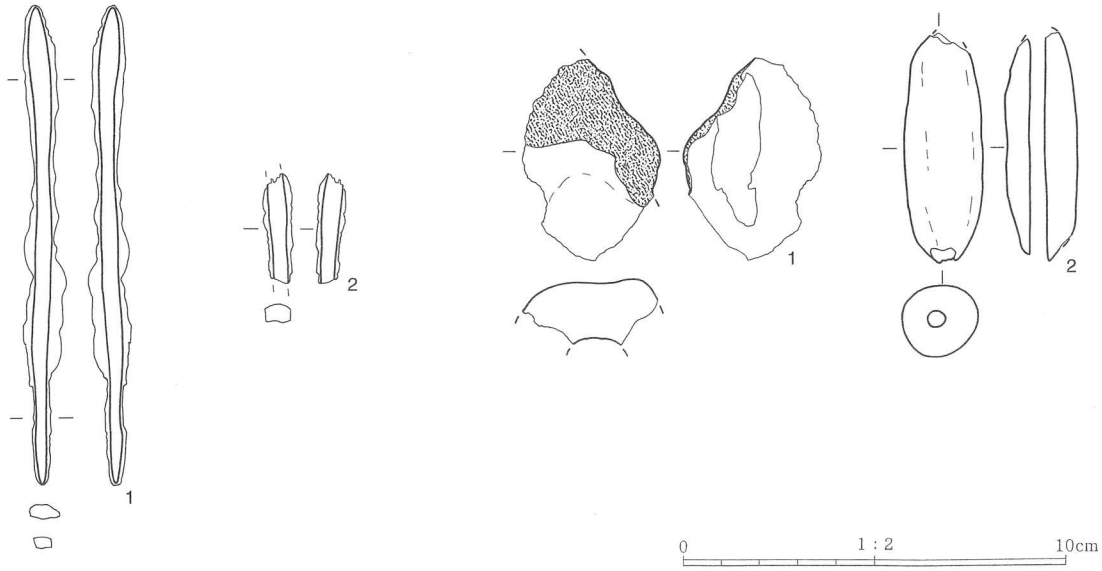


No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
119	RD353土坑・3層	坏・口～胴部	1/4周以下	ロクロナデ→ヘラミガキ	ロクロナデ→ヘラミガキ	内外光沢	
120	RD353土坑・6層	須恵坏・口縁	1/8周	ロクロナデ	ロクロナデ		
121	RD353土坑	坏・口縁部	1/8周	ロクロナデ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・墨書→「太」？	
122	RD354土坑・３層	坏・口縁部	1/8周	ロクロナデ	ロクロナデ		
123	RD356土坑　Ｑ３下層	甕・口縁部	1/4周以下	ヘラケズリというよりナデ	ヘラナデ？（摩耗）	内外摩耗	
124	RD356土坑　Ｑ３下層	坏・口縁部	1/5周	ロクロナデ	ヘラミガキ？	内面黒色処理・外面やや摩耗	
125	RD356土坑　覆土下部	須恵坏・底	1/5周	ロクロナデ／底：回転糸切	ロクロナデ	粘土まくれ痕	
126	RD357土坑・3層	甕・上半	1/5周以下	ヘラケズリ→口縁ヨコナデ？（摩耗）	ハケメ→口縁ヨコナデ	胎土砂・外面やや摩耗	
127	RD358土坑　p.1（２層）	須恵壺・胴	1/5周	ロクロナデ→ヘラケズリ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ→一部カキメ	外面光沢あり	
128	RD358土坑p.1（２層）、RD358土坑　（割合１：２）	甕・底部	一周	ヘラナデ？／底：木葉痕	ハケメ	外面二次焼成？で赤い、剥落	p.70
129	RD359、360土坑	甕・口縁部	1/5周以下	ヘラケズリ	ハケメ→口縁ヨコナデ？	胎土砂混入	
130	RD359、360土坑	台付坏・底部	底のみ一周	台内面除きヘラミガキ（光沢）	ヘラミガキ？（やや摩耗）	台内面ロクロナデ、底菊練り状	
131	RD361土坑　No.1（3層？）	甕・上半	1/4周以下	口縁ヨコナデ→ヘラナデ？（滑）	ヘラナデ	厚い	
132	RD362土坑	坏・口縁部	1/8周	ロクロナデ？（摩耗）	ヘラミガキ？	内面黒色処理	

第46図　土師器・須恵器（13）



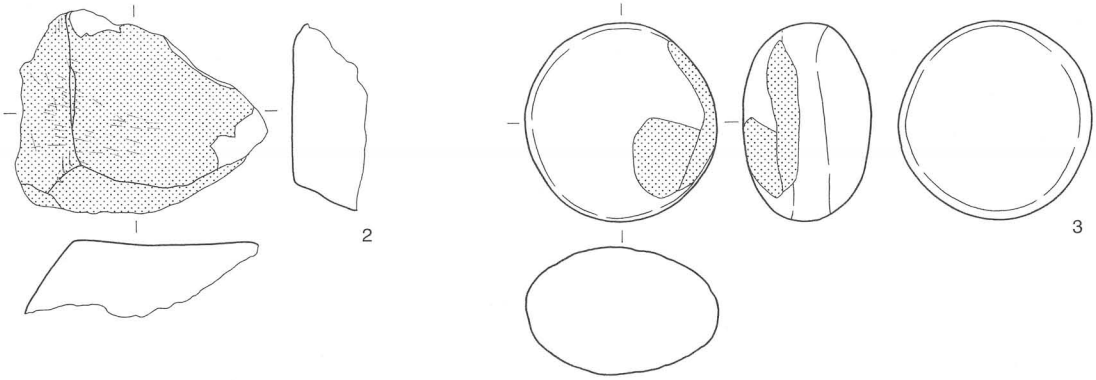
No.	出土地点・層位	器種・部位	残存状況	外面（口縁部/胴部/底部）	内面（口縁部/胴部/底部）	備　考	本文記載
133	沢跡	須恵甕・胴	破片	平行タタキ目	浅い凹凸（当て具痕不明瞭）		
134	沢跡	甕・上半	1/4周以下	口縁ヨコナデ→ヘラケズりというよりナデ	ハケメ→口縁ヨコナデ	胎土石	
135	沢跡	坏	2/3周以下	ロクロナデ／底：回転ヘラケズり	ヘラナデ？	内面黒色処理・墨書（一部）・外底、口黒斑	p.70

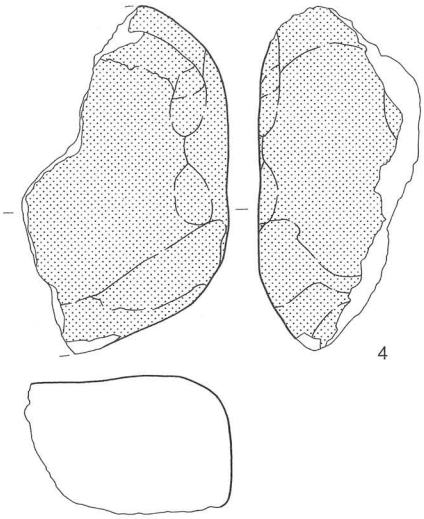


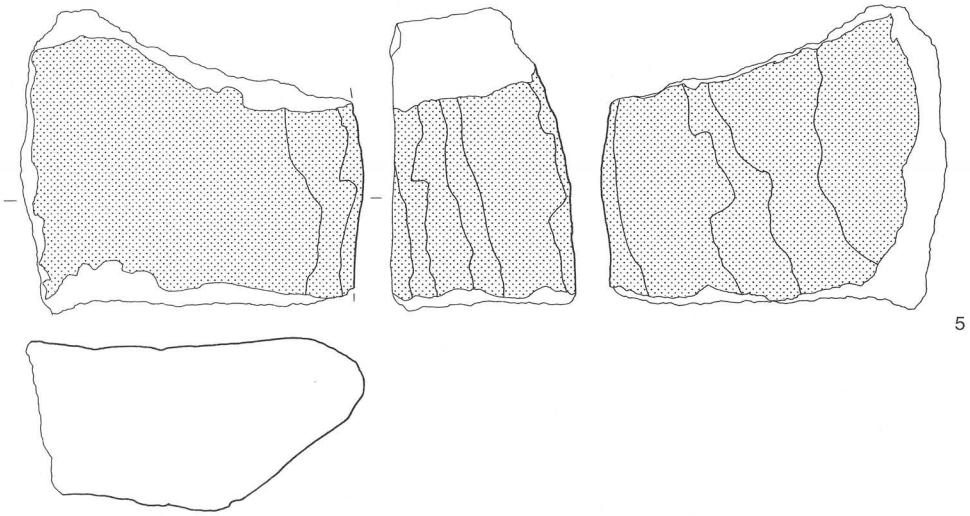
No.	出土地点・層位	種類	残存状況	最大計測値（cm）			重量（g）	備考	本文記載
				長さ	幅	厚さ			
1	RA153住居　No.50	鏃	略完形	12.6	0.9	0.8	—	手違いで重さ未計測のまま保存処理へ	
2	RA153住居　No.51	鏃？	小片	(2.9)	0.7	0.5	—	手違いで重さ未計測のまま保存処理へ	

No.	出土地点・層位	種類	残存状況	重量（g）	特徴	本文記載
1	RA153住居　Q１覆土下位	羽口	破片	25.8	溶着滓付着・熱変化	
2	沢中央・Ⅱ層上面	土錘	口一部欠損	22.3	胎土砂混入・表面に指圧痕状の凹凸	

第47図　土師器・須恵器（14）、鉄製品、土製品

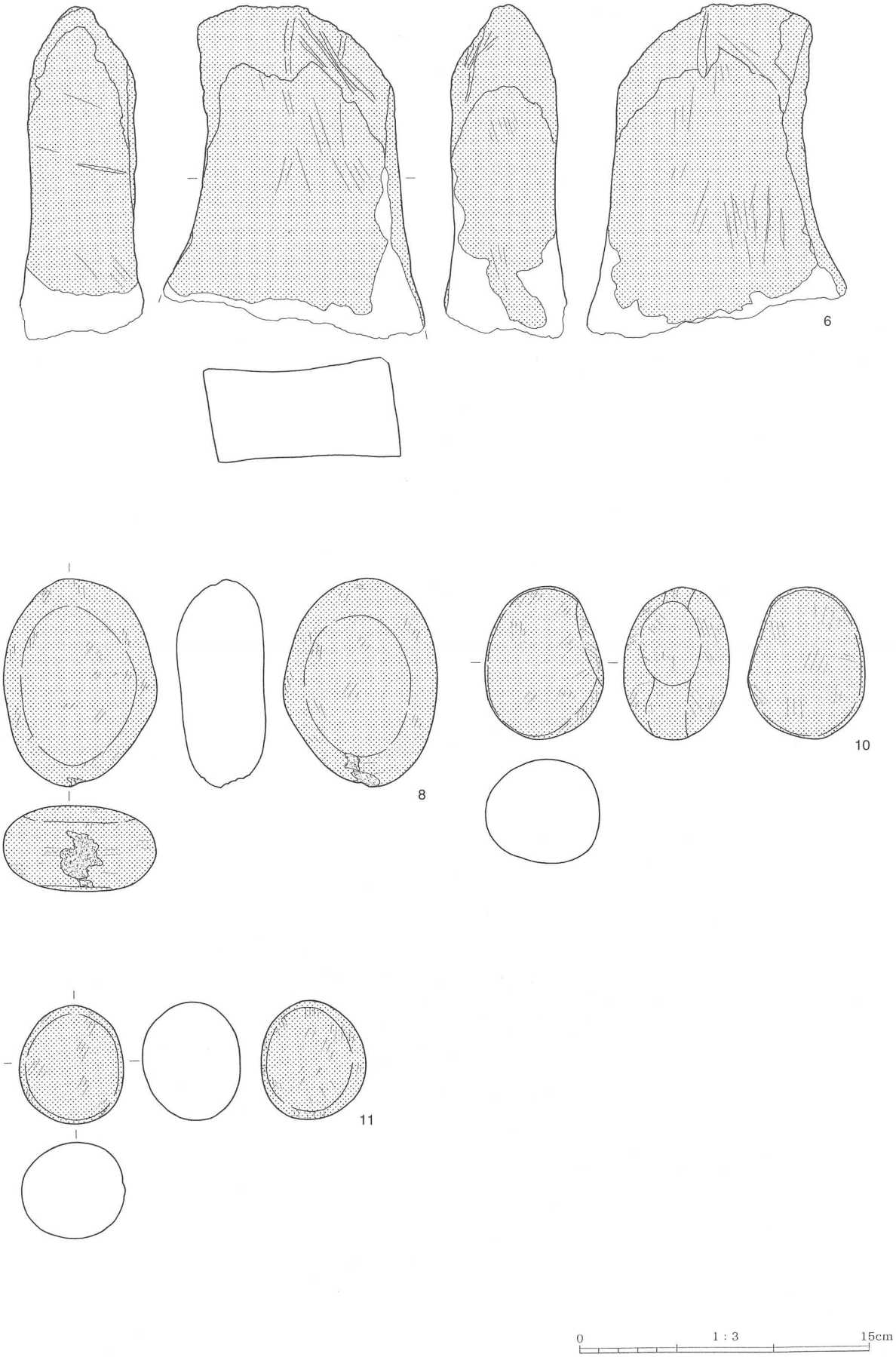






0　1：3　15cm

第48図　石器（1）



第49図　石器（2）

Ⅵ 考　　察

1　「盛南開発」地域における細谷地遺跡第15次調査区の特徴

「盛南開発」地域の８地点の調査に係わったが、遺跡および遺跡内の地点によっても、それぞれに個性が認められるものだと漠然と考えてきた。同じような集落跡でも、畝間状遺構の検出はほぼ細谷地遺跡に限られ、後述する土師器焼成坑も、今のところ細谷地遺跡と本宮熊堂Ｂ遺跡に限られている。竪穴住居跡の属性でも、こうした傾向は認められ、細谷地遺跡では２ｍ前後の極めて小さいものが比較的顕著である。カマドは比較的差異が顕著にでるようで、作り替えの回数、袖の構造、煙出の長さ・壁のどの高さから始まるか・内側に傾斜するか外側に傾斜するか、さらに向中野館遺跡第８次調査区では祭祀痕らしきものも認められた（p.７の文献71）。前述の小規模の住居は、カマドを作り替える代わり、すなわちカマドを作るために竪穴が必要であったとも考えられる（“独立カマド”）。その小規模な竪穴は、同じ細谷地遺跡でも第４・５次調査区に特に顕著である。

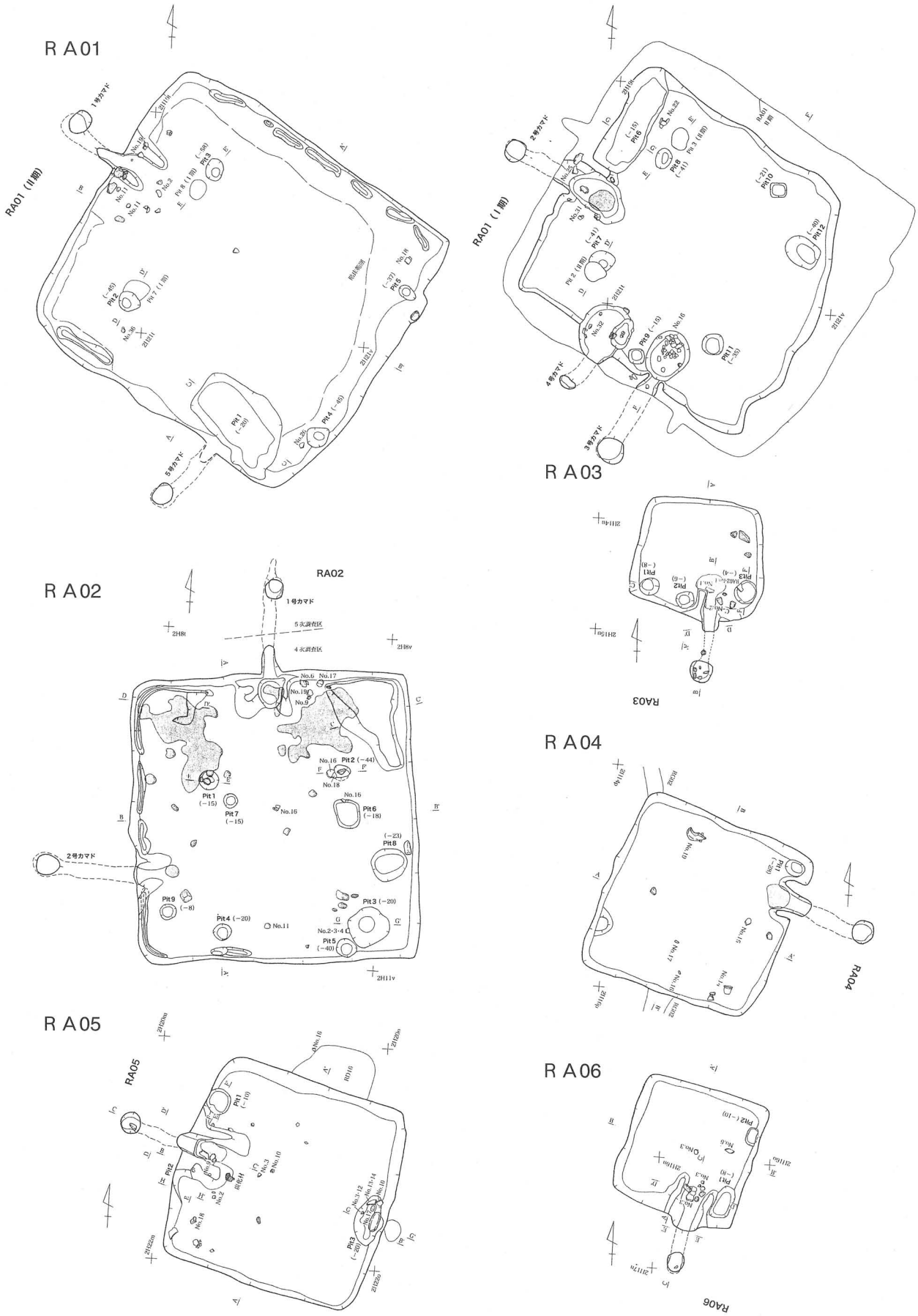
「盛南開発」地域で発見された1,000棟を越える竪穴住居跡のほとんどは、９世紀後半～10世紀初頭で、この時期爆発的に増えるのである。大量の“移民”を想定するのが自然であろう。あちこちからやって来て集落のそれぞれの場所に居を定め元の場所の伝統に従って住居等を建てるために、遺跡差・地点差が顕著に認められるのではないかと推定される。この仮説を検証するために、第15次調査区に隣接する第４・５・８次調査区から発見された竪穴住居跡およびその出土土器を集成してみた（第50～73図）。門外漢のためか今回顕著な傾向を抽出することはできなかったが、煙出が住居壁において床面より高い位置から始まる点は、今回の調査区の特徴と言えそうである。

2　土師器焼成坑

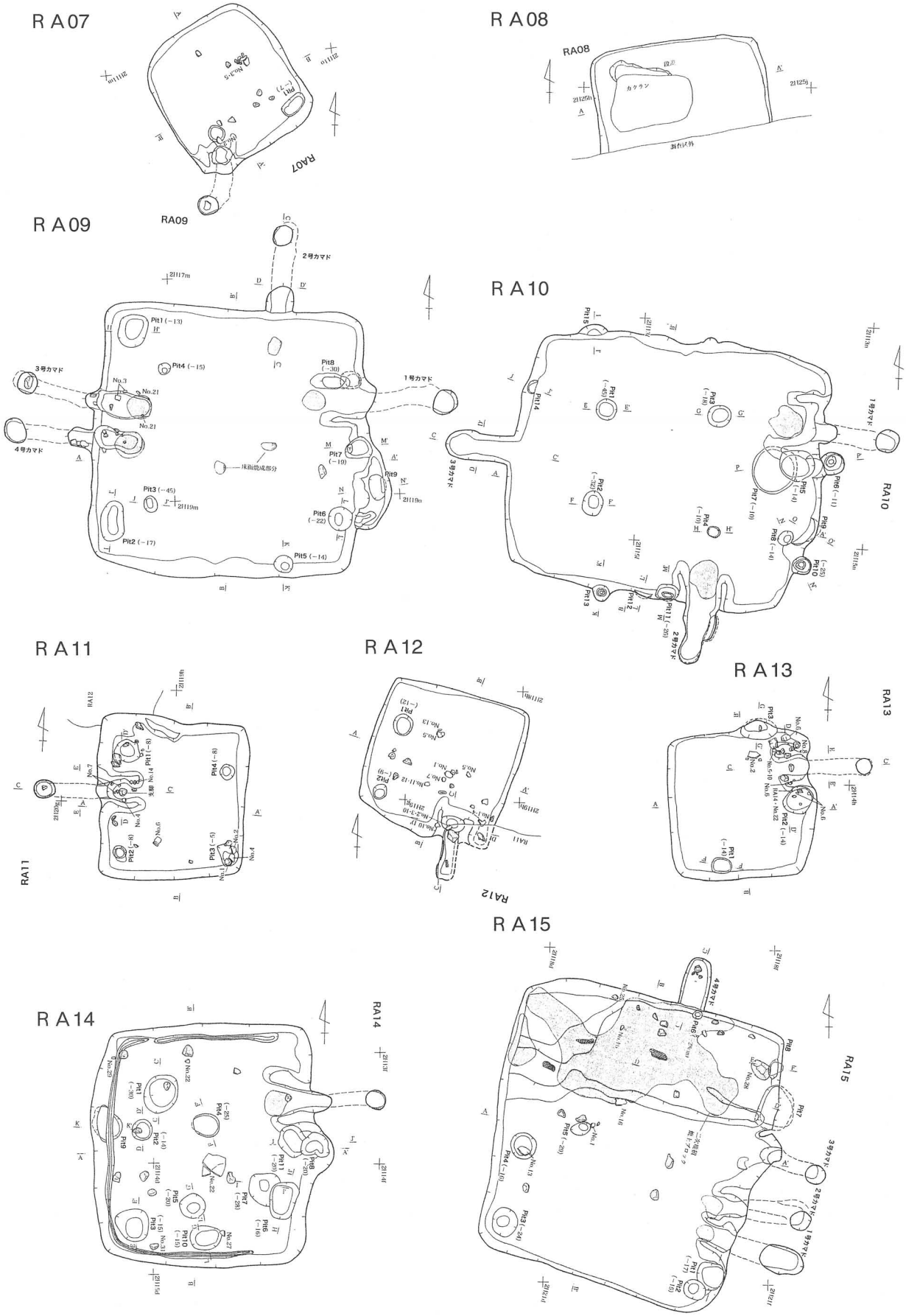
細谷地遺跡では、第４・５次調査で「焼成土坑」（後述）が検出されて以来、土器焼成坑の可能性が注目され、第８次調査で土師器焼成時の失敗品が周囲の土坑から検出されて、この遺跡で土師器を焼成していたとほぼ推定され、第９・10次調査で焼成土坑から同様の失敗品が出土するにおよび土器焼成土坑の存在は決定的になった。今回の第15次調査では、竪穴住居跡内からロクロ・ピットが確認され、さらにその実態が明らかになりつつある。そこで、ここでは、細谷地遺跡でこれまでに発見された関係遺構を集成し、その実態についてまとめ、さらに周囲遺跡の関係遺構も集成して、この地域における土師器生産と消費についても若干考察を加えたい。

土師器焼成遺構としては、失敗品の出土など確証が得られた遺構に限れば資料は極めて少ないものとなる。そこで、それよりも一般的な焼土が確認された土坑を対象としたい。底、壁、覆土に現地性と思われる焼土が認められる土坑を便宜的に“焼土坑”と呼ぶ。「焼成土坑」でも良いのだが、ここではそこまで明瞭にせず、あくまで考古学的に焼土が確認された土坑という範疇にとどめたい。“焼土土坑”というとしつこく感じるので“焼土坑”と略した。

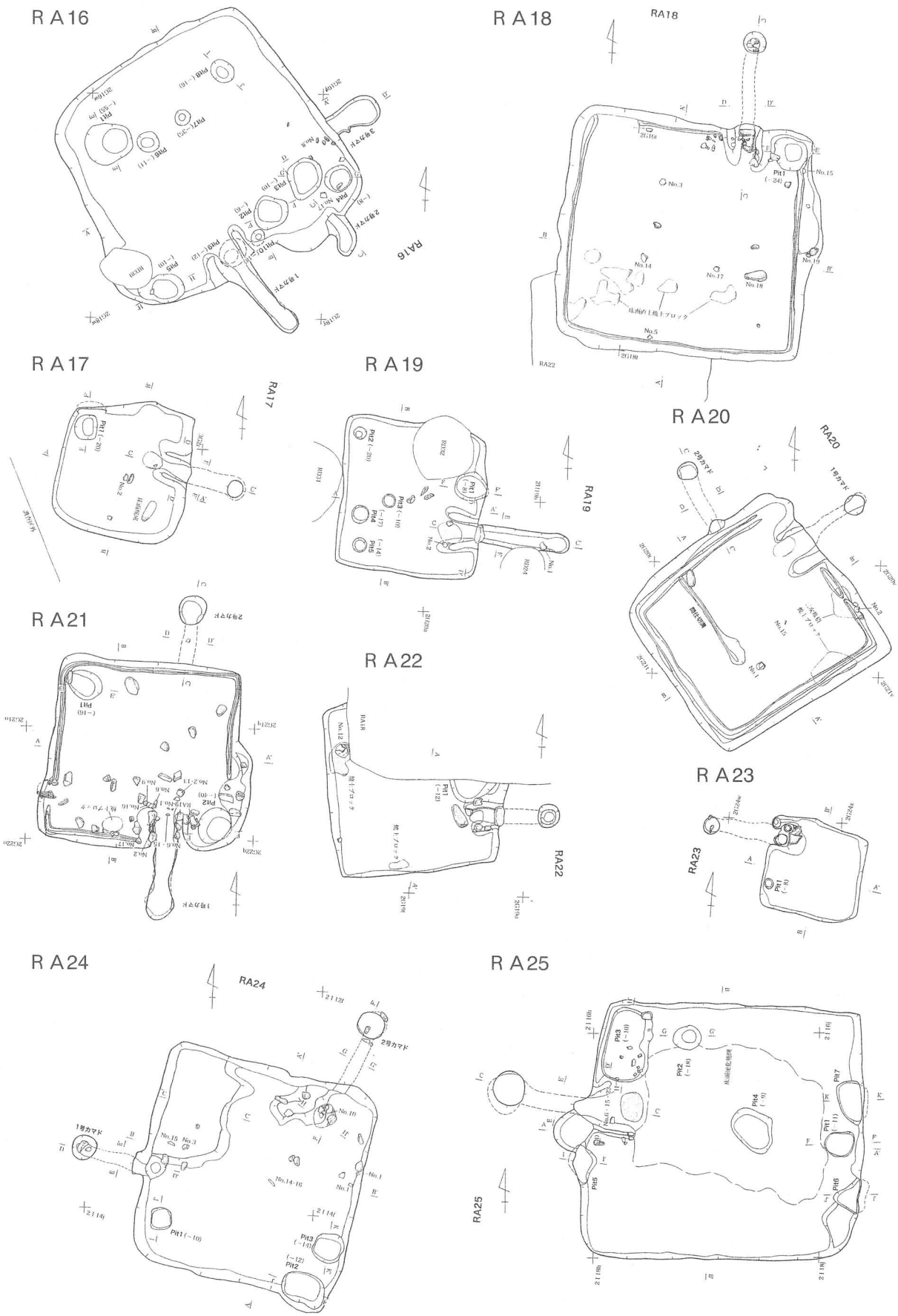
収集の範囲は、第Ⅱ章周辺の遺跡で扱った範囲（第５図）で報告書が刊行されている遺跡を対象としたが、見落としも多く存在すると思われる。御教示いただければ幸いである。文献は、第Ⅱ章に記した文献番号で示した。第２表に示した法量は報告書の記載に拠ったが、形は、統一性を図るため筆者が図を見て判断した。時期も、報告書で慎重に記載している場合でも、出土土器がある場合は筆者が判断してやや積極的に記している。なお、近隣の地区も若干瞥見した結果、矢巾町下赤林Ⅰ遺跡



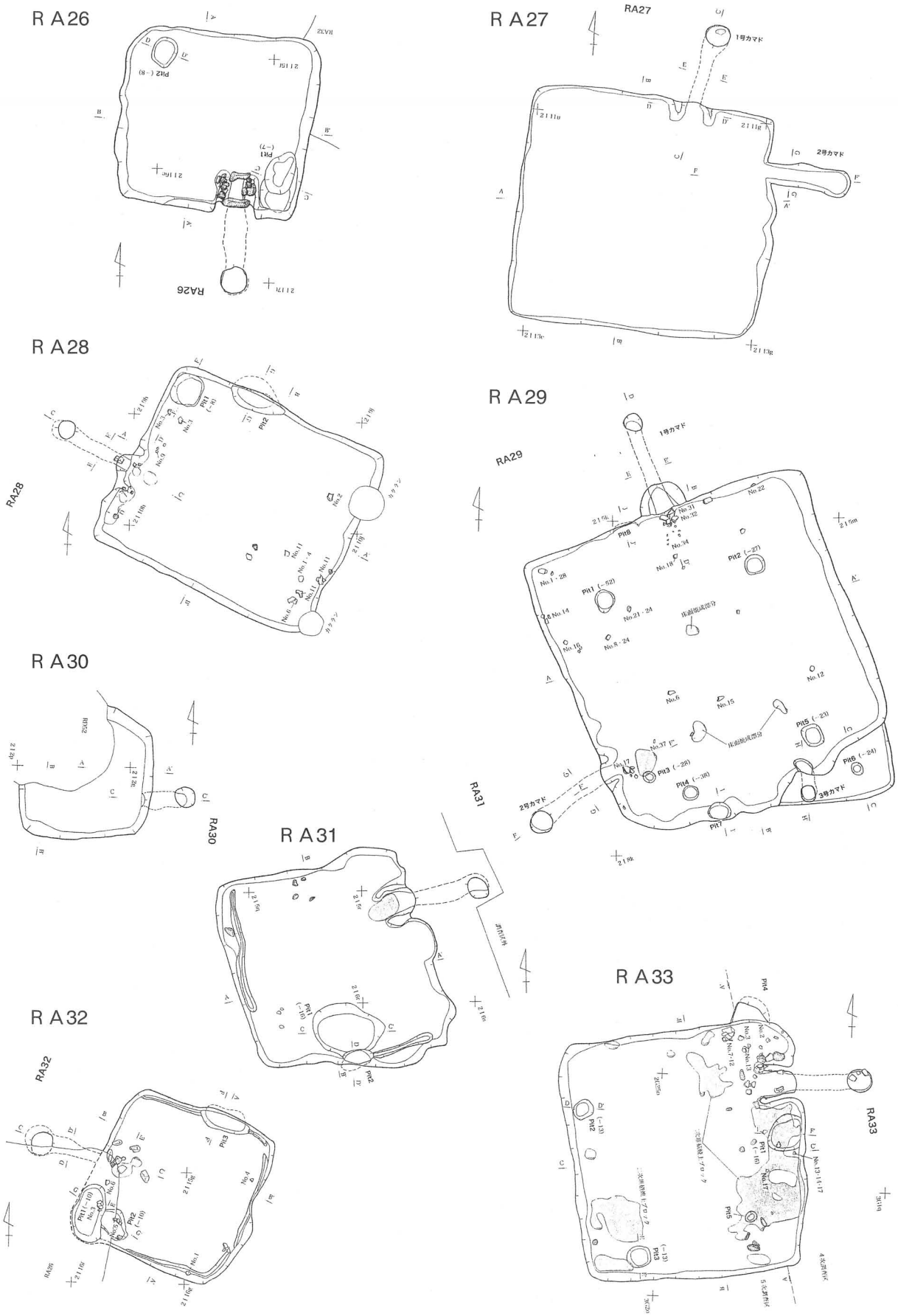
第50図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（１）（ｓ＝1/100）



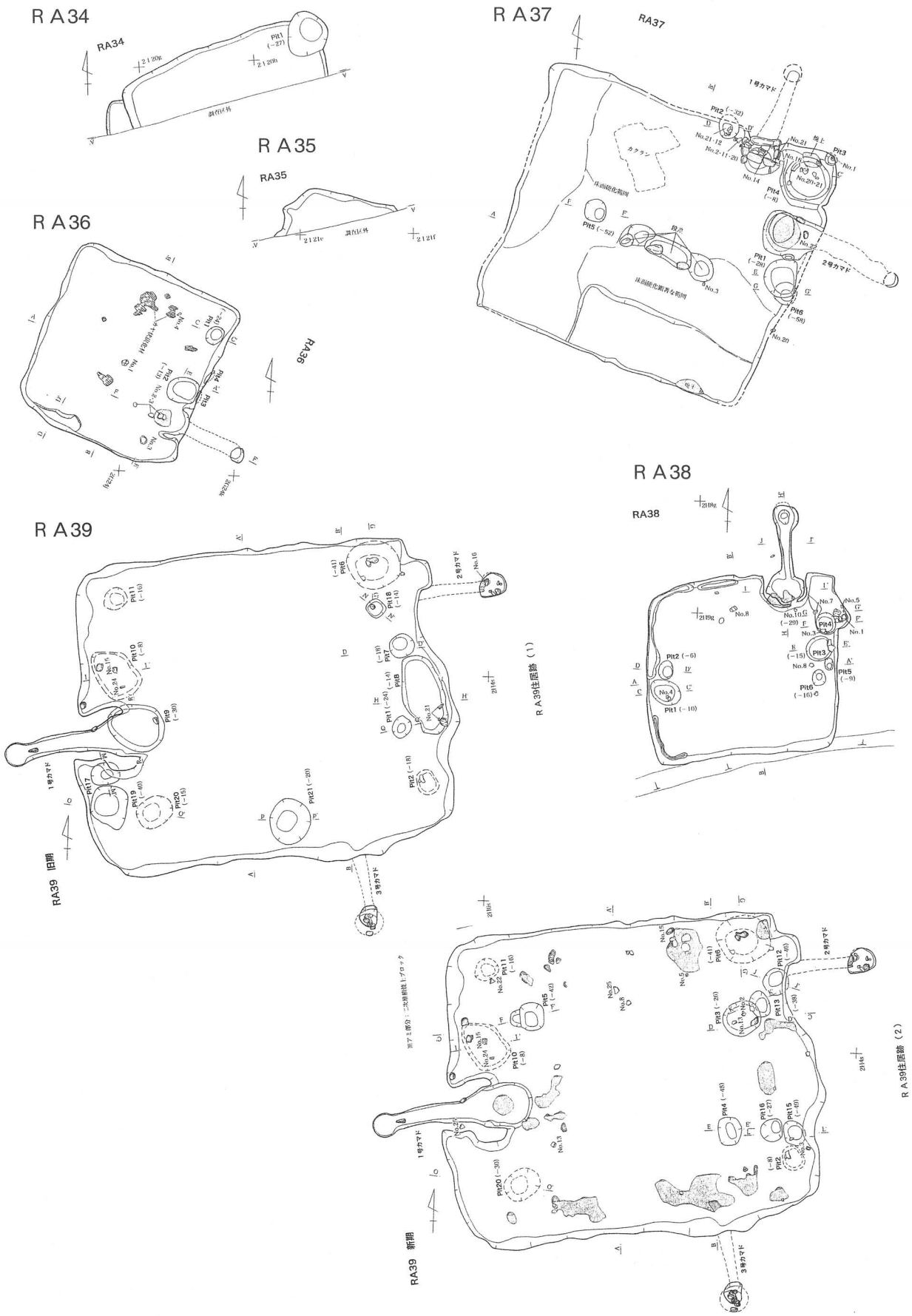
第51図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（２）（ｓ＝1/100）



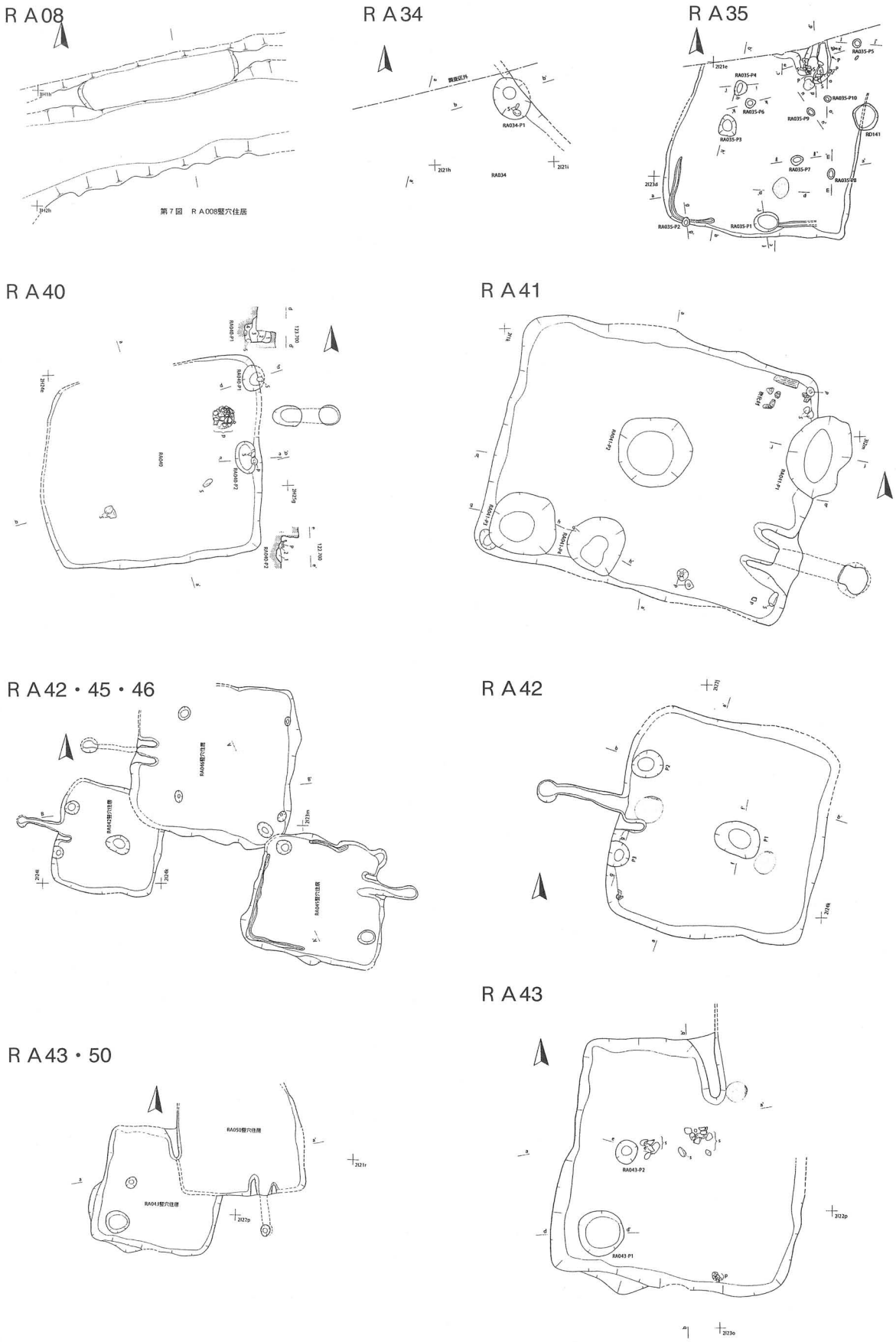
第52図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（３）（ｓ＝1/100）



第53図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（４）（ｓ＝1/100）

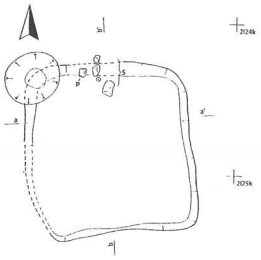


第54図　細谷地遺跡第４・５次竪穴住居跡集成（５）（ｓ＝1/100）

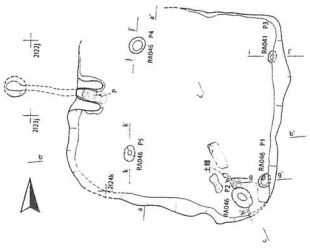


第55図　細谷地遺跡第８次竪穴住居跡集成（１）（ｓ＝1/100）

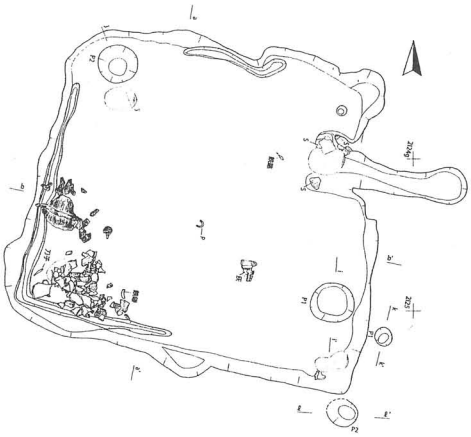
R A44



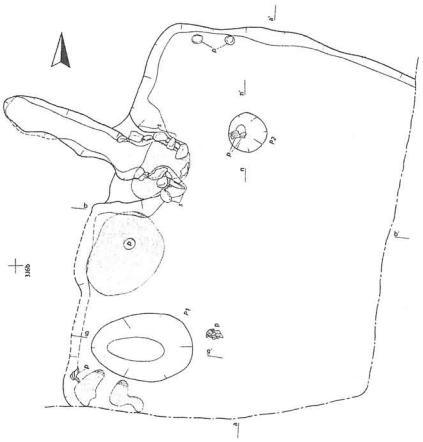
R A46



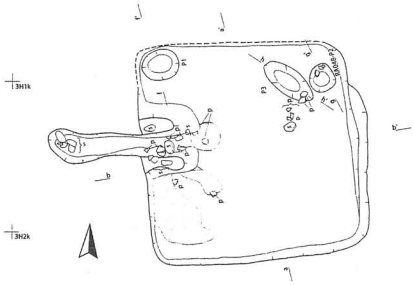
R A45



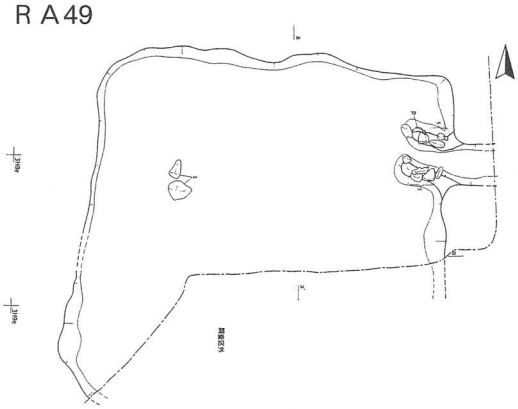
R A47



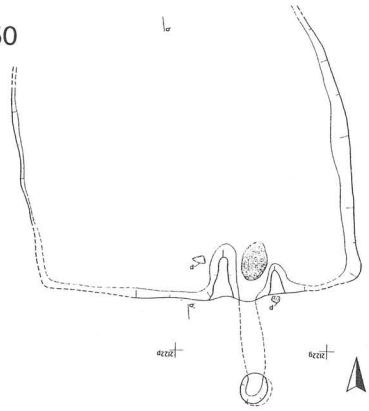
R A48



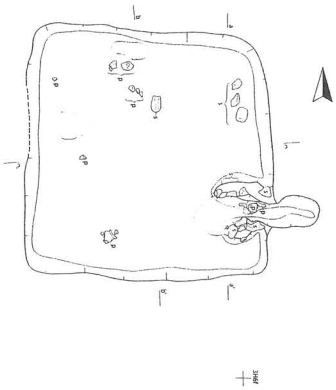
R A49



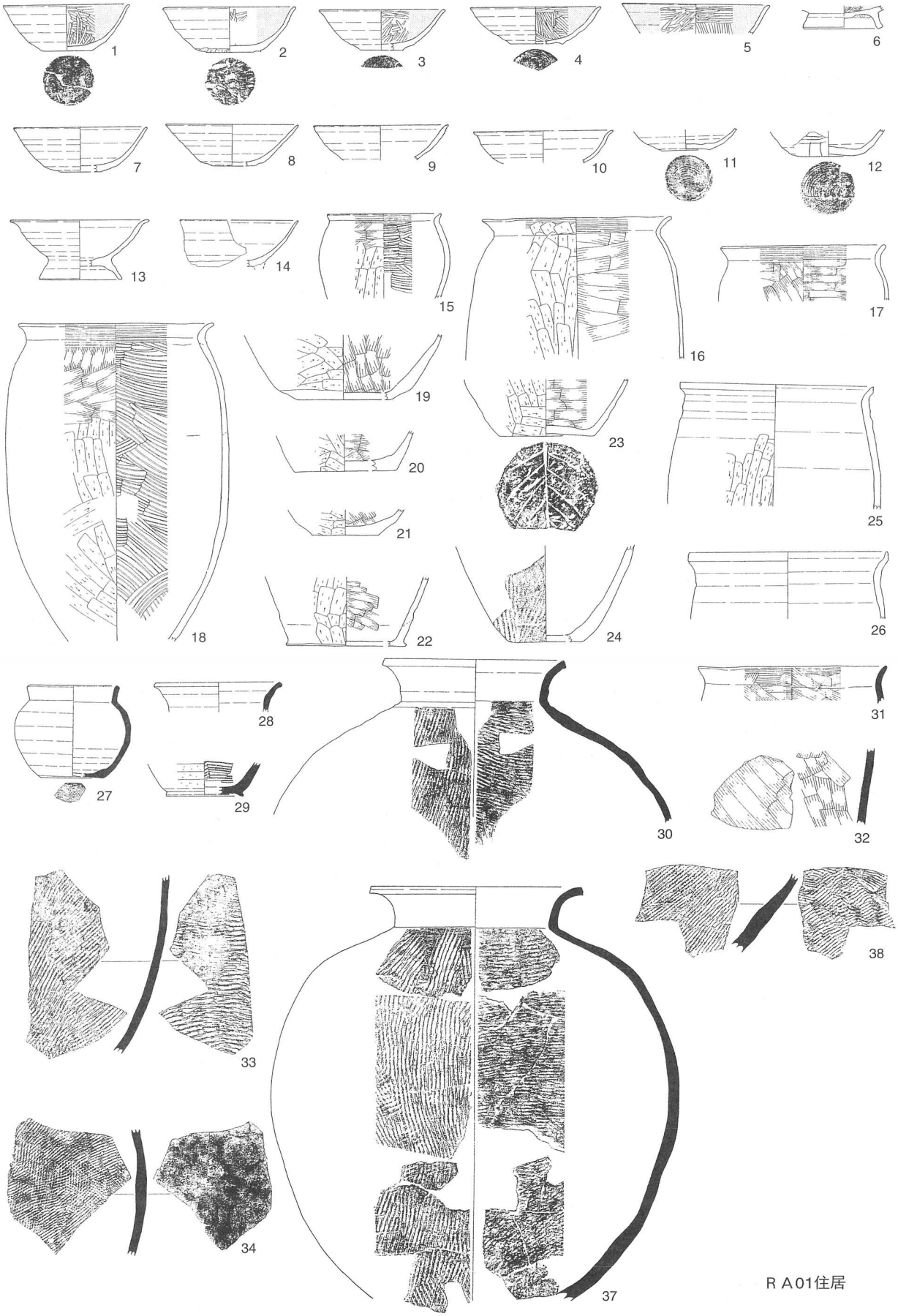
R A50



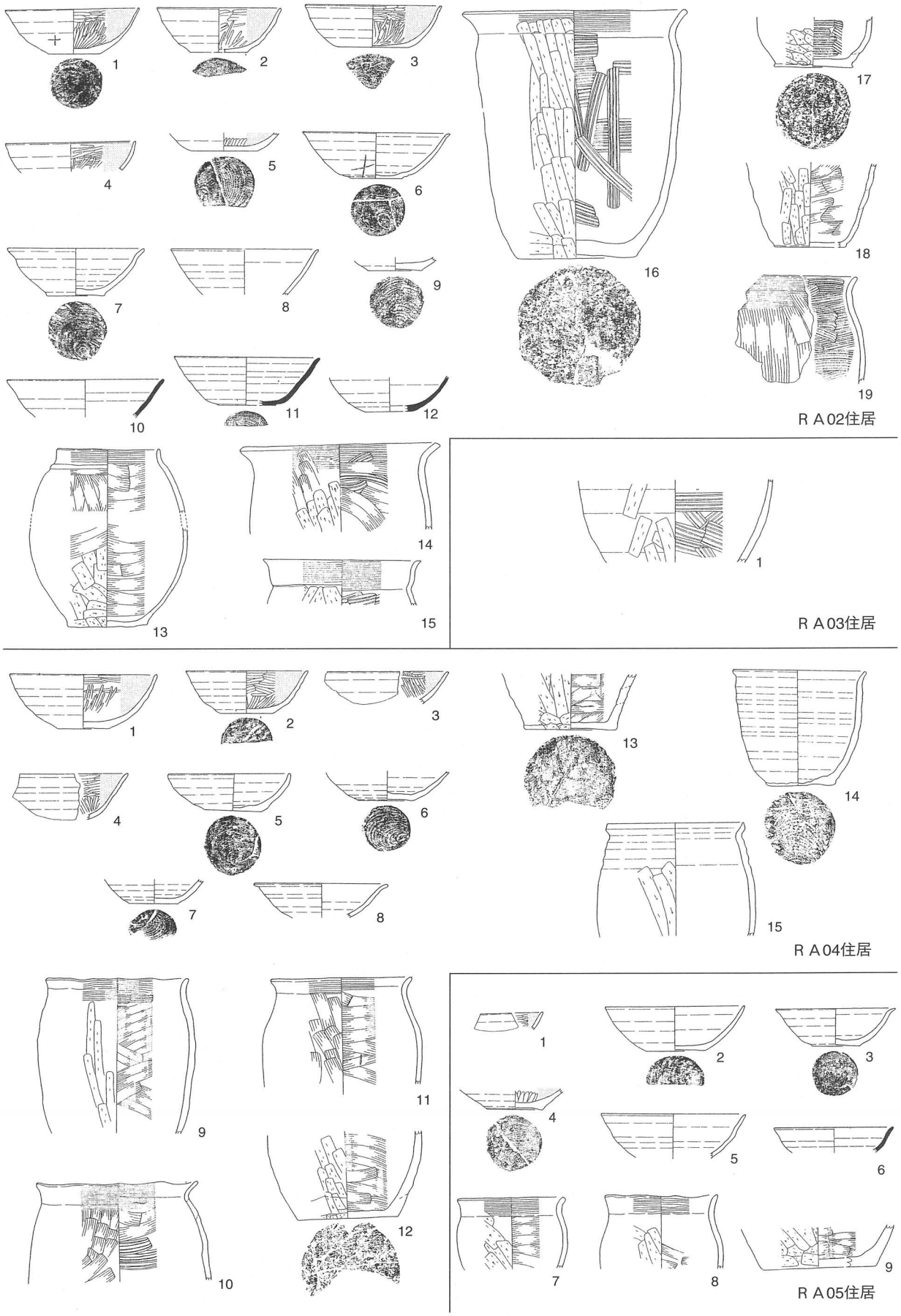
R A51



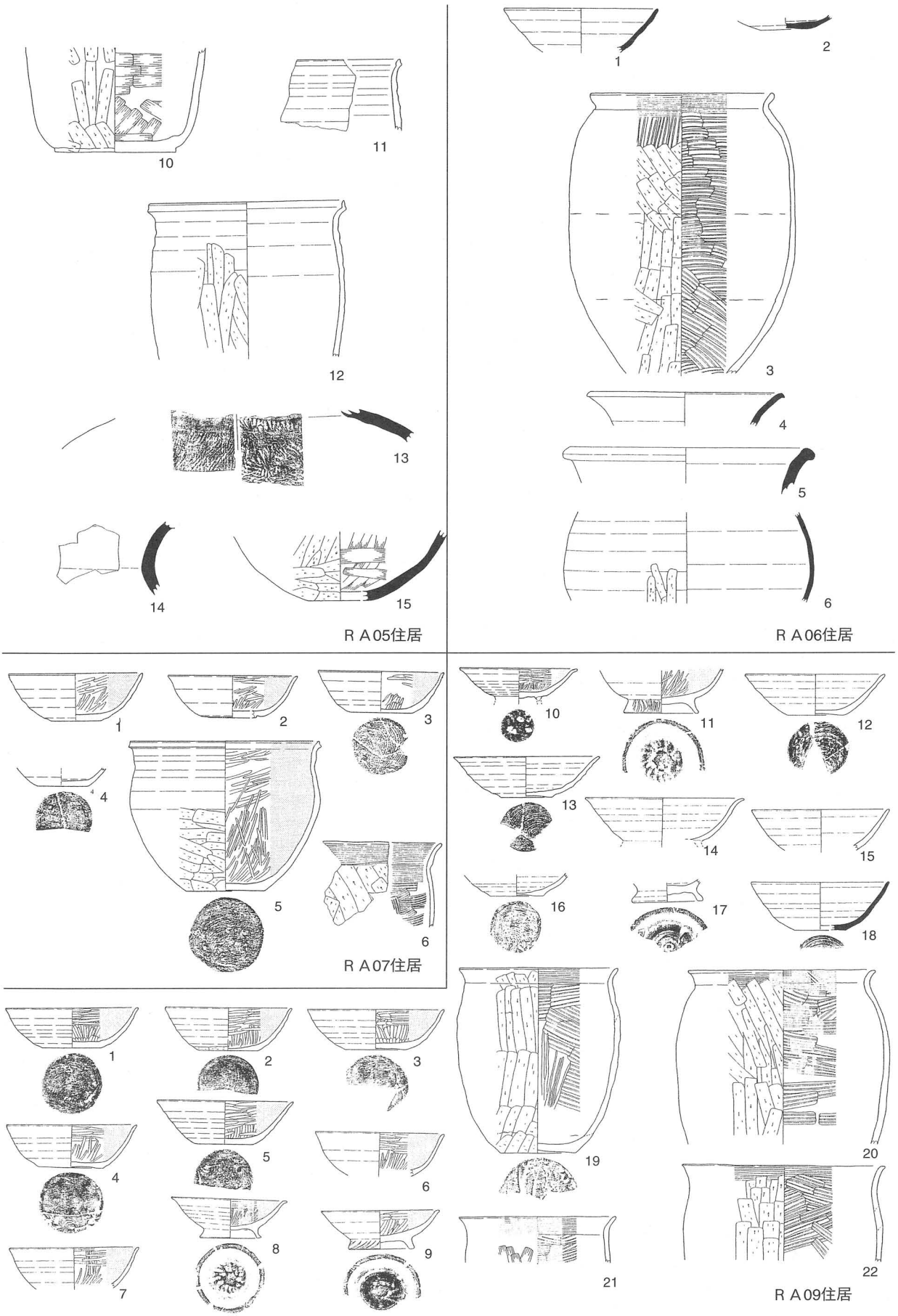
第56図　細谷地遺跡第８次竪穴住居跡集成（２）（ｓ＝1/100）



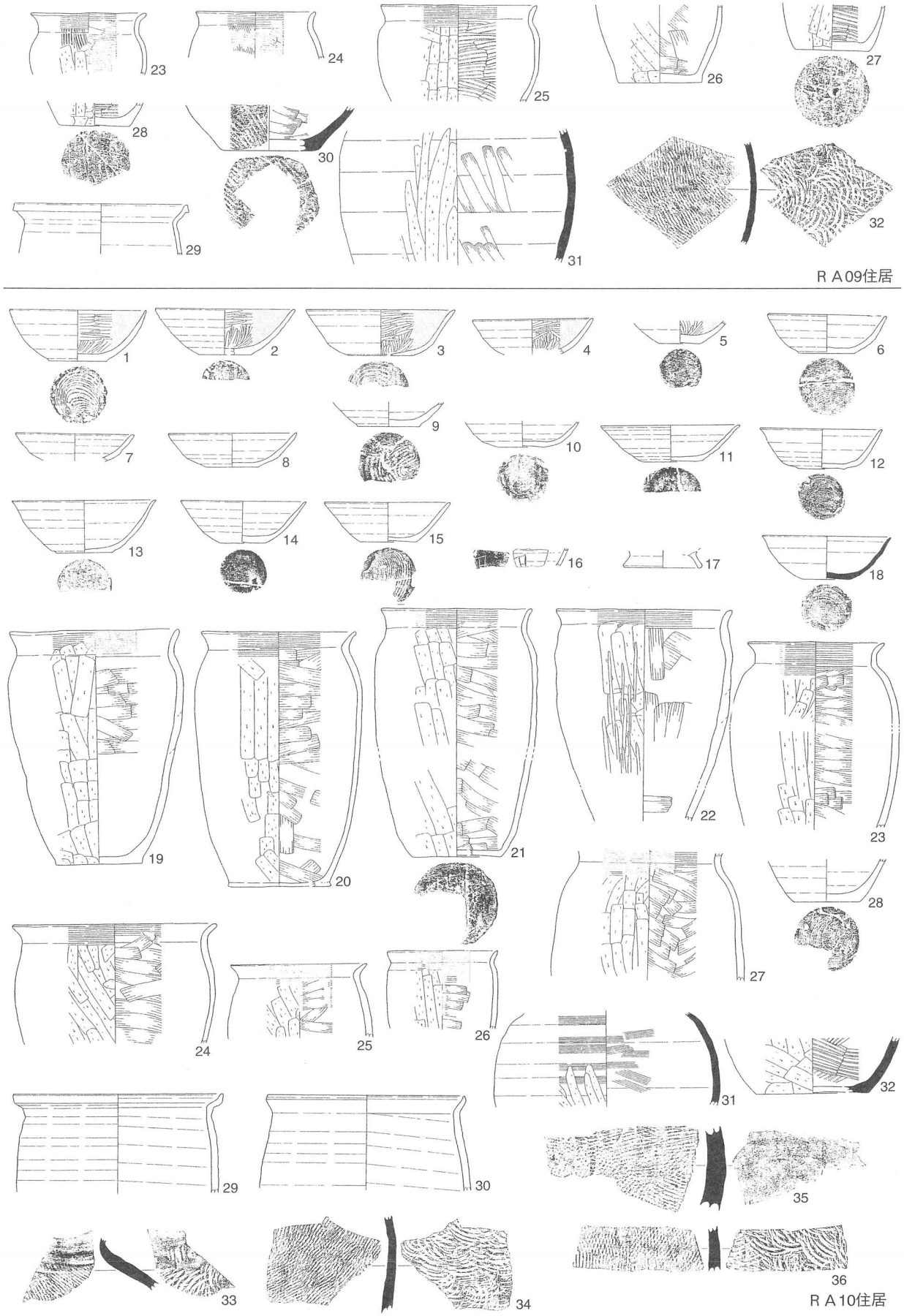
第57図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（１）（ｓ＝1/6）



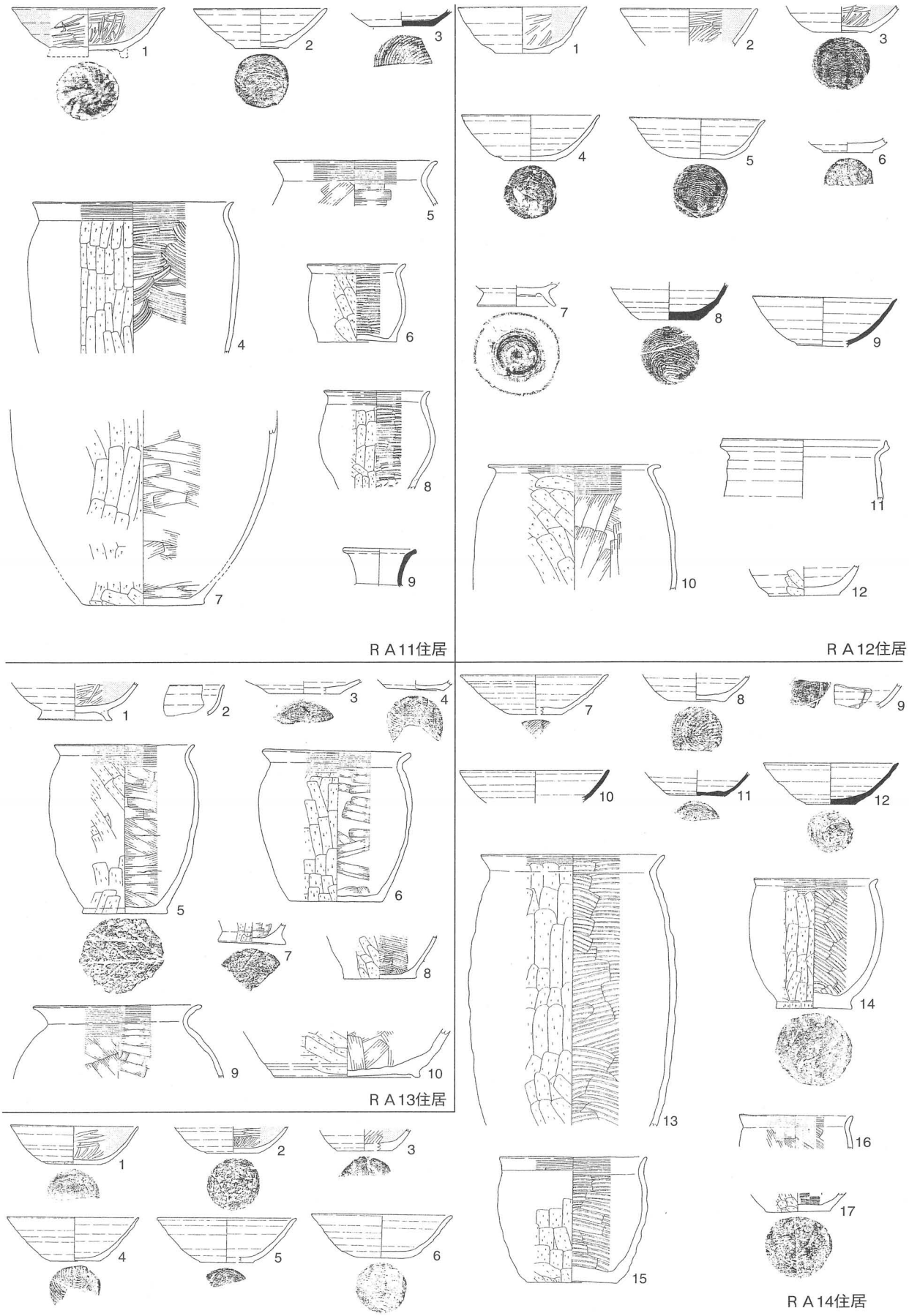
第58図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（２）（ｓ＝1/6）



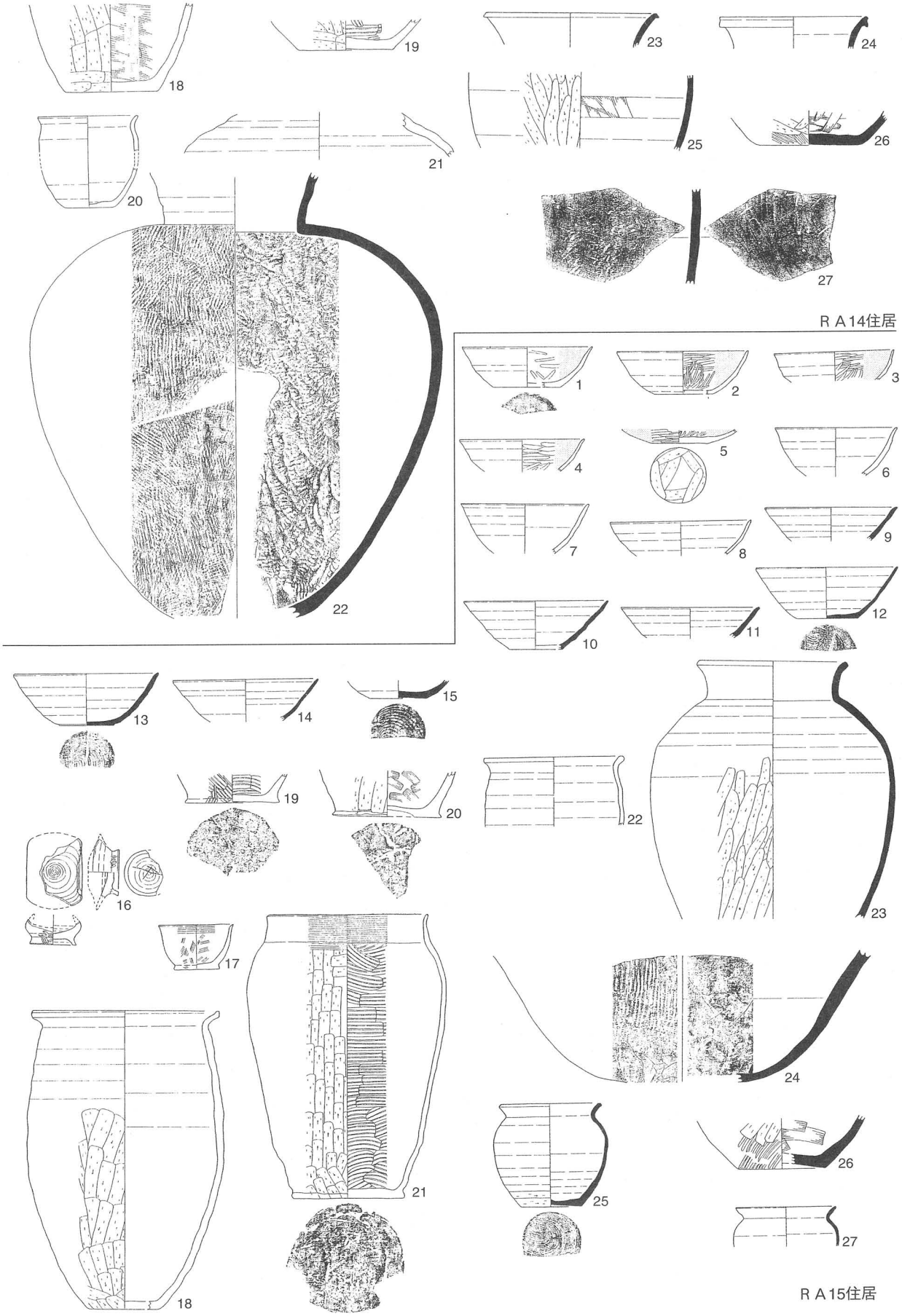
第59図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（３）（ｓ＝1/6）



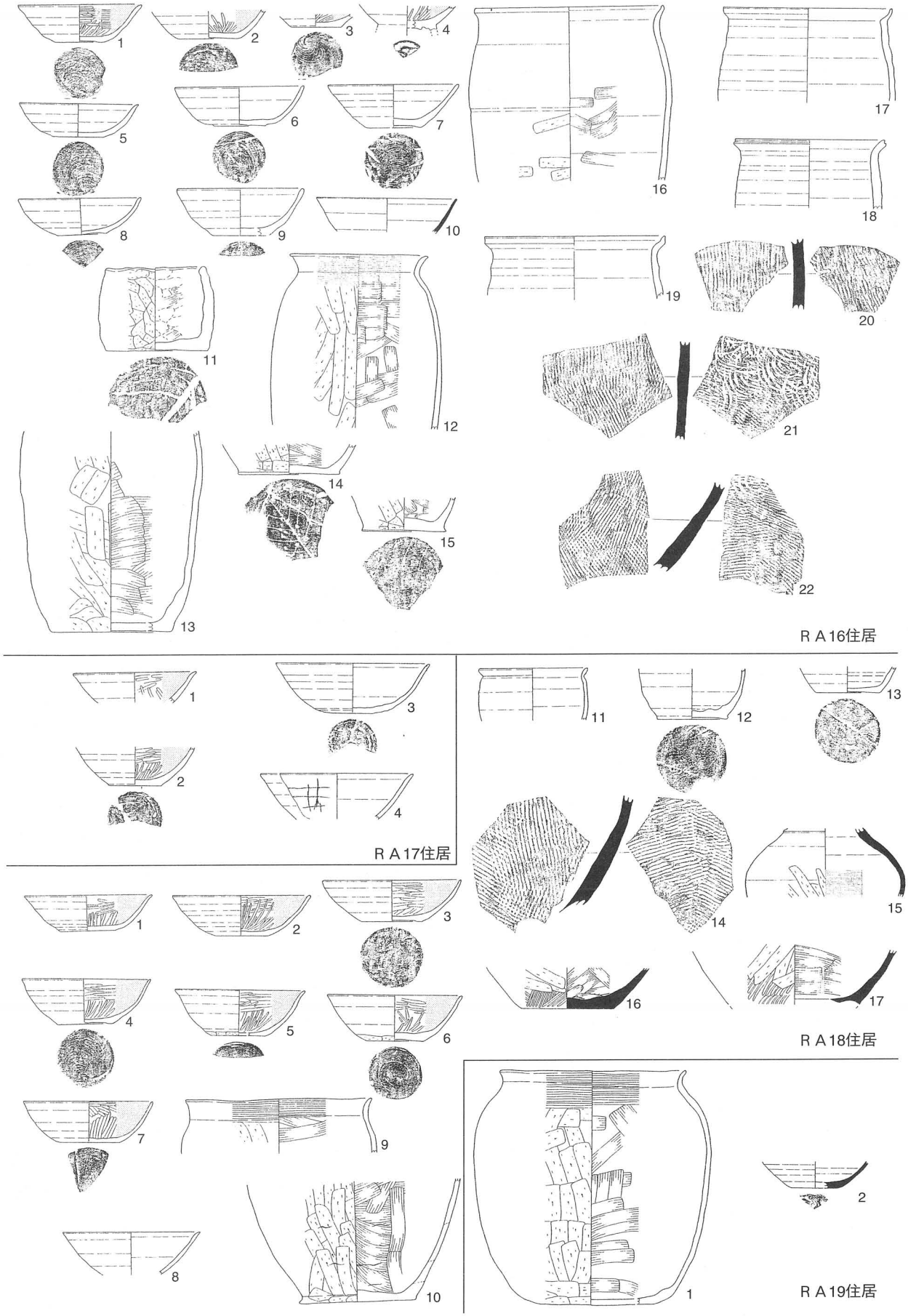
第60図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（４）（ｓ＝1/6）



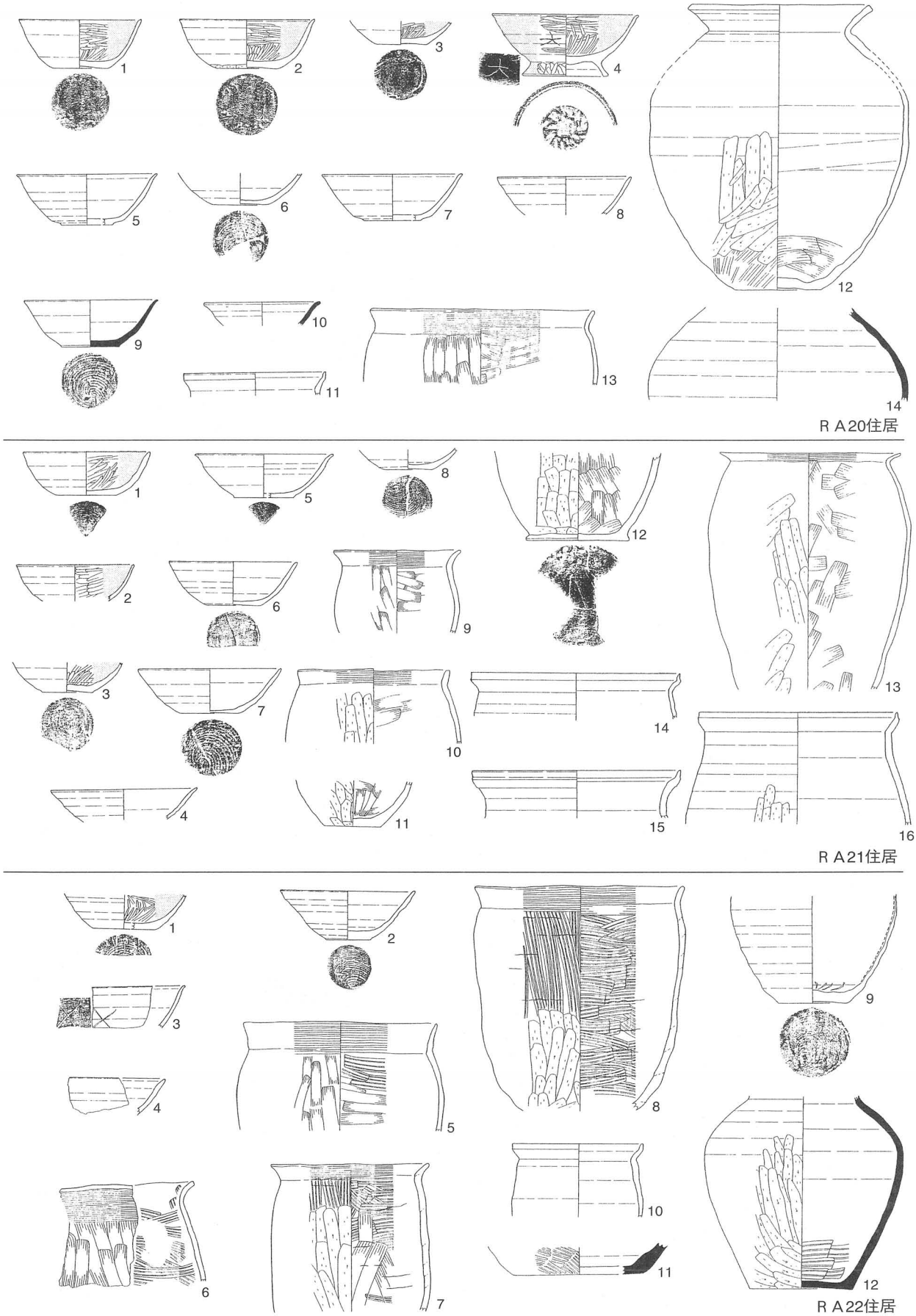
第61図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（５）（ｓ＝1/6）



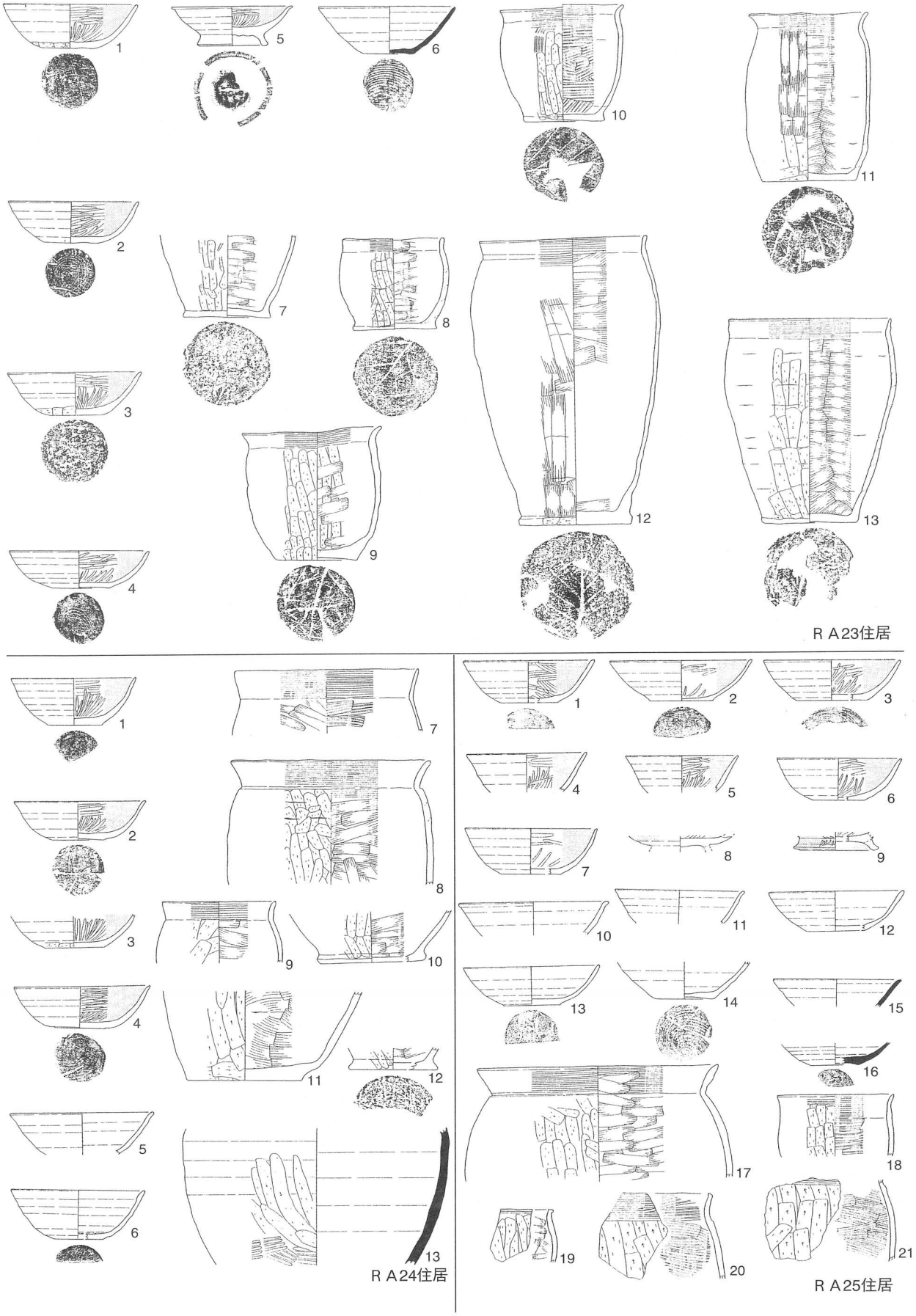
第62図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（６）（ｓ＝1/6）



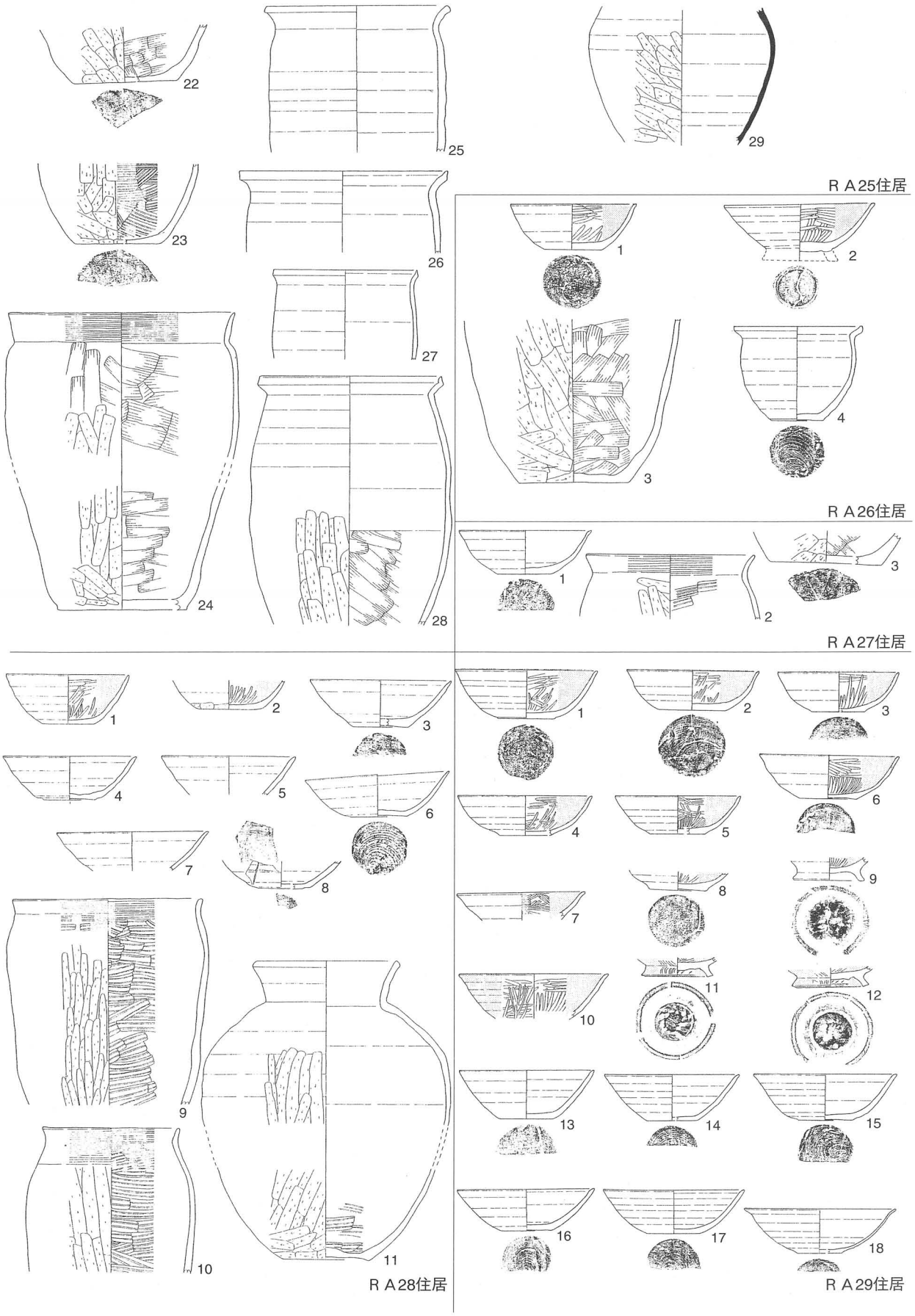
第63図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（７）（ｓ＝1/6）



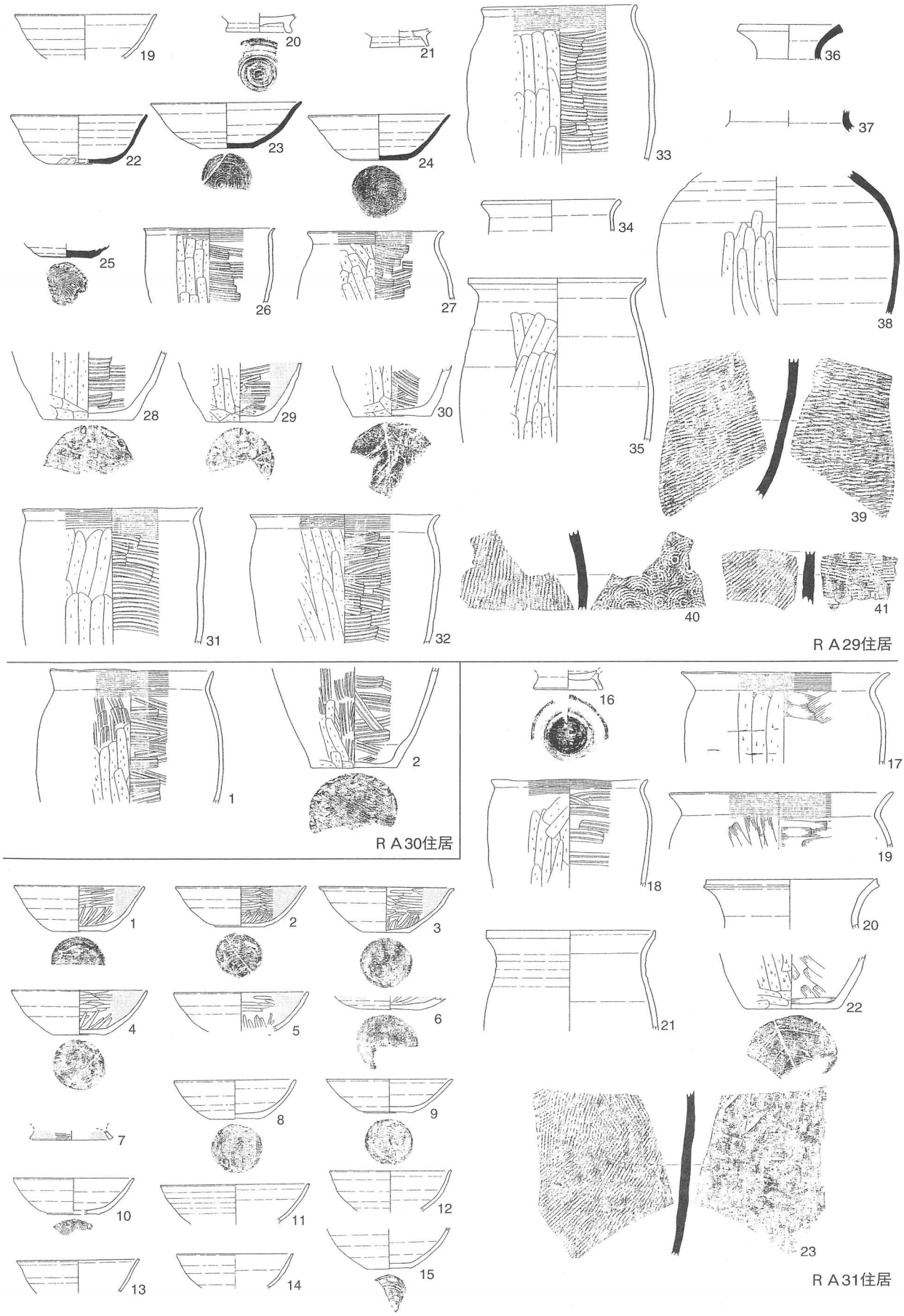
第64図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（８）（ｓ＝1/6）



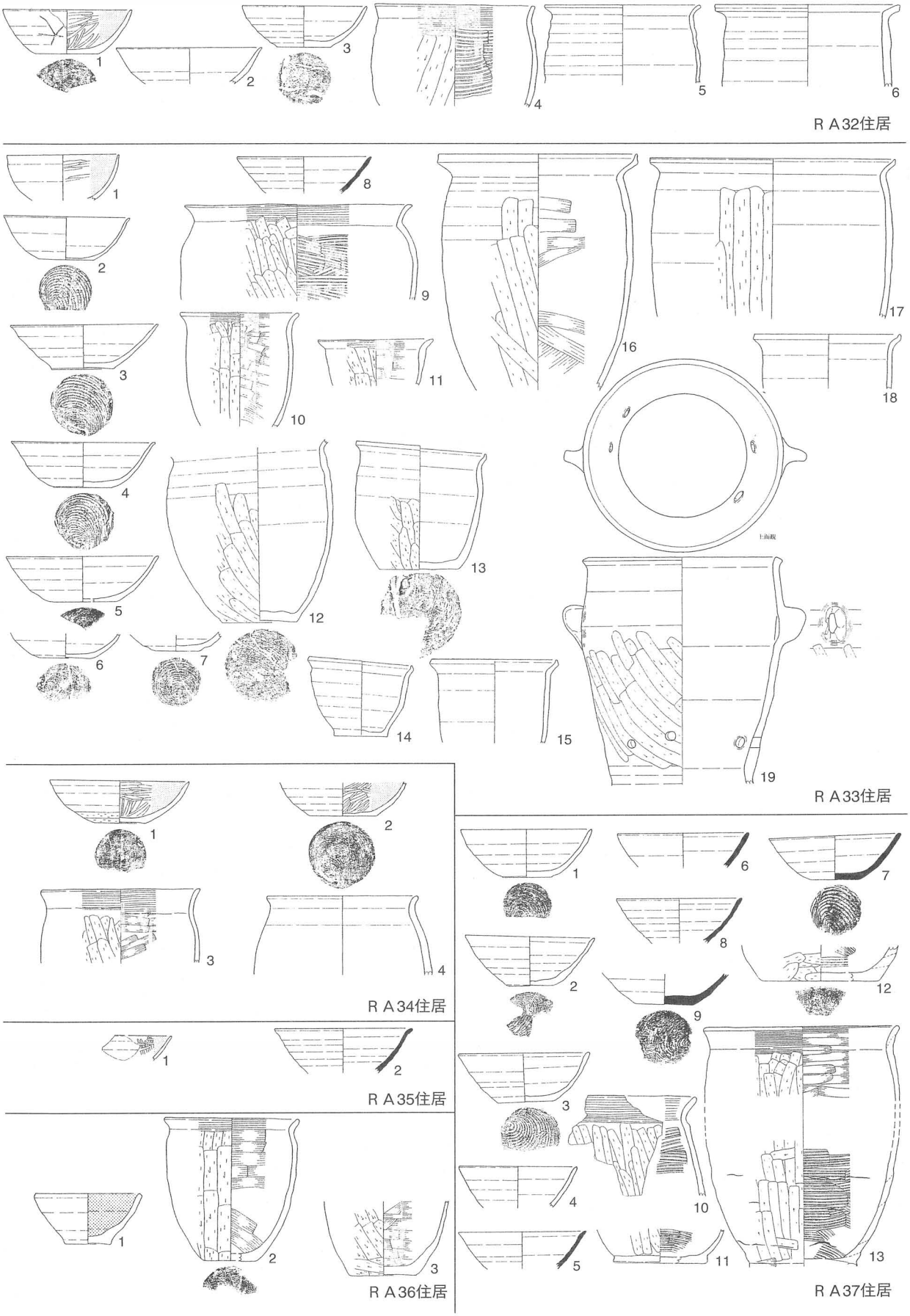
第65図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（９）（ｓ＝1/6）



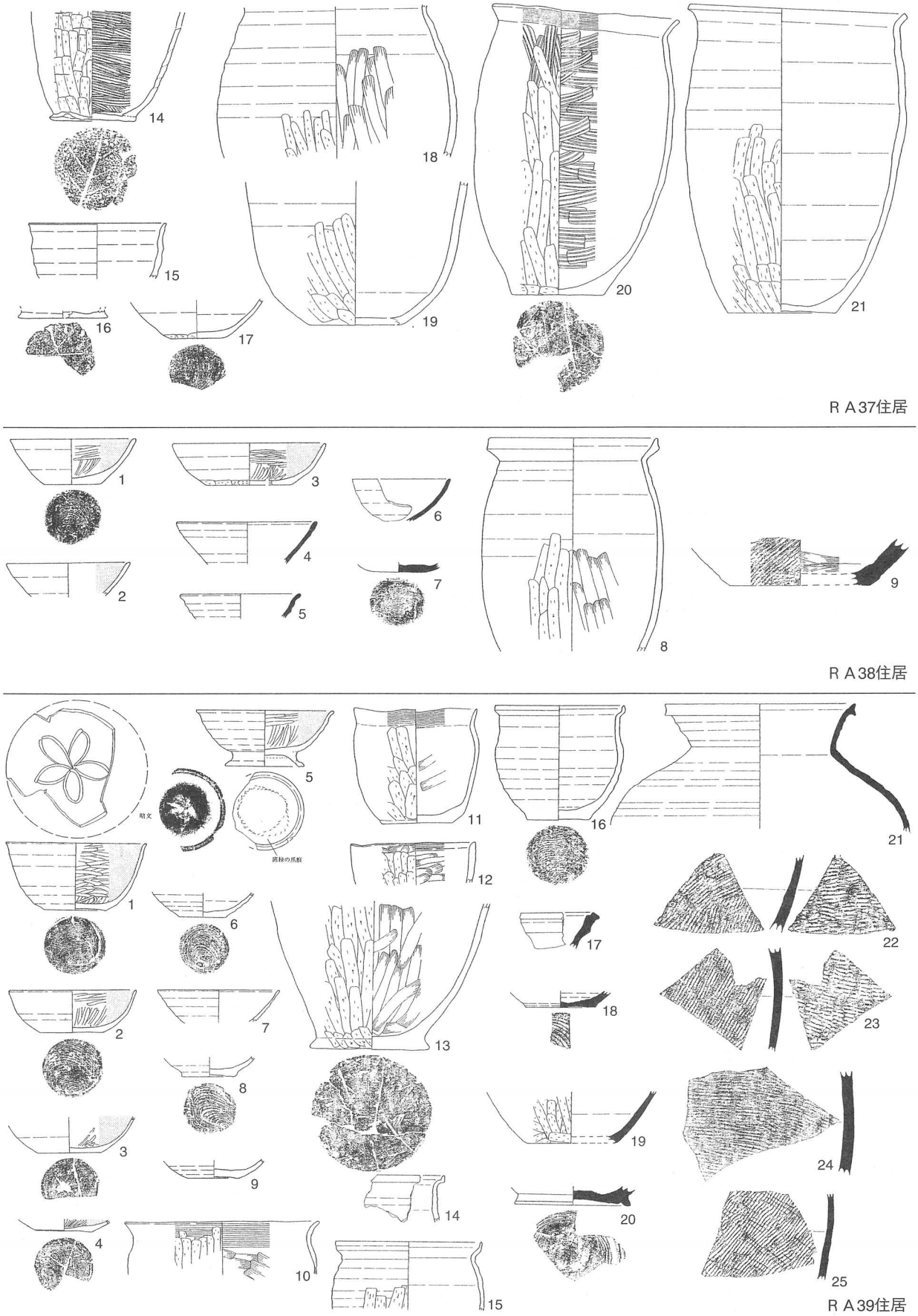
第66図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（10）（ｓ＝1/6）



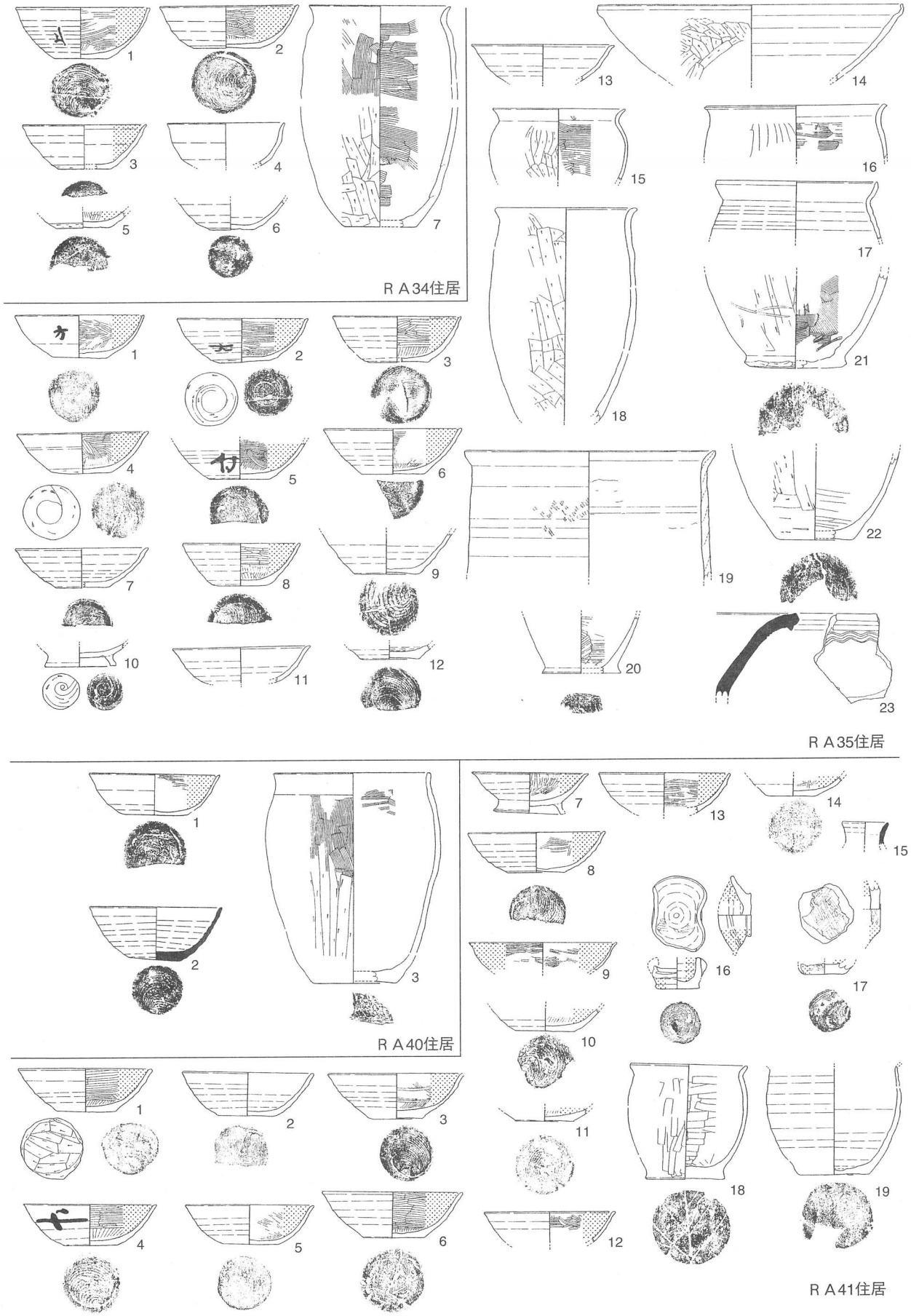
第67図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（11）（ｓ＝1/6）



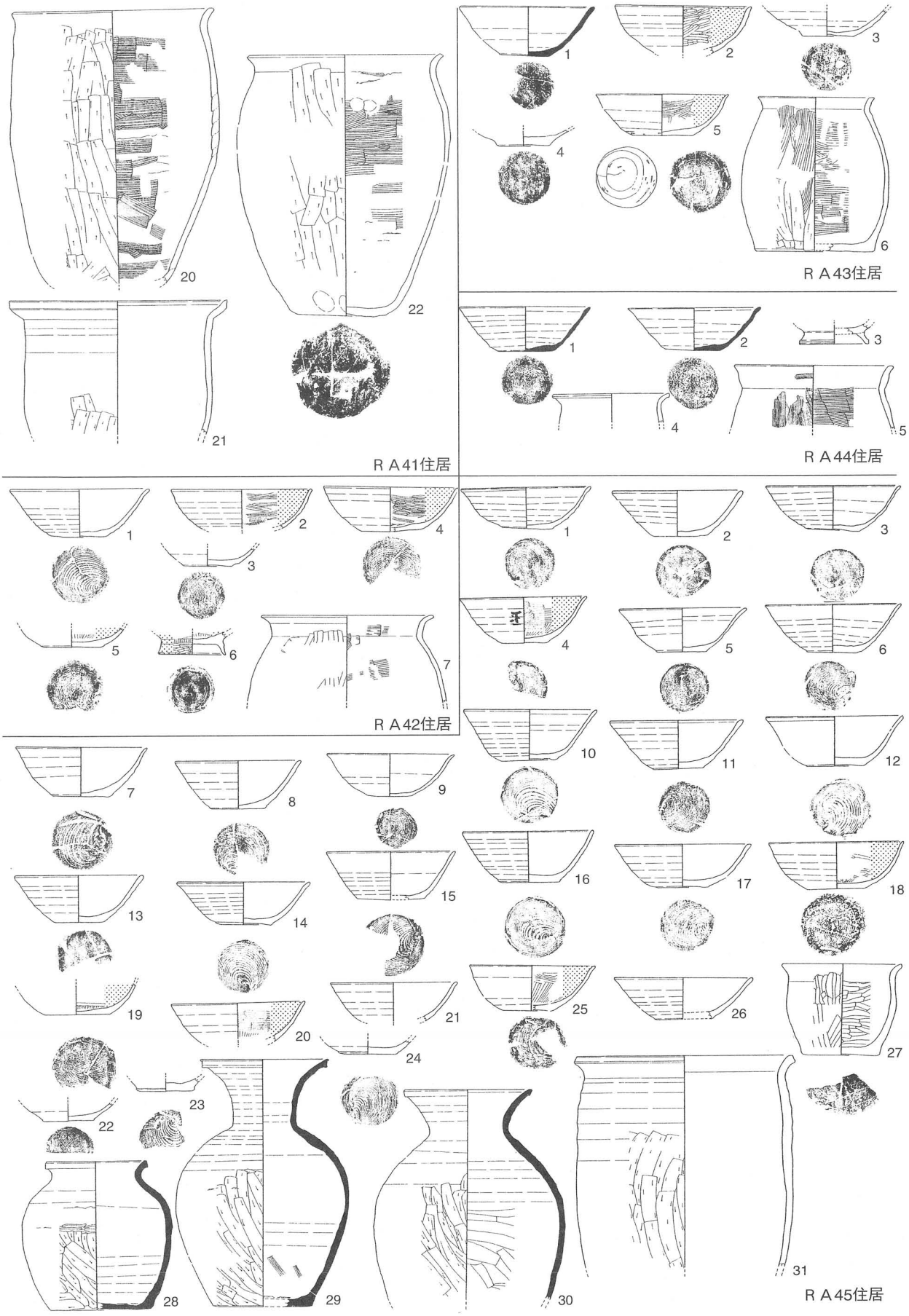
第68図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（12）（ｓ＝1/6）



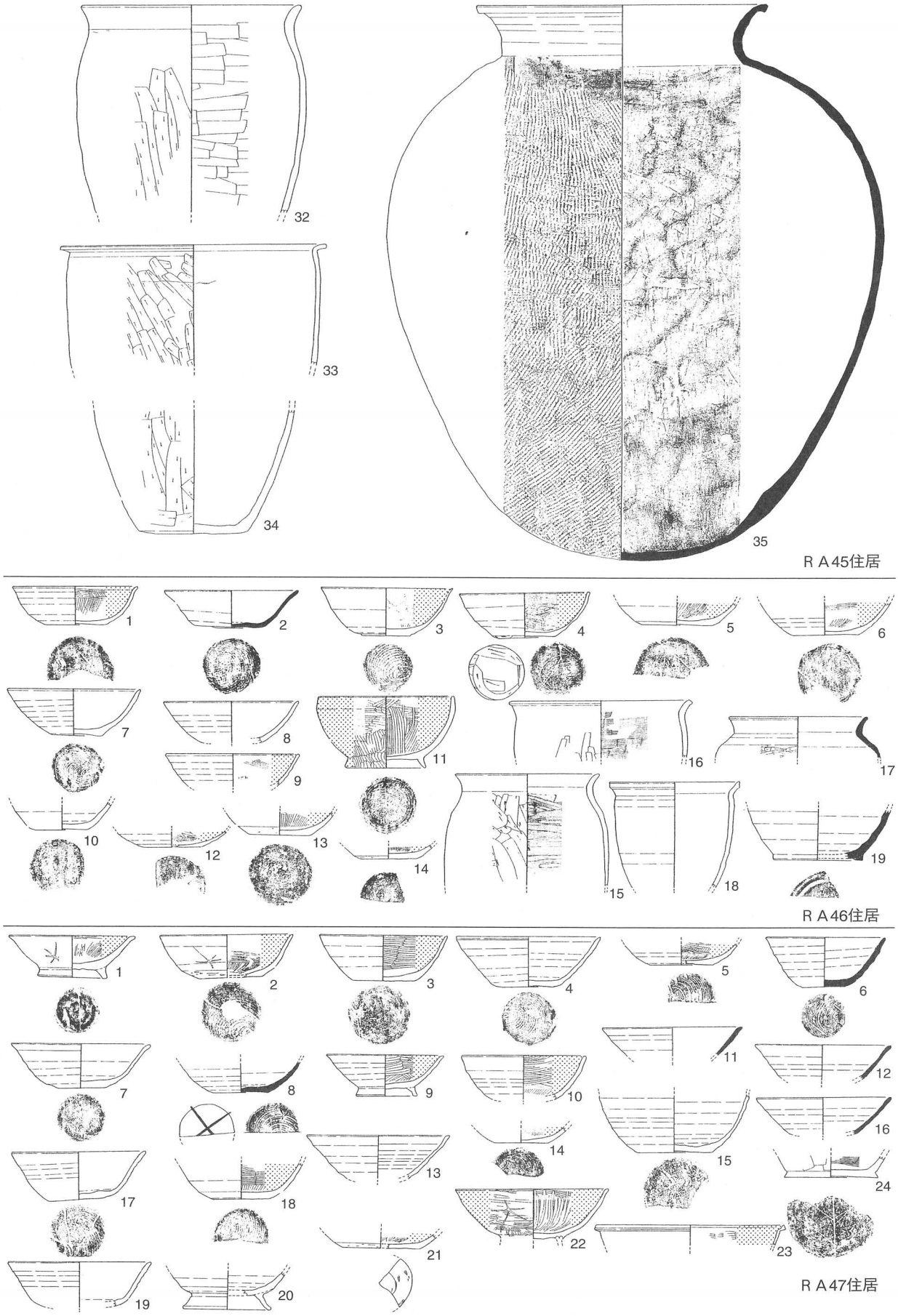
第69図　細谷地遺跡第４・５次住居跡出土土器集成（13）（ｓ＝1/6）



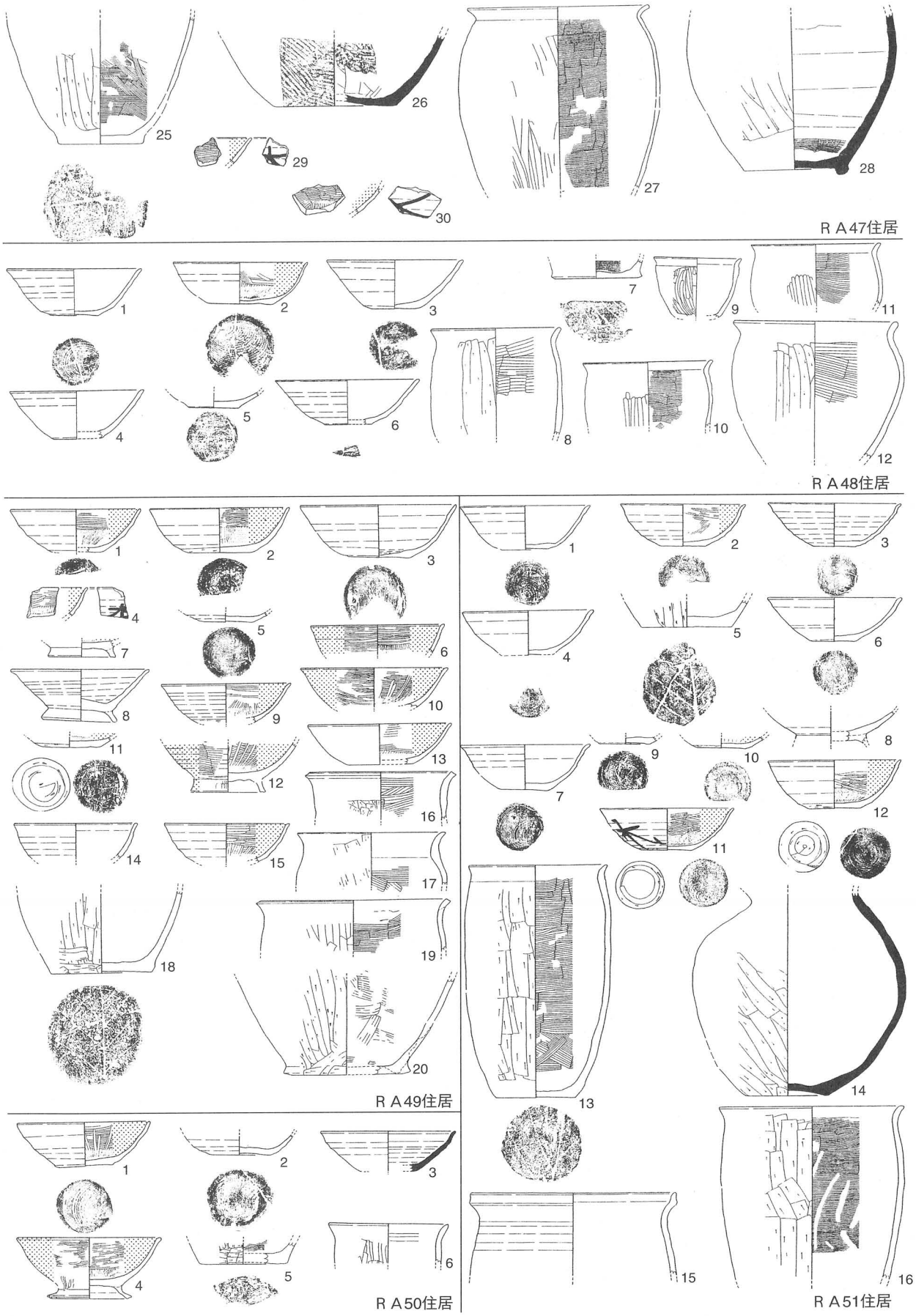
第70図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（１）（ｓ＝1/6）



第71図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（２）（ｓ＝1/6）



第72図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（３）（ｓ＝1/6）



第73図　細谷地遺跡第８次住居跡出土土器集成（４）（ｓ＝1/6）

（文献43）に焼土坑の可能性のある遺構を見つけた（ＡＡ03ピット）。細谷地遺跡から約５㎞南に存在し、105×90㎝の円形で深さ20㎝、焼土はブロック状だが、灰や木炭片も一緒に出土している。

以下、遺跡、調査区別に見ていく。収集した焼土坑のうち、比較的土器焼成土坑の可能性が高いものについては、第２表に記した。

・細谷地遺跡第15次調査区（第２表）今回の調査区である。以下の第４・５・８次調査区とは隣接し、第９・10次調査区は離れている（第３図）。ＲＡ153住居跡からロクロ・ピットが検出され、土師器焼成遺跡としての材料が増えた。ただし、ＲＡ153住居跡は担当者が異なっていたこと、さらに焼土坑が主として埋没沢に確認され、筆者は漠然と「土器を焼くときには空焚きをするものであり、湿気の強い場所で土器を焼くなんてことはあり得ない」と信じていたため、野外調査の時点では、“土器焼成”に関する認識はなかった。

検出された焼土坑は、覆土中の焼土が主体で被熱状態があまり良くなく現地性かどうか確信を持てないものが多いが、形や灰、炭化物の出土はそれらしい。特に出土した炭化物は小片が多く、その樹種は、サワグルミ、クリ、アオダモ、ヤマウルシなど、手近にあったと思われる雑木で、久保田氏の実験を彷彿させ（久保田　1989：p.58）、また北野博司氏の「古代の土師器の焼成技術」のまとめにも符合する（北野　1997：p.245）。

注目されるのは、焼土坑の分布である。ロクロ・ピットが検出されたＲＡ153住居跡の周りに折り重なるように分布するのである（第74図）。これがどの程度一般化できるのかわからないが、埋没沢というあまり好ましくない自然条件よりも、そのアクセスの良さが優先されているのであろう。

・細谷地遺跡第４・５次調査区（第２表）

第15次調査区北半の西側に隣接し、東西に長い調査区で、遺跡の北西隅にほぼ相当する（第３図）。

相当遺構は、「焼成の痕跡が見られる土坑」としてまとめられ（「焼成土坑」と略称）、報告者は、「焼成面が土坑内部全面に形成されず偏在すること、焼成の程度が比較的強いと見られること、居住域の内部に取り込まれている点から見て、現時点では土器焼成土坑の可能性が高いものと考えて」はいるが（報告書：p.271）が、積極的な裏づけがないことから、強く主張しているわけではない。

焼成土坑は、次のように二つに分類されているが、報告者は基本的には同じものと捉えているようだ（p.271）。「底面から側壁にかけて焼成面が形成されているもの」（報告書：p.191）を「一次焼成土坑」、「ある程度埋没ないし埋め戻された後にレンズ状の焼土層が形成されているもの」（同）を「二次焼成土坑」。第２表のＲＤ01～42土坑までの６基が一次焼成土坑、ＲＤ05～109土坑までの７基が二次焼成土坑に相当する。二次焼成土坑は、今回の第15次調査でも主体を占めるが、第４・５次の場合は、さらに覆土の上部に認められるという印象を受ける。また、今回の調査では全体的に長軸：単軸の比が大きいのに対し、第４・５次では小さく長方形というより方形に近いものが目立つ。

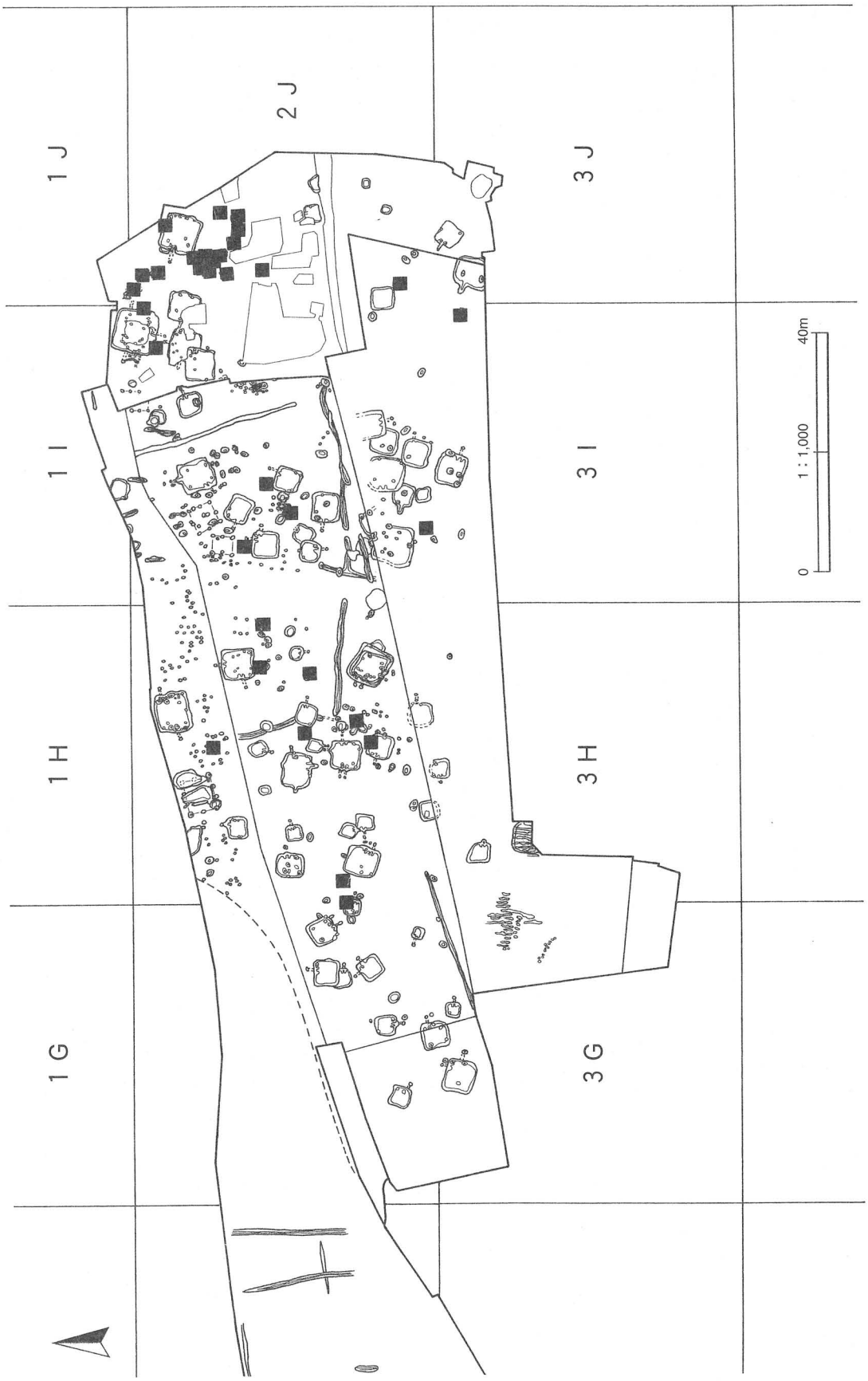
今回と特に対照的なのが分布である（第74図）。今回の調査ではかなり偏っていたのに対し、第４・５次では、ＲＤ109土坑を除き、段丘崖に近い住居跡検出区域に、基本的に点在しながら連綿と続くといった印象である。ＲＤ25と32、ＲＤ16と20のように、幾つかがまとまりを持っているというように見える部分もあるが。ところで、ＲＤ109は、これらから120ｍほど離れた調査区西端の旧河道から検出されている。検出された地点自体は、旧河道に挟まれた微高地であり（報告書：付図２）、直接水につかるような場所ではないようだが、竪穴住居を建てるのには二の足を踏むような場所であるらしく、周囲に住居は検出されていない。ＲＤ109土坑は、“別物”と考えた方が良いかも知れない。

・細谷地遺跡第８次調査区（第２表）

第15次調査区南半の西側に隣接し、第４次調査区にほぼ併行する（第３図）。３基の焼土坑が確認

第２表　「盛南開発」地域における土師器焼成遺構の可能性のある焼土抗

No.	遺跡		遺構		平面形	規模 cm	深さ cm	壁～底の形	被熱状態	備考（重複・出土遺物・その他）	時期	点数	文献
	遺跡名	立地	遺構名	立地									
1	細谷地15次	段丘	RD343	埋没沢脇	長楕円？	135×？	15	なだらか～平	底→片端	カクラン・土師器坏口縁部片カクランから	９ｃ末±	7	
2	細谷地15次	段丘	RD344	埋没沢	台形	135×125	10	なだらか～平	－	集中区・上面から須恵器破片、完形に近い状態に復元	９ｃ末±	-	
3	細谷地15次	段丘	RD345	埋没沢	楕円形	140×110	12	なだらか～平	覆土焼土ブロック→偏り	集中区・重複→最新・遺物なし	９ｃ末±	9	
4	細谷地15次	段丘	RD346	埋没沢	隅丸長方形	128×105	14	なだらか～平	－	集中区・重複→古・遺物なし	９ｃ末±	-	
5	細谷地15次	段丘	RD347	埋没沢	長方形	136×100	8	なだらか～平	底直上に淡い焼土？	集中区・重複→古・遺物なし	９ｃ末±	9	
6	細谷地15次	段丘	RD348	埋没沢	不整長方形	153×110	12	なだらか～平	底→焼土？	集中区・土師器甕胴部破片出土	９ｃ末±	9	
7	細谷地15次	段丘	RD349	埋没沢	方形基調	165×？	18	なだらか～平	覆土焼土→偏り	集中区・重複→古・土師器甕、坏片・覆土下部→灰、炭化物	９ｃ末±	10	
8	細谷地15次	段丘	RD350	埋没沢	不整長方形	210×175	18	なだらか～平	覆土焼土→偏り	集中区・重複→新・土師器片比較的多い・覆土下部→灰など	９ｃ末±	10	
9	細谷地15次	段丘	RD351	埋没沢	不整長方形	236×145	35	なだらか～平	覆土焼土→偏り	集中区・重複→新・土器小片多・覆土下部→灰、ヤマウルシ炭	９ｃ末±	10	本
10	細谷地15次	段丘	RD352	埋没沢	長方形	180×160	20	なだらか～平	－	集中区・重複→古・土師器坏、須恵器壺片出土	９ｃ末±	-	
11	細谷地15次	段丘	RD353	埋没沢	方形基調	148×138	30	テラス？	壁、覆土？→偏り	集中区・土師器、須恵器坏・段浅いのは焼土の反対側・灰	９ｃ末±	11	書
12	細谷地15次	段丘	RD354	埋没沢	長方形	160×130	25	なだらか～平	壁？、覆土→偏り	集中区・須恵器坏片出土	９ｃ末±	9	
13	細谷地15次	段丘	RD355	埋没沢脇	方形基調	204×？	26	なだらか～平	底→片端	RA153住居と重複→古・遺物なし	９ｃ末±	9	
14	細谷地15次	段丘	RD357	埋没沢脇	方形基調	120×110	30	スロープ	－	傾斜低い方床直に炭化材（クリ）・土師器甕片、磨石出土	９ｃ末±	-	
15	細谷地15次	段丘	RD358	埋没沢脇	方形基調	140×120	30	スロープ	－	須恵器壺胴部、土師器甕底部出土	９ｃ末±	-	
16	細谷地15次	段丘	RD359	埋没沢脇	長方形？	240×？	25	なだらか～平	壁～底→片端	覆土中央にも焼土、反対側にも焼土・アオダモ炭化材・土器片多	９ｃ末±	9	
17	細谷地15次	段丘	RD361	埋没沢脇	方形基調	128×108	26	スロープ？	底→偏り	重複→新・掘り方？・サワグルミ炭化材、土師器甕、磨石	９ｃ末±	10	
18	細谷地15次	段丘	RD362	埋没沢脇	方形基調？	100×？	10	なだらか～平	覆土焼土？	重複→古？・土師器坏小片出土	９ｃ末±	7	
19	〃　4次	段丘	RD01		方形	152×144	24	なだらか～平	底～壁→偏り	住居と重複→古・土師器坏、甕・炭化物	９ｃ末±	1	23
20	〃　4次	段丘	RD11		方形	142×130	28	テラス	底→偏り	土師器坏出土	９ｃ末±	4	23
21	〃　4次	段丘	RD16		方形？	112×？	26	なだらか～平？	壁～底→偏り	住居と重複→古・土師器坏・炭化物	９ｃ末±	1	23
22	〃　4次	段丘	RD25		方形	150×112	35	底平ら	壁→三方向	底面上炭化物集中	平安	3	23
23	〃　4次	段丘	RD41		台形	150×150	28	スロープ	壁～底→偏り	覆土中央にも焼土・土師器、須恵器出土	９ｃ末±	2	23
24	〃　4次	段丘	RD42		長方形	172×130	35	スロープ？	壁～底→偏り	重複→古・土師器出土	９ｃ末±	2	23
25	〃　4次	段丘	RD05		円形基調	102×98	22	なだらか～底	覆土→偏り	土師器、須恵器出土	９ｃ末±	0	23
26	〃　4次	段丘	RD09		方形	142×118	28	テラス？	覆土	覆土中層に草木灰	平安	3	23
27	〃　4次	段丘	RD20		楕円形	100×77	27	一様でない	底面直上ブロック状		平安	3	23
28	〃　4次	段丘	RD32		円形	120×120	35	逆台形	覆土上位	住居と重複→新	平安	2	23
29	〃　4次	段丘	RD46		方形	110×100	20	スロープ	覆土上位		平安	2	23
30	〃　5次	段丘	RD86		長方形	132×86	22	凹凸著しい	覆土上位		平安	1	23
31	〃　5次	段丘	RD109	旧河道	方形	145×110	18	なだらか～平	覆土中～上位		平安	1	23
32	〃　8次	段丘	RD137		方形	134×134	30	なだらか～平	底面→偏り	土師器破片出土	９ｃ末±	7	36
33	〃　8次	段丘	RD138		方形	170×136	16	なだらか～平	底面？→偏り	焼土付近焼けた礫出土	９ｃ末±	7	36
34	〃　8次	段丘	RD139		不整方形	192×120	21	なだらか～平	底面→偏り	覆土上位に焼けた礫出土・土師器出土	９ｃ末±	7	36
35	〃 9・10次	段丘	RD153	埋没沢	長楕円形	187×91	31	スロープ	壁～底→偏り	底面直上間層挟んで灰層・土師器、須恵器	９ｃ末±	3	67
36	〃 9・10次	段丘	RD154	埋没沢脇	円形基調	123×99	24		壁、底カーボン層上	住居と重複→新（凹み時）・底面にカーボン層・土師、須恵、炭化材	平安	0	67
37	〃 9・10次	段丘	RD155		方形	150×132	24	スロープ	底面直上→偏り	重複→古・焼土→黒色土層・土師器焼土上、ケヤキ炭化材	平安	8	67
38	〃 9・10次	段丘	RD156		方形基調	133×120	29	なだらか～平	覆土ブロック状	住居と重複→新・底面地山ブロック含む暗褐色土・土師、須恵器	平安	7	67
39	〃 9・10次	段丘	RD157		長方形	112×81	25	なだらか～平	覆土上～中位	焼土→覆土中位炭粉層上・掘り方・土師器失敗剥片、須恵器	平安	9	67
40	〃 9・10次	段丘	RD158		楕円形	139×91	27	なだらか～平	覆土壁際→偏り	住居より新・覆土中位炭粉層・掘り方・土師器失敗剥片、須恵器	平安	9	67
41	〃 9・10次	段丘	RD159		楕円形	89×78	27	なだらか～平	壁際→偏り	住居と重複→新・底直灰層・土師器、須恵器、炭化材	平安	10	67
42	〃 9・10次	段丘	RD160	埋没沢	長楕円？	163×111	25	なだらか～平	壁～底？→偏り	住居と重複→新・二等辺三角形？・掘り方・土師、須恵器	９ｃ末±	7	67
43	〃 9・10次	段丘	RD161	埋没沢？	方形基調	84×67	14	なだらか～平	覆土上～中位	炭化材出土	平安	1	67
44	熊堂Ｂ20次	段丘	RD134		不整方形	215×215	24	なだらか～平	底→偏り	重複→新・土師器甕破片出土	平安	1	39
45	熊堂Ｂ20次	段丘	RD135	埋没沢脇	不整方形	175×140	22	なだらか～平	覆土中位→偏り	土師器小片出土	古代	9	39
46	熊堂Ｂ20次	段丘	RD138	埋没沢脇	円形	60×60	16		覆土上位→偏り	RD139と重複→新	古代	8	39
47	熊堂Ｂ20次	段丘	RD139	埋没沢脇	不整長楕円	180×130	20	凹凸	覆土上位→偏り	RD138と重複→古	古代	9	39
48	熊堂Ｂ20次	段丘	RD140	埋没沢脇	不整方形	115×115	8	なだらか～平	覆土？→偏り		古代	7	39
49	熊堂Ｂ20次	段丘	RD141	埋没沢脇	不整長形	120×60	26	スロープ？	覆土中位→偏り	重複→古・本土坑自体重複？・土師器坏出土	９ｃ末±	4	39
50	熊堂Ｂ20次	段丘	RD143	埋没沢脇	長楕円形	110×70？	34	なだらか～平	覆土中位→偏り	重複→新・土師器坏出土・中位→炭	９ｃ末±	3	39
51	熊堂Ｂ20次	段丘	RD145	埋没沢脇	長形？	？×50	5	なだらか～平	床？ブロック→偏り	土坑自体重複？	古代	3	39
52	熊堂Ｂ20次	段丘	RD147		方形	175×140	18	なだらか～平	覆土下位→偏り	土師器甕底部出土	古代	7	39
53	熊堂Ｂ20次	段丘	RD148		不整長形	185×130	50	スロープ？	底→偏り？	土坑自体重複？か掘り方？	古代	8	39
54	〃　25次	段丘	RD203		不整方形	156×118	16	なだらか～平	底→偏り	被熱礫底面から出土	不明	1	61



第74図　細谷地遺跡第４・５・８・15次調査区における焼土坑の分布（■が焼土坑）

●細谷地遺跡
第９・10調査区

●本宮熊堂Ｂ遺跡
第20次調査区
（Ｅ区西）

※ 縮尺は両方とも
１：1,000

第75図　細谷地遺跡第９・10次調査区、本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区における焼土坑の分布（■が焼土坑）

され、土師器焼成時の失敗品である剥片土器が出土した土坑が1基ある。報告書に難があり、残念ながらこれらの土坑の位置関係を読み取ることはできない。すなわち、報告書の遺構配置図に土坑名が記されておらず、また個々の記載にも不明瞭な点が多く推定することもできない。例えば、ＲＤ138土坑では、図にも文章記載にも2J3eのグリッド名が見られるが、もしこれが正しければ調査範囲から大きく外れていることになる（正誤表にもなし）。個々の遺構の図と配置図の図が顕著に異なるため、形から推測することもできない。第67図のトーンを被せた土坑がそれに相当するのかも知れないが、説明はない。これが正しいとすれば、土坑の間は10～36m離れている（第74図）。近接した二つの焼土坑は、剥片土器が出土した土坑とも９～12mとほぼ等間隔で並ぶようである。なお、第２表に示したＲＤ137、138土坑の法量も、図と文章では大きく異なっている。ここでは図の方に従った。

剥片土器が出土したのは、ＲＤ140土坑で、153×133㎝の丸みを帯びた方形で深さ25㎝、覆土は単層で剥片土器はほぼ満遍なく出土したようだが、特に北半分の下位～底面に多く出土したそうである。剥片は192点。遺物から９世紀後半～10世紀前半と推定されている。

・細谷地遺跡第９・10次調査区（第２表）

遺跡の北東端の一部に相当する（第３図）。今回の調査区からは、170m以上離れる。９・10次は、調査委託者の違いで、調査区は入り組んでいるので、ここでは一括する。

第８次調査と同様の、土師器焼成失敗品と考えられる剥片状の土器片が、焼成土坑から出土しており（ＲＤ157・158土坑）、土師器焼成遺構としての性格を裏付ける。第４・５次報告書に倣い、「一次焼成土坑」、「二次焼成土坑」に分けており、第２表のＲＤ153・154土坑の２基が一次焼成土坑、ＲＤ155～161土坑までの７基が二次焼成土坑に相当する。しかし、ＲＤ159土坑の場合は、竪穴住居と重複して掘り込まれ、焼土が形成された面がたまたま住居覆土中であっただけであり、一次焼成土坑と考えた方が良いのではないか。さらに、ＲＤ157・158・160土坑も、掘り方を持っていることを考えれば、“黒土”中に焼土が形成されていても、一次焼成土坑と考えた方が良いかも知れない。ＲＤ153・160土坑を除き、円形あるいは方形基調で“長いもの”は少ない。掘り方を持つものが注目される。

ＲＤ157～159土坑のように近接するものがあり、幾つかのまとまりを見せながらも、基本的には調査区の北から南まで散在している（第75図）。その周囲には竪穴住居が存在し、今回の15次調査区のＲＡ153住居跡と“集中区”のような関係が認められるのではないかと思われるが、残念ながら“ロクロピット”のような有機的関連が窺われるものはないようである。ただし、近接するＲＤ157～159の形状が比較的似ていることから、その“まとまり”の背後に類似する原因を読み取ることは許されるのではないかと考える（例えば同じ“経営主体”）。

・向中野館遺跡

細谷地遺跡の北東側に隣接する（第５図）。第３次調査区から焼土坑が１基検出されているが（文献15）、最も近い細谷地遺跡の焼土坑ＲＤ155（第10次調査区）からは当時の湿地を挟んで約180m離れている。ＲＤ06土坑が相当するが、図面（報告書：第13図）はプランが二つあるのに説明がなく、掘りすぎなのかどうかはっきりしない。観察表（p.27）には、232×189㎝の不整形、深さ22㎝とある。図では壁に焼土のトーンが貼ってあるが、観察表に説明はない。８世紀代の土師器甕と９世紀後半～10世紀初頭の土師器甕が出土したようで、おそらく覆土下部から出土した後者の時期と推測されるが、報告書では不明とされている（p.54）。

・飯岡才川遺跡

細谷地遺跡の北西側に隣接（第５図）。第３次調査区から焼土坑が２基検出されているが（文献21）、

最も近い細谷地遺跡の焼土坑ＲＤ86（第５次調査区）までは旧河道を挟んで70m以上離れている。

焼土坑はＲＤ05と06土坑で、両者は重複し06の方が新しい。ＲＤ05は、118×100㎝の不整楕円～円形で深さ22㎝、底部付近に焼土が認められるがブロック状のようで、出土遺物はない。ＲＤ06は、170×147㎝の不整楕円形で深さ28㎝、底部付近に焼土が認められ長軸方向でない南側に偏るが、ブロック状のようで、出土遺物はない。本調査区から出土した土器は９世紀後半前後が主体をなす。

・台太郎遺跡

向中野館遺跡の北側に隣接するが間には当時広い湿地があったと推定され、離れている（第5図）。焼土坑は、第18次調査区（文献18）から３基、第22次調査区（文献17）から１基、第44次調査区（文献31）から１基、第51次調査区（文献40）から２基検出されている。

第18次調査区のそれは、ＲＤ094・221・241土坑である。221と241の間は比較的近く約40m離れている。241と94の間、221と94は、約120mである。ＲＤ094は、136×111㎝の不整方形で深さ10㎝、焼土は、文章に記載がないが、平面図では南側に偏っている（底面か）。土師器甕口縁部片が出土し（図なし）、平安時代と推定されている。ＲＤ221は、281×144㎝の不整楕円形で深さ18㎝、二つの土坑が連結するような形になっており、“連結部”が一段高い。焼土は、片側の“土坑”のほぼ中央に形成されている。焼土について記載がなく底面かどうか不明である。須恵器甕破片が出土しているが、重複する住居に帰属する可能性があるようで、時期は平安時代以降と推定されている。ＲＤ241は、121×115㎝の円形で深さ19㎝、焼土は底面に形成され、中心よりやや偏る。時期は不明。

第22次調査区の焼土坑は、ＲＤ827土坑である。234×198㎝の方形基調の不整形で深さ36㎝、南西側の壁下部から底面にかけて焼土が検出されているが、現地性でないと推測されている（報告書：p.17）。比較的多くの土師器甕、坏が出土し、奈良時代と推定されている。最も近いのは第51次調査区のＲＤ1138土坑である（後述）。

第44次調査区の焼土坑は、ＲＤ1076土坑である。第22次区のＲＤ827とは、本遺跡の中では近いと言えるが、それでも約90m離れている。200×156㎝の円形で深さ50㎝、覆土中位に焼土が形成され、土坑のほぼ中央に位置する。これ以外にも焼土の混じる層が黒土を挟んで覆土中に複数認められている。底面はスロープ状を呈するが、覆土中位の焼土は傾斜の途上にあり、あまり整合的でない。出土遺物はないが、周囲の遺構から奈良時代と推定されている。

第51次調査区の焼土坑は、ＲＤ1138、1158土坑である。異なる調査区から出土しており、両者は400m近く離れている。ＲＤ1138は、第22次調査区のＲＤ827土坑に最も近く、約40m、ＲＤ1158は、第18次調査区のＲＤ221土坑に最も近く160m以上離れている。

ＲＤ1138は、150×120㎝の不整円形で深さ８㎝、底面西に偏って焼土が認められるが、焼成は弱い。出土遺物はない。ＲＤ1158は、180×130㎝の不整長方形で深さ38㎝、覆土下位東側に偏って焼土ブロックを大量に含む層を確認。覆土上位から土師器甕が出土し、奈良時代と推定されている。

・本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区（Ｅ区西）（第２表）

遺跡の西端の一部に相当する。焼土坑が10基検出されている（第２表）。分布を見ると、ＲＤ134、ＲＤ135・138～140、ＲＤ141・143・145、ＲＤ147・148の四箇所のまとまりが認められ、土師器焼成坑の可能性を窺わせる（第75図）。周囲にそれらしい竪穴住居も見られるが、ロクロ・ピットは検出されていない。ＲＤ135・138～140の一群から５m程度しか離れていないＲＤ146土坑から、内面黒色処理した土師器坏の「細かく、薄く剥がれたように砕けている。接すると『カチャ、カチャ。』ときわめて金属的な音がする」破片が出土している（報告書：p.283）。焼成失敗品の可能性が高い。ＲＤ132土坑からは、よりそれらしい剥がれたような土師器甕胴部の失敗剥片が出土しているが、焼土坑

の一群から80m以上離れる。報告者も土師器焼成坑の可能性を考えてはいるが、あまり強く主張してはいない（報告書：p.341）。

・本宮熊堂Ｂ遺跡第25次調査区（第２表）

遺跡の北端の中央付近に相当する。時期不明の焼土坑が１基検出されている（第２表）。１基のみだが、第20次の群在地点から30m程度しか離れていないので含めることにした。

・本宮熊堂Ｂ遺跡その他の調査区

第１次調査区（文献２）の７Ｐ７Ｑ区に２基、第10次調査区（文献20）に１基焼土坑が検出されている。これら３基は、40m以内の比較的近接した範囲に分布する。

１次調査区の焼土坑は、ＲＤ07、ＲＤ31土坑で、両者の間は15m程度離れている。ＲＤ07は、176×128㎝程度の不整楕円形で深さ40㎝、中央部に溝状の彫り込みがつくのは別遺構か。底面の半分から壁にかけて焼土が偏って検出され、その反対側の底はスロープ状になっている。主として焼土のない側から土師器甕片が出土している。出土土器は奈良時代である。ＲＤ31は、183×104㎝の不整長方形で深さ16㎝で、底西半分に焼土が見られる。出土遺物はなく、時期不明。

10次調査区の焼土坑は、ＲＤ068土坑で、230×150㎝程度の不整長方形で深さ30㎝程度、底南東半に焼土が認められる。竪穴住居状遺構の貼床下に検出され、また他の土坑とも重複しており、形に不確かな部分があるようだ。奈良時代の土師器甕が出土している。

・野古Ａ遺跡

本宮熊堂Ｂ遺跡の南側に隣接する遺跡だが（第5図）、検出された焼土坑は、本宮熊堂Ｂ遺跡の第20次の群在地点からは、400mも離れている。第１次調査区の焼土坑からは200m程度である。第12次調査区で３基（文献29）、第15次調査区でも３基、焼土坑が検出されている（文献30）。二つの調査区は隣接するが、焼土坑は、35m以上離れている。

第12次区のそれは、ＲＤ037・040・041土坑で、ＲＤ037は134×131㎝の円形で深さ25㎝、底面から覆土にかけての焼土は、北半分に偏る。出土遺物はない。ＲＤ040は、円形が３つ連続したような不整楕円形で313×127㎝で深さ51㎝、覆土中位に焼土が認められるが、土坑の中央に位置する。底はスロープ状を呈す。奈良時代の土師器長胴甕が出土している。ＲＤ041は、126×124㎝の円形で深さ37㎝、中層に認められる焼土はブロックの集合のようだが（報告書：p.111）、底から検出面まで弧状に層位的に広がっている。底は凹凸が著しい。出土した土師器甕は８世紀代か。３基は、それぞれ８～16mほど離れて点在している。

第15次区の焼土坑は、ＲＤ070・072・073土坑である。ＲＤ070は、240×110㎝の長方形で深さ20㎝、長軸片端の覆土下部に焼土。出土遺物なし。ＲＤ072は、175×150㎝の不整円形で深さ30㎝、北端覆土下部に焼土が見られ、写真では、その反対側はスロープ状を呈しているように見える（報告書：p.188）。土師器小片が出土したが、時期は不明とされる。ＲＤ073は、90×80㎝の不整円形で深さ12㎝、覆土に認められる焼土はやや西側に偏っている。出土遺物はない。ＲＤ072と073は、約1.3mと近接し、ＲＤ070は、これらから30m以上離れている。

・新堰端遺跡

野古Ａ遺跡の西約１㎞、志波城の南東隅に位置する遺跡で（第5図）、焼土坑が１基検出されている（文献52）。ＲＥ02竪穴で、200×165㎝の隅丸方形で深さ20㎝、底面中央よりやや東寄りに焼土を確認。掘り方を持つ。出土遺物はないが、平安時代と推定されている。

・下羽場遺跡

第５図のすぐ南に位置し、細谷地遺跡の南西約2.5㎞に位置する遺跡である（岩手県教育委員会

1979)。第５図の図幅からはみ出すが、隣接地区として捉えられるので、ここで扱う。ただし、地形的には、本遺跡は北上山地西側にとりついた扇状地に立地し、上記の遺跡とは大きく異なる。焼土坑が２基検出され、両者の間は16m離れる。方形焼土遺構として報告されており、第１号方形焼土遺構は、150×120㎝の不整方形で深さ30㎝前後で、焼土は壁から底全体に認められたようである。底は傾斜する（スロープ状)。土師器甕と坏が出土し、９世紀後半～10世紀初頭と推測されている。第２号方形焼土遺構は、130×？㎝（カクランのためはっきりしない）の方形で深さ20㎝、北壁を中心に三辺およびその下の床面に焼土は形成されている。土師器片が出土しているが、重複する遺構に帰属する可能性もあって、時期は不明である。東北自動車道建設に伴う調査で、1976年と、かなり早い段階の調査だが、報告者は江刺市瀬谷子遺跡などと比較して土器焼成遺構の可能性をにおわせている。

細谷地遺跡と周辺の遺跡の焼土坑についてまとめておく。土師器焼成坑の確証があったのは、細谷地遺跡と本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区のみであった（第２表)。細谷地遺跡では、焼成失敗品の剥片土器とロクロ・ピット、本宮熊堂Ｂ遺跡では焼成失敗品の剥片土器が発見された。焼土坑のみで土器焼成遺構と認定する難しさを痛感するが、焼土坑自体においても、細谷地および本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区とそれ以外の遺跡・調査区に違いが認められる。それは分布である。前者には幾つかの集中地点が認められるのに対し（第74、75図)、後者は散在する。土師器焼成坑が群集することは、よく知られている（上村　1993：p.２、木立　1997：p.23)。しかし、細谷地および本宮熊堂Ｂ遺跡第20次調査区の焼土坑の全てが群集するわけでもない。

土師器焼成坑の研究は、窯跡研究会の活動で飛躍的に高まった（窯跡研究会1997『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社)。この時点で不明だった岩手県北上市以北では、その後青森県五所川原市隠川（４）遺跡などで土師器焼成坑が発見され（青森県教育委員会　1998)、特に青森市野木遺跡では数多くの土師器生産遺構が検出され考察が深められている（木村　2001ほか)。

ところで、『古代の土師器生産と焼成遺構』でも、土師器焼成坑をどのように認定するかという問題にかなり苦慮している様子が窺える（木立　1997ほか)。上述のように、焼成失敗品などの確証が得られず、そして群集せず“点”として発見された焼土坑を土師器焼成坑に認定するのは至難の業である。菅原祥夫氏は、福島県福島市勝口前畑遺跡で１基だけ検出された焼土坑を土師器焼成坑と認定し、集落内生産型の代表として掲げるが（菅原　1997：第９図)、報告者自身は、「土器焼成遺構である可能性が考えられるものの、断定することはできなかった」と慎重である（福島市教育委員会1995：p.140)。そもそも、土師器焼成遺構にその証拠となるものが残っている方が稀なはずである。焼成に使う道具が置き忘れられることは想定されるが、元々そのような道具はほとんど不要のようだし、焼成失敗品は別の場所（土坑など）に廃棄する方が自然である。当然のことながら成功品は別の場所に運び出されてしまう。したがって、証拠はほとんど“焼土”しか残らない。“焼土坑”で“何を”焼成していたか掴むのは容易なことではない。このような認定に難のある土坑を、それが土師器焼成坑であるか否かの二者択一で扱うことに問題がありはしないか。確からしさの異なる遺構を等価に扱うことに無理があるのではないか。各遺構それぞれが持つ様々な属性を総合的に判断して、どの程度土師器焼成坑の可能性があるのか確率的に示す必要があるのではないだろうか。

実はこの問題は考古学で扱う遺構のほとんど（特に土坑）に当てはまり、筆者は、縄文時代の墓でこの問題に取り組んだことがある（金子　2005)。古代については門外漢だが、ここで土師器焼成坑の定義について、一つの試案を提出してみたい。

１）平面形は、円形ではない（１点)。

２）底面にスロープかテラスが認められる（１点)。

3）深さが40㎝以上ある（－１点）。
4）土師器焼成に使う道具、焼成失敗品が伴う（12点。不明瞭なら０点だが、その場合は７に該当）。
5）土坑内に灰が認められる（１点）。
6）遺跡内に群集する（２点）。
7）周囲（概ね20m以内）に土師器焼成に使う遺構・遺物（ロクロ、ロクロ・ピット、粘土採掘坑、白色粘土、焼成失敗品など）が発見されている（６点）。

個々の焼土坑について、上の属性それぞれを検討し、その総合点で判断する。12点以上を土師器焼成坑と断定、６～11点を可能性が高い（その焼土坑が土師器焼成坑でなくとも、付近には存在すると推定できる）、３～５点を可能性があるとする。１については、土師器焼成坑に円形のものも多数存在するが、一般に土坑は円形のものが多く、逆に円形以外の土師器焼成坑の平面形はこの土坑に特有の形が多いので、あえて掲げた。４の焼成失敗品がその土坑に帰属するかどうかの判断は難しいし、７の“周囲”をどの程度の距離とするかにも問題がある。識者がより良い定義を提出することを望む次第である。「盛南開発」地域での検討結果は、第２表の右端から二番目の列である。概ね、それらしいものは高得点に、疑いを持つもの（No.31、43）は低い得点になっているようだ。

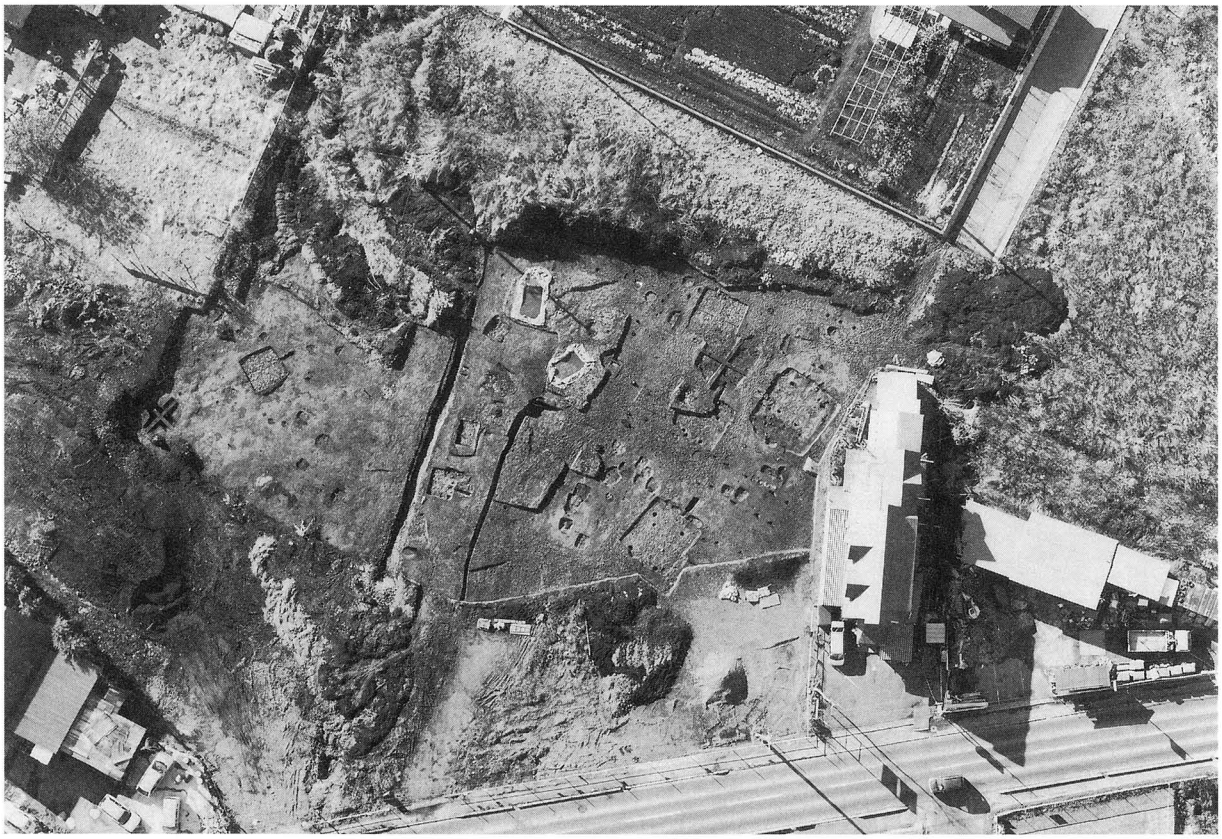
最後に、この地域で確認された土師器焼成坑の可能性が高い焼土坑についてまとめておく。平面形は円形のものが非常に少ない。円形のもので高得点を得ているのはNo.46の本宮熊堂Ｂ遺跡のＲＤ138土坑だけである。付近に失敗剥片が出土し群集しているために高得点になったものだが、規模が小さい点に疑問を残す。焼土が覆土の黒土中に検出されているものが多いようだ。黒土だと焼土と認定できない場合が多く、見落とされている可能性が高い。焼成実験の結果からは底面が赤土である必然性は読み取れず（久保田　1989）、焼成を繰り返しているうちに残留物や周囲の黒土が流入してしまうため黒土に焼土が形成されるのではないだろうか。そのうち、深さが足りなくなったり水が抜けにくくなったりするようになって使用限度を超え、土坑は廃棄されるのではないだろうか。久保田正寿氏の指摘の通り（久保田　1989：p.92）、湿気はそれほどの弊害にはならないようで、埋没沢に検出されるものも比較的多かった。なお、細谷地遺跡第15次調査区から考えると、土師器焼成坑が群集するのは、工房からのアクセスの良さによる可能性が窺われたが、いかがなものだろうか。

参考文献

青森県教育委員会　1998『隠川（４）遺跡　隠川（12）遺跡Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
岩手県教育委員会　1979『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告書第32集
金子　昭彦　2005「東北地方北部縄文時代晩期における墓と副葬品」『紀要』ＸＸⅣ(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
上村　安生　1993「土師器焼成坑について」『Ｍｉｅ　ｈｉｓｔｏｒｙ』vol.６　三重歴史文化研究会
木立　雅朗　1997「第１章第１節　土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
北野　博司　1997「第３章第１節　古代の土師器の焼成技術」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
木村　淳一　2001「第Ⅶ章第１節　野木遺跡北地区における土師器生産」『野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ（平安時代遺物．分析．総論編）』青森市埋蔵文化財調査報告書第54集－
久保田正寿　1989『土器の焼成１―土師器の焼成実験―』自費出版
菅原　祥夫　1997「第２章第９節　東北東部―古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑―」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社
福島市教育委員会　1995『勝口前畑遺跡３』福島市埋蔵文化財報告書第74集

写　真　図　版

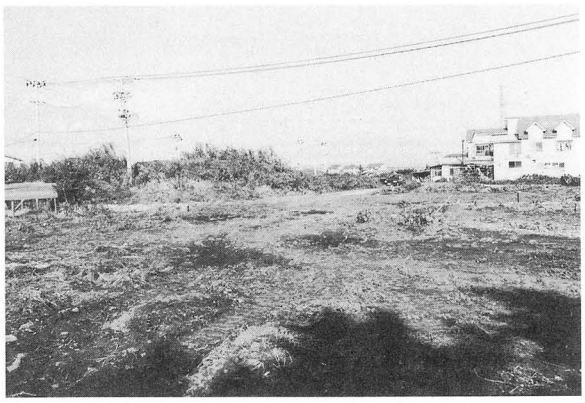
遺跡遠景（東側上空から）



調査区全景（東側上空から）

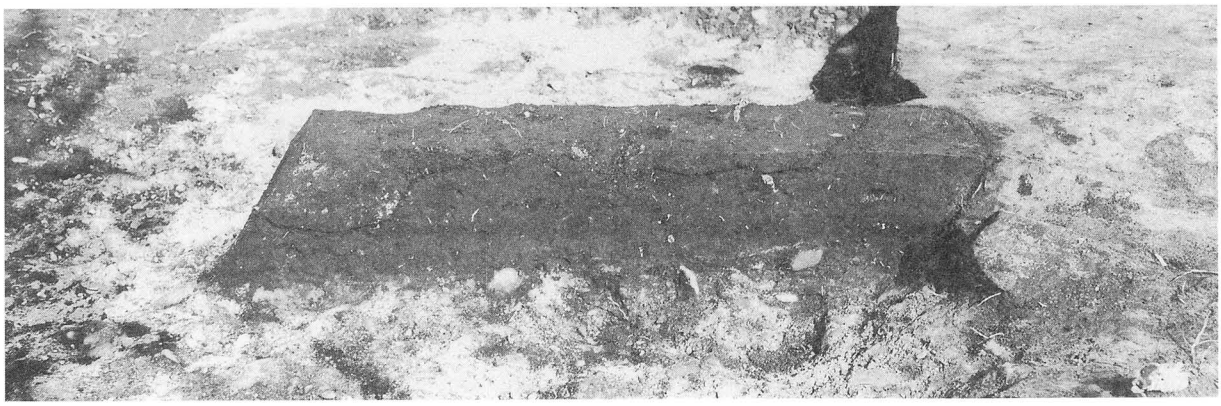
写真図版１　遺跡遠景　調査区全景

調査前風景（北から）



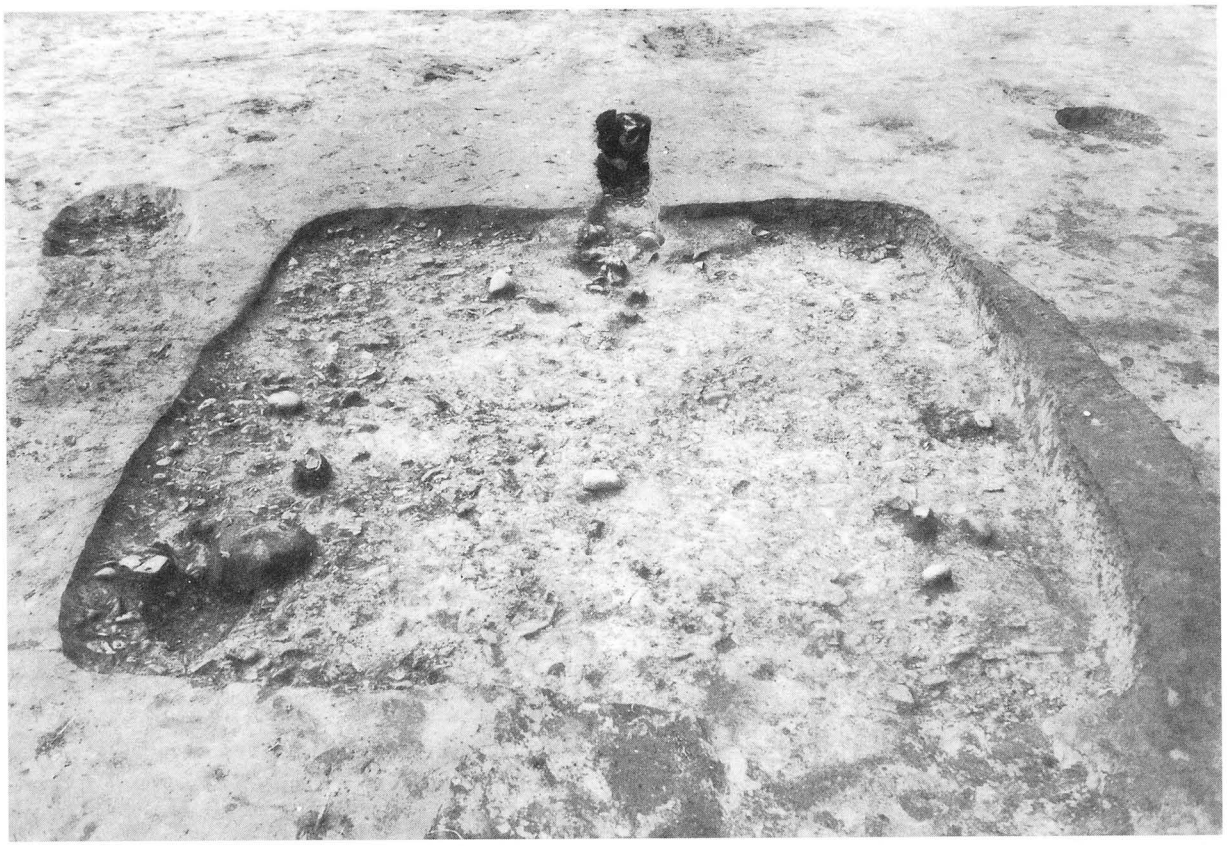
調査前風景（南東から）

RA047　平面（西から）

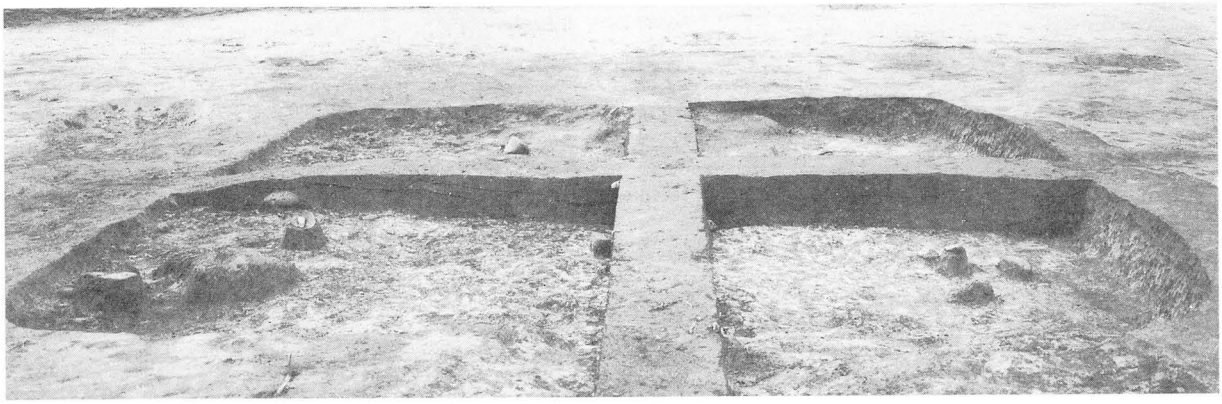


RA047　断面（南から）

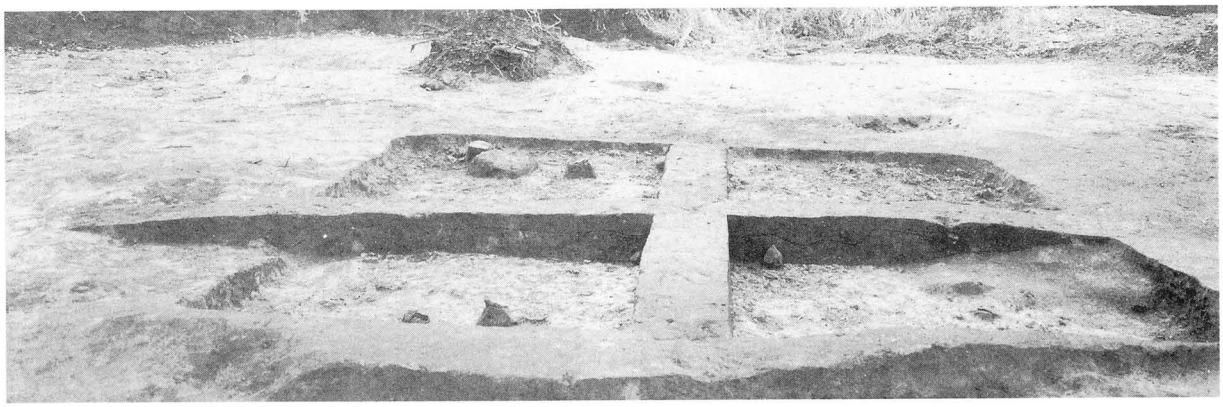
写真図版２　調査前風景・RA047住居跡



全景（東から）



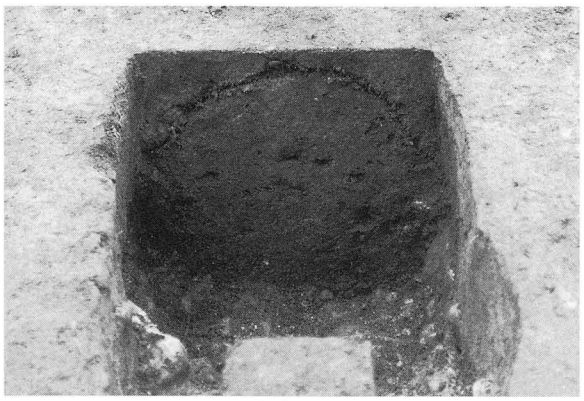
断面（東から）



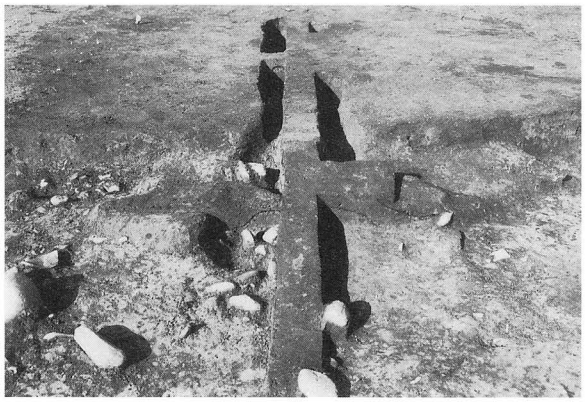
断面（北から）

写真図版 3　RA150住居跡（1）

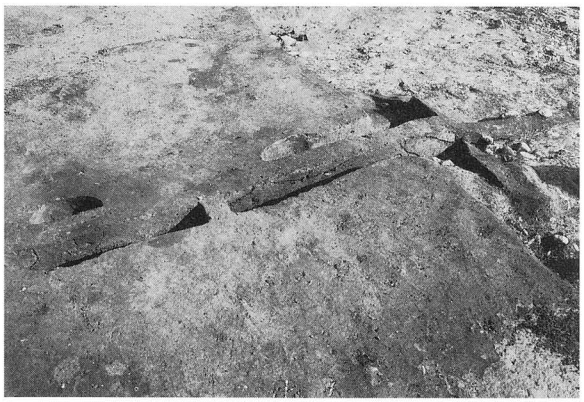
カマド全景（東から）



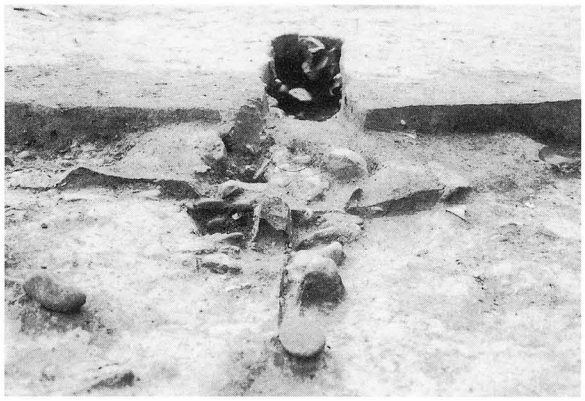
カマド煙道横断面（東から）



カマド断面（東から）

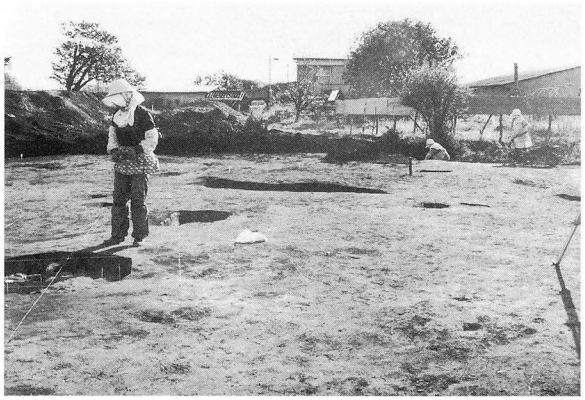


カマド断面（南から）



カマド断ち割り（東から）

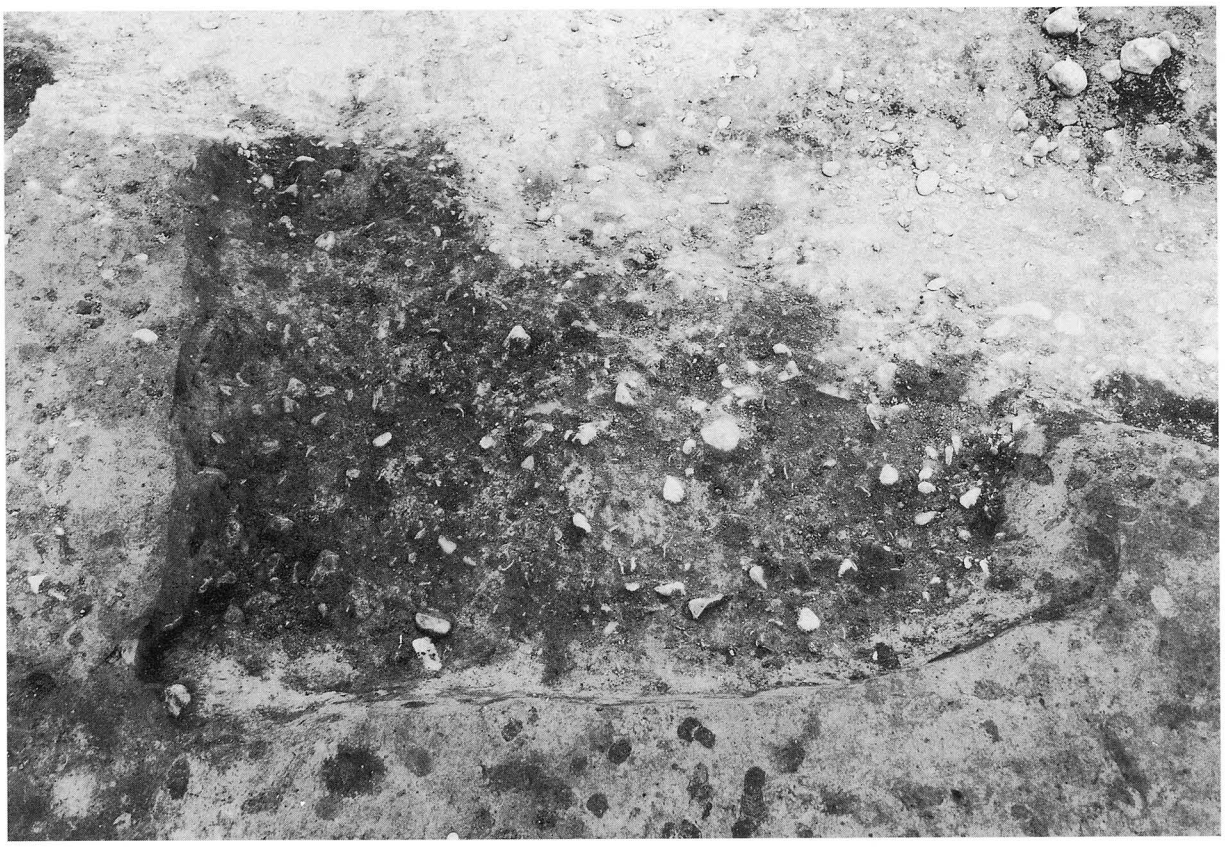
カマド断ち割り（南から）



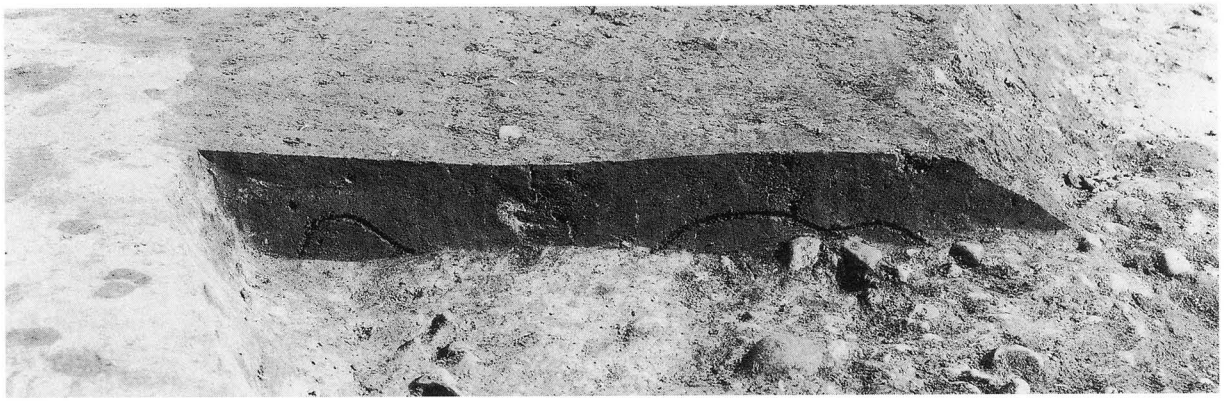
調査風景

調査風景

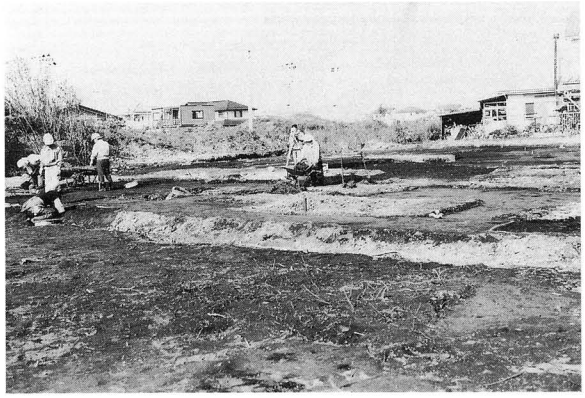
写真図版４　RA150住居跡（２）



RA151　平面（北から）



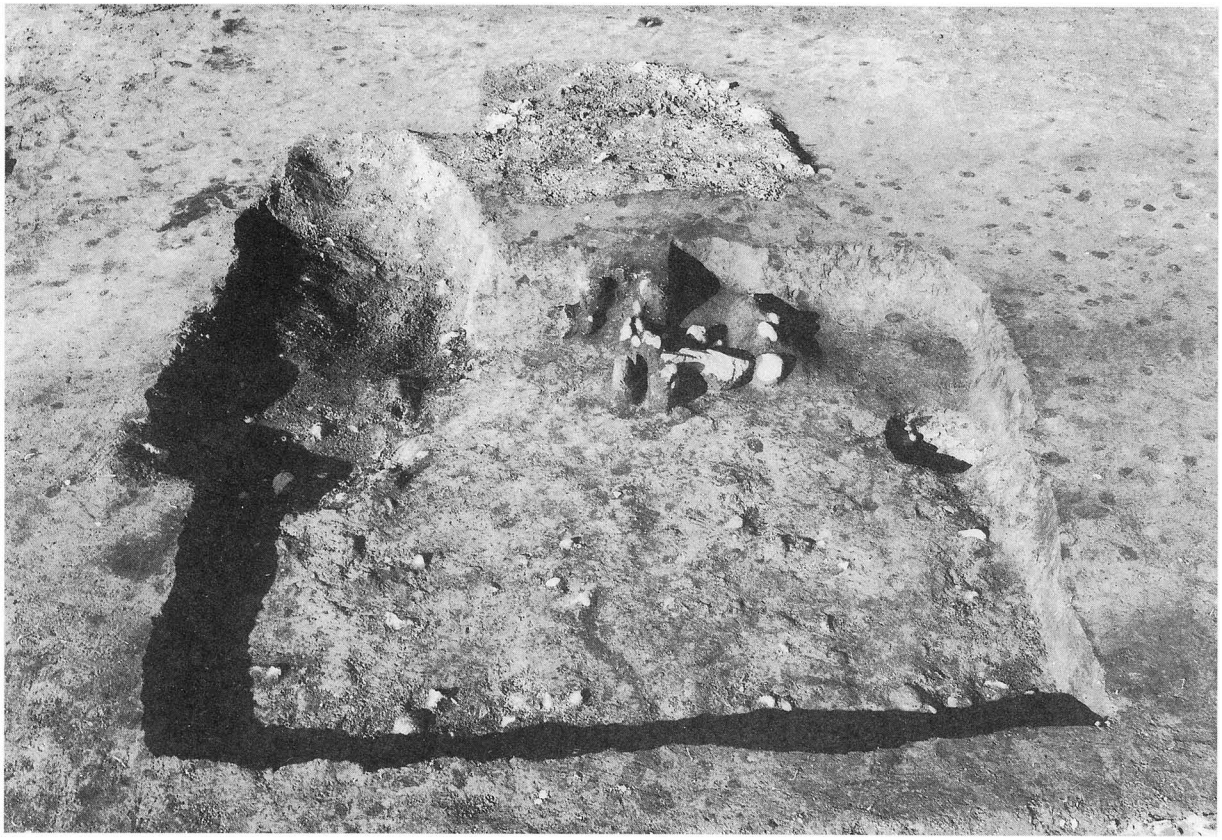
RA151　断面（西から）



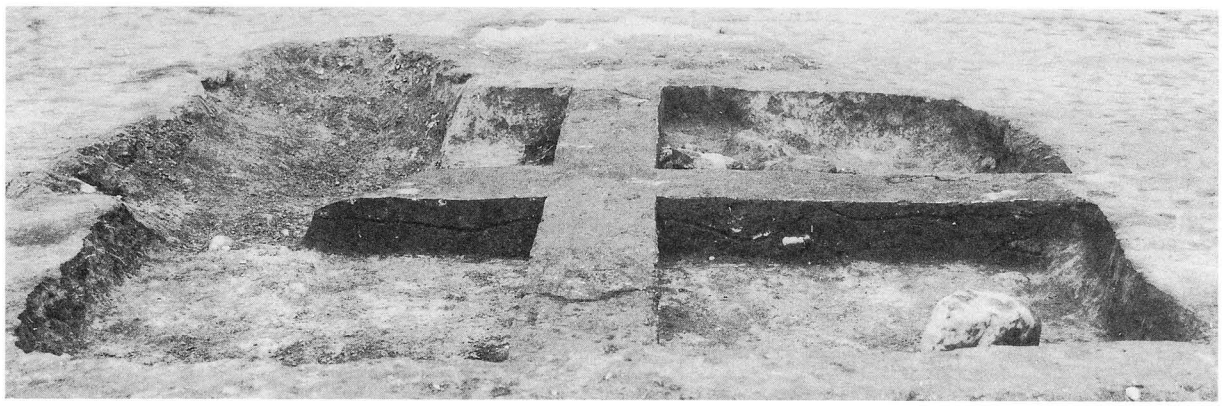
調査風景

RA152　検出状況（南から）

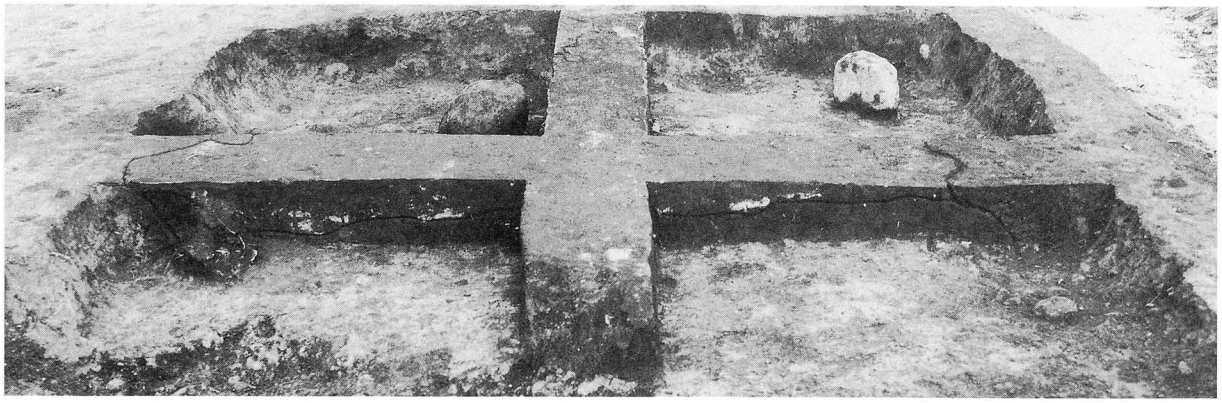
写真図版５　RA151住居跡・RA152住居跡（１）



平面（南から）

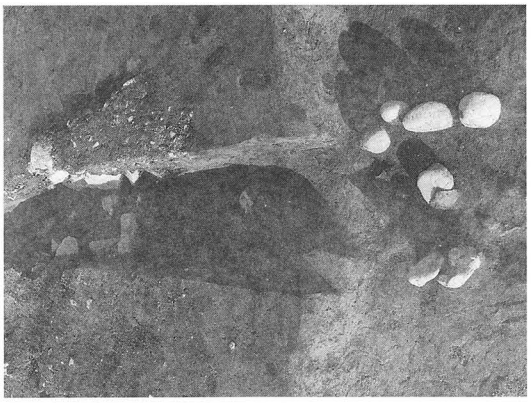


断面（南から）

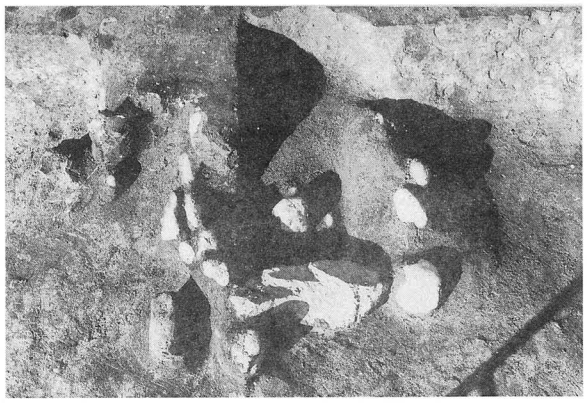


断面（西から）

写真図版６　RA152住居跡（２）



カマド平面（南から）

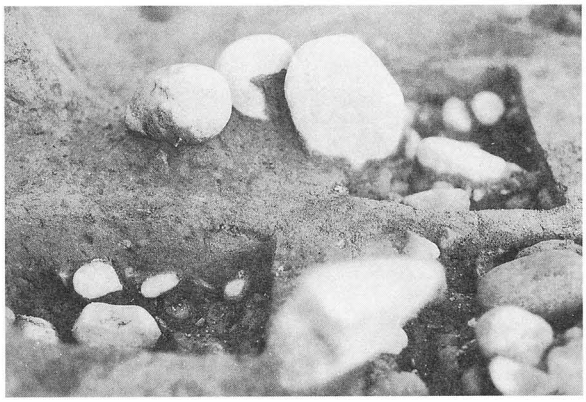


カマド

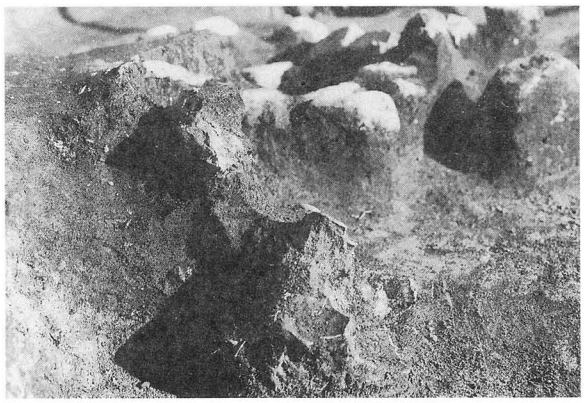
カマド残り（南から）

カマド煙道断面（西から）

カマド焚き口断ち割り（南から）



カマド焚き口断ち割り（西から）

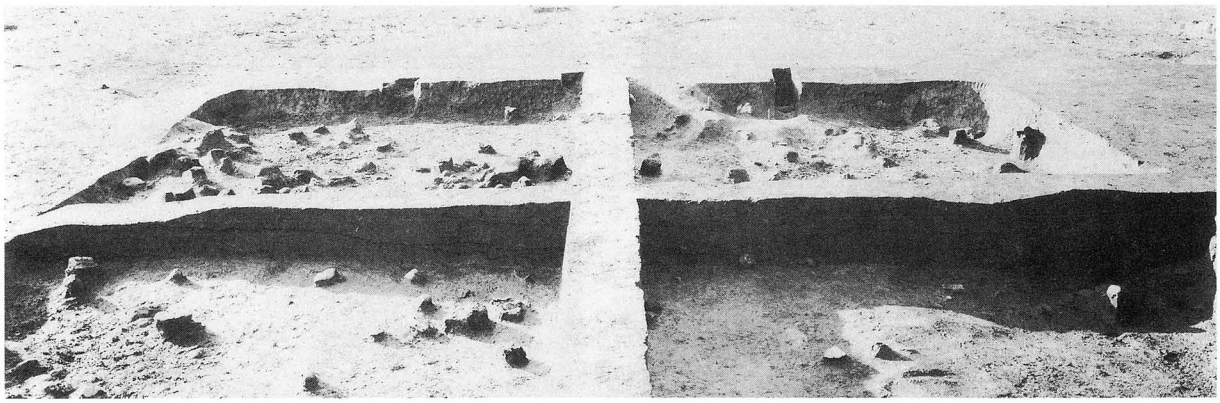


遺物出土状況

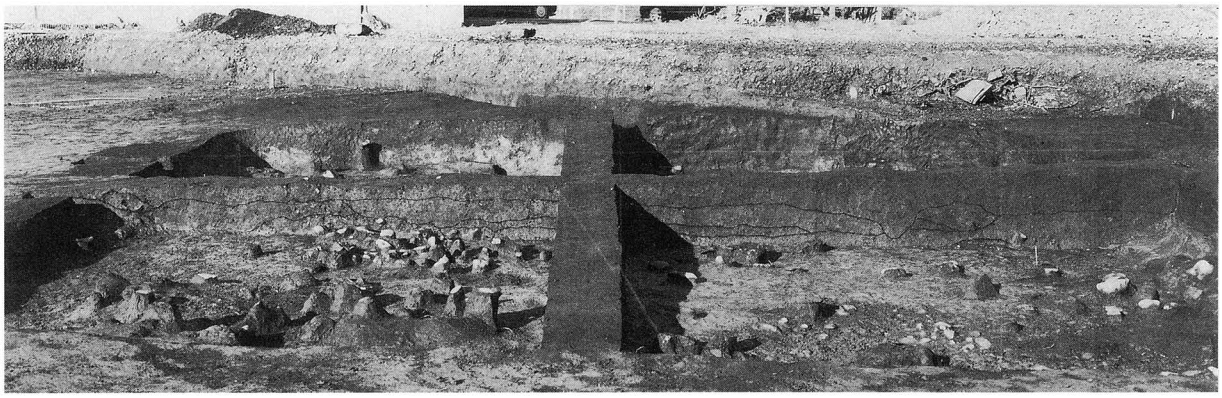
遺物出土状況

写真図版７　RA152住居跡（３）

全景（東から）



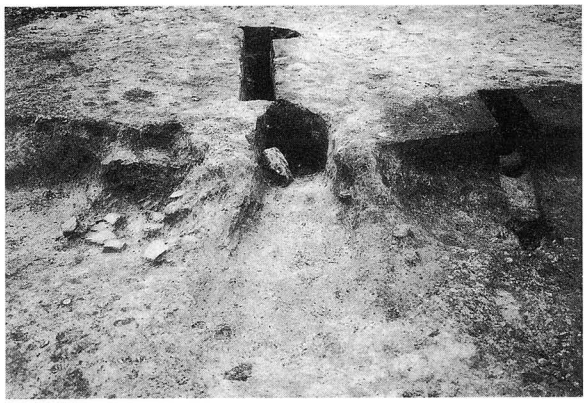
断面（東から）



断面（南から）

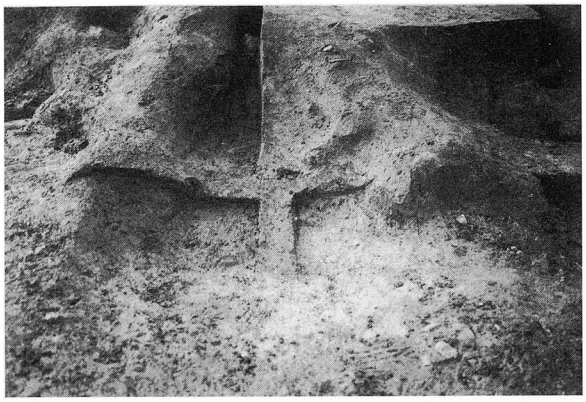
写真図版８　RA153住居跡（１）

焼土・遺物出土状況（東から）

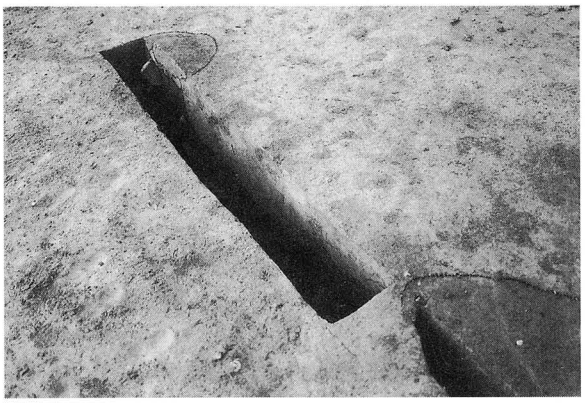


カマド全景（東から）

カマド断面（南から）

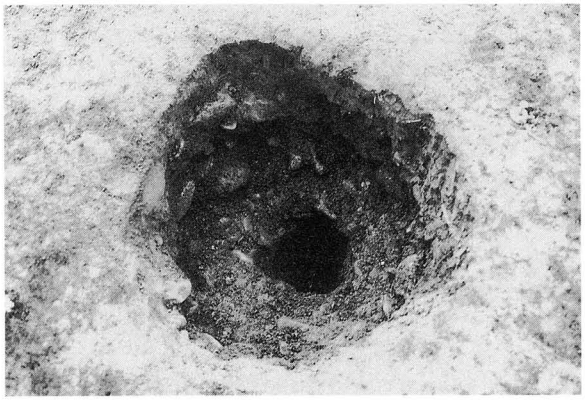


カマド断面（東から）



カマド断面（南から）

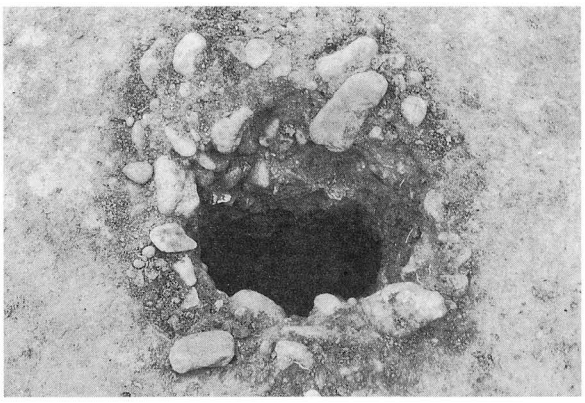
カマド袖断ち割り（東から）



Pit3　全景（北から）

カマド袖断ち割り（東から）

写真図版９　RA153住居跡（２）



RA153　Pit1　柱痕完掘

RA153　Pit2　柱痕完掘

RA154　平面（東から）

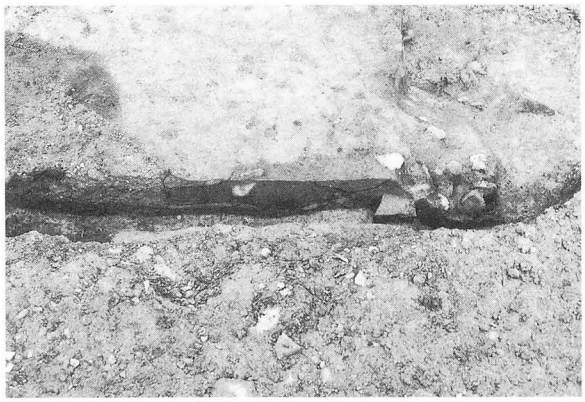
RA154　断面（東から）

写真図版10　RA153住居跡（３）・RA154住居跡（１）

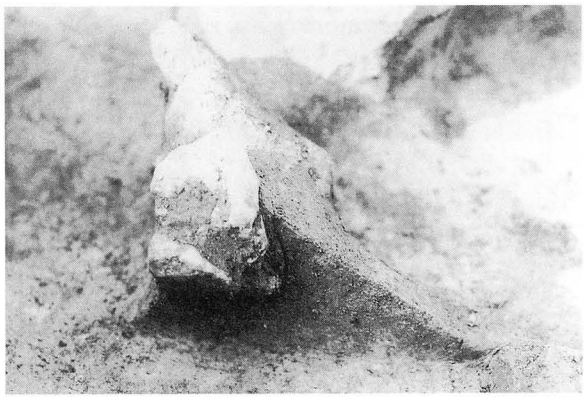
断面（北から）

カマド平面（東から）

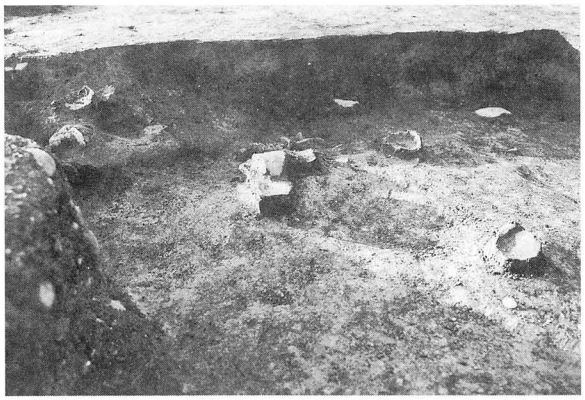
カマド遺物出土状況



カマド煙道断面（南から）



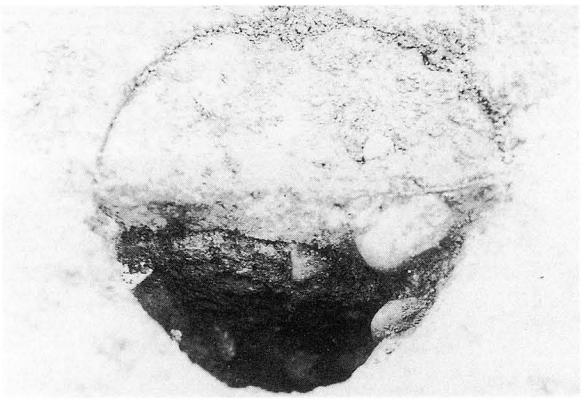
カマド袖断ち割り（東から）



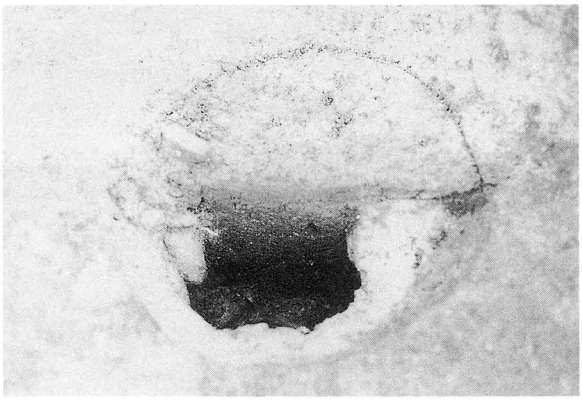
遺物出土状況

遺物出土状況

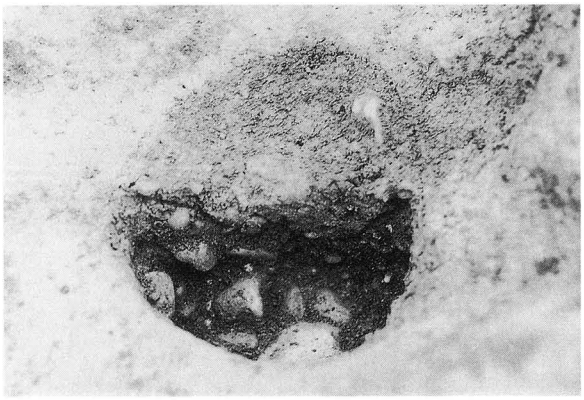
写真図版11　RA154住居跡（２）



柱穴１　断面（南から）



柱穴２　断面（南から）



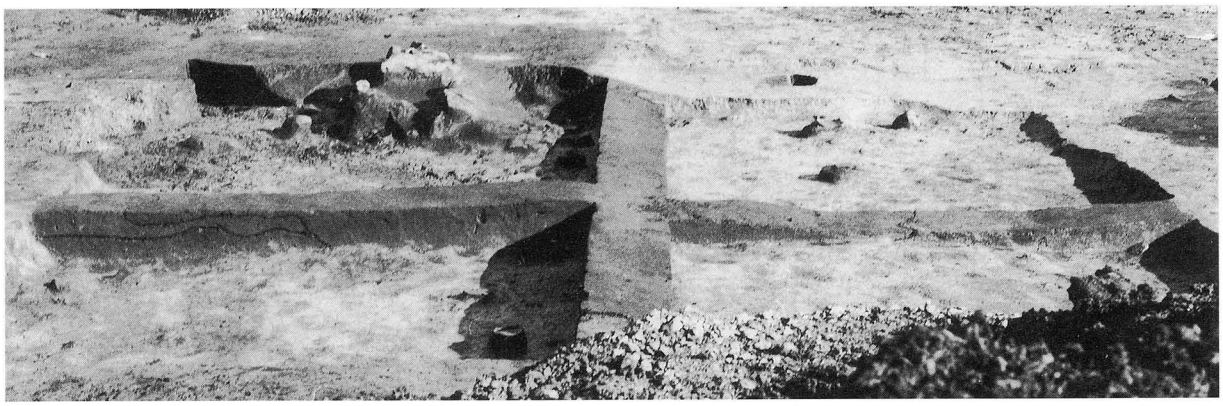
柱穴３　断面（南から）

柱穴４　断面（南から）

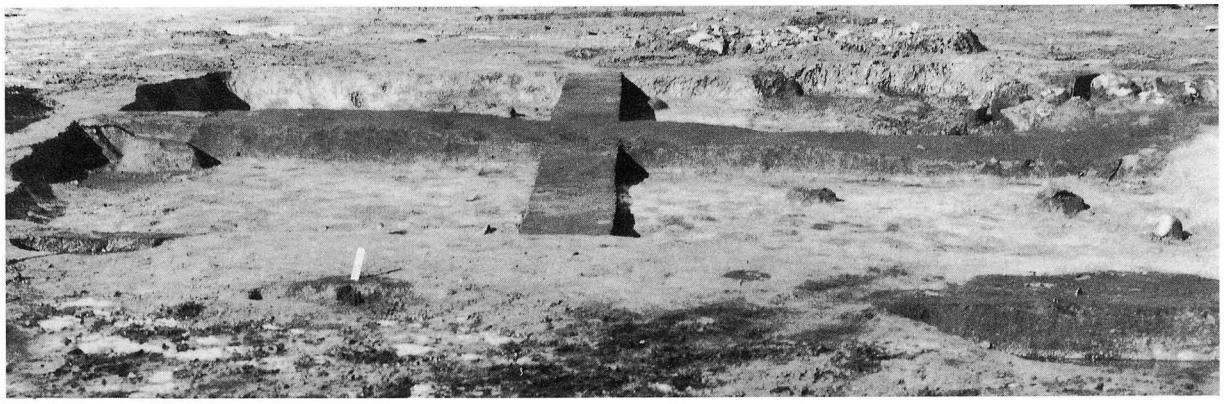
旧沢跡調査風景（西から）

写真図版12　RA154住居跡（３）・旧沢跡調査風景

平面（西から）

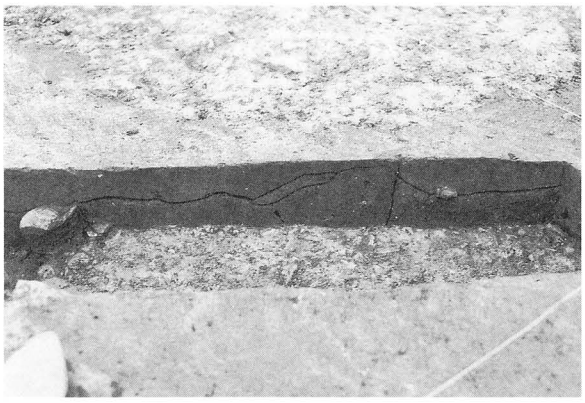


断面（西から）



断面（南から）

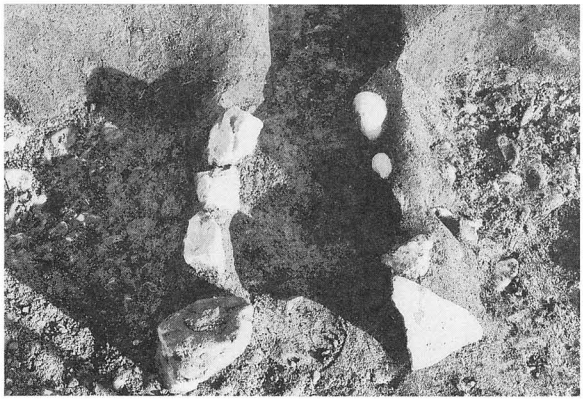
写真図版13　RA155住居跡（1）



RA155とRA156の重複断面（南東から）

カマド

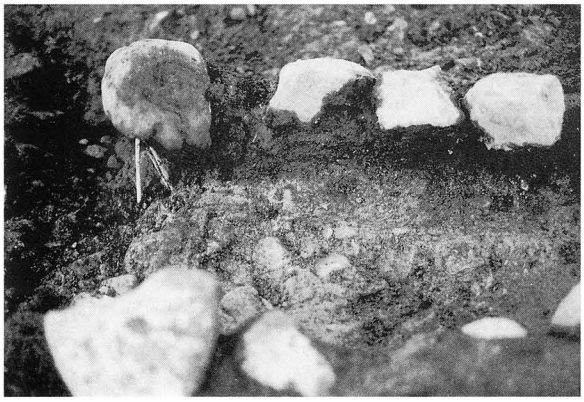
カマド平面（西から）



カマド袖平面（西から）

カマド断面（南から）

カマド断面（西から）

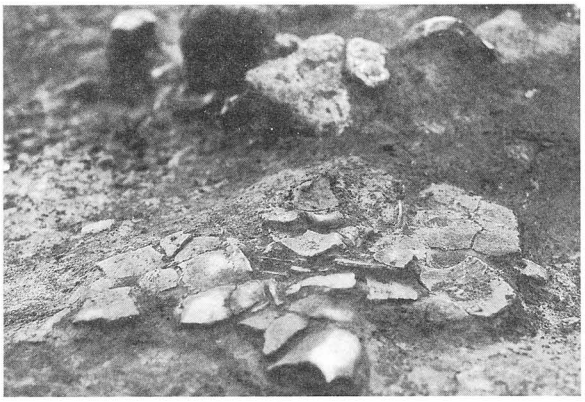


カマド断ち割り（南から）

カマド断ち割り（西から）

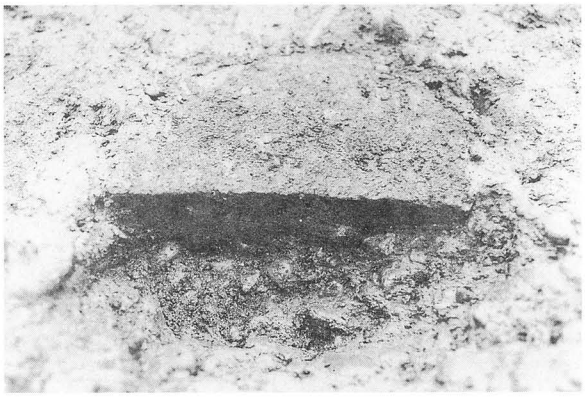
写真図版14　RA155住居跡（２）

遺物出土状況

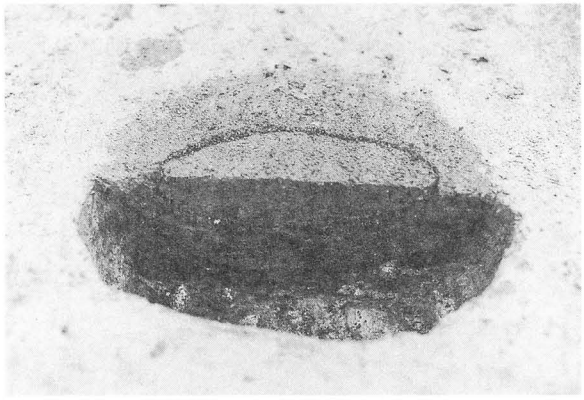


遺物出土状況

柱穴１　断面（南から）

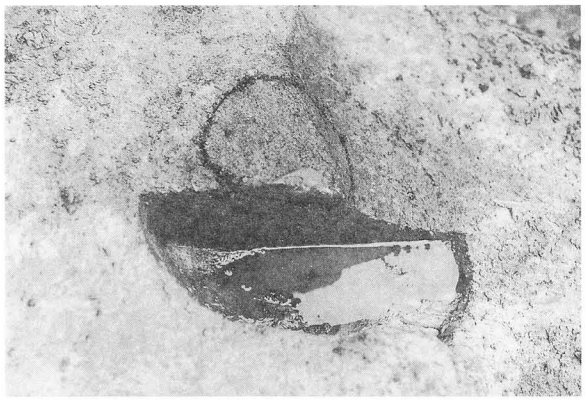


柱穴２　断面（南から）

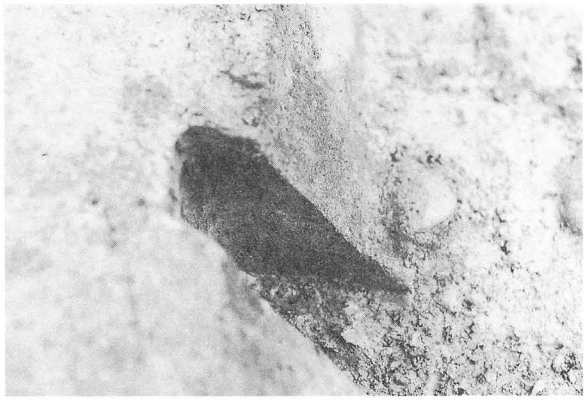


柱穴３　断面（南から）

柱穴４　断面（南から）



柱穴５　断面（南から）

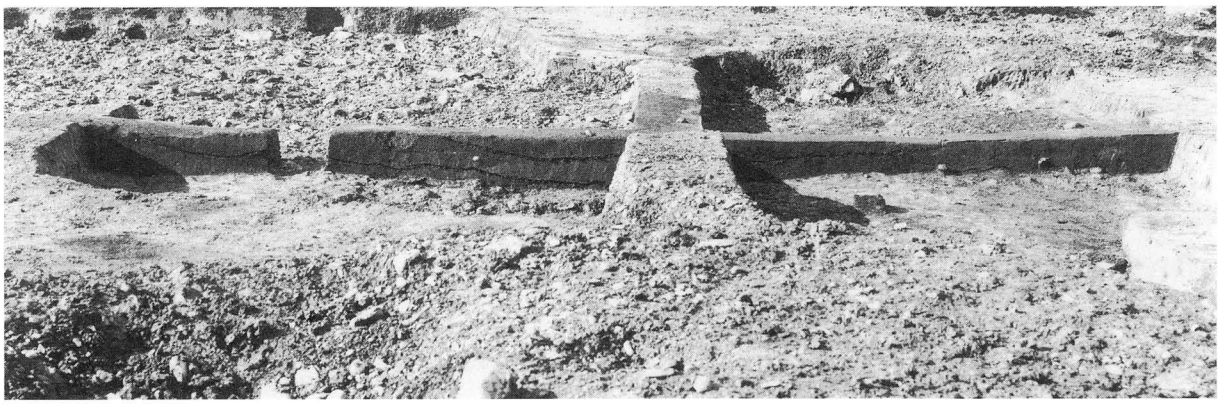


柱穴６　断面（南から）

写真図版15　RA155住居跡（３）

平面（北から）

断面（南から）



断面（東から）

写真図版16　RA156住居跡（1）

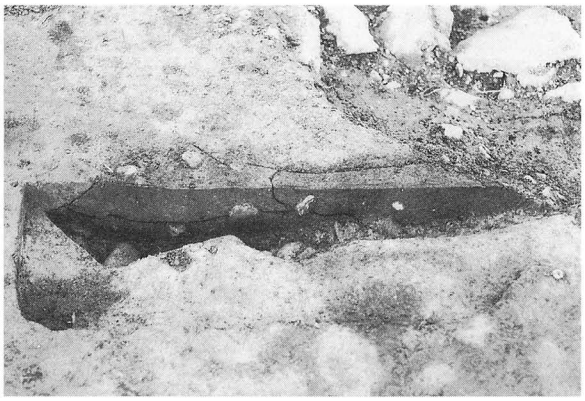
カマド1　平面（南から）

カマド2　平面（東から）

カマド1　断面（東から）

カマド2　断面（南から）

カマド1　断面（東から）



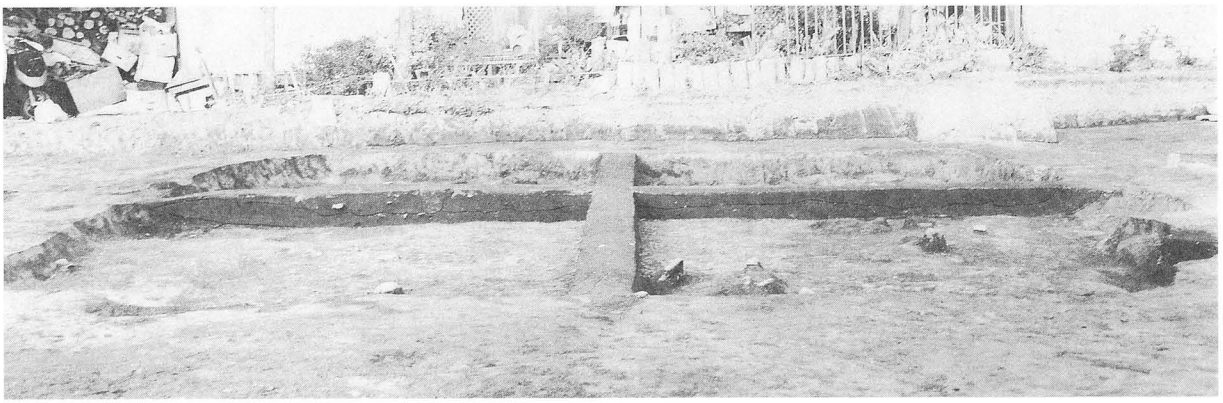
カマド2　断面（南から）

遺物出土状況

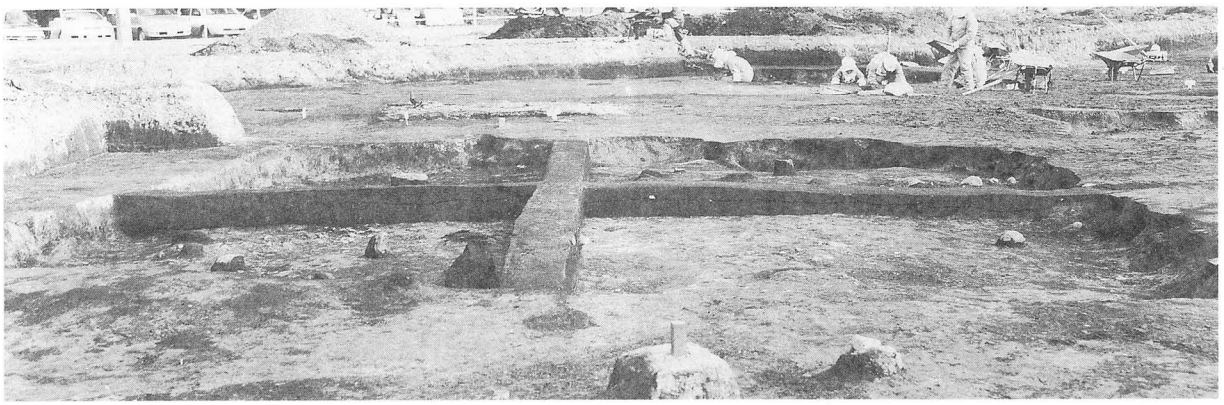
遺物出土状況

写真図版17　RA156住居跡（2）

平面（西から）



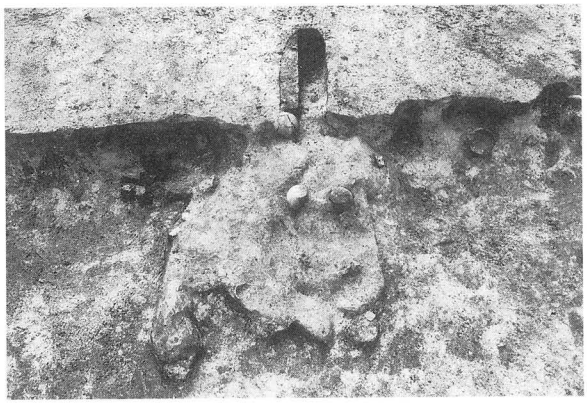
断面（南から）



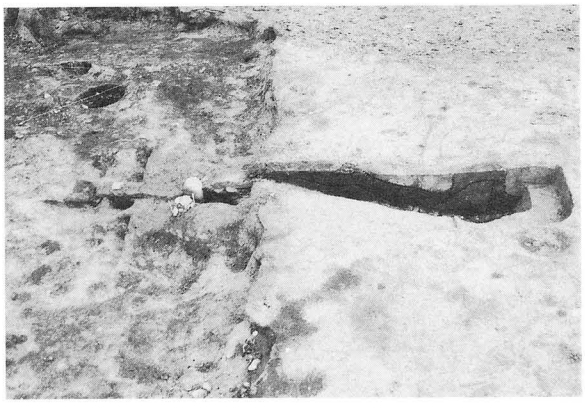
断面（西から）

写真図版18　RA157住居跡（1）

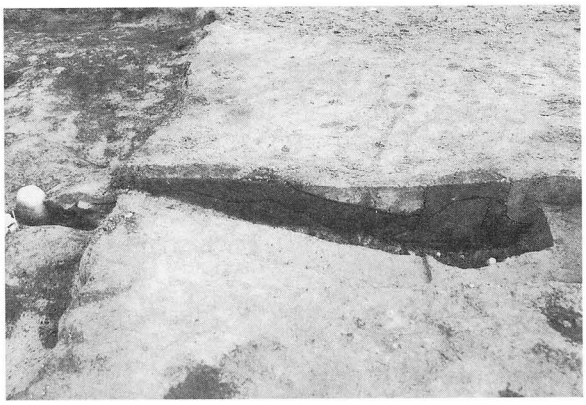
カマド１　平面（北から）



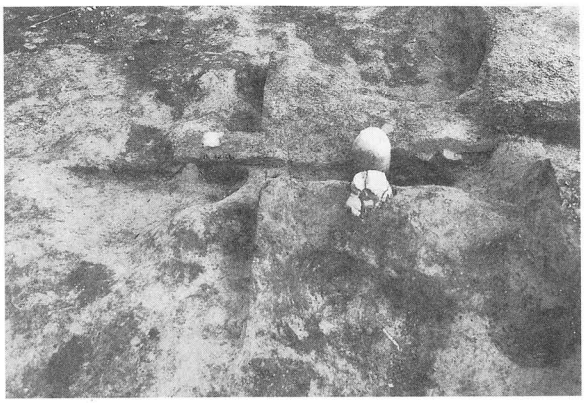
カマド１



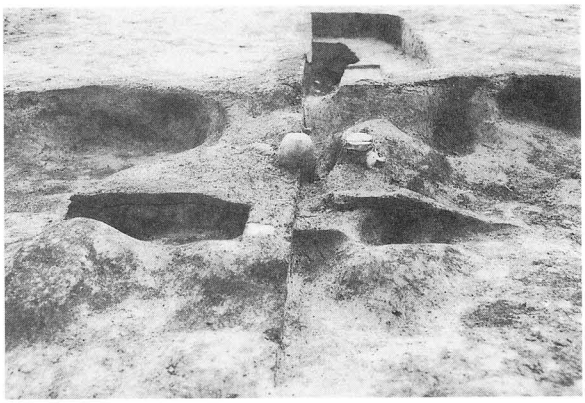
カマド１　断面（西から）



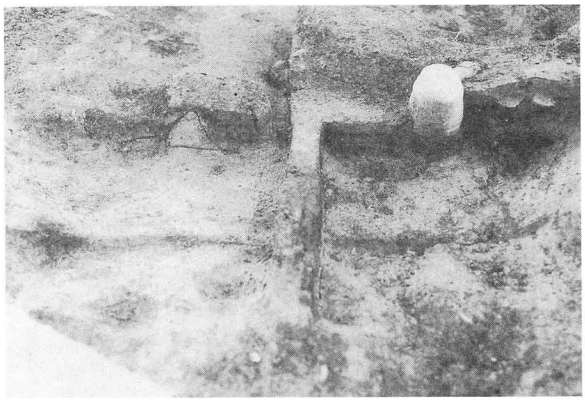
カマド１　断面（西から）



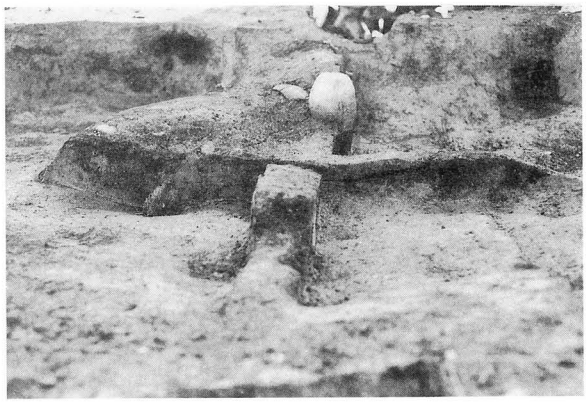
カマド１　断面（西から）



カマド１　断面（北から）

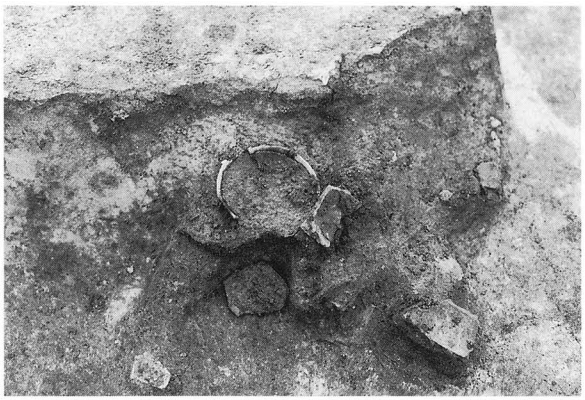


カマド１　断ち割り（西から）



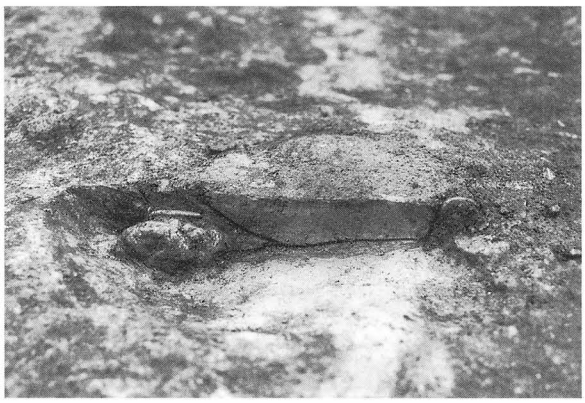
カマド１　断ち割り（北から）

写真図版19　RA157住居跡（２）

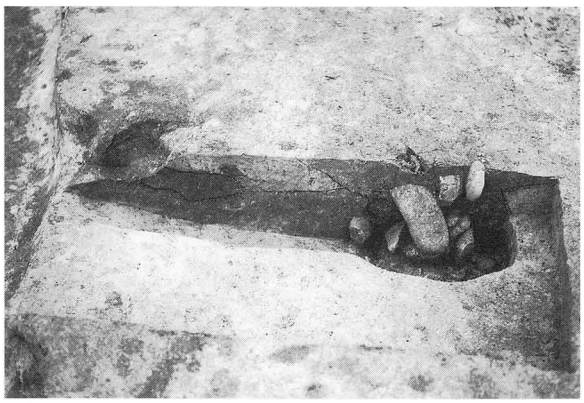


遺物出土状況

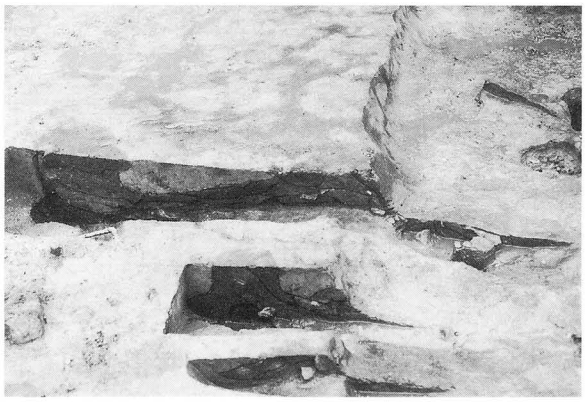
カマド２　断面（南から）



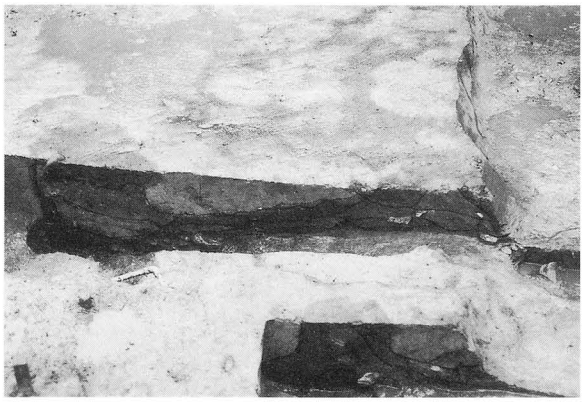
カマド２　断面（南から）



カマド２　断面（南から）

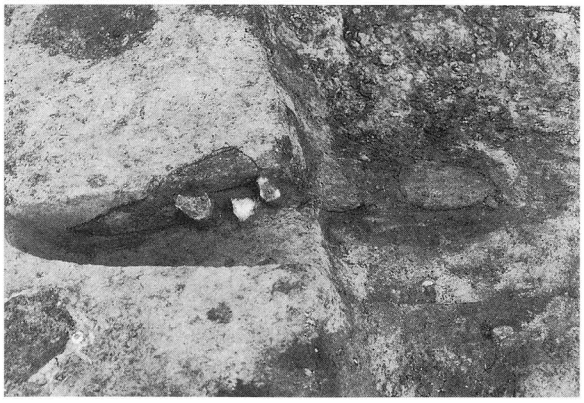


カマド３　断面（南から）



カマド３　断面（南から）

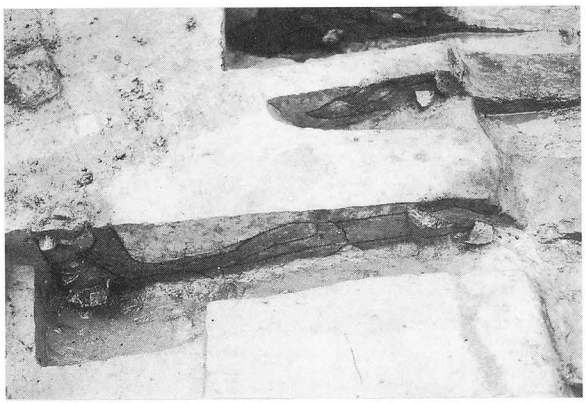
カマド３　断面（南から）



カマド４　断面（南から）

写真図版20　RA157住居跡（３）

カマド５　断面（南から）



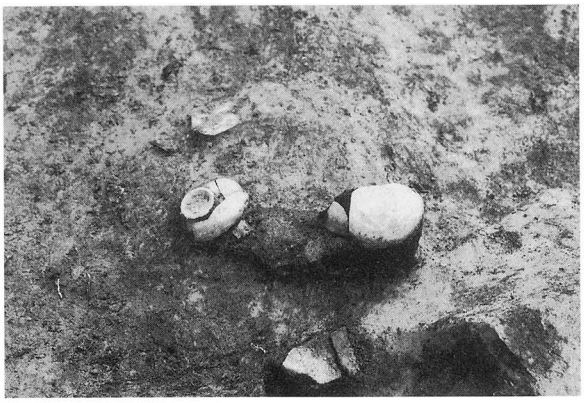
カマド５　断面（南から）

カマド６　断面（南から）

カマド６　断面（南から）

遺物出土状況

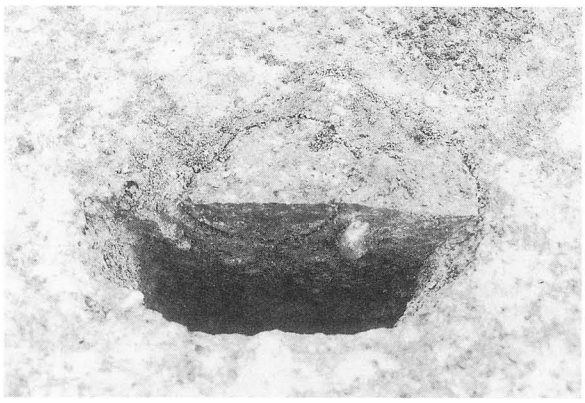
遺物出土状況



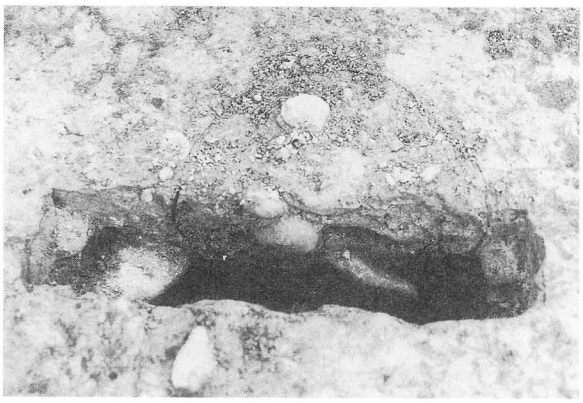
遺物出土状況

遺物出土状況

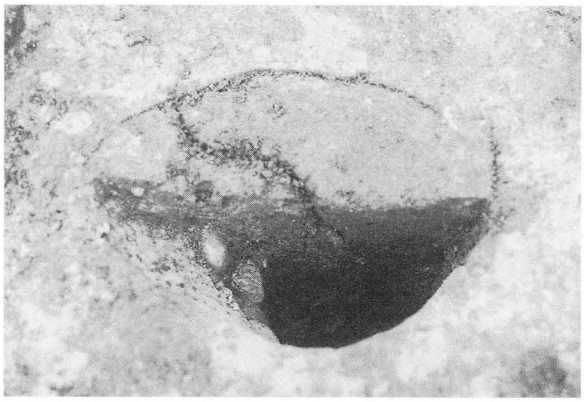
写真図版21　RA157住居跡（４）



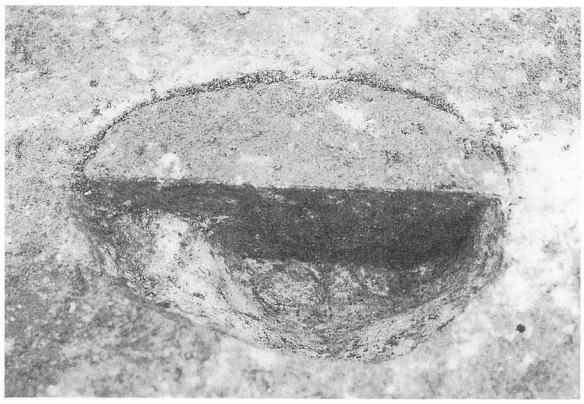
柱穴１　断面



柱穴２　断面



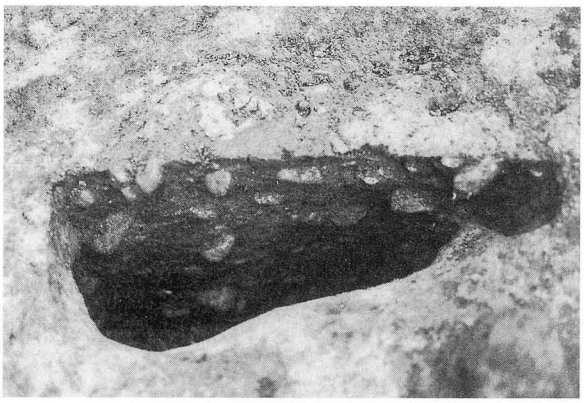
柱穴３　断面



柱穴４　断面

柱穴５　断面

柱穴６　断面

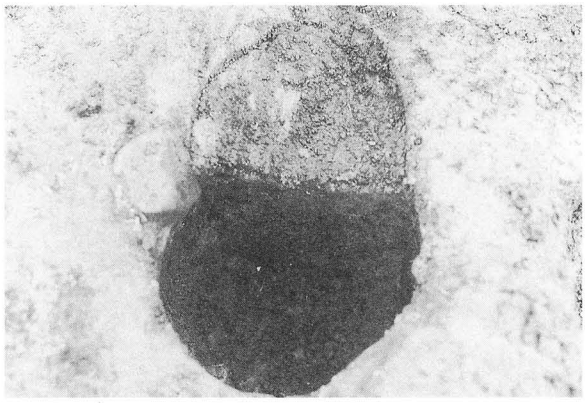


柱穴７　断面

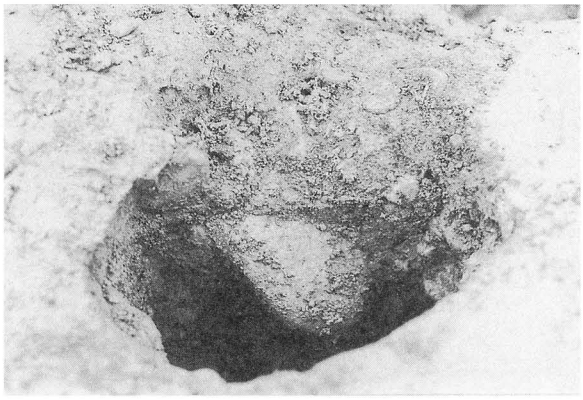
柱穴８　断面

写真図版22　RA157住居跡（５）

柱穴10　断面

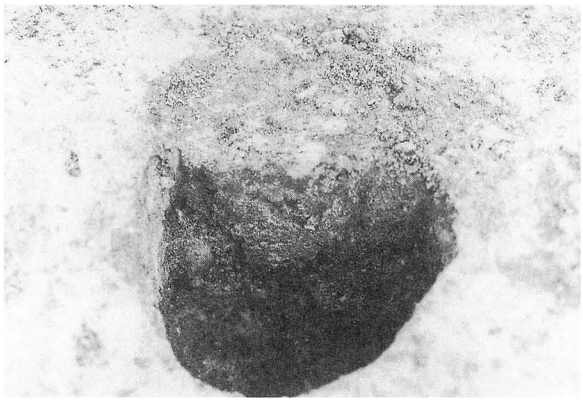


柱穴11　断面



柱穴12　断面

柱穴13　断面



柱穴14　断面

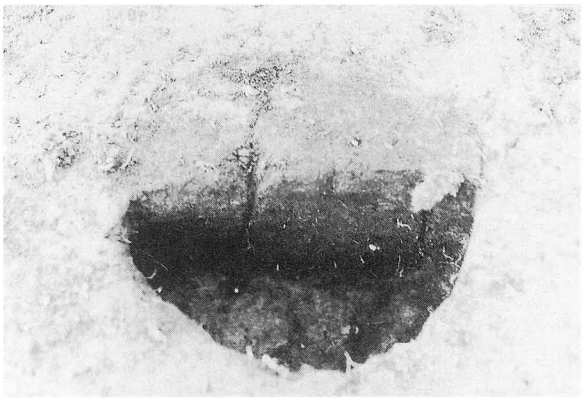
柱穴15　断面

柱穴16　断面

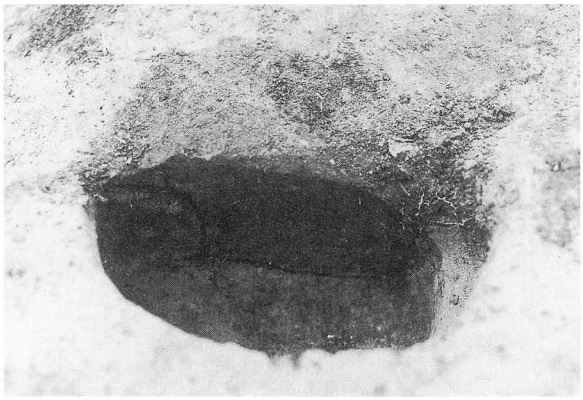
調査風景

写真図版23　RA157住居跡（6）

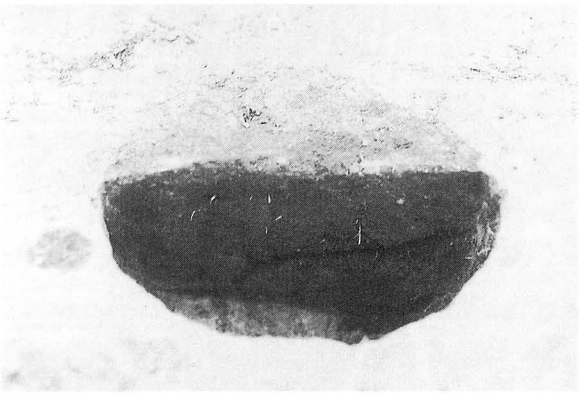
平面（南から）



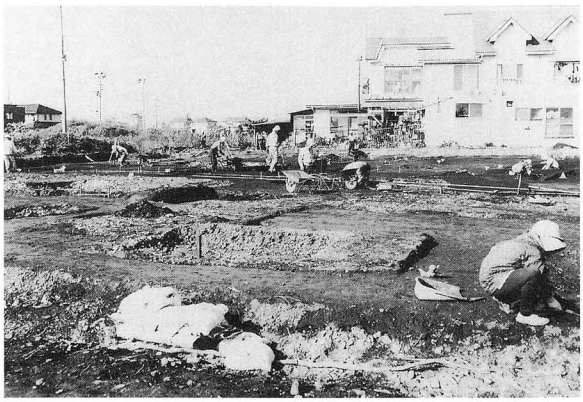
柱穴６　断面（南から）



柱穴４　断面（南から）



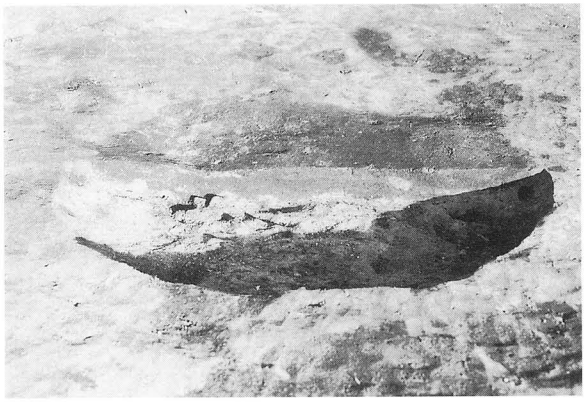
柱穴５　断面（南から）



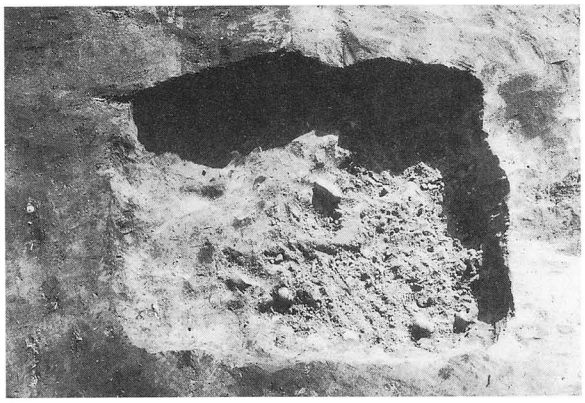
調査風景

写真図版24　RB003掘立柱建物跡（補）

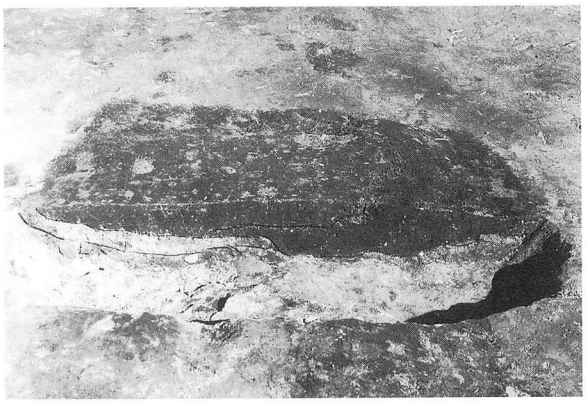
RD338（東から）



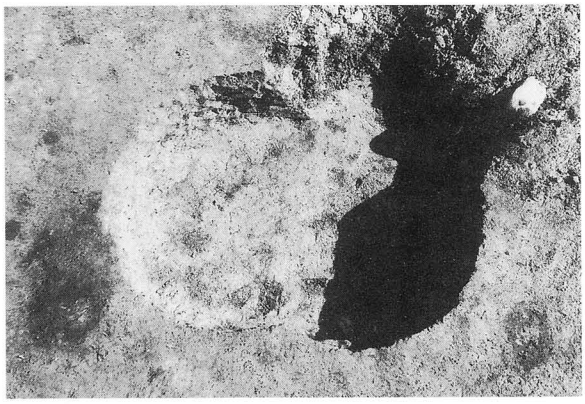
RD338　断面（西から）



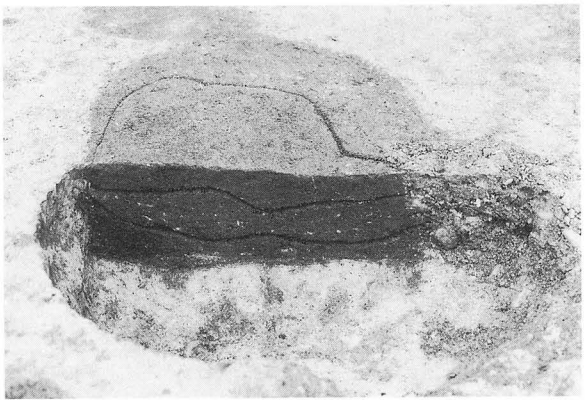
RD339（北から）



RD339　断面（南から）

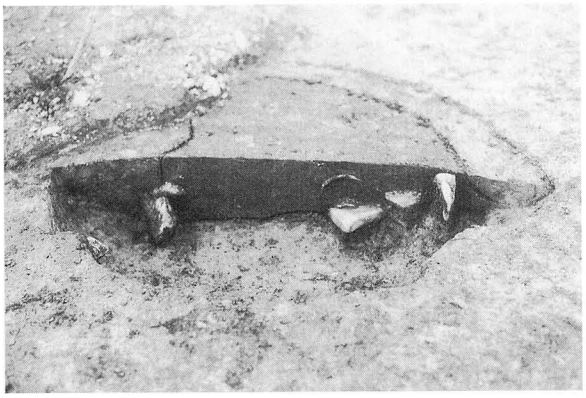


RD340（西から）



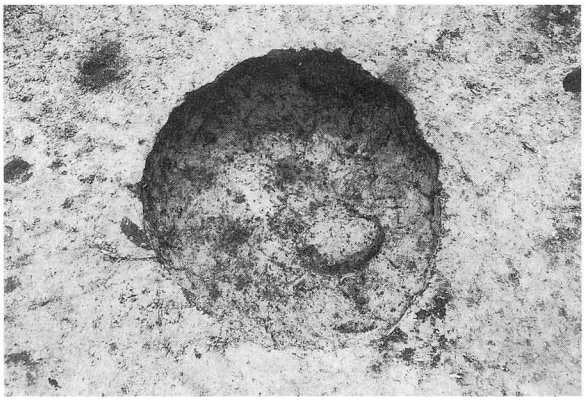
RD340　断面（南から）

RD341（南西から）

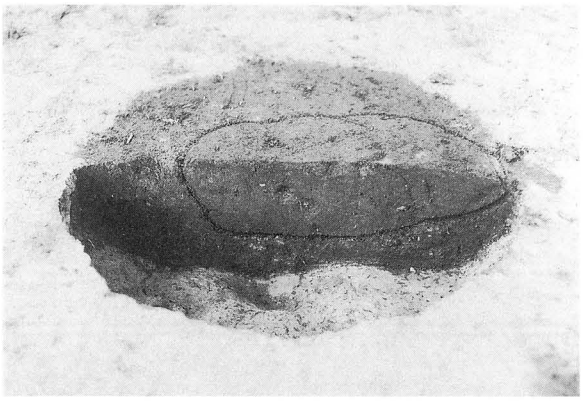


RD341　断面（南から）

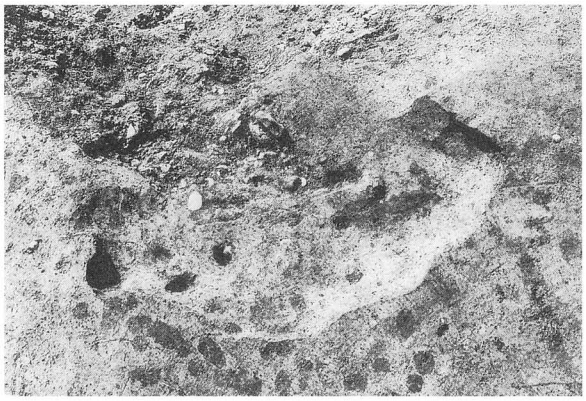
写真図版25　RD338～RD341土坑



RD342（北から）



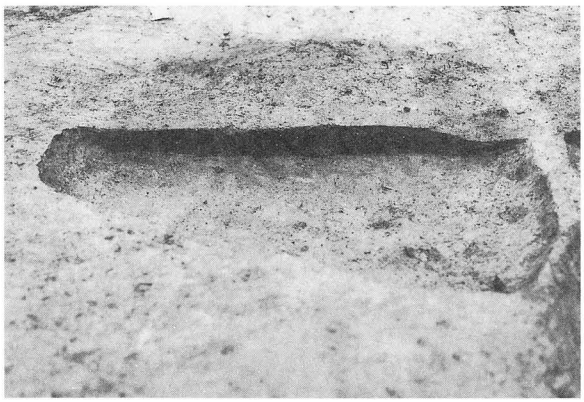
RD342　断面（南から）



RD343　（北東から）

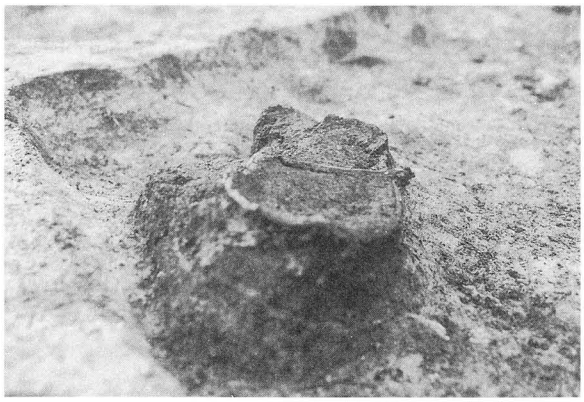
RD343　断面（南西から）

RD344（東から）



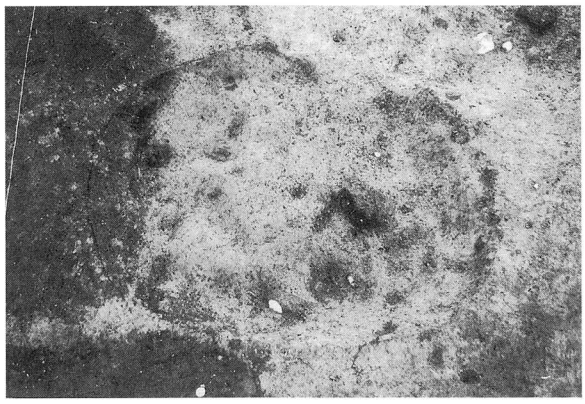
RD344　断面（西から）

RD344　遺物出土状況

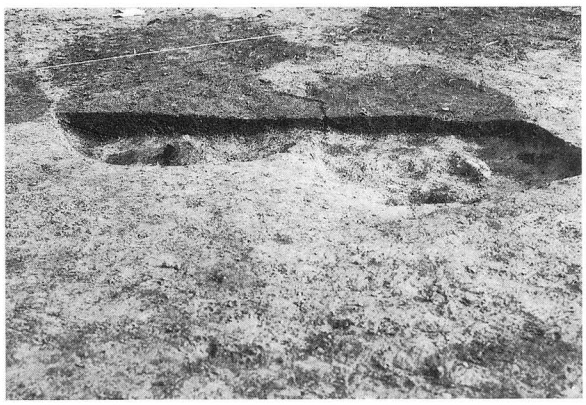


RD344　遺物出土状況

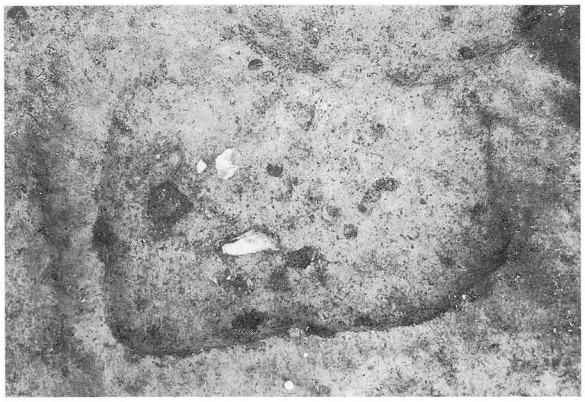
写真図版26　RD342～RD344土坑



RD345（北東から）

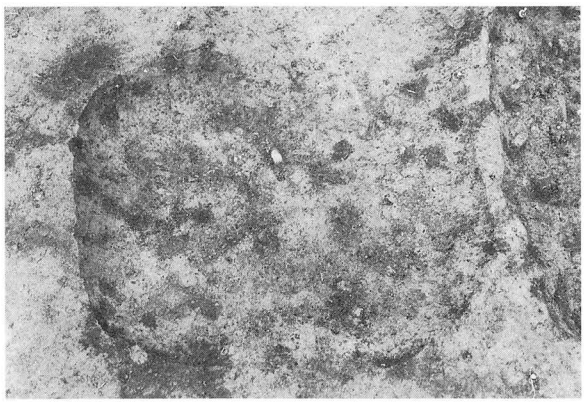


RD345・RD347断面（北西から）



RD347（南から）

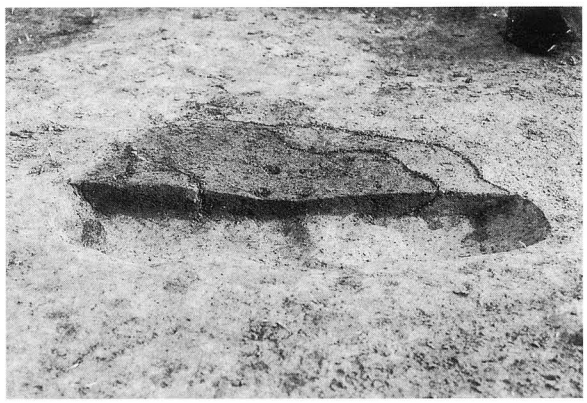
調査風景



RD346（東から）

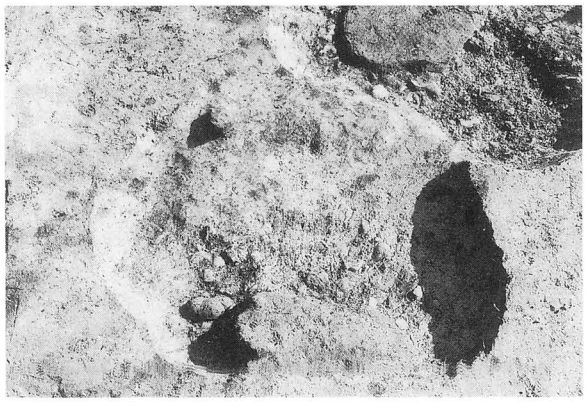
RD346　断面（西から）

RD348（西から）

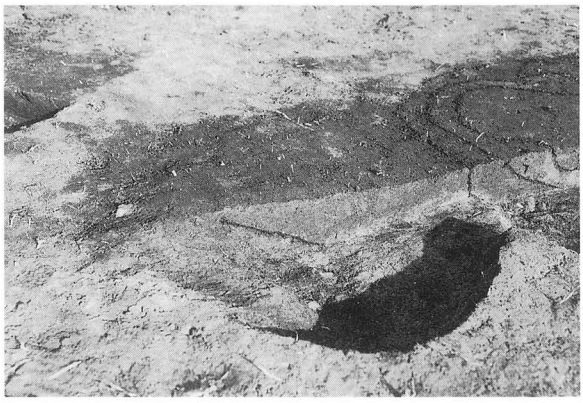


RD348　断面（北西から）

写真図版27　RD345～RD348土坑

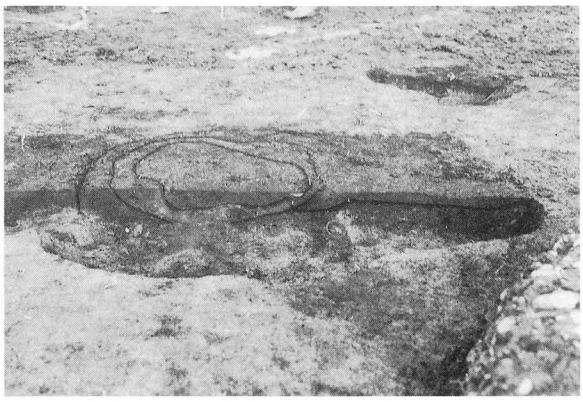


RD349（西から）

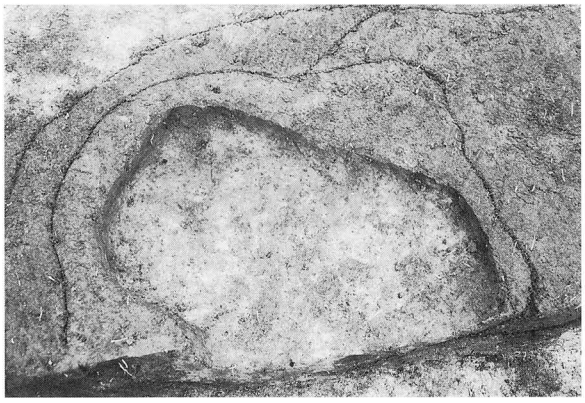


RD349　断面（南西から）

RD350（北から）

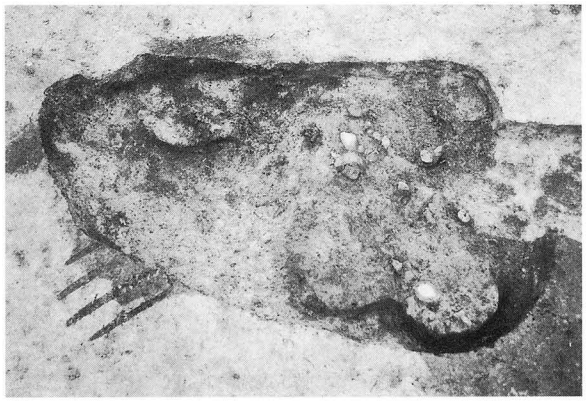


RD350　断面（南西から）

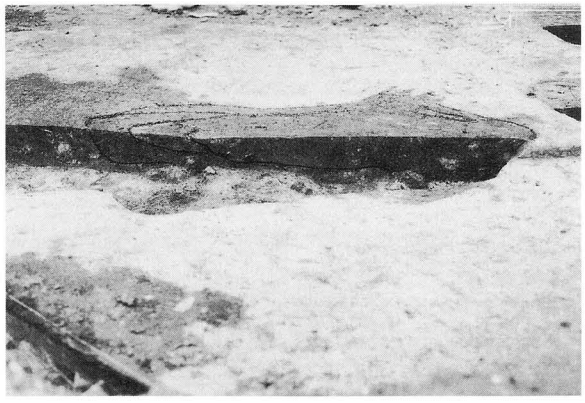


RD350　灰検出状況（南西から）

調査風景

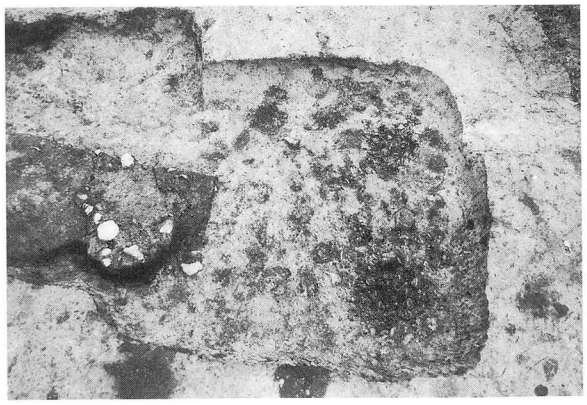


RD351（北から）

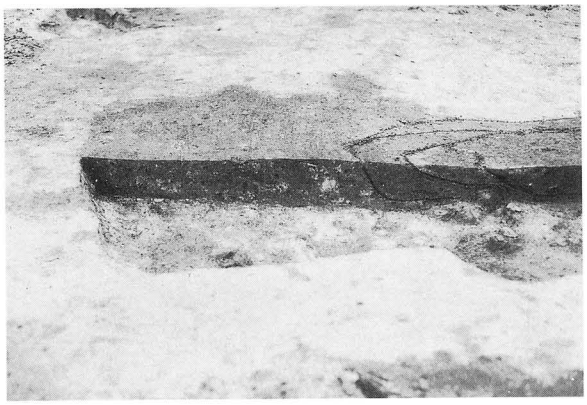


RD351　断面（南から）

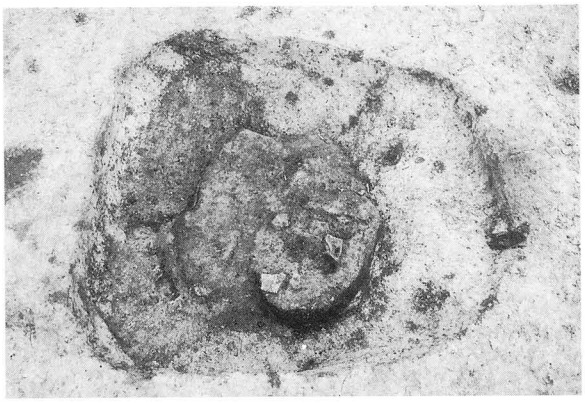
写真図版28　RD349～RD351土坑



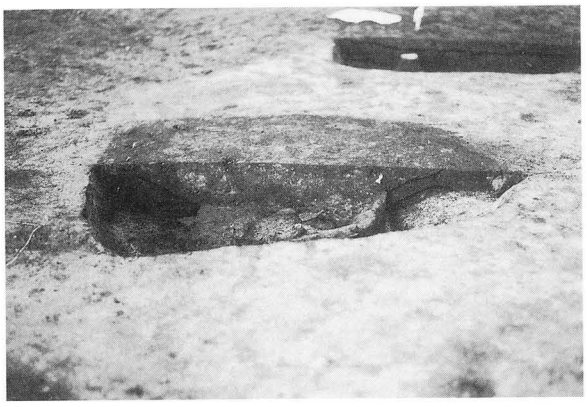
RD352（北から）



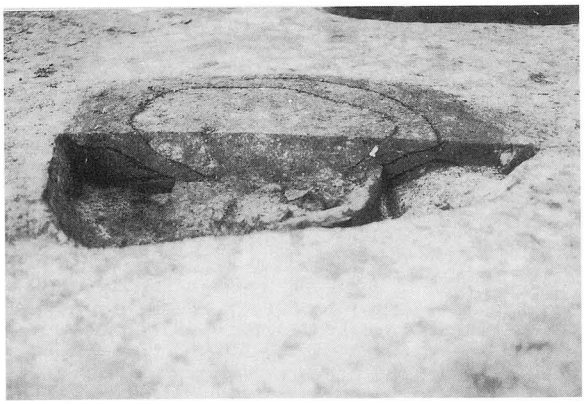
RD352　断面（南から）



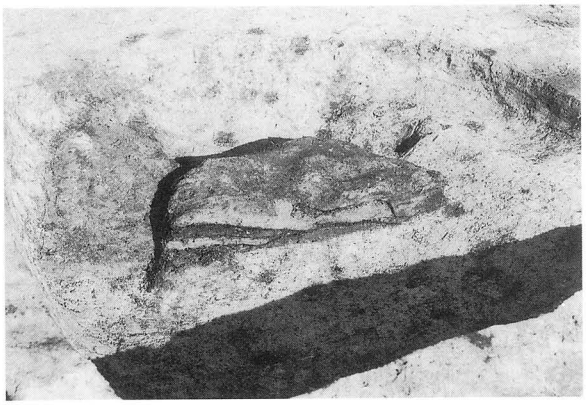
RD353（南から）



RD353　断面（南から）

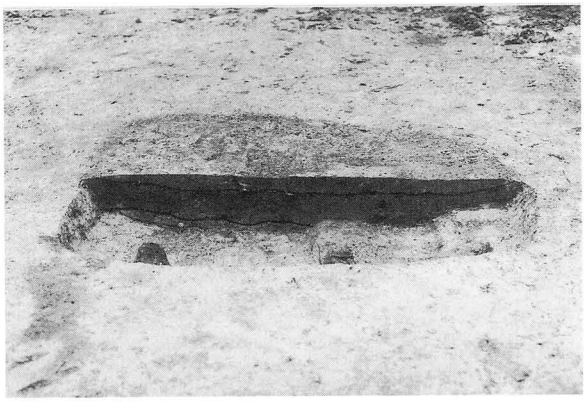


RD353　断面（南から）



RD353　断面付け足し（南から）

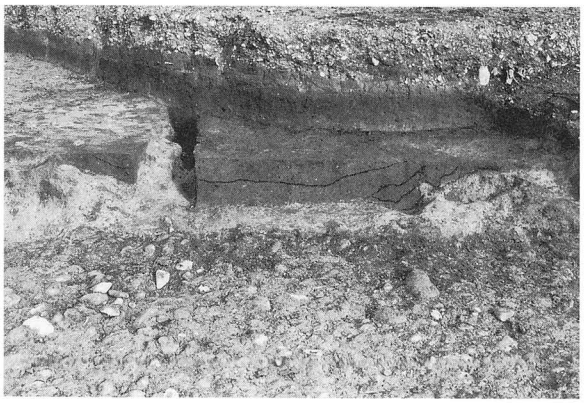
RD354（北から）



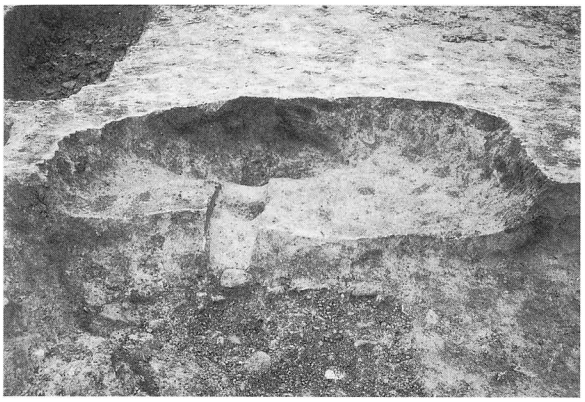
RD354　断面

写真図版29　RD352～RD354土坑

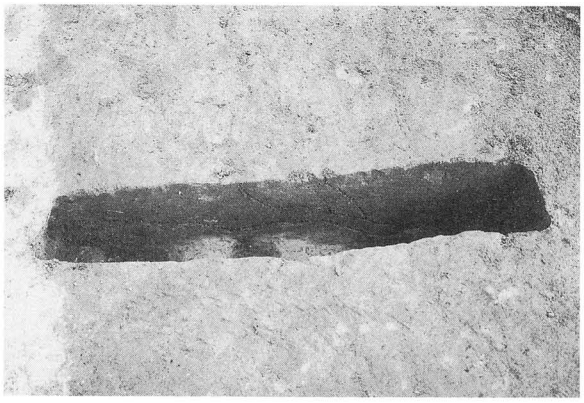
RD355



RD355　断面（南から）

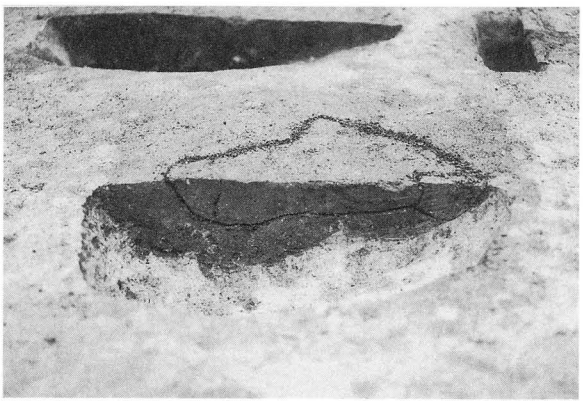


RD356（東から）

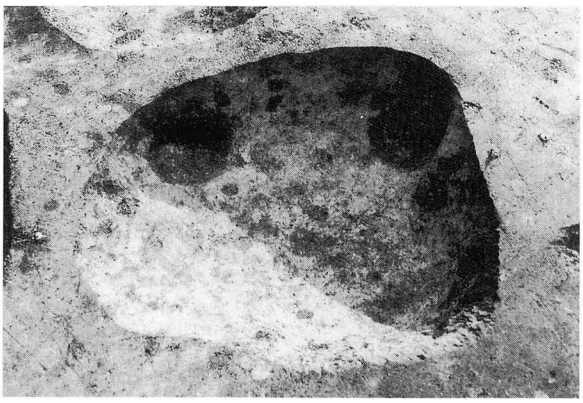


RD356　断面（南から）

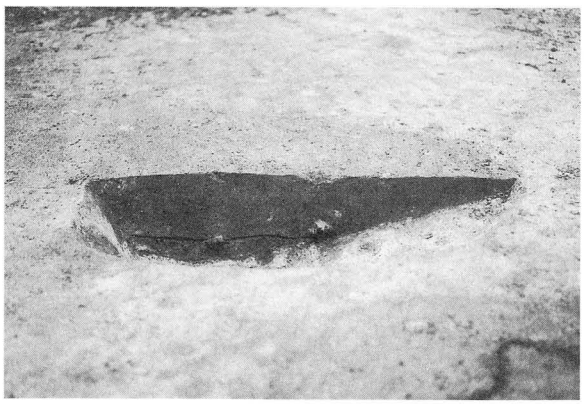
RD357（東から）



RD357　断面（南から）



RD358（北から）

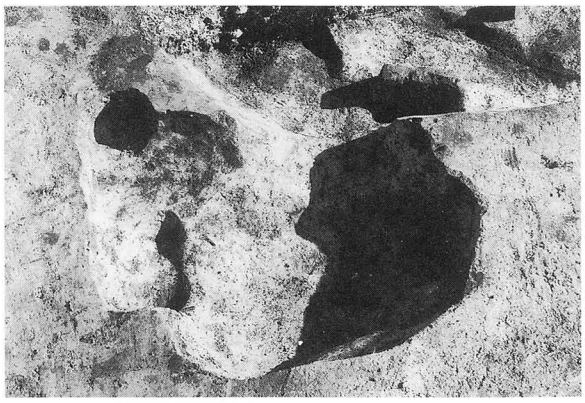


RD358　断面（南から）

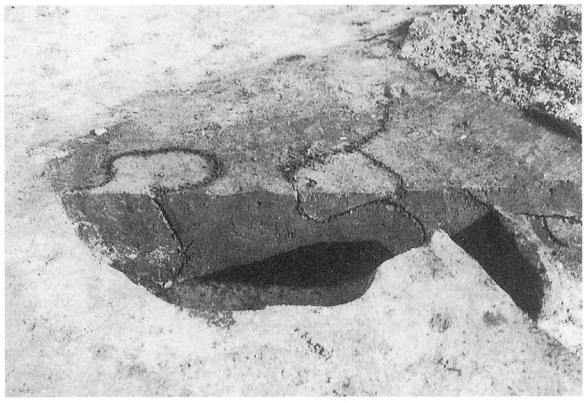
写真図版30　RD355～RD358土坑

RD359（東から）

RD359　断面（南から）

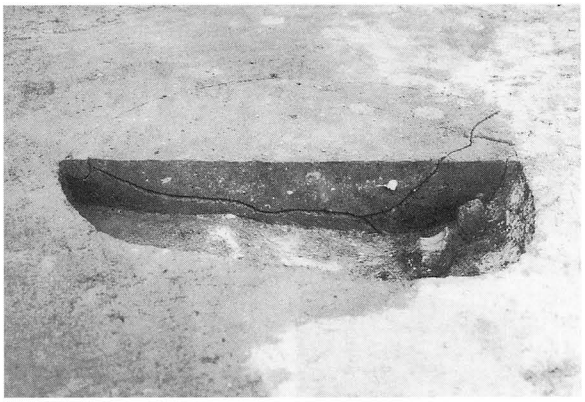


RD360（西から）

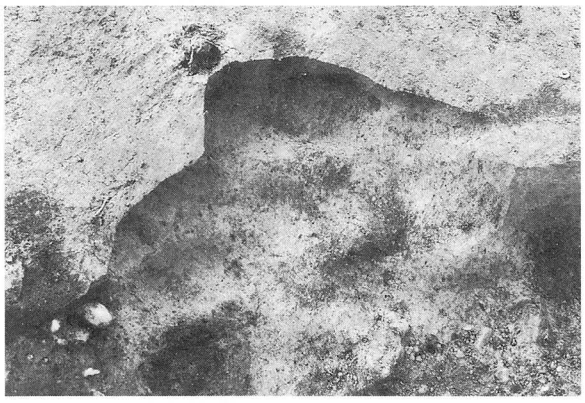


RD360　断面（南から）

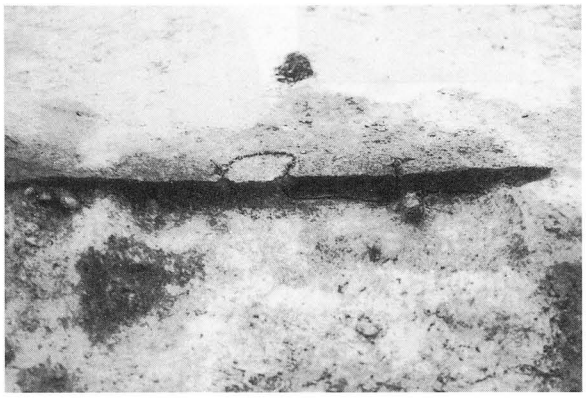
RD361（南から）



RD361　断面（南から）



RD362（北から）



RD362　断面（北から）

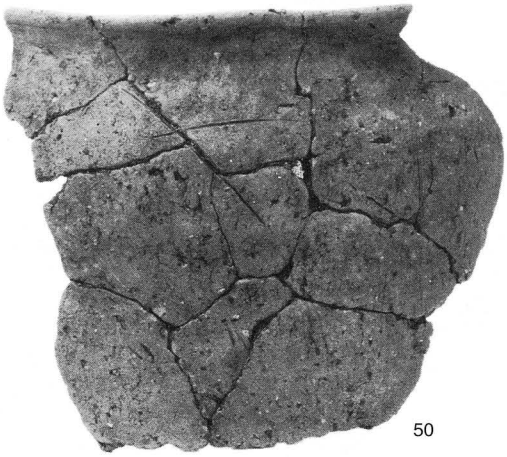
写真図版31　RD359～RD362土坑

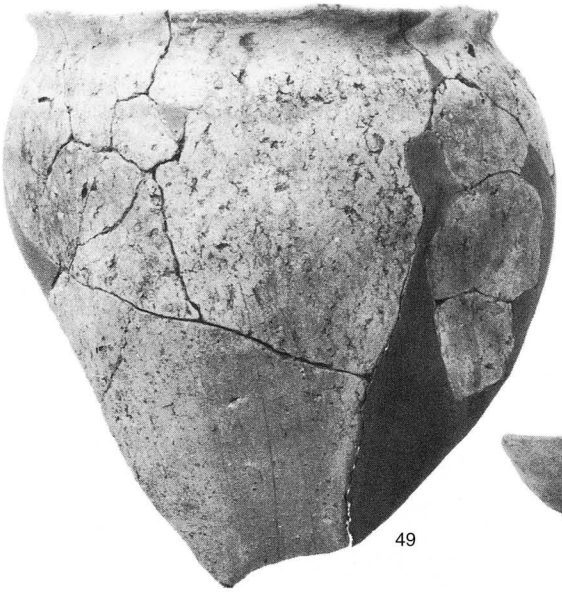
写真図版32　土師器・須恵器（1）

写真図版33　土師器・須恵器（２）

47

48


50


49

51

52

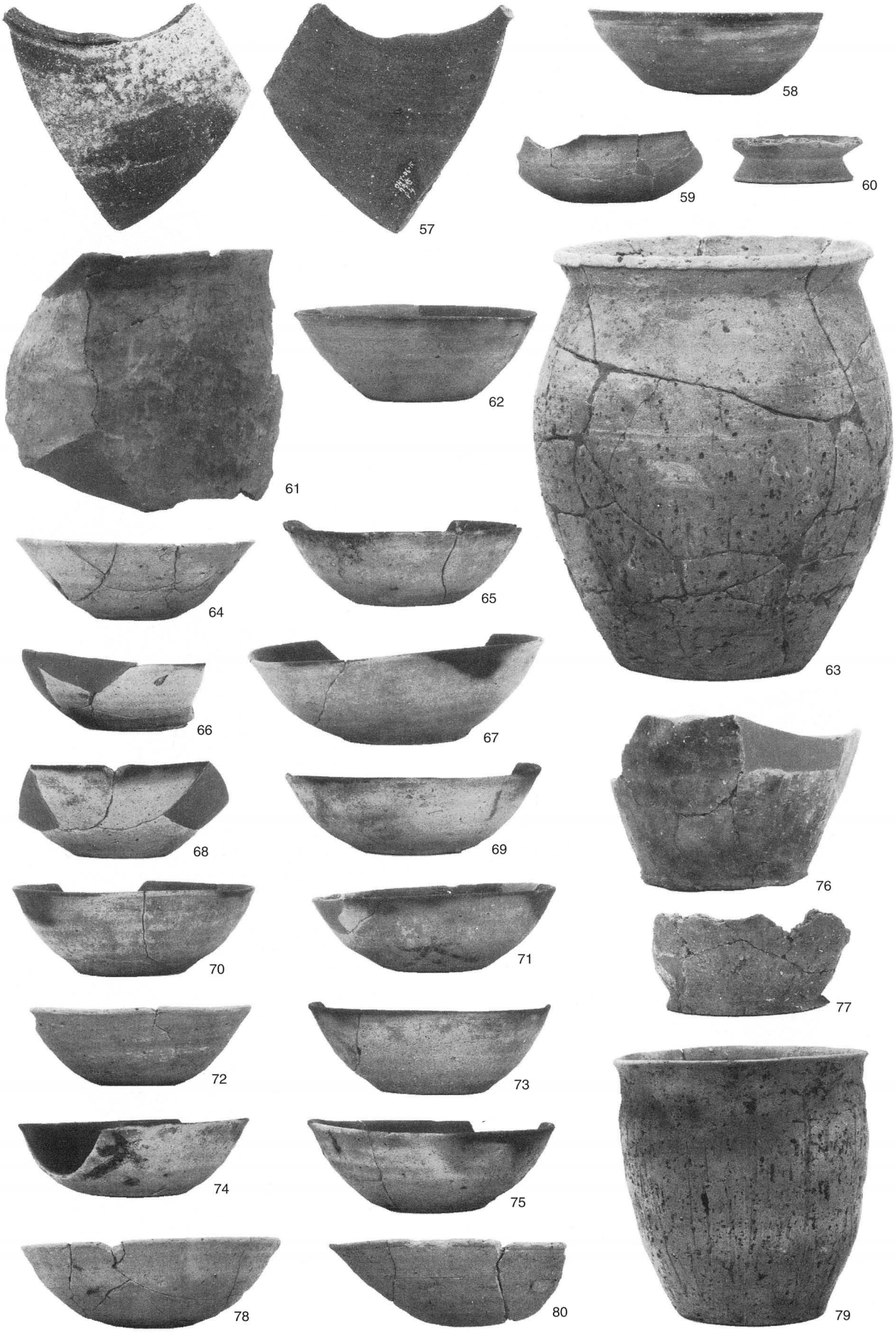
53

56

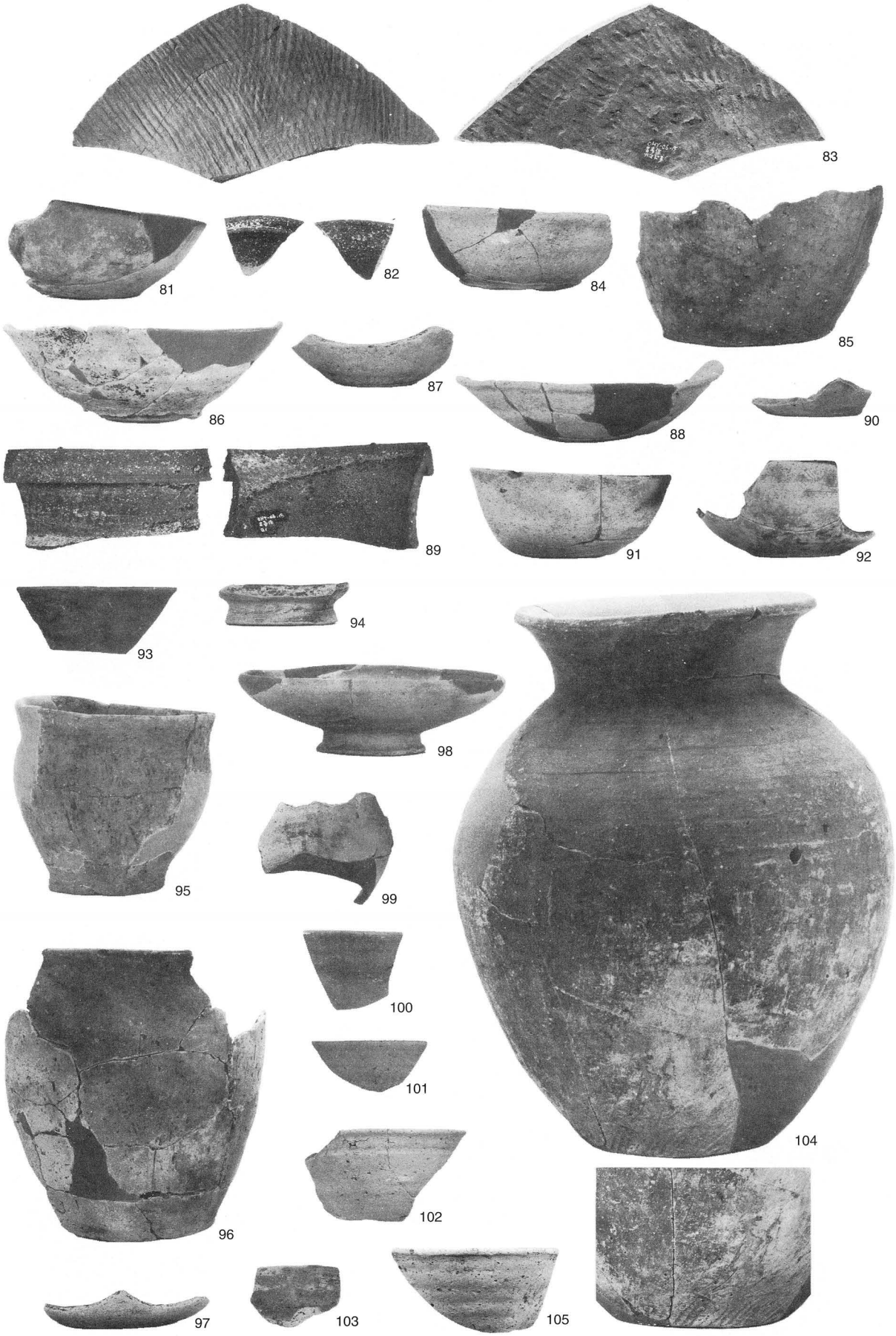
54

55

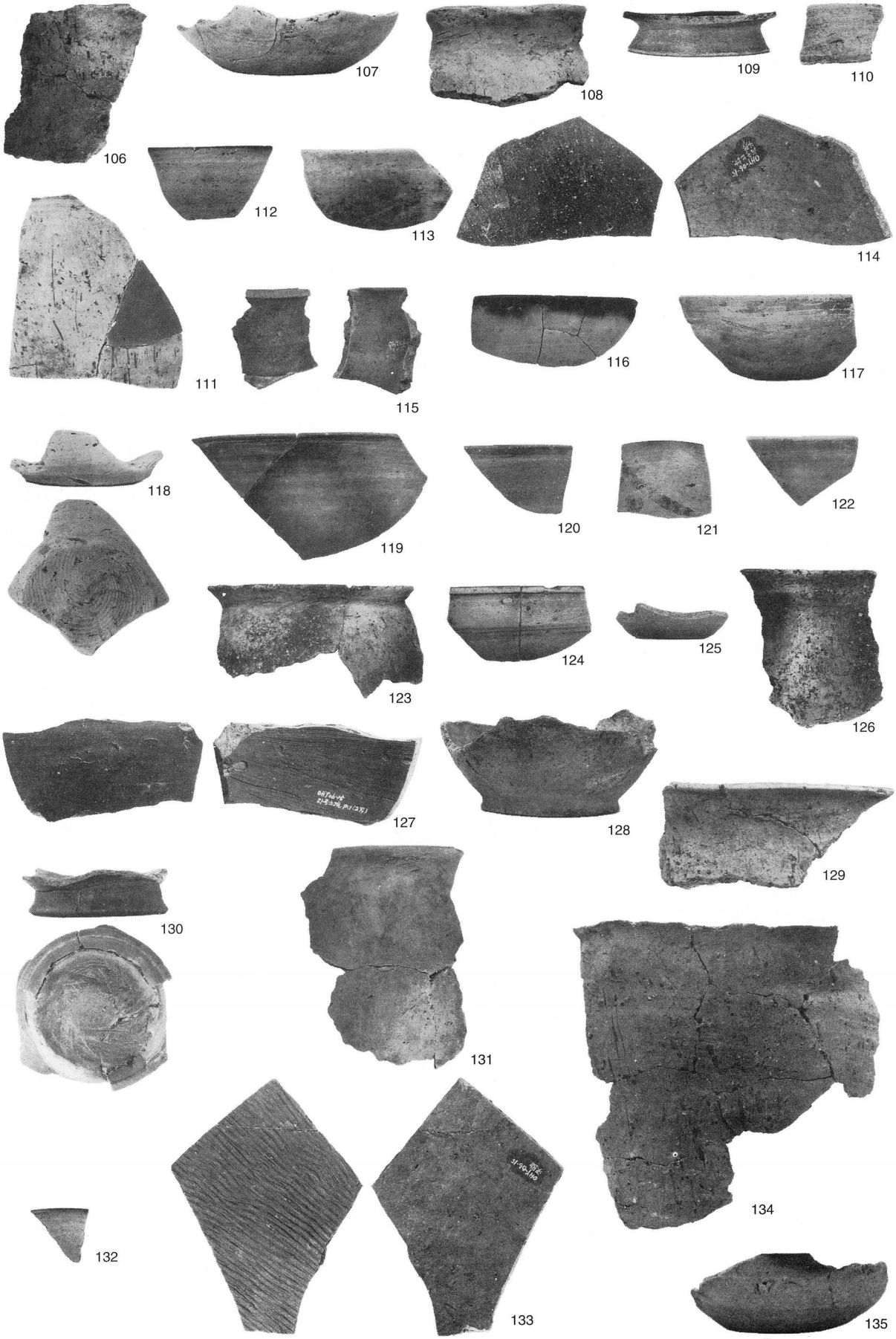
写真図版34　土師器・須恵器（3）



写真図版35　土師器・須恵器（４）



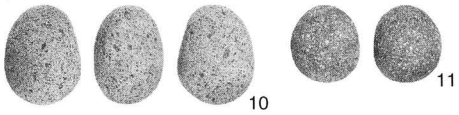
写真図版36　土師器・須恵器（5）



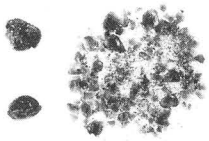
写真図版37　土師器・須恵器（６）

No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量（g）	石質（産地）	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ					
1	RA150住居　カマド北袖	砥石？	11.1	6.6	1.7	65.6		破片	溶岩	
2	RA153住居　No.28	砥石	9.8	8.1	3	251.8	凝灰岩（奥羽山脈・新生代新第三紀）	破片		48図
3	RA153住居Q３・7層	磨石？	7.8	7.5	5	286.2	安山岩（奥羽山脈・新生代第四紀）		一部面をなす使用痕	48図
4	RA154住居　Q4	砥石	13.6	8	6.4	347.8		破片	溶岩	48図
5	RA154住居　Q4	砥石	11.95	13.45	7.2	705.4		破片	溶岩	48図
6	RA156住居　s.1	砥石	17.45	13.4	6.4	1078.5		欠損	溶岩・酸化鉄？付着	49図
7	RA156住居　Q２	砥石？	9	7.6	4.9	194.1		破片	溶岩	
8	RA156住居　Q２	磨石	10.8	7.9	4.5	448.8	－		先端敲打痕、全面磨面？	49図
9	RA157住居・２層	砥石？	6.8	6.3	4.7	94.4		破片	溶岩	

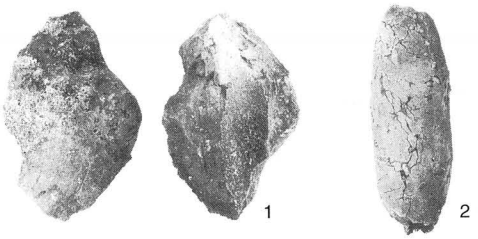
写真図版38　石器（１）（Ｓ＝1/3）

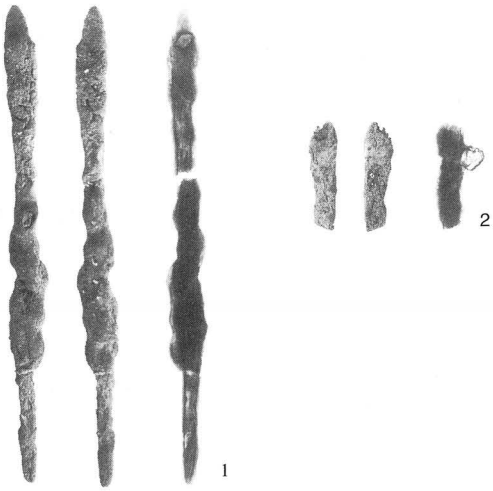


No.	出土地点・層位	器　種	最大計測値（cm）			重量（g）	石質（産地）	残存状況	備考	図の有無
			長さ	幅	厚さ					
10	RD357土坑	磨石	8	6	5.45	376.8	―		全面磨面？	49図
11	RD361土坑　Ｎｏ．２（底）	磨石	6.2	5.4	5	230.8	安山岩（奥羽山脈・新生代新第三紀）		全面磨面？	49図



No.	出土地点・層位	種類	残存状況	重量（g）	特徴	本文記載
1	RA047住居　南	原石？	破砕	2.6	細片化・長さ1.4幅0.9cm、長さ1.5幅1.1cmの塊	





写真図版39　石器（２）・琥珀・土製品・鉄製品（石器1/3、琥珀2/3、土製品・鉄製品1/2）

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第514集

細谷地遺跡第15次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成20年2月23日
発　行　平成20年2月28日

発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　（019）638－9001
ＦＡＸ　（019）638－8563

印　刷　有限会社　博光出版
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号
電　話　（019）641－0671

© （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2008